日本バドミントン協会 75周年記念事業

日本のバドミントンの始まり

BADMINTON JAPAN 75th Commemorative Project
The Beginning of History in Japan

公益財団法人 日本バドミントン協会

日本におけるバドミントンの夜明け

CONTENTS

日本バドミントン協会
75周年記念事業
日本のバドミントンの
始まり

目次

5 第1章 協会設立前史
～我国のバドミントンに関係した歴史的な諸過程を総覧する
1600年代／1700年代／1800年代／1900年代～終戦／1946年～1952年／
明治26年11月25日発行の月刊雑誌「體育」にバドミントンの紹介

123 第2章 バドミントン概史
～バドミントンの歴史を語ることについて考える

159 第3章 著者総論「歴史の捉え方」

165 著者プロフィール

166 あとがき

第1章

協会設立前史

～我国のバドミントンに関係した歴史的な諸過程を総覧する

我国のバドミントンに関係した歴史的な諸過程を総覧する

はしがき

私達が風にも舞う程の小飛体（シャトル）に興味を寄せて遊びに夢中になる習性の根源を探ろうとすれば、生命進化の形でも武器の開発過程の研究でもなく、ましてミサイルにまで及ぶ工学的動機による“飛翔体”の研究や戦略的計画のためでもない。“シャトル”と呼ぶ飛翔体をめぐるスポーツである“バドミントン競技”に関わった人とその組織体系への追憶の尽きない興味による明日への想いである。その始まりは、「一人では遊びきれない」このスポーツの「人と人の多次元的な関わりの競技構造への向かい方」にある。そして、今私達はその組織形態 75 年の歴史、つまり 3/4 世紀という何か特別な意味を思わせる峠の途中の時点を通過しようとしている。しかし、その協会の歴史の土台には幾世紀にも及ぶ長い夜明け前の時が流れていた。その人と社会が醸成されていった大切な時期を回顧してみたい。

はねつきの年代譜：まずは、“はねつき”のような遊び出現の長い歴史を拾い上げて行こう

1639 年　寛永 16 年　絵巻物「出島図」の原画を描いたとされる渡辺秀石（1639 ー 1707）誕生
1644 年　寛永 21 年
1644 年　正保元年
1647 年　正保 4 年　2 隻のポルトガル船、貿易を求めて長崎に入港　幕府は兵 5 万人、他で警護
1688 年　元禄元年
1699 年　元禄 12 年　**「唐通事会所日録」（元禄 12 年 4 月 27 日）によれば**長崎視察に来ていた上使である**萩原近江守重豪が唐人屋敷と出島を絵図にするよう宿泊先の鉅鹿清兵衛に言い残して行ったので、4 月 27 日渡辺秀石を唐人屋敷 へ派遣、唐大通事林三郎兵衛も同行、絵図面作成に立ち会ったというのである。（オスカー・ナホッド著・富永牧太訳「17 世紀日蘭交渉史」p. 266, 昭和 60 年）**。また 、**「商館日記」」1699 年 6 年 6 月 3 日**によれば，「勘定奉行の命を受けて、その日のうちにオランダ通詞が絵師（渡邊透石）一人を連れていき、絵師は出島の全て （住居・倉庫・台所・食堂・カピタン部屋等）を内部まで描き、色彩を付けて仕上げ、上司が喜び、江戸へ送ることにした旨が記されている。

1704 年　元禄 17 年
　｜　宝永　元年
1705 年　　8 年
　｜　宝永　9 年
1711 年　正徳　元年
　｜
1716 年　正徳　6 年
　｜　享保　元年
1736 年　享保 21 年
　｜　元文　元年
1741 年　元文　6 年
　　寛保 元年

図版 201 **渡辺秀石画**「出島絵図」 ロンドン　大英博物館蔵
以下「出島図」関係の図版ナンバーは出典の長崎市出島史跡整備審議会編『出島図ーその景観と変遷ー』1987 年発行、中央公論美術出版 の図版ナンバーをそのまま表記する。

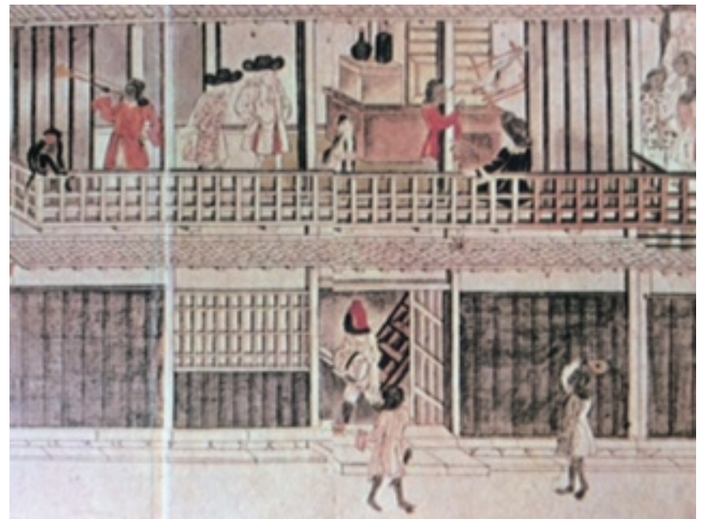
図版 202 『漢洋長崎居留図巻』『長崎阿蘭陀出島之図』長崎　長崎県立美術博物館蔵

図版 203 模写『出島絵図』（伊達宗明伯爵所蔵の写し）東京　東京大学史料編纂所所蔵

図版 204　模写『紅夷人旅館図』（藤一識画）東京　東京大学史料編纂所所蔵

(上)
図版 205『蘭館図』（「長崎漢洋居留図」の内）
神戸　神戸市立博物館所蔵

(中)
図版 206 モディー『長崎画集』所収　文化 2 年
荒木如元「出島絵巻」、1939(昭和 14)年再販



(下)
図版 207 狩野春湖『出島図』（「長崎図」の内）
水戸 水府明徳会彰考館蔵

1744 年　寛保　4 年
　|　　延享　元年
1748 年　延享　4 年
　|
1751 年　寛延　元年
　|
1764 年　宝暦 14 年
　|　　明和　元年
1772 年　明和　9 年
　|　　安永　元年
1781 年　安永 10 年
　|　　天明　元 年
1789 年　天明　9 年
　　寛政　1 年

ヨハン・ニューホッフ
Johan Nieuhof
(1618-1672)
オランダの旅行家；ブラジル、チャイナ、インドを記述。1655-1657 年に広東から北京までの 2,400km を旅したことで有名。この旅行に際しては東インド会社のから報告書を含めた大使としての任にあったことが記されている。

バタビアでの羽根つき遊びの風景
Johan Nieuhof 画“TWEESHUYS te BATAVIA※”　渡辺雅弘提供

この光景はバタビアにある“孤児院(orphaage)”で、ニューホッフの旅のジャーナルに含まれていたものである。

【部分】羽根を見る子供

※ **BATAVIA（バタビア）**
インドネシアの首都ジャカルタのオランダ植民地時代の名称。インドネシア語ではバタフィアと発音する。古代ローマ時代の今のオランダ地方に居住していたゲルマン人のバタウィー族に由来する。
当時バタビアは中国製を含めて品物を日本に輸送するオランダの貿易の中継地になっていて、イギリスに対する重要な拠点だった。

【部分】打具（何と呼ばれていたかは不明）で羽根（被射体も何と呼ばれていたかは不明）を打つ子供

ニューホッフの絵が描かれた年の出来事の詳細は不明でだが、彼が生きた年と比べて我国の江戸期の“出島図”が描かれた時代の約 1 世紀前に当ることに注目したい。描かれた打具、被射体の形状は、特に打具が現在のラケットと近いのが見て取れる。紅毛雑話の図と比較してほしい。

1787　天明　7 年　**森島中良　『紅毛雑話』【オランダ人に聞いた話・オランダの書物の話を集め ウーラング（被射体）とラケット（打具）を用いた黒坊の弄(あそ)びを紹介】。**

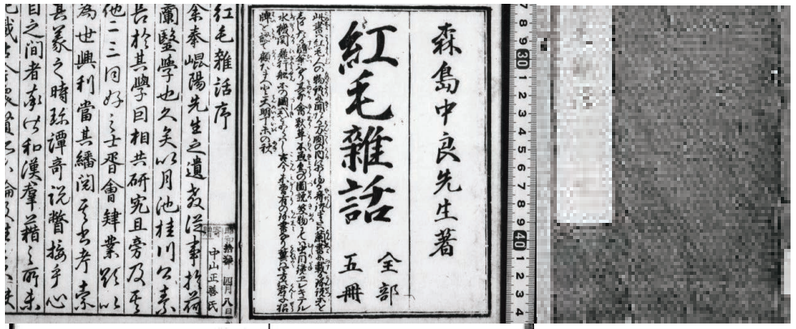
森島中良（1756-1810）

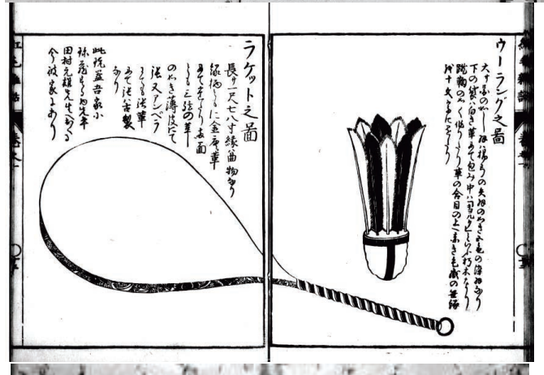
森島中良は、三代目桂川甫三の次男で、桂川甫周（1756-1810：江戸時代の医師、蘭学者、狂歌師、奥外科医師桂川家）の弟にあたる。寛政頃まで家祖桂川甫筑の元姓である森島を名乗っ た。幼名は友吉、字は虞臣、通称は次郎・万蔵。号は中良、後に甫斎甫粲。狂名は竹杖為軽。森羅万象、築地善交など多数の変名を持つ。幼名は友吉、字は虞臣郎、通称は 次・万蔵。号は中良、後に甫斎、甫粲 等多数 の変名を持つ。兄の知識を平易にした啓蒙的な本を出版、『北槎聞略』も手伝ったと伝えられる。文人として平賀源内に兄事し、絵画・考証学にも通じた。相当な変人で家族が虱(シラミ)だらけの着物を洗おうとすると「一匹は残しておいてくれ、また増や すから」と頼んだという逸話があるという。**黒坊の弄(あそ)びを「ウーラング（被射体）をラケットで打つ」と紹介したのが『紅毛雑話』**で、寛政の 頃迄森島の姓を名乗った。『紅毛雑話』の著者（一部 wikipedia による）

桂川甫周(医師・蘭学者)著『解体新書』の翻訳に参加（日本人で初の顕微鏡を使用)の実弟

ウーラングの図
大きさは（ほぼ）図程。多くの矢羽のように五色の染め羽根で、下の袋は白皮で、中はキョルクで作られれており、各々の皮上で合わせて丁文字に掛ってある。

ラケット（紅毛羽子板）の図

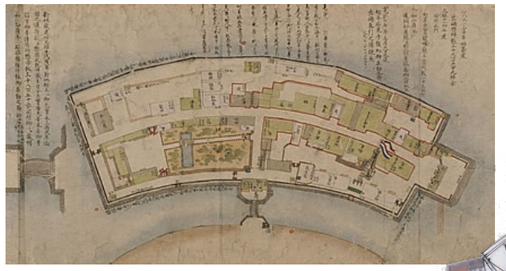




『紅毛雑話』1787 年
西洋に関する諸々の話が書かれた 全 5 巻の書。巻一に我国最初のラケットの図がある。羽子板並羽根を用いた「黒坊の弄(あそ)び」で、西洋館(出島(でじま)の)で閑暇(やりば)の時は遣羽子様について遊ぶなり。「**羽子板をラケットという。羽根をウーラングという。**」とし、ラケットについて「両面に三絃の皮のように薄皮を張り、アンペラ※を貼ることもある」としている。アンペラとはアンペラという植物の皮を縒って作った糸を織り込んだもので、これを張る場合もあるというのである。
※**アンペラ** カヤツリグサ科の多年草。南アジア、アフリカ、オーストラリア等の熱帯地方の湿地に自生。茎を叩き潰してむしろなどを作る。

1793　寛政　2-5 年
1794　寛政　6 年
1795　寛政　7 年
1796　寛政　8 年
1797　寛政　9 年
1798　寛政　10 年
1799　寛政　11 年
1800　寛政　12 年
1801　寛政　13 年
　　享和　1 年
1802　享和　2 年
1803　享和　3 年
1804　享和　4 年
　　文化　1 年
1805　文化　2 年
1806　文化　3 年
1807　文化　4 年

出島の大火（この後で、横の道が 3 間半に拡張された）



『長崎諸役場絵図』長崎歴史文化博物館所蔵
出島の諸施設・歴史・家賃などを記した平面図。大火で焼けた場所は赤線で示されている。

オランダ国旗を掲げて長崎湾に入ったフェートン号

1808　文化　5 年
1809　文化　6 年
1810　文化　7 年
1811　文化　8 年
1812　文化　9 年
1813　文化　10 年
1814　文化　11 年
1815　文化　12 年
1816　文化　13 年
1817　文化　14 年
1818　文化　15 年
1819　文政　1 年
1820　文政　2 年
1821　文政　3 年
1822　文政　4 年
1823　文政　5 年
1824　文政　6 年
1825　文政　7 年
1826　文政　8 年
1827　文政　9 年
1828　文政　10 年
1829　文政　11 年
1830　文政　12 年
1831　文政 13 年
1831　天保　1 年

フェートン号事件：鎖国体制下の長崎港へイギリス軍艦が侵入。
ナポレオン戦争の余波が日本へ；フランスの統治下にあったオランダの東インド会社は依然としてアメリカ船を利用して長崎と交易を続けていた。フェートン号は偽ってオランダ国旗で長崎に入港。出迎えたオランダ商館員を拉致。長崎奉行松平康英は僅かな薪、水、食料で援軍の到着を待つ間にフェートン号は長崎港を出る。幕府は 1825 年異国船打払令を発令。
鍋島藩はその後近代化に尽力するようになる。

Phhillipp Franz Balthasar von **Shiebold**,1796-1866. ドイツの医師・博物学者。1828 年一時帰国の際に船が難破し、漂流物が日本の浜に流れ着き、その中に日本地図があったため、帰化を望んだが国外追放となる、イネ 2 歳の時。鳴滝塾を開設、日本人に医学を伝授。20 年後許されて再来日。（左）**楠本イネ**（1825 年生まれ）：父シーボルトと母お滝の娘、イネは我国の女医（産科医）第 1 号となる

シーボルト、商館員として来日　【英国】ラグビー校でラグビーの原型が誕生

イギリスの捕鯨船乗組員が常陸浜に上陸。幕府・水戸藩は対応に追われる。この後、漁船を除く異国船を撃退せよとの指令が出る。

異国船打払令、オランダ人画家・フィレーネフ※を招聘
※シー ボルトの下で薬剤師として働く：。シーボルト植物園の 1000 種以上の植物を植え、これを写生

シーボルト事件
シーボルトが帰国に際して国禁の日本地図を持ち出そうとしたが船が難破。漂流物の中にこの地図があり、国外追放となる。

シーボルトが持ち出そうとした伊能忠敬の日本地図の写し

1832　天保　2 年
1834　天保　3 年　【英国】D.Walker　男性的体操を発表

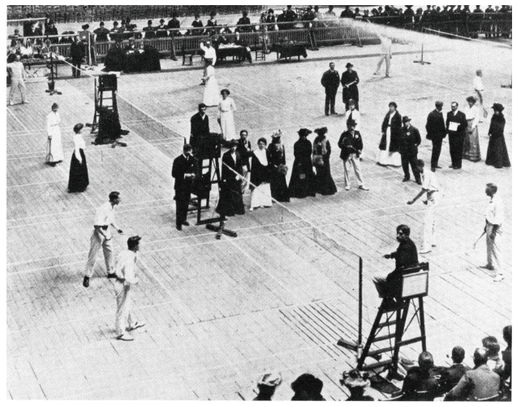
1838　天保　9 年　【英国】水泳競技会開催
1839　天保 10 年　【英国】J.G.In De Betou　リング体操導入
1840　天保 11 年
1841　天保 12 年
1842　天保 13 年
1843　天保 14 年
1844　天保 15 年　**【英国】George Williams ら 12 名の青年達が London で Y.M.C.A を設立、活動開始する**

　　弘化　1 年
1845　弘化　2 年　【英国】Eton College で一定のルールでの 陸上競技会が始まる
1846　弘化　3 年
1837　弘化　4 年
1848　弘化　5 年
　　嘉永　1 年
1849　**嘉永　2 年**　【米国】J.Roberts YMCA 初代体育手記
1850　**嘉永　3 年**　**ペリー来航**　【日本】最初のお雇い外人体育教師
1851　**嘉永　4 年**　**世界初のロンドン万博がクリスタルパレス（水晶宮）で開催される**

クリスタル・パレス（水晶宮）＜鉄とガラスの時代の到来を告げる

※ この crystal　palace hole が 1902 年だけ全英バドミントン選手権大会の会場になった。

下の写真はその時の試合風景。プレーヤーに動きがないのは、当時のカメラの性能が動きを捉えるのに十分でなかったからで、静的な情景しか撮れなかったからである。どれほどの時間をかけて、感光のためにポーズ（静止姿勢）を取っていたのだろうか。バドミントン の暦時の記録は、カメラ技術の進歩と並行しているとも言える。

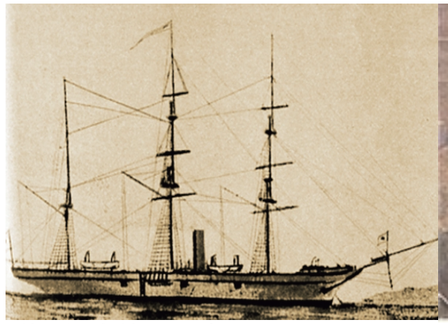


YMCA 活動がロンドン万博を契機として世界に伝搬

1853　嘉永 5 年　黒船浦賀に来航、開港交渉　　【世界】世界 YMCA 同盟設立

Metthew Calbralth Perry()1794-1858

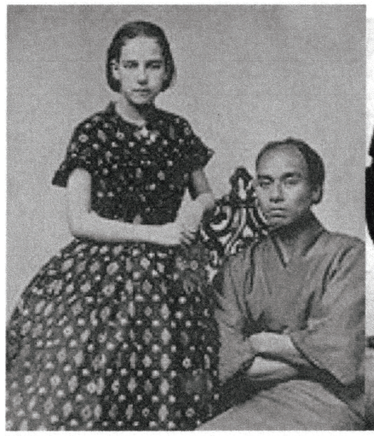
1854　嘉永 6 年　柏原藩 9 代藩主織田信民は 8 代信敬の意志を継ぎ藩校崇広館を設立
1855　嘉永 7 年　英国艦隊長崎に入港
　　安政 1 年
1856　安政 2 年　日米和親条約の締結　　ニュー・ヨーク YMCA に体育場・浴室を造る
1857　安政 3 年　日米修好条約の批准書をワシントンで交換するために江戸幕府は正使（新見正興）、副使（村垣範正）、目付（小栗忠順；通貨比率の交渉ら使節団 77 人）を米国海軍の外輪（蒸気）フリゲート艦ポーハタン号で渡米させる。咸臨丸をオランダで造船。日本最初の蒸気軍艦で幕府海軍史創世期の主力艦として配備。



正使一行が乗船したポーハタン号
日米修好条約の締結はこの艦上で行われた。
横浜開港資料館所蔵

不慮の事故に備え、護衛を名目に咸臨丸※も派遣：軍艦奉行水野忠徳の建議による。木村喜毅を軍艦奉行に昇進させ、乗組員を勝海舟他、海軍伝習所出身者で固め、中浜（ジョン）万次郎を通訳に帯同。福沢諭吉は木村の従者として、経験豊かな米海軍大尉ブルックを乗船させている。

※咸臨丸：幕府海軍が保有していた軍艦。木造でバーク式３本マストを備え、蒸気コルベット※※。「咸臨」は『易経』から取られた'君臣が互いに親しみ合うこと'を意味する。(wikipedia)
1860 年の日米条約批准（条約に対する国家の最終的な確認で、確定的な同意のための手続き）の交換のための補助艦として我国最初の太平洋横断を果たす。戊辰戦役で北海道木古内サセキ岬で沈没、最後を迎えた。
※※コルベット（corvette):平甲板で一段砲装の木造砲装備の軍艦：小型軽武装の高速艦で、主として輸送船団の護送に使われる。



福沢諭吉と Theidora Alice（15 歳）の記念撮影

感臨丸の乗員：右から福沢諭吉、岡田井蔵（教授方手伝）、肥田浜五郎（教授方）、小永井五八郎（勤番役）、濱口興右衛門（教授方）、根津欽二郎（教授方手伝）

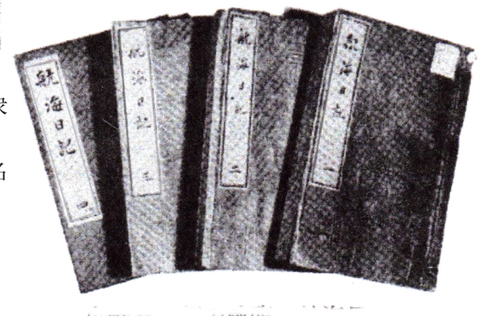
赤松大三郎
帰国後、オランダで造船学を研修

勝麟太郎

小野友五郎
咸臨丸筆頭測量方：月距法を習得、ブルックを驚かせる

感臨丸の太平洋横断航海の技術アドバイサーを務めた**ジョン・M.ブルック John Mercer Brook (1826-1906)**
後に深海測深装置を完成させ、大西洋横断ケーブルの埋設に貢献。幕府海軍の技術指導も行い、咸臨丸の渡米の航海を実質指揮する。

ジョン万次郎
（1827-1898、土佐清水出身）　江戸末期から明治にかけてアメリカ合衆国と日本を結んで活躍。帰国後、中浜万次郎と名乗る。



福沢と中浜は、渡米中にウェブスターの英中辞典を買い求めているが、これは英和辞典を作成するためのものであった。

【英和辞典の略歴】長崎通詞本木栄之進（良永）が 20 代半ばの 1760（宝暦 10）年、英語の達者なオランダ人から英蘭辞書を借り、その仕事を継いだ息子庄左衛門（正永）がこれを完成させた。この辞書を原型として、1810(文化 7）年、広く使用されていた『蘭英辞典』に和訳を加えて、1814(文化 11)年に完成したのが、後年福沢諭吉も使用したという**史上最初の英和辞典『諳厄利亜（あんげりあ）』**である（wikipedia）。アンゲリア（Angelia；ラテン語）は近世の学者が用いたイギリスの呼称。

因みに。**『諳厄利亜（あんげりあ）語林大成』は本木昌三が中心になって編纂された。1808（文化５）年のフェートン号事件**（1808 年英国軍艦がオランダ国旗を掲げて長崎港に侵入、オランダ商館員から食糧・薪・水を奪った事件）**に衝撃を受けた幕府はイギリス研究の必要性を痛感。オランダ語通詞等に英語習得を命じ、英和辞典を編纂させる。イギリス駐在歴を持つオランダ人ヤン・コック・ブロンホフの指導を受けて、約６千語を収録、発音を仮名書にした。初の英和辞書の編纂ではあったが、発音はオランダ訛りが強く、不十分な点があった。編纂には本木昌三の他、通詞馬場貞歴、末永祥守、楢林高美、吉雄永保等が当たった。**

ヨハネス画『プロホフと乳母』
プロホフ（1779-1853）オランダ商館長 赴任期間は不明、出島で英語の指南役を務めてくれた。

英和辞典が造られた主な歴史は、
- 1862 年　英和大訳袖珍辞典
- 1862 年　英和大訳袖珍辞書改正増補版
- 1873 年　英和字彙附音挿図　日就社
- ：
- 1902 年　新訳英和辞典　三省堂
- 1927 年　新英和大辞典　研究社

河原慶賀画『プ ロホフトと家族の図』

1858　安政　4 年　**日本開国**
1859　安政　5 年　**神奈川開港**

篠山藩主青山忠高が藩校「崇広塾を再開：M.Willson 著作の英語教科書“The First Reader” に “Battledore & Shuttle-cook”が紹介されていた(明治以前の崇広小学校でも使用).

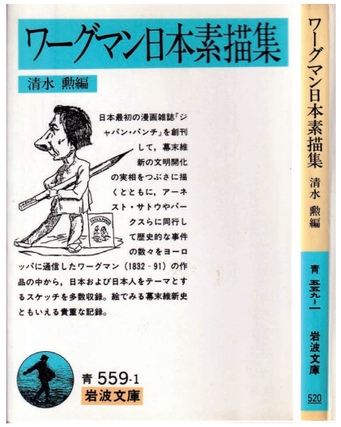
柏原藩崇広塾（かいばらはんすうこうじゅく）
1858 年小島省斎が第９代藩主信民の命で開設した柏原藩崇広塾

図は崇広塾で使われた英語の教材書 The First Reader 所収の挿絵バトルドアー＆シャトルコック（Battle-dore & Shuttle-cock）が紹介されていた。
（觜木夫妻の提供）

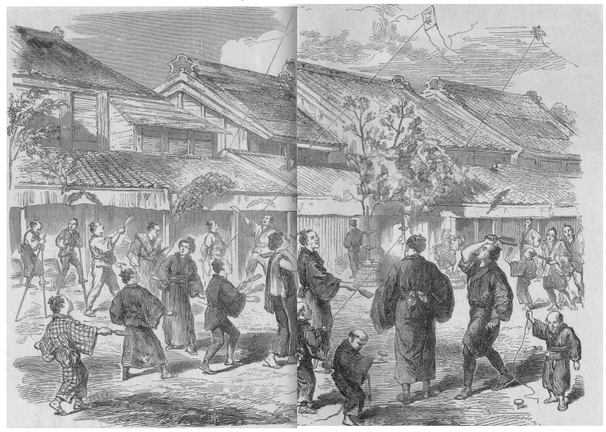
オックスフォード大学、ハーバード大学体育館を建てる

1860　万延　1 年　**玩具商 Issac Spratt が“Badminton Battledore　a new game” を製造・発売（出典 B.Adams: The Badminton Story, p.22）**

1861 万延　2 年　**チャールズ・ワーグマン Charles Wirgman(1832-1891,英)幕末に『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ』の特派員として来日。漫画雑誌『ジャパン・パンチ』を創刊。ユーモアに満ちたポンチ絵を描き、幕末～文明開化に向かう日本の様子・事件・風俗との出会いを記録した。その中に数点のバトルドアー＆シャトルコックの描かれ漫画がある。**



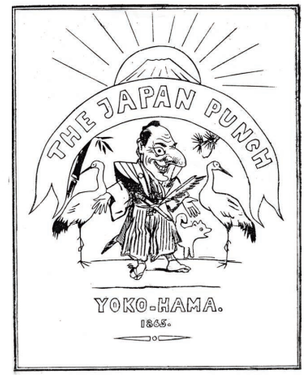
清水勲編『ワーグマン日本素描集』



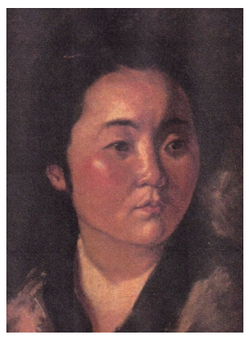
「横浜の正月」1865(慶応元)年『ILN』７月 15 日号

画家不明　ワーグマン像

創刊号表紙絵：日本初の外字雑誌で漫画雑誌の表紙

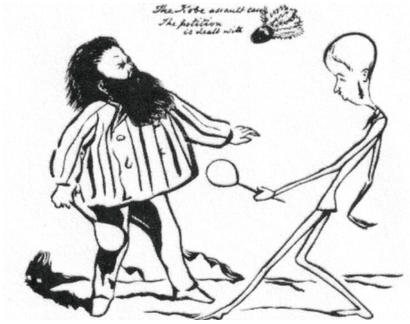


『ザ・ジャパン・パンチ第２号 1865』の表紙

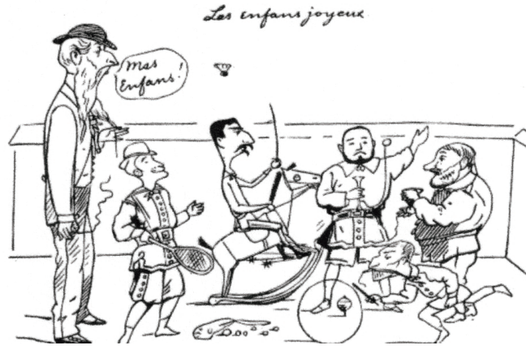


ワーグマン画小沢カネ（ワーグマン夫人）像

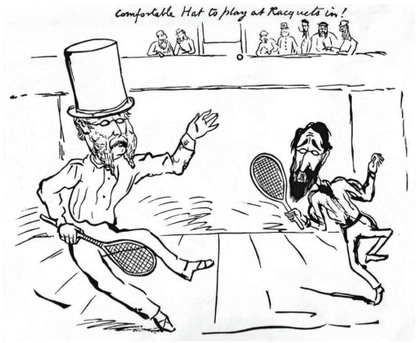
自治政府と 1865 年度の領事の間でやることは正に**バトルコック＆シャトルドアー**だ（話が噛み合わず、しっちゃか・めっちゃかだ）



神戸の申立てはあっさり処理されてしまう。



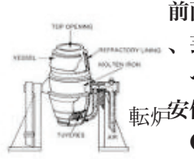
子供たちの遊び場ですね。



ラケットをするにはぴったしのハットだねえ！

東京レクリエーション・クラブ
此処にいないボーイ達（遊び人）はビリアード場にいるねぇ！

1862　文久１年（万延２年）　**第２回ロンドン万博（日本人が初めて見た万博）。クリミア戦争後の国家主義が前面に出、軍需産業の比重が拡大：全体として第１回パリ万博成功の影響を受、芸術分野の展示を加える。ベッセマーの製鉄が特に衆目を集める。**



転炉

ベッセマーの製鉄法

ベッセマーの製鉄：転炉を用いて溶けた銑鉄から鋼を大量に生産する世界初の安価な製鉄法

アームストロング砲

●竹内下野守保憲を正使とする 38 名の使節団を送る。一行の中に福澤諭吉もいた。使節団は機械に注目し、電信局、海軍工廠、造船所、銃器工場等を見学、部品を組み合わせて造るアームストロング砲(戊辰戦争で使用された)に特に興味を示した。オールコックの手で日本の工芸品が展示されていた。ヨーロッパ人はこれを称賛したが一行の一人渡邊徳三は「骨董品のような雑具だ」と『欧航日記』に書き残している。この時福沢諭吉が exhibition を博覧会と訳したと言われている。

1863　文久 ２年
1864　〃　３年
1865　元治（文久４年）元年
同　　慶応（元治４）元年　　**五雲亭貞秀 「無題　異人商館内部の図」を描く**

1866　慶応 ２年　英国駐屯軍根岸にライフル射撃装置
（度重なる居留地襲撃で幕府は居留地防衛権を承認する）

1867　慶応 ３年　米、英、仏、蘭に兵庫港開港の勅許

第２回パリ万博と有田焼の白磁人形：

ナポレオン３世のロンドン伯への挑戦、**【万博にも娯楽を！】がテーマ：日本から幕府と薩摩・佐賀両藩が調度品などを出品；ジャポニズムの契機と**なる【この中に佐賀藩出品の有田焼の陶磁器に可愛い人形が含まれていた。白磁の肌合いの美しさがヨーロッパの人々の心を捉え、人気を呼んだ。】**この人形が手にシャトルとラケットを持っている（アメリカのコレクターから送られた物）。**

【右図】この白い肌の人形が刺激となりフランス人形が誕生したと言われる。以後も万博で人形のコンテストが開催され、金・銀・銅の賞を設けてこれを競わせる程人形作りが盛んとなり、ひいてはベル・エポック時代を迎えることになる。この習慣が後にオリンピックの金・銀・銅メダル授与に繋がったと言われる。

徳川昭武ら日本派遣団一行
後列左端の渋沢栄一の顔も見える

【ベル・エポック（良き時代）】19 世紀末からのパリが繁栄した、華やかな時代。
子供が社会的な地位を獲得した時代でもあった。

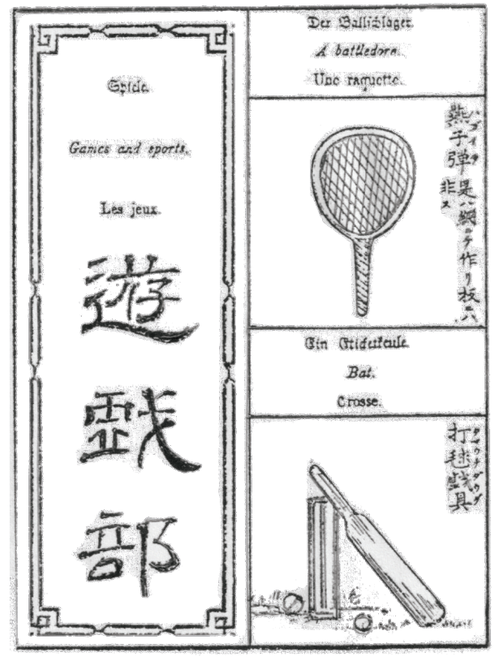
カラー・ボックスに収まったバトルドアー＆シャトルコックとお茶販売会社の CM カードに描かれた‘シャトル遊び’の **打ち出し器と羽根**：フルカラーの印刷が可能になり、多色刷りのカードが人気を呼ぶ（英国）

1868　慶応 4 年　　江戸を東京と改称
　　明治 元年
1869　明治 2 年　　新政府大学校を設立
1870　明治 3 年
1871　明治 4 年　　学制に体操を採入

田中芳男※訳『泰西訓蒙圖解』（文部省）
鳴海正泰は『テニス明治誌』（p.18、1980 年、中央口論社）で、“燕子弾圖”に触れ、「是ハ網ニテ非ス」と紹介している。さらに同書で併せて「明治 5 年刊行の『ザ・ジャパンパンチ』に言及、「はっきり羽根を使ったバドミントンの絵がある」ととしているが、この時点ではイングランドにおいても未だ“バドミントン”と呼ばれるゲームは誕生していない。
（次頁を参照）

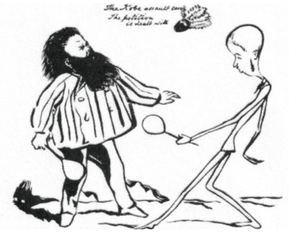
田中芳男（1838-1916）

田中芳男訳『泰西※訓蒙図解』（右図）
田中芳男は、飯田市出身、博物学者、殖産家で、医師の家に生まれ、幼児より父について山谷で薬草を採り、薬を作る。1856 年シーボルトの弟子になり、伊藤圭祐について勉学。昆虫標本で好評を博す。1872 年湯島聖堂での公開展示博覧会をはじめ、我国初の公共図書館を始める。1882 年東京国立博物館の前身を上野に移転させ、上野動物園も作るなど、自然資源の価値を人々に伝えた。
※泰西（たいせい）：＜意味は‘西の果ての’＞大義は西洋世界全体を指す語で、所謂‘極東’の対義語。中国から見た西洋の意味であったがマテオ・リッチが西洋を泰西と呼ぶことで中国を西洋と対等な地域圏とする視点から用いられた。ここではその気概を田中に見ておきたい。



田中は、A battledore を**燕子弾（ハゴイタ）**と訳し、これは網にて作り板には非ずとし、raqutte とも呼ばれる、と紹介している。

1872　明治 5 年　　**明治の改暦（新暦）：太陰太陽暦（天保暦；旧暦）を廃止。翌年より太陽暦を採用することを決める。神戸で英語学校開設。**
横浜・神戸インターポート・バドミントン対抗試合が行われる（出典不明）。
前出（p,11）の 1872 年 10 月 12 日のポンチ絵で紹介した「送り込まれた“神戸の申し立ては”あっさり処理された」とある漫画は、掲載誌の p.261 にあるロイター通信の内容と関係する何某かの実際の交渉ごとがあったことの戯画化であるのか、それとも本当にゲームが行われたのかは定かでない。日本人が参加してのことか否かも不明である。



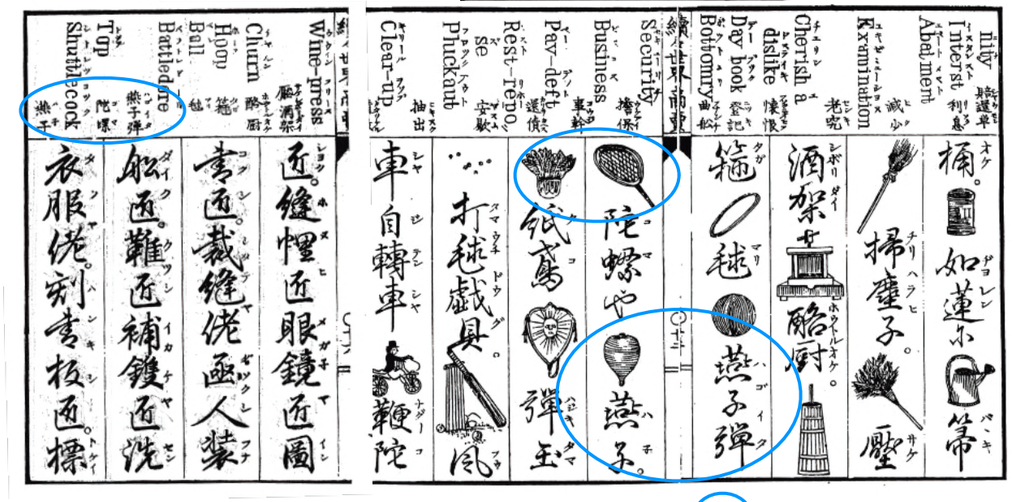
1873　明治 6 年　　徴兵令が布告される
Newsweek によれば、この時代
9 割近くが兵役を免れていたという。
実際には日清戦争期でも全体の 5%
しか徴収されず、兵役逃れが問題に
されたという。
【徴兵制】国家権力が 20 歳になった国民(男子)を挑発（相手を刺激して）行動や欲情を起こすようにしむけること

大衆を刺激する或るイメージ

英国人、海兵学校でフットボールを指導。
米国人、開成学校で野球を紹介

【米国】北米の大恐慌

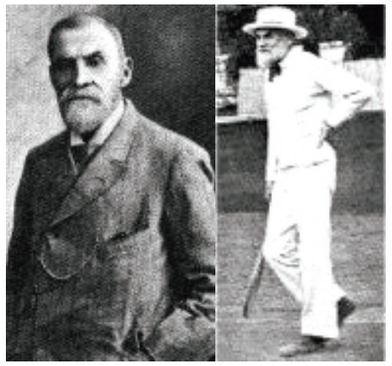
橋爪貫一（1820-1884）『續々世界商賣往来』を刊行
：燕子弾（Battledore）と燕子（Shuttle-cock）を紹介した。



表の中の英語の綴りと日本語訳した用語に注目（　　）
明治４年雁金屋清吉（1871-1873）、東京府小石川大門町、伊丹屋善兵衛、他が共同出版。早稲田大学図書館所蔵。

【開成学校】：前身は江戸時代に洋学の中心機関として幕府が設立した蕃書調所で，文久２(1862) 年に洋書調所と改称，さらに翌年**開成所**と改称して幕末にいたり，明治１(68) 年に新政府がこれを復興して**開成学校**と呼び，その後大学南校，南校，第一大学区第一番中学を経て，1873 年に専門**学校**として**開成学校**が設置された。正岡子規も在籍した。
　清水一利が「ベースボールを野球と訳したのは**正岡子規**と言うのは俗説」と指摘している。但し、1896 年新聞「日本」の「松蘿玉液（しょうらんぎょくえき）」（子規４大随筆集の一つ）に、ルール・用具・方法を野球用語として翻訳、今日でもそれが使われていると言う。

1873 年　**プーナ（インド）で最初のバドミントン・ルールの基本フレームが作られる。**
以下の二つの資料が伝えるバドミントンの基本形態の成立とプレーの説明：
① J.H.E.ハート（Hart）、印度のプーナ（Poona）で最初のバドミントン・ルールのフレームが作られる。【B.アダムス著『バドミントン物語』
【 Bernard Adams：The Badminton Story, BBC. 1979. p. 31, 】



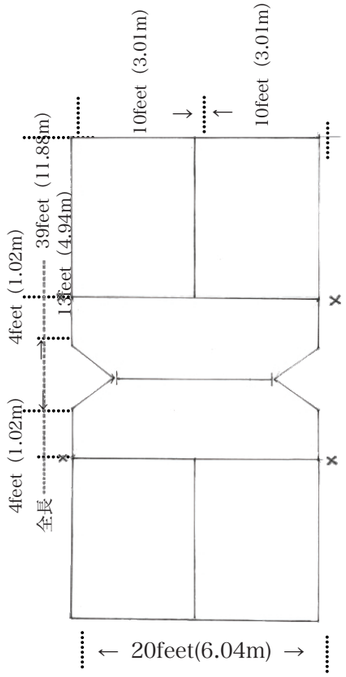
バドミントンのパイオニアである J.H.E,Hart（右）、彼の名は常にヴィダル（左）と共に尊ばれる

1870 年代初期から西インド地方のカラチには幾つかの室内競技場があり、J.H.E.ハートも熱心にゲームをしていた。後に雑誌に載った記事によれば、当初はラケットでなくバトルドアーが使われていた。（ママ）インドで最初に造られたコートは中央部が縊れた砂時計型だった。これは部屋の中央部に内側に開くドアーがあって、それぞれの側の中央部に二つの浅いＶ字型の切り込みが必要だったためだ。バドミントンが行われる様になって 30 年程後にこれはすっかり無くなっていたという。
＜ Badminton Gazette November, 1909 ＞

② J-Y.ギラン著『図解バドミントン史』【Jean-Yves Guillain：Badminton【 An Illustrated History: p.47 -56.,2004】「共通に使われる諸規則（Rule）の発明」という文節 があり、1873 年に誕生したばかりのバドミントンのルールについて、次の様に記している。

1873 年、「バドミントン」というゲーム名はシャトルコックを使用する ゲームの名称となった。此年の５月 31 日に、一人の読者が雑誌『ザ・フィ ールド（The Field）』に載せた広告がある。「最近、印度で流行していると 噂に聞く“バトルドアーのバトミントン・ゲーム（the Badminton game of Battledore）についてもっと知りたい”というものであった。
もう一 つの記事は、「床上４フィート以上の高さに一本のストリング（撚り合わせて作った索；縄、綱）で分割した空間の一方の側に４人でプレーするゲームについて綴られていた。即ち、最初に 15 ポイントに 達した方が勝者となる。狙い（aim）は相手のシャトルコックのリターンを阻止することで、勿論シャトルコックは常にそのストリング（索：ネットの意）を越える様に ヒットしなければならない。そこで示唆されるのは、そのストリングから紙数枚を吊るすか、ネットを使用してシャトルがストリングの下でなく上を越えたことを確証できるようにし、両サイドの対立を避けることである。

砂時計型バドミントン・コート
Hour Glass Badminton Court ※

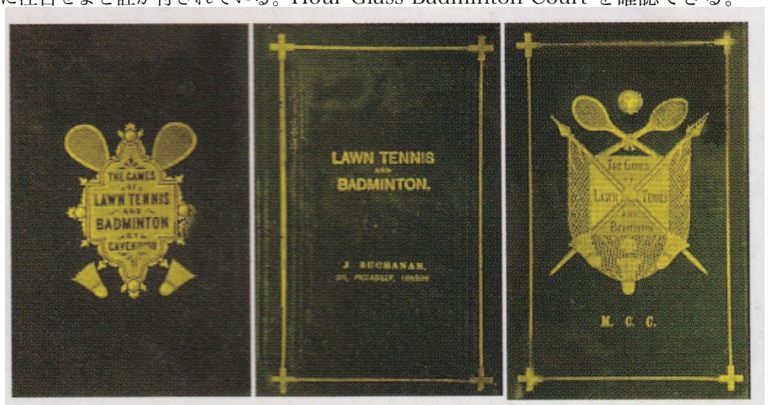


※ 砂時計型のコート

小孔を通して一定量の砂を落下させることで時間を測る
砂時計に似て中央の境目が縊れている形のコート

Bernard Adams が『The Badminton Story』p.26 に「Badminton at Peshawar, India,1874」と紹介した当時のバドミントン風景；heavily worn courts [すっかり（芝の）磨り減ったコート] のあることに注目せよと註が付されている。Hour Glass Badminton Court を確認できる。

キャベンディッシュ
本名 Henry Jones
1831-1899,英、whist（4人制のトランプゲームや他のゲーム、テニス、バドミントン等のルールを作る
(中谷敏昭提供)



（右）キャベンディッシュ著『ザ・ゲーム・オブ・ローンテニス＆バドミントン』1876 年発行、
（中）ブキャナン著『ザ・ゲーム・オブ・ローンテニス＆バドミントン』1877 年、
（左）M.C.C 発行『ザ・ゲーム・オブ・ローンテニス＆バドミントン』(ニュー・ゲーム・テニスと Anglo-Indian Game of Badminton, 1877 年；第 1 回ウインブルドン選手権の時に発行されたもので、テニスとバドミントンの砂時計型のコートが描かれている)

キャベンディッシュ著『ザ・ゲーム・オブ・ローンテニス＆バドミントン』

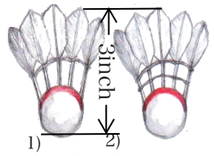
（面表紙）
THE GAMES
OF
LAWNTENNIS
(WITH THE AUTHORISED LAWS)
AND
BADMINTON
BY
“CAVENDISH” OF AUTHER OF
“The Lawsand Principles Whist”, &c.,&c.
(以下略)

目次
ローンテニス
グラウンドと用具　5
ゲームの説明　8
シングル・ハンディッド・ゲーム　8
ダブル・ゲーム　12
ハンディキャップス　12
心得（ヒント）　15
ローン・テニスの競技規則　20
バドミントン
グラウンドと用具　25
ゲームの説明　28

表紙と内容の一部（次頁に内容の一部を紹介）

著者註【scientific】:
競技や業務等が高度になる、巧妙になる、細密になる状態を示す。

※ 羽の括り糸の強度を変えることでシャトルの径を変えで飛び方（距離）を調節



1)one band type
2)two band type
ツー・バンドにすることでシャトルの強度は大きく強化され,それがRSL という社名にまでなった。
Rein-forced Shuttle-cocks Lemitted Co.

※※5 インチは 12.7cm

バドミントン

◇

バドミントンというゲーム（競技）は、屋内・屋外のいずれでも、2〜8 人までの様々な人数でプレーでき、2、3、4 人が最もよい。以下の説明は屋外ゲームについてのものである。屋内ゲームはそれと同じ方式（プラン）で行う。部屋による影響によってのみ変更される。

グラウンドと用具

グラウンド（コート）のサイズは、用いるスペースやプレーヤーらの力や能力によって、42ft×20ft〜30ft×15ft まで様々になる。グラウンドと複数のコートは図 1 或いは図 2 に従ってローン・テニスに対する指示同様にラインを引かなければならない。ポストの高さは凡そ 6ft、ネットの高さは 5ft 必要で、（ネットの）中央部で次第に低くなる様にし、エキスパート・プレーヤーに対しては 4ft6inch にする。ネットの深さ（depth：丈）は様々でよいが、グラウンドまで垂れているものが奨められる。

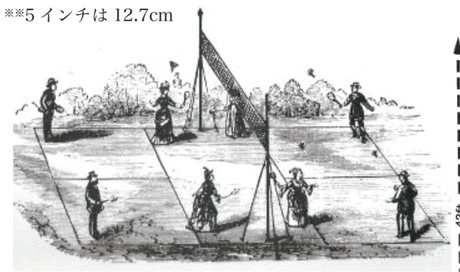
さらに、シャトルコックスとラケットが必要になる。普通に入手できるシャトルコックスは、高さが 5inch※※で、重量 1oz(約 28.3g)のものにする。多くは身体に負荷が罹るように重量を重くしてある。しかし、ゲームがサイエンティフックになるにつれ、以下の様な指示にしたがって製造された物でプレーされる：シャトルコックの重量はおよそ 3 /4 oz、高さは 3inch (7.62cm) の白色の羽根のみにすること。家庭で膠を着けたものがよく、商店の製品でも稀に十分よいものもある。羽根の中程に白糸を内と外に交互に通して結び、トップで直径が 3inch になる様にする。風のある日は、シャトルコックの重量を約 1oz 増量し、さらにトップの半径を 2inch3/4 に小さくしなければならない。こうした重量と大きさが最もパワーフルなラケットに適しており、普通のラケットではこれらのシャトルコックスはドライブすることが難しいが、普通のラケット用のシャトルコックスは羽根を 2inch3/4(5.72cm)に短くするのが正しい。ラケットの形状は**ラケッツ・ゲーム**で使用されるものと同じでよいが、幾らかは小さ目で、およそ長さが 2ft6inch(76.2cm 程）の物がよい。

ゲームの説明

もしグラウンドを図 1 のように設置するなら(此方を推奨する)、ゲームはローンテニスと同じやり方で間違いなくプレーできるが、一つ全てのストロークをヴォレー性にしなければならず、シャトルコックがグラウンドに接地すればそれを自分のコートに落としたものとして、相手プレーヤーのカウントするところとなる。むしろ、多くのプレーヤー達が好む様に図 2 のようにグランドが設置されたなら、図 1 との相違点は、サービスはベース・ラインとサービス・ラインの間のコートのいずれからなされてもよく、それが反対側コートの対角側コートのベースラインとサービス・ラインの間に落ちなければならないことになる。もしそれが、サービス・ラインとネットの間に落ちたならフォルトとなる。

仮にシャトルコックがネット或いは一方のポストに触れて、更に飛び続け、適正なコート内に落ちた時は、最上のルールは、サービスまたはリターンがグッド（good）と見做されることもあるが、多くのプレーヤー達はこれをフォルトにするかケースによってはそのストロークを無かったことにする。

ゲームをセテング（追加）することについては、ローン・テニス規則が奨められる。しかし、多くのプレーヤーは 13all で 5points をそのゲームにセテング（ゲームを two-up するのでなく、five-up する**ラケッツ**）の規則の方が好まれる。14 all では同じ様にゲームに 3points をセテングするのである。ハンド・アウト側（得点圏を持たないサイド）はセテングするか・しないかを選択する権利を持つ。



※ 左のコートの様子は B.Adams:THE BADMINTON STORY,p.29（1979）に In the 1883 rules the centre line stops at the front service line in the mordern fashion として紹介されている。此絵ではネットの高さが誇張され過ぎている。

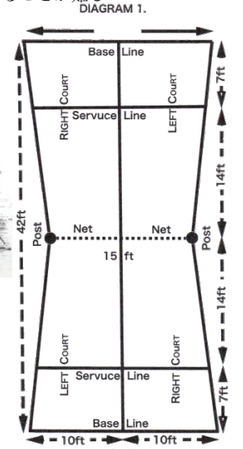


図 1

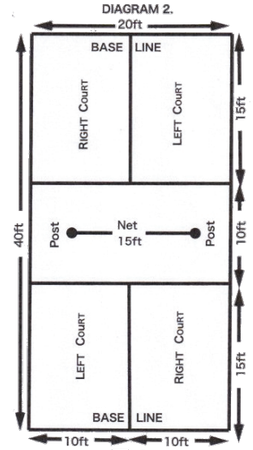


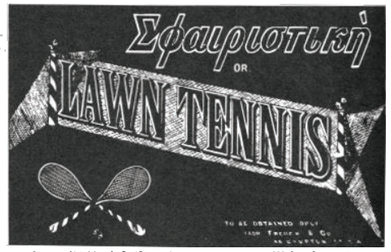
図 2

資料は中谷敏昭（天理大）が大英博物館等で収集

1873 年　明治 6 年　　英国人、海兵学校でフットボールを指導。　【米国】北米を大恐慌が襲う
米国人が開成学校※で野球を紹介　　※明治初期東京府に設立された文部省直轄の洋学研究・ 教育の機関

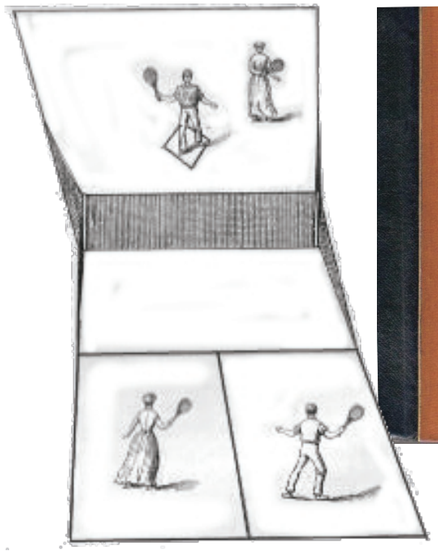
1874 年　明治 7 年　　【英国】Wingfield ：イングランドでローンテニスを始める（これが ①バドミントン誕生後になること、②コート内からサーブを出すこと、③コートにサービスラインがあることなどから、シャトルをボールに置き換えた、“バドミントンがお兄さんであるとする説”を語るバドミントン関係者もいるが、テニスの祖先にはリアル・テニスなどの多様な歴史があり、テニスの深い歴史を軽視してはならない。

ウイングフィールド少佐
ジョージ・E・アレクサンダーの粘り強い努力でいかさま師という異名から「真の紳士」として蘇ったウイングフィールド少佐（インドで軍務に就く）、1874 年ローン・テニスの前身；スファリスティックを世に送り出した：ハイナー・ギルマイスター著『テニスの文化史』(1990) p.217.より



ある発明が広告される：18/19 世紀古いテニスの凋落ぶりは凄かった。1874 年 3 月 7 日『コート・ジャーナル』誌に注目すべき短報が載る、スファリスティック；小さな箱に入れて持ち運びのできるゲームについてである。この数日前にウィングフィルドは『テニスの古代ゲーム用、新式改良型ポータブルコート』の特許を取得していた。野外で誰もがやれるゲームの紹介であった。 こうして、ロンドン・カールトン・ストリートにあるフレンチ商会から膨大な量のテニス用具セットが売り出されて行った。

スファリスティック
プレー用の館や常設コートなしにプレーできることが特徴。2 本の支柱を約 6.4m(21ft)離して立てるだけでよい。あとはラインを示す色付きの紐またはリボンがあればできる。氷上ででもできる、というのである。



19C 末期のスケートテニス
テニスの遊ばれ方の多様性を示す好例

Duke of Beaufort, K.G&A.E.T.Watson, 『The Badminton Library : Tennis, Lawn Tennis, Rackets, Fives』1890.
Lucien Davis,C.M.Newton,によるプレート 12 版、図版 67 と写真。（右）面表紙、（左）図版（Diagram of Major Wingfield's Game of SPHARISTIKE),P.137.　　（阿部所蔵）

1875　明治　8 年　　銀座にガス灯点灯 (**英国ではガス灯の発明がバドミントン発展の一つの要素となった；夜間スポーツの誕生;バドミントンは夜もやれる**)
英国人 F.W.Strange、大学予備門講師として来日、陸上競技、漕艇、水泳、ヨット、スケート、フットボール、クロッケーを指導。

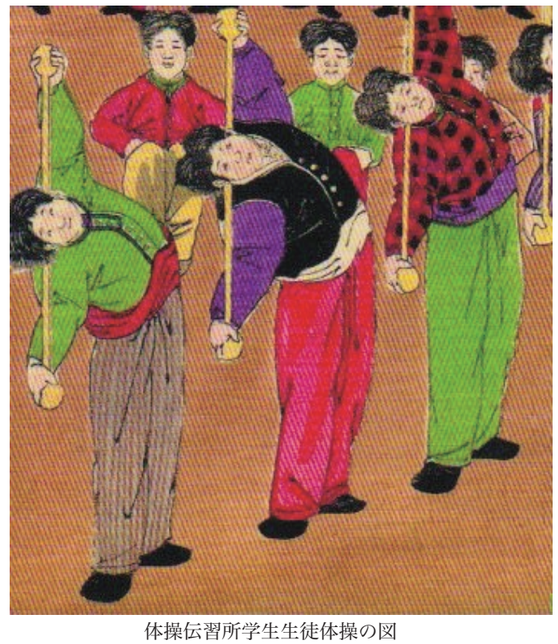
銀座ガス灯通り（歌川広重三代画）

1876　明治　9 年　William S,Clerk（クラーク博士）来日、札幌農学校を開設
「青年よ大志を抱け」と説く

1877　明治 10 年

1878　明治 11 年　**体操伝習所を設立**。文部省の招聘で G.A.Leland（リーランド博士）(米)**来日**、体操・テニス・サッカー等を紹介。**Leland は日本の学校体育の父**と呼ばれる。我国に体育的な活動規範のモデルやスポーツの基本的概念、活動形態を伝え、指導者を養成する。通訳を担当したのは江戸幕府の開成所卒の**坪井玄道**（げんどう）：後に体育学を学び、体操伝習所教師となる

坪井玄道　1852-1922
日本最初の体操教師。千葉県出身。慶応 2 年江戸幕府の開成所に入学英語を学び、東京師範学校（現在の筑波大学）教員となる。J.A.リーランド（米）の通訳を務め、体操の重要性を認識して体育学を学び、体操伝習所教師となり、明治 19 年高師助教授。明治 23 年日本体育会体操練習所（現在の日体大）教授就任。明治 33 年黒田清輝、滝廉太郎と英国留学。大正 11 年東京女子体操音楽学校の名誉校長となる。平成 18 年日本サッカー殿堂入り。



体操伝習所学生生徒体操の図

クラーク博士

リーランド博士

今村嘉雄著『学校体育の父 リーランド博士』不昧堂書店、1968 年がある。著名な外科医で耳鼻咽喉学者として知られる。日本の体育草創期に伝習所の実際活動を軌道に乗せ、近代体育の手ほどきをしてくれた恩人。**江戸期にオランダの影響を受けた日本の体育事情を刷新**。

1879　明治 12 年　Leland 東京師範学校で新体操術を指導
Leland 神田一橋に体操伝習所を開設

1880　明治 13 年　東京 YMCA 創立　機関紙「六郷雑誌」の創刊

1881　明治 14 年　体操伝習所　第 1 回卒業生を出す。Leland 帰国
内村鑑三ら、札幌 YMCA を組織

1882　明治 15 年　**嘉納治五郎**　学習院教員となる。
宮川経輝ら、大阪 YMCA を創立する。
美満津商店、東京本郷・赤門前に創業

1883　明治 16 年　**大学予備門、東京大学　合同陸上競技大会を開催。**

1884　明治 17 年　**熊野雄七ら横浜 YMCA を創立。**

1885　明治 18 年

1886　明治 19 年　**神戸 YMCA の前身「神戸基督青年会」を設立 → 神戸英語会の誕生。**
大阪 YMCA 体育会を組織し体育事業を開始、日本初の YMCA 会館を建設。

1887　明治 20 年　福岡 YMCA 創立、横浜でピンポン始まる。
P.de Cubertin（クーベルタン）：教育における身体訓練普及委員会を設立する（仏）

1888　明治 21 年

嘉納治五郎（1860-1938）講道館柔道の創設「日本体育の父」

1889　明治 22 年　**帝国憲法発布**
J.T.Swift 、東京 YMCA 会館に＄ 35,000 の募金を集める、日本 YMCA 同盟初の名誉主事となる。
1890　明治 23 年　神戸基督教青年会の結成
教育勅語の発布
三田土（みたつち）ゴム会社 軟式テニスボールを開発・生産
1891　明治 24 年　**嘉納治五郎、大日本体育会を創設。**　J.A.Naismith バスケットボールを考案
1892　明治 25 年
1893　明治 26 年　東京 YMCA、 美土代町に新会館を起工。

神田美土代町の
東京 YMCA 会館

クーベルタン男爵（仏） 古代オリンピックの復興を提案
クーベルタン男爵ピエール・ド・フレディ（1863-1937）：
フランスの教育者、英国のパブリック・スクールに**教育の理念**を見、心身共に鍛える教育を目指すようになり、**古代オリンピックを復興させる**。ソルボンヌ大に於ける演説で「**ルネサンス※・オリンピック」を提唱**。賛同者と**国際オリンピック委員会（IOC）を設立。1896 年のアテネ・オリンピックの実現を図る**（※ 文芸復興：芸術・文化の革新運動の意味とされるが‥）。

「自己を知る、自己を律する、自己に打ち克つ、
これこそがアスリートの義務であり、最も大切なことである」

「大切な事は勝つことではなく、参加することだ」
ピエール・ド・クーベルタン

Pierrede Fredy baron de Coubertin, 1863-1937
仏の教育者。古代オリンピックを復興、近代オリンピックの基礎を築く。“優れた人種は劣等人種に社会的恩恵を与えなくてもよい”とも考えた社会進化論者の一面もあった。

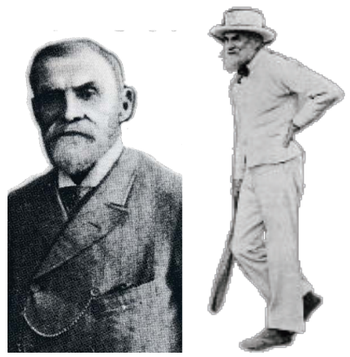
人に対する２つの方向の考えを持っていたクーベルタンのポートレート

1893(明治 26)年　Badminton Association が England で創立される。
イングランドのサウスシーにあるドルビー大佐邸に 14 のクラブ代表が集会し、協会（Association）を結成し、①ルールの統一と、②その普及に努めることを盟約する。

Major Doby
ドルビー大佐とダンバー邸

S.M.Massey 著『Badminton、G.BELL& SONS,LTD、1911 年』の「**歴史と回想**」によれば、ゲームの起源と名称はイングランドに帰することができるが、急速な発展はインドで行われた。1873 年西印度のサッタラにあるジムカーナ（野外競技場）に増設された小屋で初期の形態のものが行われ、これを**タムフール**と呼んだ。愚かなことに、ラケットというボキャブラリーのない者達が、自分の知っている“タムタム（tum tum；シャトルを打つ音の擬音か）”という言葉からこう呼んだのだ、という。
18 世紀が終わる頃までイングランドでカバー・コートの使われた形跡はない。1875 年のフォークストン；Folkstone にある陸軍集会所（サービス・クラブ）にクラブがあり、ドルビー小佐はそこの会員だった。このクラブがウエストクリフ・ホテルの ball room で“tea & Badminton”を行なっていたという。「今日、バドミントンと呼ばれるもののパイオニアは、故 G.W.ヴィダル氏と故 J.H.E.ハート氏で、若い弟子であった我々はこうしたベテラン・スポーツマンと対戦して、最初に勝てた時に、どんなに誇り高かったことか、どのように彼らが上品に（控えめで、謙遜しながら）勝ち、どのように度量の大きな負け方をするか、彼らと対戦することでどれほど多くのことを学ぶことができたか、などを思い出すのである。」と。

Vidal
G. W. ヴィダル 1899-1906 年までバドミント ン協会の専務理事を務める. バドミントン界 の長老(doyen)


.F. H. E. ハート(Hart) 1868-
インドでプレー後、イングラン ドの若いプレーヤーを育て、バ ドミントンの発展に尽くした。多くの若手プレーヤーの崇敬の的となった。

1874 年の印度 peshawar におけるバドミントン。すかり擦り減って白く写っているいるコートに注目。
B.Adams 著 The Badminton Story より

1874 年にインドで撮影された“ニュー・ゲーム”と呼ばれたバドミントン・ゲーム（風除けのシールドに注目）

1894　明治 27 年　札幌 YMCA 設立、東京 YMCA 会館竣工

日清戦争

P. de Coubertin（ピエール・ド・クーベルタン） ソルボンヌ大でオリンピックの復興を提唱

オリンピック委員会創設される　初代会長に Demetrius Vikelas（希）※

※デミトリオス・ヴィケラ（1835-1908）、シュロス島の生まれ。ロンドン・ユニヴァシテー・カレッジ卒。1894-1896 年まで IOC 初代会長を務めた経営者。幼少時から病弱で、教育を受ける機会が少ななかったと言われる。

清水勲編『続ビゴー日本素描集』1992 年.
魚釣り遊び（魚：朝鮮、傍視する：ロシア）
(『トバエ』1 号、明治 20 年 2 月 15 日)

1895　明治 28 年

1896　明治 29 年　**第 1 回オリンピック競技大会 Athenes Greece で開催**　柳田亨誕生

1897　明治 30 年　日本学生 YMCA 同盟の結成　P.de Coubertin 第 2 代 1OC 会長に
Boston でマラソン大会始まる

1898　明治 31 年　デンマーク：Nielsen ハンドボールを考案

1899　明治 32 年　L.H.Gulick（米国のキャンプ ファイアー運動の創設者。）：スポーツ心理学を開発

L.H.グーリックについて寺島善一著『身体感覚・體育館について』明治大学教養論集 1979 年がある.

1900　明治 33 年　神戸 YMCA の再興　廣田兼敏札幌で誕生　慶應義塾にラグビー紹介される

第 2 回国際オリンピック大会

1901　明治 34 年　**大森兵蔵**　Stanford University に入学
長崎 YMCA の設立

F.H.Brown（ブラウンの名で語られる） Rochester、YMCA の Assistant Director となる（後に来日し、名古屋 YMCA の指導者講習会で日本初のバドミントンの講習を行う.)

F.H.Brown Rochester

大森兵蔵（1876-1913）
Stanford Junior Unive.に入学。
YMCA 体育教授 後に東京 YMCA にバスケット、バレーを日本に紹介する。
20 歳年上のアニー・シェブレー（日本に帰化；大森安仁子と改名.日本の古典文学の翻訳を行う）と結婚。この時代、米国英仏は植民地支配の新手法としてスポーツの利用を考え、基督教会の活動を活発化させていた。1889 年その第 1 号として日本 YMCA が設立されていた。

1902　明治 35 年　東京 YMCA、10 年続いた米国からの援助を断る
名古屋 YMCA 発会式を挙行。丸山愿（げん）初代会長に

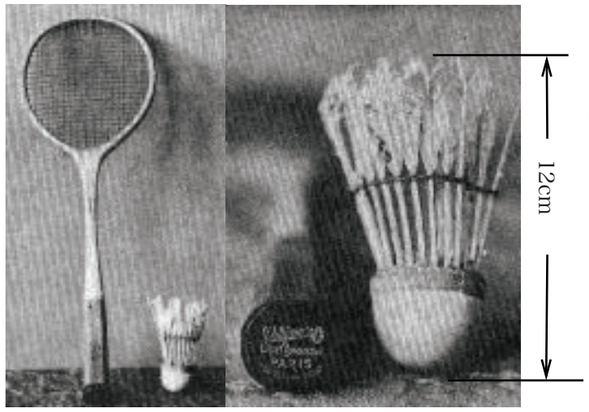
日本最初の体育教師坪井玄道 欧州留学より帰国

坪井玄道（1852-1922）
1871 年開成所卒業、東京高等師範（現在の筑波大学）教員となる。**リーランド**の通訳を務め、1886 年助教授。
サッカーを日本に紹介、殿堂入りする。市川市立
歴史博物館に関連の品が展示されている。

坪井玄道（1852-1922）
前出；P.20

石渡俊一（後に神戸 YMCA 体育主事）大阪に生まれる

朝倉金作（新潟市の写真家）渡英。バドミントン・ラケット（William's C, Paris）とシャトル（おそらくフランス製）を持ち帰る



現在のシャトルの高さ 62 ー 70mm に比べてはるかに大きい。風のある野外で行われることも多かったからである。
羽軸の括り糸は 1 本であるが、コルクへの植え付け部分も糸で括られている。

明治 35 年写真家朝倉金作（新潟市）が持ち帰ったバドミントン・ラケット

1903　明治 36 年　**東京 YMCA に体育倶楽部を設立。**京都 YMCA 創立。

1904　明治 37 年　日本、ロシアに宣戦布告 **日露戦争勃発**
第 3 回国際オリンピック大會、米国開催

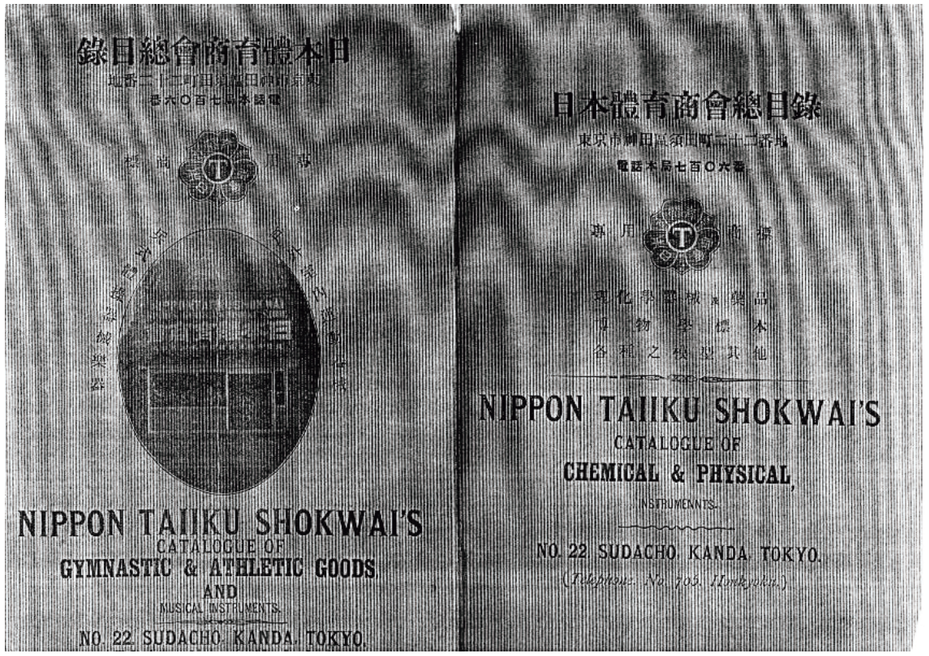
京都 YMCA 会館に遊戯室を設置

1905　明治 38 年　笹尾粂太郎ら 仙台 YMCA を創立
日露講和条約　東京 YMCA 体育クラブ設立。

ギリシャより日本にオリンピック委員会の結成要請文書届く

1906　明治 39 年　長崎 YMCA、会館完成

1907　明治 40 年　　資料の発行年度がこの年と推定される**日本體育商會の目録（表紙；下の写真）にバドミントン用具の価格表が載る**



東京市神田区隅田町　日本體育商會聰目録　pp.１２－１３

**前頁のカタログは、『新遊戯バドミントン用具（箱入）BADMINTON SET』を掲載した頁の紹介で、「*欧州ニオイテ盛ンニ行ルル處ノ最新遊戯「バドミントン」ハ「ローンテニスコート」ヨリモ尚小サキ会場ニ於テ使用スベク亦タ運動最モ快活高尚ニシテ家庭用、會社用、女学校用、小学校用等ニ最モ適當スルノ庭園運動具ナリ其巨細（大と小の）なる価格ハ左記ニ*」と書き出され、「*箱入りバドミントンA號I箱が2,600*」で、「*但此品號二號ラケット四本「シャトルコック　コルク底羽半ダース二號ネット壹張、三ツ■杭棒（読めない）※（※3個の棒を繋いで1本のポストに組み立てる）一對、綱張様用■引自在付一對分、小杭（三組の杭棒の支えに使用）一對分、小槌壹個の七種箱入*」とする付記が添えられている。

1908　明治 41 年　　大森兵蔵　米国より帰国　東京 YMCA 体育主事となる(1909 年に辞任)
第 4 回オリンピック競技大会　London

1909　明治 42 年　　**大日本体育協会の創設　嘉納治五郎初代会長、**大森兵蔵もこれに参加

1910　明治 43 年　　**第 5 回オリンピック競技大会選手選考会を羽田で挙行**

1911　明治 44 年　　嘉納治五郎　東京高等師範学校校長　IOC 委員となる
北米 YMCA で 1,000 名の医師が身体測定・身体検査に奉仕、210 の Bible class を開設、128 名の体育指導主事が指導に当たる**【スポーツ指導形態の基本イメージ形成する萌芽となる】：スポーツ史上、注目すべき事案である。**
京都 YMCA、会館・屋内運動場・1,000 人ホール完成し、運動部設置。

1912　明治 45 年　　**我国初のオリンピック選手団の結成；監督大森兵蔵、選手三島弥彦・金栗四三がシベリア経由でストックホルムに向けて出発**
大森兵蔵『オリンピック式陸上競技法』（運動世界社）を出版※

選手団の出発に合わせて大森兵蔵著『オリンピック式陸上競技法』が刊行されている。どのような技術的情報や戦術的情報を認知してゲームに臨もうとしたかがわかる。

※　左の挿入図はその一頁目の写しである。全文は国立国会図書館デジタルコレクション『オリンピック式陸上競技法』を参照されたい(明治 45 年 6 月 24 日に内交の印のある書籍を見ることができる)。

第 4 回日本 YMCA 同盟総会を京都同志社で開催；体育事業振興を決議
神戸 YMCA、体育部を開設

フランス・バドミントン協会が所有する明治期の日本の女学校での羽根つき大会の写真

1912　大正 1 年　**E.S.Brown 来日、我国に極東オリンピックの開催を働きかける**
E.S.Brown； YMCA 活動※を通してオリンピックの理想の実現を推進
※Wikipedia で大森兵蔵を検索: 米國の YMCA 普及活動の狙いを参照されたい。
神戸 YMCA、体育部を開設。
大森兵蔵『オリンピック式陸上競技法』（運動世界社）出版（前頁を参照)
第 4 回日本 YMCA 同盟総会を京都同志社で開催；体育事業振興を決議

1913　大正 2 年　**神戸 YMCA 会館落成、日本最大の大講堂兼室内体育館(21×10×6m）を併設**
大森兵蔵 オリンピックの帰路米国で客死
第 1 回極東（後に東洋と改名）オリンピック・マニラ大会開催
東京 YMCA 理事会；会館拡張・体育館の建設を立案
F.H.Brown 来日；YMCA 同盟名誉体育主事・東京 YMCA 名誉体育主事就任
日本体育協会主催：第 1 回陸上競技大会を陸軍戸山学校で開催：F.H.Brown 見学
Herbert Sneyed 来日、横浜 YMCA 名誉主事に就任

1914　大正 3 年　**廣田兼敏**（後に横浜 YMCA 体育主事）京都工業学校夜間部林業科を卒業
第 1 次世界大戦：日本；ドイツに宣戦布告
F.H.Brown 長崎 YMCA で体育講演（聴衆 150 名)、各地の YMCA で各種競技の普及に努める
神戸 YMCA 何回目かの ピンポン大会・玉突競技会・武術大会等を開催
神戸 YMCA 会員 vs 米軍艦サラトガ号乗組員バスケ親睦試合を行う

1915　大正 4 年　**F.H.Brown** 神戸高商生にバスケットボールを指導
神戸 YMCA 体育講習会を開催

1916　大正 5 年　日本 YMCA 同盟「全国主事会」を開催： **F.H.Brown らが「体育主事の諸問題」「青年会の衛生法」等を講演**
大阪 YMCA の仮設運動場でも室内 BB・ピンポンの活動始まる
柳田亨（後に東京 YMCA 主事）水泳指導
第 6 回オリンピック競技会ベルリン大会 第一次世界大戦のため中止
横浜 YMCA 会館落成、室内体育場を設置、F.H.Brown 記念運動会開催

1917　大正 6 年　大阪 YMCA バレーボール部 神戸 YMCA を訪問、親善試合を行う
京都 YMCA vs 神戸 YMCA 第 3 回極東バスケット予選会で京都が勝ち代表決定
東京 YMCA 日本初室内総合体育館完成（鉄筋コンクリート 3 階建：165 坪）
第 3 回極東選手権大会東京芝浦で開催（ **F.H.Brown 大会名誉委員となる**）
東京 YMCAvs 横浜 YMCA バスケットの対抗試合を実施

1918　大正 7 年　横浜 YMCA;ピンポン大会、徹夜旅行、野球大会、体育部新旧会員親睦会等を開催;京都 YMCA の継続的な柔道、野球、ピンポン,ボーリング、バスケ大会等々の活動は依然として活発、加えて機関紙「京都青年」で H.H. Grafton が「エクササイズ」と題して体育活動をアピール。
W.S.Ryan(日本 YMCA 同盟)：横浜 YMCA に日本初の体育リーダー 会を作る

1919　大正 8 年　**大日本体育協会、極東体育協会を脱会**
廣田兼敏、横浜 YMCA 職員となる
日本のベルサイユ条約批准(1919 年 6 月仏国ベルサイユで第 1 次世界大戦後における連合国とドイツの間で締結された講和条約) :ベルサイユ体制（社会主義体制に対する資本主義国家の結束を図ることを意図した体制）が始まる。
東京 YMCA に「バスケットボールチーム」誕生

名古屋 YMCA「第 2 回体育指導者講習会」を開催、指導者 F.H.Brown、W.S. Ryan のプログラムで（バドミントンも）行われた。日本 YMCA 同盟が、名古屋・京都・大阪・神戸・福岡を巡回指導 (開催期日不明)。これと後述する松葉の手紙の内容は一致するが、廣田は「松葉のメモは全部間違いだ」と言ったという。

大正期の我国のバドミントンを考える際に挿入しておきたい二つの小さい事案①②

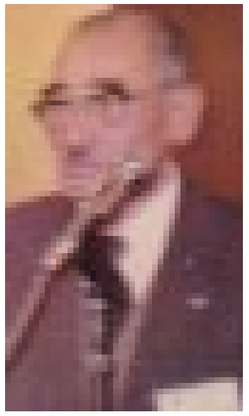
新潟日報
国産1号？バドミントン発見
田上の旧家からネットなど一式
箱に「大正七年求ム」
一組
バドミントン・セット

① 大正期の国産バドミントン・ラケットか

1979 年（昭和 54 年）12 月 16 日付「新潟日報」紙に「国産 1 号？バドミントン発見　田上の旧家からネットなど一式、箱に「大正七年求ム」の見出しでこの年には国産のラケットが販売されていたことが報じられた。記事内容の大意は以下のようである；「南蒲田上町（みなみかんばらぐんたがみまち）で大正 7 年製のバドミントン・セットが見つかり、話題になっている。同町きっての旧家、田巻恒彦さん（67）方の土蔵から出てきたもので、町や加茂市のバドミントン関係者は「国産第一号のラケットかもしれないと資料をひっくり返している。見つかった用具は国産で「東京本郷・美満津商店（※本誌 p.30 を参照）製造」の刻印があり、箱には「大正七年求ム」と書かれている。現在の用具と比べると、フレーム、シャフトとも一周り太く、“テニスラケットの弟分”といった感じ。ネットやポールも一式‥‥。玉巻さんが小学校に入った時に買ってもらったのだという。（中略）「スポーツ八十年史」を見ても「日本には大正十二・三年頃、北米 YMCA から用具が贈られていた」「戦前の国産メーカーは横浜の一社だけ」とあるだけで、はっきりしない。「バドミントン史を書き換える新事実」と言い切るには資料不足で、関係者も「求ム、バドミントンの歴史に明るい人」といった表情だ。ちなみに、この用具一式の値段だが、当時の金で二十五円なり。同時期の織物工場の工員の月給は十円前後だった。（大正四年「新潟県産業調査書」下巻)。戦前の大地主の一端が伺われる。

②前述の大正 8 年に名古屋 YMCA で開催された「第 2 回体育指導者講習会」で F.H.Brown によるバドミントン実習が行われた：この時我国における最初のバドミントンの指導講習（紹介程度）が YMCA において行われたようであるが、名古屋 YMCA の記録：安村正和著『YMCA 年表 1842~1990 年体育事業を中心に』(1993 年)にはそれがなく、昭和 2 年にそれに該当するような行事が実施・記録されている。この事案が重要なのは後に廣田兼敏が自ら主張する“我国におけるバドミントンの最初の紹介は廣田自身による”とする主張と事実が異なってくるからである。

【 松葉徳三郎の手紙】 次に示したコピー資料は青木昭二（大阪）から筆者宛に送られた 1977 年 9 月 16 日付の松葉徳三郎の手書き原稿の写しである。松葉は長く大阪 YMCA 体育指導主事を勤め、F.A.Brown の指導を直接受けた。当時の YMCA における 代表 的な指導者の一人である。以下にその内容を記す。



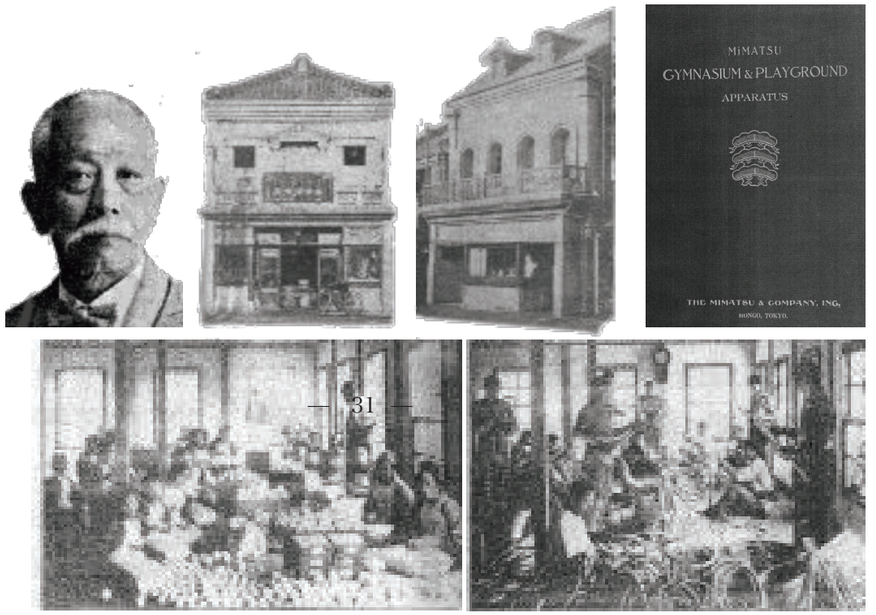
松葉徳三郎（1903-1981）
大阪バドミントン協会 30 周年記念で挨拶する松葉徳三郎

「 前略　手が不自由で乱筆になりましたので、よろしくご判読下さいますようお願いいたします。私がバドミントンを教わったのは大正 8 年 11 月の頃だった思う。東京 YMCA 体育部名誉主事として名古屋・京都・大阪・神戸・福岡などへ指導に巡回された F.H. ブラウン氏からコーチを受けた。これが私がバドミントンを受けた最初であると思う。その時一緒にコーチを受けた小川、石脇さんなどは亡くなられた。その後大正 10 年 4 月大阪 YMCA 体育部見習いと して就職してから川崎策実さんと練習するようになり、レクレーショ ンの程度で行なったまでで、大阪 YMCA バドミントンクラブという名称で行なったが発展せなかった。その後、私が 13 年 5 月 1 日に応召するまで続いた。この前にも関西大学にバスケット ボール部、アメリカンフットボール部を創設したので残念ながらバドミントンには手が伸びなかった。その後、18 年 9 月退役になるまで後輩の方々のお世話になっている。」

細かな議論をするなら、バドミントンを“レクリエーショなるなものも含めて捉えるか・競技としてのみ捉えるか”、第三者として、松葉・廣田の各々の感覚はどちらであったのか、あるいは競技をルールの理解で止め、とりあえずはゲームができることとするか、戦術的なプレーを含めて競技の程度やそのためのトレーニング法までを含めるのか。ガイダンスかレッスンか等、議論の尽きないところである。その是非を軽々に判断することは、不可能なことである。問題は、「廣田が松葉を指導した」といい、松葉は「それを受けたことがない」とする主張の違いにあるのだが、廣田のバドミントン競技に寄せる思いの強さが、歴史過程の認識に大きく作用してくるのである。この後もこの事は注意して見てゆきたい。

※ ここで、前出の‘美満津（みまつ）商店’に注目しておきたい。

日本スポーツ用品製造販売業者の草分けとなる**美満津商店は、1882(明治 5)年 5 月に、伊東卓男が**東京神田区猿楽町 2 丁目に**創業し、誕生した。**1890（明治 23）年 8 月～1895（明治 28）年 7 月までに、現在の東京大学赤門前の東京本郷区本郷 5 丁目 10 番地に移転。創業 10 年を待たずに同地 12 番地に新店舗を開店する。同店が製造・販売していた商品はカタログ『美満津商店総目録』（店舗、小売店舗内部、製造工場の写真が掲載されている）で明らかである。写真は 1904（明治 37）年発行の『**美満津商店総目録**』に掲載された「体操部（スポーツ用品の製造工場）の一部でテニスラケット製造が行われていたが、バドミントン用ラケットもここで製造されていた事は既に紹介した。



（上段左）創業者：伊東卓男、1939 年没.（上段中左）標本部、（上段中右）美満津商店体操部店舗の写真、（上段右）『美満津商店総目録 No. 19（1904 年）、（中段左）用具造り風景：ボール造り、シャトル造りのようにも見える。
（中段右、下段右）テニス工場のラケット製作（写真に見えているのはテニス・ラケットか）、下段左：美満津のカタログの表表紙

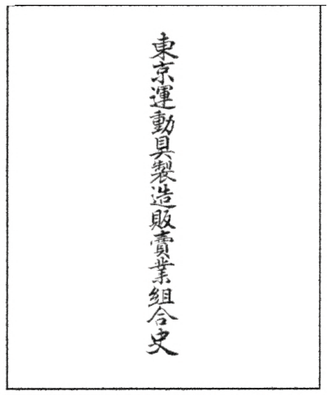
出典：中嶋健著「美満津商店の製造工場に関する一考察」下関市立大学 60 周年記念論文集（2017.1）:本資料の提供は大隈廣明＜筑大教授（2001 年）＞による。この論文中に、1922-1923 年に国内に全国 10 ヶ所のラケット関係の工場のあったことが紹介されている。

1921　大正 10 年　**東京運動具製造販売組合** 1879(明治 12)-1959(昭和 34)年が創立される。
：紀元 2600 年のオリンピック大会招致運動の中で同組合が創立されたことが以下の**復刻版『東京運動具製造販売組合史』1989(平成元)年**に記されている。
この**復刻版**＜巻頭＞で当時の東京スポーツ用品工業共同組合理事長を務めた三星**勲**は 1936(昭和 11)年に非売品として刊行された**旧版『東京運動具製造販売業組合史：創立 15 周年記念事業』（戦災で消失）**を 30 周年記念事業として復刊可能

なものにまでしてくれていた当時の**編纂・発行責任者玉澤敬**三に深い感謝を贈っている。その中に、**大正 10 年前後の、やがてバドミントン競技に関係してくると思われる組合加盟各社の記録があり**、この項の最後で拾って置きたい。

東京スポーツ用品部工業組合理事長 三星勲は組合史の巻頭を次の様に記した。

「本書復刊に当たって」大正 10 年創立の東京運動組合の歴史を伝える資料で東京空襲による消失を免れて現存するのは、西正雄編纂『**旧東京工組**』と他に東京卸組合関係書しかなかった。この度、組合創立 30 周年を記念して、創立 15 周年記念事業で刊行された『**東京運動具製造販売業組合史**』**の復刻版**を加えることができた。**メーカー・卸・小売の各組合が一本であった時**を改めて見直すことで業界の一致団結と親睦を図りたい。



「序」平沼亮三：1879(明治 12)-1959(昭和 34)年；日本の市民スポーツの父と呼ばれる（慶大卒）

平沼記念体育館に引かれたバドミントン・コートのラインが見える

『序』 此度東京運動具製造販売業組合 15 周年事業として我国運動記者の大先輩でありスポーツ界の権威である廣瀬賢三君によって運動具の発達史とも云うべきものが出版されるので、序文を求められたが、私は此運動具が我邦に何もなかった頃から細く且長く運動界に関係して居るので、今日の如く運動競技が長足の進歩をした様に、運動器具も亦之に正比例して発達したことを喜ぶ一人である。

當時野球と云へば僅かにバットとボールだけであった。其バットとボールも米国から輸入してゐた。其後グローブが出来、ミットが出来、マスクが用いられ、ゴム毬で出発したテニスが硬球まで我邦で作られる如き、まことに此十五年の進歩発達は目覺ましいものと思ふ。

米国から輸入した野球のボールやバットの如きは、丁度野球技が米国より輸入され其指導を受けたものが、今や米國大學の選抜軍も我大學軍に敗れるまでの技術の進歩は、等しく器具に及ぼし、近頃はボールもバットも外国に向かって逆輸出するまでになったことは、單に斯道の上ばかりでなく、我国工業の発展より見ても慶賀に堪へざる處であるとともに、此進歩發達した運動器具が一面我邦の運動競技の興隆に貢献してくれたことは勿論、之によって我が国民の體位の向上にも資する處大なるものありたるは敢えて賛する迄もない事と信ずる。
茲に運動具製造販賣業組合の労を謝し、併せて組合史の発刊を祝して序文と致す次第である。

昭和十年十月二日　　平沼亮三

昭和 10 年 12 月、当時の同組合員一覧よりラケット製造・販売に係わった同組合会員

美満津商店
明治 15 年創業
本郷区本郷 5-10
伊東虎夫

イシイカジマヤ
明治 28 年創業
本郷区湯島天神 3-1　石井順一

フタバヤテニス堂
大正 13 年創業
本郷区春木町 2-58
長谷義明

河崎ラケット製作所
大正 13 年創業
本郷区根津須賀町 10
河崎吉太郎

鈴木運動具店
明治 42 年創業
下谷区南稲荷町 5
鈴木清蔵

k.k.バンブー社
昭和 10 年創業
神田区小川町 2-2
戸田千葉

美津濃運動用品 K.K.
明治 39 年創業
大阪市東区淀屋橋南 1
水野利八

合資会社杉田日進堂
明治 37 年創業
神田区錦町 3-4
杉田鑛蔵

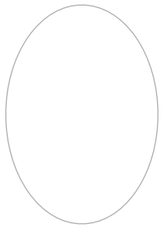
マスダ徽章商會
大正 15 年創業
麹町九段中坂下
増田繁夫

平井運動網製造所
明治 31 年創業
小石川町氷川下町 13
平井辰太郎

森下ラケット製作所
大正 7 年創業
荒川区尾久町 2-534
森下福三郎

山田ラケット・スキー製作所
滝野川区田畑町 1753
山田祐助

美津和元気堂
昭和 4 年創業
渋谷区千駄ヶ谷町 5-937　幅屋元記



青木ラケット製作所
大正 5 年創業
足立区八千代町
青木誠三郎

同組合の成果は、1922（ 大正 11）年の文部省主催運動體育展覧会の開催にまで行き着くことになる（後述）。

1921　大正 10 年　10 月横浜 YMCA 名誉主事 S.スネード（在日 1913-30 年）が休暇旅行を終え、**米国 YMCA より寄贈されたバドミントン用品を持ち帰ったとする廣田兼敏の話が日本バドミントン協会編の『バドミント ン講習会用テキスト』1952（昭 27）年に紹介されおり（未確認）、亦、そのことが同じ廣田の話として日本体育協会編『日本体育協会 75 年史』(p. 691、1986 年）にも次のように紹介されている：廣田兼敏著「横浜 YMCA とバドミントン」『日本体育協会 75 年史ー日本バドミントン協会』(p.691、1986 年):**

ところが、バドミントンに関する限り、文明開化への道のりは遠く、つぼみをもち始めたのは、やっと、大正も 13、4 年の事であって、横浜 YMCA 名誉主事 S・スネード（在日期間 1913-1930）のもたらしたバドミントン用具一式が、今日の日本バドミントンの隆盛を築くとは誰が予想し得たであろうか。

大正 10（1912）年休暇旅行を終えた S.スネードは、米国 YMCA より寄贈されたバドミントン用具を持ち帰り、横浜 YMCA 体育主事廣田兼敏（1899~1981）に渡し、更に東京 YMCA にもお裾分けをする。廣田は、横浜の外人スポーツクラブ「YC&AC」（創立 1868 年・横浜市中区矢口台 11–1）を訪れ、会長ヘセルタン（英国人）らにバドミントンの“手ほどき”を受けるが、当時のバドミントンはレクリエーション・スポーツの域を出るものではなかったと**日本バドミントン協会編「バドミントン講習会用テキスト」（昭和 27 年、**※未確認）に記している。その一方、**昭和６～7 年頃、バドミントンは横浜 YC&AC においてウインタースポーツとして行われ、神戸の外人スポーツクラブ（KC&AC ：神戸市中央区本街通り 2-7-20）との間で、毎年開催される「インターポート」の交歓試合**に採り上げられるようになり、にわかに根付き始めたとも言うのである。

廣田は、この機会をのがさず、横浜体育活動の一環として、**昭和８年 11 月よりバドミントンを開始**し、翌年（註：昭和 9 年）には、おそらく我国初とでも言うべき市民大会（参加者 30 名位）を馬車道広場の野外コート（横浜市中区尾上町４丁目の野外コートがナルトの設置したものだとすると廣田の経緯説明に齟齬がある）で開催。更に、**昭和 12 年 11 月には、横浜 YMCA バドミントンクラブを結成するなど、一気にその幕を開いて行った**とも言う。（同テキスト本文より）

以上の内容の是非を検討する必要があるが、蘭和真は、これを敷衍する形でネット上で「日本バドミントンの初期の歴史」としてそのまま up している。資料渉猟箇所の内容に偏りがあり、これらの歴史過程は、前出の「大阪バドミントン協会史」に加え、其他の関連事業の資料からの検討が必要である

1922　**大正 11 年　文部省主催運動體育展覧會開催**

文部省主催運動体育展覧会会場正面
（御茶ノ水東京博物館）

文部省主催運動体育展覧会
皇太子行幸（大正 11 年 5 月 8 日）

1922　大正 11 年　**名古屋 YMCA、会館の建築計画の実現に向かう**（名古屋会館は日本人の手で，がモットーだった。）

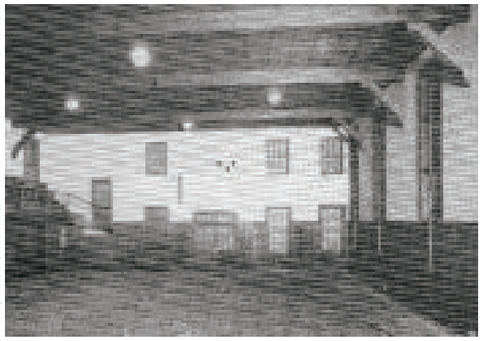
1923　大正 12 年　**関東大震災（名古屋 YMCA 救援活動に専念 →YMCA 会館の建設計画を耐震性建築に変更する必要が出て、計画の変更が喫緊の課題となる）**

９月１日 11 時 58 分 32 秒頃発生、南関東・その隣接地（東京府、茨城県、千葉県、静岡県等）に史上最大規模の大きな被害をもたらした。

名古屋 YMCA：関東大震災の救援活動：１ヶ月余の期間、職員４名、有志３名が横浜方面にて青年会救援事業の一部を援助して 10 月 21 日帰名せり。名古屋 YMCA としては共済会を組織し、金 1,224 円、物資 4,000 点を調達した（1923 年の常務理事会記録より）。

関東大震災で、東京・横浜 YMCA 喪失の体育館再建のため名古屋 YMCA は蓄えて来た体育館建設基金を復興基金の一部として拠出し、体育館建築を保留・延期することを決定(出典：吉村欣治著『名古屋 YMCA60 年史」1964(昭和 43)年、名古屋基督教青年会)。

関東大震災　東京・横浜 YMCA 体育館消失；
横浜で奉仕作業する名古屋 YMCA 救援隊



名古屋 YMCA 體育館

（右）昭和 30 年完成した名古屋 YMCA 瓦町会館『名古屋 YMCA100 年史』、2002 年より

日本で初めてバドミントン競技（？）

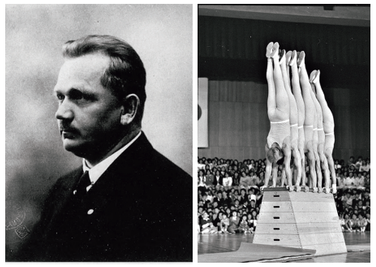
名古屋 YMCA100 年史編纂に当たり、バドミントンの日本普及の歴史を探ってみた。名古屋 YMCA 100 年史（吉村欣治著）には「バドミントンは 1927(昭和 2)年、ラケット、シャトルコックスの国産品が無いので、上海から取り寄せた。それから高価な外国製品を買うことができないので、それを見本に東京の美津野運動具店に作らせることにした。これが恐らく＜日本人の間でバドミントンの競技をした初めであろう（原文のまま）＞
『名古屋 YMCA100 年史』p.22 より

1924　大正 13 年　於：神戸 YMCA、震災後　第１回主事養成講習会開催　D.W.Ryan の指導；柳田（東京）、廣田（横浜）ら 24 名が受講、20 日後に参加者による体育実演会
この講習会でバドミントンが取り上げられたかどうかは不明；ただし後年柳田、廣田はバドミントンに関わることになる。
第１回冬季オリンピック（仏シャモニー）
我国学校体育の父：リーランド（74 歳）死亡
松葉徳三郎 大阪 YMCA 体育職員となる
東京ローンテニスクラブで第２回日本女子庭球選手権大会開催
第８回オリンピック　**F.H.Brown**（日本 YMCA 同盟）技術顧問として参加
W.S.Ryan 神戸 YMCA 体育主事となる
第１回明治神宮競技大会開催
F.H.Brown「オリンピック精神」を『開拓者 12 月号』に発表
Brown 名誉主事になる
名古屋 YMCA の新館完成（本ページの上の写真を参照）

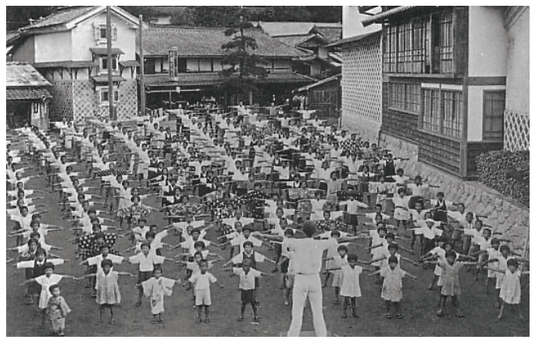
1925　大正 14 年　日本 YMCA 同盟　第２回主事養成講習会を横浜 YMCA で開催
名古屋 YMCA 新会館の落成、２階に大講堂と室内体育場を設置
三橋喜久雄とデンマーク体操：玉川・成城学園で体操指導
三橋喜久雄（1888-1969 年、鳥取県出身）大正３年
永井道明の招致で東京高師助教授となり、14 年教授となるが退職。1927(昭和 2)年三橋体育研究所を設立、**生命体操**を創案。戦後は GHQ により指導者として追放された(**海軍体操**の考案者であったからか)。

三橋喜久雄

神戸 YMCA「体育講演・実演会」を開催
松葉徳太郎（大阪 YMCA）第７回極東選手権大会予選会に出場 800M で優勝
第７回極東選手権大会 Manila Philippnes で開催
Niels Ebbesen Mortensen Bukh(1880-1950)
デンマーク体操選手・教育者。
正確な演技のイメージを合理的であるとすることが、我国の準備体操などで、集団的・画一的なパフォーマンスを価値とする規範性を強調したために体操の目的に沿うより、集団的統一の美を重んじる風潮を生むことにつながってしまった。1・2・3 の規則正しいリングのスウェーデン体操に替えて、行う人も見る人も美しい体操を目指す。ラジオ体操 第２（昭和７年）につながる。


ニールス・ブックとデンマーク体操

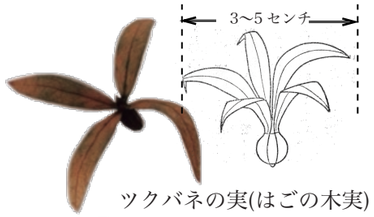
昭和３年新しい朝が来た
；NHK のラジオ体操


戦前のラジオ体操の風景

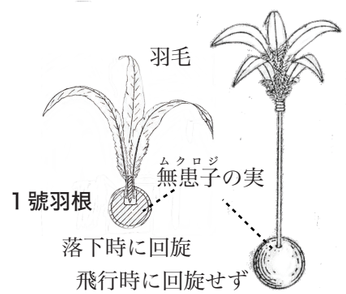
1926　大正 15 年　横浜 YMCA 会館の増築工事始まる
F.H.Brown『東京青年』11 月号に「体育の目的・美しいスポーツマンシップ」を掲載

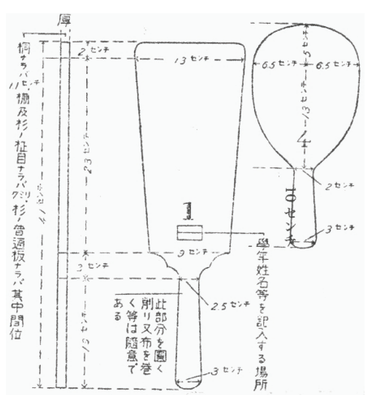
1926　大正 15 年　９月６日　**石橋鬼千興『創案・追羽根競技（全）』武蔵野體育會より刊行**
石橋大尉は明治神宮の神苑に捧ぐる競技に、我国独特のオイバネを明年から加えて貰いたいとして、追羽根の具体的な展開と指導のノウ・ハウを提案し、助力を賜りたいと問いかける、上記の著書を武蔵野體育會より刊行する。次頁へ

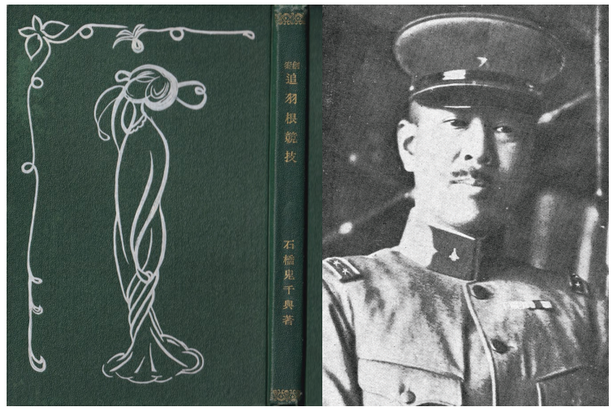
追羽根競技を考案した三つの理由：
①健康に導いてくれた追羽根
②古来からの運動競技を発達させたい
③優良卓越した第二第三の国民を得たい
大正４年から研究開始、軍隊の教育に応用。大正 10 年新規の考案を加える。勧めがあり、大正 15 年、半製品ながらこれらを公開。室外遊戯としての体育の一つの形を提案した。等級分けされたコート内で、羽根（羽子；胡鬼の子）をネット越しに羽子板（胡鬼板）で打ち合う競技＝追羽根を體育とする。羽根は一號（長羽根）～五號（室内羽根）を用途に合わせて差別化。



ツクバネの実(はごの木実)







石橋鬼千與著『創案 追羽根競技』
武蔵野體育會（昭和 15 年発行）

羽子ゲーム　大正 15 年１月 15 日付　夕刊国民新聞掲載

【競技・体育としての追羽根の復活】

追羽根が競技・体育上の効果を収める必要要素は、「永続性」「と普及性」である。体育として実施するには、「興味」が必要で、これが永続性を生む。これを保証するのは準備や実施に掛かる時間と設備が多く要るのであれば、一般には普及し得ない。
追羽根は、500 年以上の時間を掛けてその形態を整え、一般に普及し、その形を留めて来たものだ。だからと言って、昔からのものをやろうと言うのではない。本法が、競技としての相当的価値を有するものであることを確信する。

用具：羽子板 １号板（大板）・２号板（中板）・３号板（小板）・４号板（室内板）の４種類を使用（重量別）

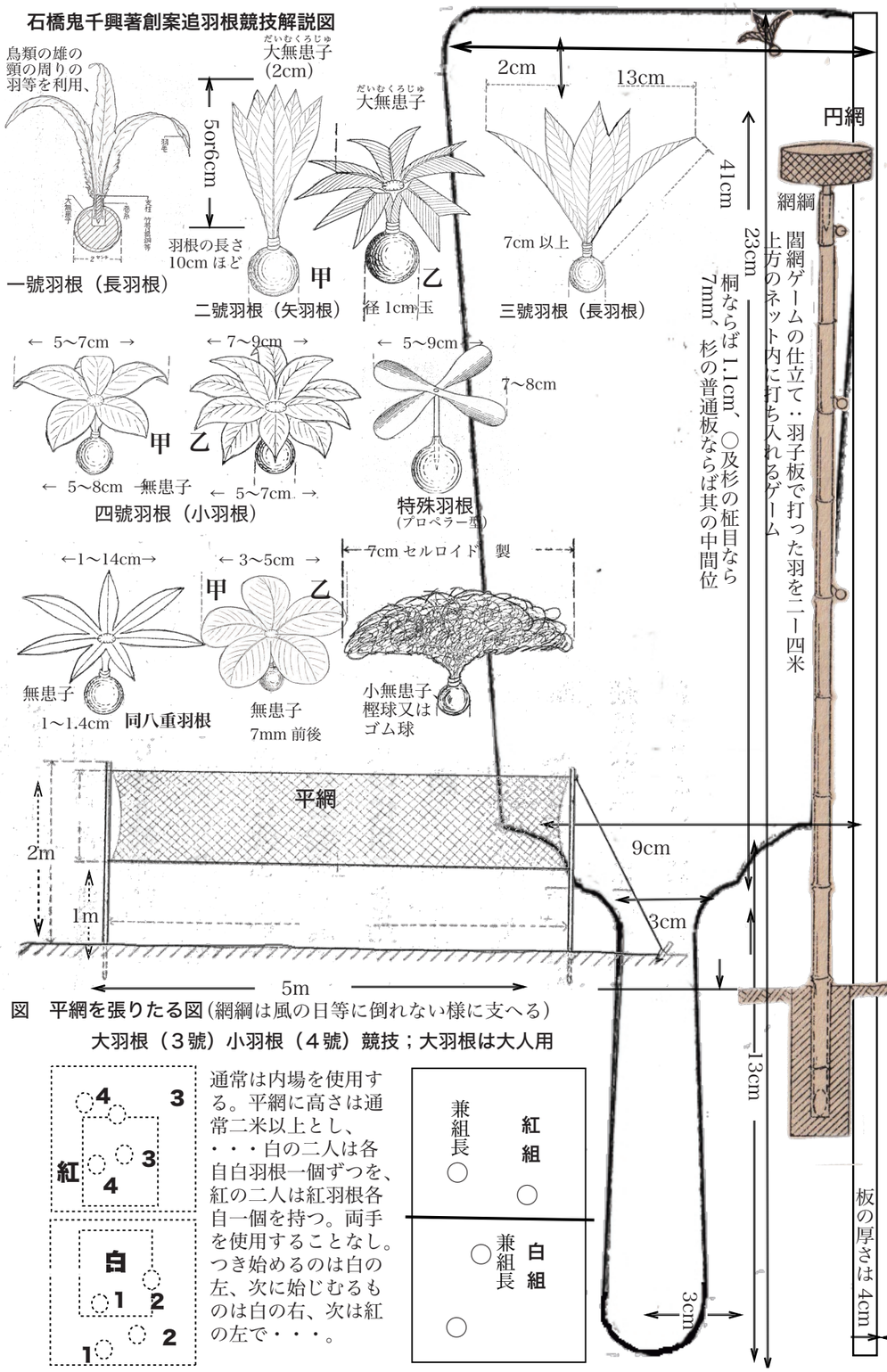


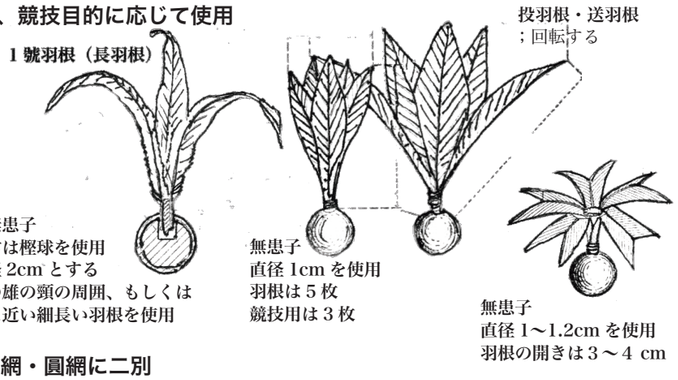
図　平網を張りたる図（網綱は風の日等に倒れない様に支へる）

大羽根（３號）小羽根（４號）競技；大羽根は大人用

通常は内場を使用する。平網に高さは通常二米以上とし、・・・白の二人は各自白羽根一個ずつを、紅の二人は紅羽根各自一個を持つ。両手を使用することなし。つき始めるのは白の左、次に始じむるものは白の右、次は紅の左で・・・。

：羽根　６種（1～5 號）に分け、競技目的に応じて使用

1 號羽根　(長羽根とも言う)
2 號羽根　(矢羽根とも言う)
3 號羽根　(大羽根とも言う)
4 號羽根　(小羽根とも言う)
5 號羽根　(室内羽根とも言う)
飛行羽根
夜行羽根

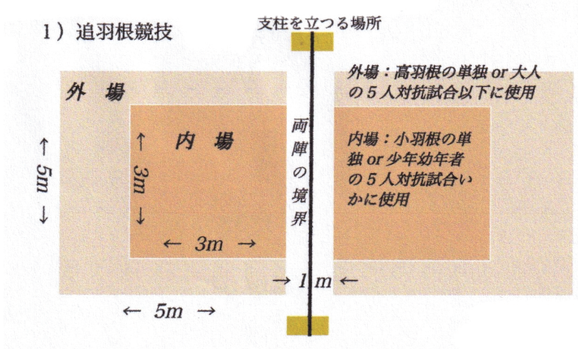


；編（ネット）競技用に使用。平網・圓網に二別

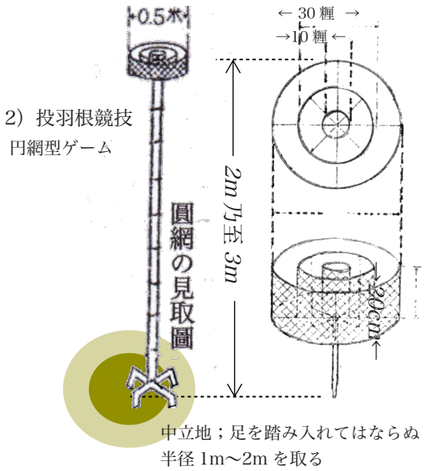
平網は前頁を参照。圓網は前図及び図の如し
圓網は針金、割竹で枠・骨格を作り、籠目は竹、針金等で作る

；競技場　２種類の競技法に合わせる

1）追羽根競技



2）投羽根競技
円網型ゲーム



中立地；足を踏み入れてはならぬ
半径 1m～2m を取る

3)競技の方法

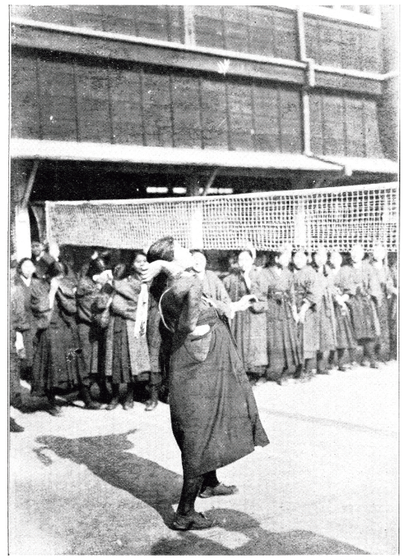
概別すると羽根競技、追羽根競技、投羽根競技、室内競技の４種に分けることができる。此の競技を人數其他の都合上、色々な名称をつけている。実際此羽根競技は、入るには易いが、熟練するのはなかなかむずかしい。殊に人数が多くなるとにつれて、その組全員の共同と作戦とが、勝敗に大なる影響を與えるものである。それらの工夫を凝らすことが、亦興味を持つものである云々。

1-1. つく羽根競技

2. 数え羽根（主として幼年少年用）
3. 一人追羽根（全般）
4. 競點つく羽根

2-1.追羽根競技：1 人對抗追羽根競技（大羽根三號）
準備、実施（※ゲームの進め方、自己の行 動 域（フォーメーション）等）に言及

2. 2 人對抗追羽根競技（大羽根三號）他からなる。

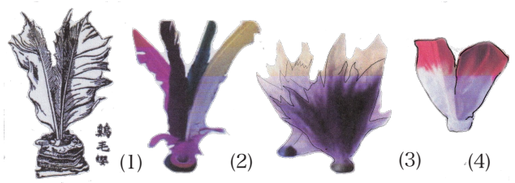


大正 15 年 1 月 13 日夕刊報知新聞掲載として同書に紹介された「羽子つき競技」（今朝麹町高女で）

【本文より】 羽根は羽子（はご）とも呼び、（はね）とも読まれる。羽子板を胡鬼（こぎ）とも言うので、羽根を「胡鬼の子（こぎのこ）」とも呼ぶ。昔から西洋・東洋にもあり、最も古い物は支那（江戸中期から第二次大戦後まで我国で使われた中国の呼称）の Chien tyu 毽子で『帝京物語』には「足蹴之戯具也」とあり、また諺にも「揚柳児死踢毽子」などと言われるように中国では 2000 年の昔から「蹴球」として好まれている。大小様々な物があって、小型の物には羽毛をつけたものもあり、造りは獣毛や乾草、綿、羽毛を細糸で巻いた物もあった（中略）。‥‥　一時朝野の貴婦人紳士間に盛んに流行した。然るに日本人は元来中国人や西洋人と違い、一般に人達はその履物が蹴毬には適さない、まさか下駄や草履（ぞうり）や鞋（わらじ）では、毬（きゅう）（まり）も蹴れなかった。一般に普及し無いものは発達しない。遂に日本人に適した手毬となり、打毬となって普及し、幾多の変遷を経て、遂に足利時代に毽子に似た小毽子が板によって打たれることが考案せられた（註：羽子板で羽子を打つ羽根突き遊び）。

日本の打毬の様子：ウィリアム・グリフィス著『The Mikado's Empire (ミカドの帝国)』より：ポロのような競技

手毬及び乗馬の打毬は、寒い時に喜ばれたが、殆ど四季を通じて行われたようである。然るに板によって小毬を打つことは、主として正月に行われ、其道具は悪魔払いの儀式として焼かれるようになった（※どんと焼き）。しかしてこの時の毬は今の羽子の祖先で、打つ道具は即ち羽子板の祖先であったと見るべきである（※※詳しくは**山田徳兵衛著『羽子板』芸州堂、1994（平成 6）年**。を参照されたい）。＜以下、趣旨をまとめる：この毬は打てば憂音（憂のある音）を発してよくバウンドする木欒樹（もくれんじ）の木の実である無患子（むくろじ）が「無病息災を願う想いを込めて」羽根に付けられ、現在の形が出来上がった。＞【以上、石橋著『追羽根競技』の項終わり】以下各種の「羽根突き遊び」を紹介する。



(1) **鶏毛纓（チ・チェンツィー）：中国広東省**
(2) **現在の鶏毛纓（チ・チェンツィー）：中国四川省**
(3) **中国東北部地方：馬毛と鉄輪で出来た鶏毛纓（チ・チェンツィー）**
(4) **葉銭（ヨクチョン）：韓国の穴空き銅銭**

無患子（むくろじ）：ムクロジ科の落葉高木、アジアの温帯地方に分布。種子は羽根突きの羽子に使われる
衝羽根（つくばね）：ビャクダン科の半期性の落葉低木。関東以西。四国、九州の一部の山地に生える（英語名なし）

追い羽根（おいばね）：二人で打ち続けるられるように羽根を開かないように植えて、飛ぶ距離が出て、対空時間が取れるようにしてある。

撞き羽根（つきばね）：一人で打ち続ける羽根が遠くへ飛ばずに身体の周りにふわり落ちるように羽根を開いて植えてある。

貞房画『子供遊び**打毬**』
江戸時代

毽子

小さな網が棒の先についた毬杖（ぎっちょう）を３本立てたどんと焼きで無病息災を願い宮中で行われる**左義長**（門松，注連縄・書き初めを燃やす）

韓国の**葉銭蹴り**

蹴鞠：平安貴族の遊び、鹿皮製の鞠を一定の高さで蹴り数を競う。下鴨神社で行われる。

こうした石橋の仕事の他に、
1937（昭和 12）年 12 月　発行の山田徳兵衛著『羽子板』（芸艸堂）に大正 11 年 4 月雑誌少女世界の主催で「**追羽子テニス**」（羽子を羽二重で拵えた）が行われたとして、昭和 11 年 11 月改定とされた「**日本児童遊園協会制定の羽子突競技會規則**」と併せ次の二つの記事が紹介されている。同書 p.147

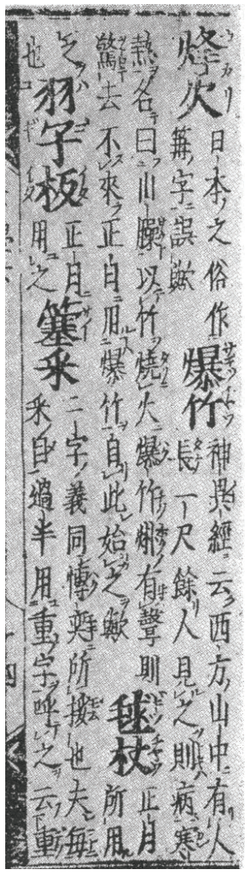
【その１】欧米のバドミントンゲームについて：欧米ではバドミントンゲームという羽子突きが行われてゐます。東洋においても、英国の文化の影響を濃く受けてゐるシャムで今日盛んに流行してゐます。この遊戯は英国で、1873 年に初めて行われ、1895（正しくは 1893）年に英国バドミントン協會の創立をみました。この協会の定めた規則は、今日欧米のバドミントンを行う國々に採用されてゐます。競技はテニスに似てゐて、そして規則は面倒（めんどう）であります。また、女子だけの競技ではありません。日本児童遊園協會の**羽子ゲーム**はテニスコート（ネットを挟んで）で追羽子を突くという程の簡単なものでありますが、わが古来の追羽子にバドミントンゲームを参照（照らし合わせる）して始まったのでありませう。追羽子とバドミントン ゲームは、少なくとも近世に於ては全く別箇に發達して来たのでありますが、追羽子がスポーツとして再認識されると、彼我の粋をとって、ここに新時代のゲームが誕生いたしました云々とあります。
【その 2】さらに石橋大尉考案の追羽根競技に言及：日本児童遊園協会に先んじて、**追羽根を體育教技に應用しようと工夫した人に、石橋鬼千興歩兵大尉がおり、**冊子『**創案羽根競技**』**を大正 15 年 9 月に刊行**しています。これはバドミントンやピンポン、バスケットボールなどを参考にしたものですが、ルールは新考案になり、羽子の我國の従来のものに工夫を加えてゐます。即ち、大人も突き、また室内でも行ふとし、**羽子は長羽子・矢羽子・大羽子・小

羽子・室内羽子・夜光羽子など数種を考案し、羽子板も角丸の板やピンポン用のラケットを用ゐてゐます。この石橋大尉の**羽子ゲーム**（大正 15 年頃もかう稱した）は女學校で一時行われていた。大尉はさらに軍隊教育にも應用しやうとするなど、羽子ゲームの歴史上、興味あることに思ひます、と記している。昭和 12 年にはパリ万国博にも出品し、後にトロカディロ人類博物館に３尺５寸の勧進帳の羽子板等が保存されたいうことである。

手毬及び乗馬の打毬は、寒い時に喜ばれたが、殆ど四季を通じて行われたようである。然るに板によって小毬を打つことは、主として正月に行われ、その道具は悪魔払いの儀式として、焼かれるようになった（どんと焼き）。しかし、この時の毬は今の羽根の祖先であったと見るべきである（※詳しくは山田徳兵衛著『羽子板』芸州堂、1994(平成 6)年を参照されたい）。以下、趣旨を紹介：＜この毬は打てば憂音（憂のある音）を発して、よくバウンドする木蓮樹の木ノ実である無患子※が「無病息災を願う思いを込めて」羽根に付けられ、現在の形が出来上がった＞としている（※一般には‘むくろじ’と読む）。

以上、羽子板競技と**羽根**ゲームを見てきた。

石橋鬼千興陸軍大尉は「追羽根には庭球（テニス）・卓球（ピンポン）・羽球（バドミントン）では感ずることのできない**愉快なもの**がある」という。それは彼の「**音**」であり、ひらひらとした落下の「**舞ひ**」ではないか！という。さらに古い文献等を見ておきたい。



今から 1400 年以上も前、**室町時代の貞成親王の『看門日記』**に 1429(永享 4)年**正月の出来事「こきの子勝負」が記録されている。貞成親王（1372-1456）の直筆原本で一般には『看門御記』と呼ばれる**。羽子板は古くは羽子木板と言われたが後には**胡鬼板**とも呼ばれるようになった。これは「はこぎいた」を略して「こきいた」と謂ふたのではなかろうかと言う。板は桐もしくは杉の木板等で、扇の半開きしたような形を造り表裏の区別をつけるのが普通であった。(註：バドミントン及びテニスのラケットには表裏がないのが一般的)。【以下趣意のみを概説】羽子板の起源は花園天皇（在位 1308-1318 年）の撰（文章等の編集）にあるという。
また、文安年間(1444-1449 年)に出来た『**下學集**』※※には「羽子板 正月ニ之ヲ用イユ」と記載がある。これは室町時代（15 世紀）に国語辞典として作られ、江戸時代のはじめの元和３（1617）年になって初めて刊行されたと言われ、編集と序文は**東麓破衲（とうろくはのう）**※※※によると記されている。

※　『**看門日記**』伏見宮貞成親王（後崇光院 1372 － 1456）日記 41 巻からなる。『室町時代の一皇の生涯「**看門日記**」**の世界**』と改題されて 2002 年講談社学術文庫で発刊されている。
※※　『下學集』1444 年成立。序文は**東麓破衲と記されている。単語総数は 3083. 18 部門からなる。**
※※※ **東麓破衲は東山の麓の庵に住む貧しい僧だという。**

上記のことを記した昭和 12 年 12 月年発行の**大著『羽子板』**の著者：**山田徳兵衛**はその「**第１章 羽子突きの起源**」で「羽子板は古くこぎ板とも呼び、江戸の初の書物には**はこぎ板**と記したものもある

と紹介している。また、近年の**『大言海』（大槻文彦著、冨山房、昭和７年発行：語源に触れていることが特徴の国語辞典）**を見ると、**『骨董集』（岩瀬醒＝山東京伝の随筆）の説**を参考として、羽子木板が古い名称で**‘は’がとれてしまひ、‘ごぎ板’となり（更に）‘はご板’になった**と解釈していますが、また一説と見るべきでありましょう、としている」と記している。

1927　昭和 2 年　**柳田亨（東京 YMCA）欧米体育を視察を兼ねて留学**
石渡俊一、竹内伝一（大阪 YMCA）の斡旋で I.T.S.Splingfild 大学入学
西村正次（東京 YMCA）名古屋 YMCA に体育主事として転任

名古屋 YMCA、バドミントンを始める（安村正和著『YMCA 年表』1842 ~1990 年 『体育事業を中心に』p.30, 1993（昭和 39）年、南京都学園）の次の内容と一致する。即ち「バドミントンは昭和２年、ラケット、シャトルコックの国産品が無いので、上海から英国製を取り寄せた。それから高価な外国製品を買うことができないので、それを見本に**東京の美津濃運動具店*に作らせることにした。これが恐らく日本人の間でバドミントンの競技をした初めであろう**。その後横浜、東京、大阪で行われるようになった。」というのである。
*この部分が東京であるとすれば美満津商店であり、大坂であれば北区の美津濃商店〔創業は 1927 年(昭和 2）年〕が既に創業している。

同年　**岡善七、伊藤隆一「ナルトスポーツ」を創立、後にバドミントン・ラケットも製作するようになる**

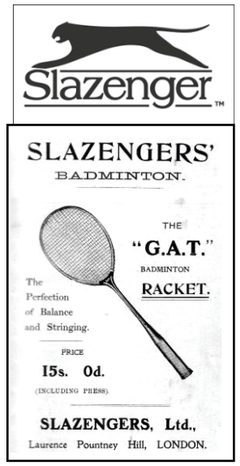
1929　昭和　4 年　**ナルト・スポーツ：工場を横浜市東久保町に移転、兄藤吉が参画、後に正規の競技規則書を入手して、これを翻訳、工場内に正規コートを造る**

同年　**柳田享　留学を終えて帰国、東京 YMCA 体育主事に就任**
（後に草創期の日本ドミントン協会を支える）
東京 YMCA で執務する柳田享

1932　昭和　7 年　第 10 回オリンピック競技大会 Los　Angeles Calif.USA.で開催
我国選手団 131 名、
日本 YMCA 同盟“オリンピック見学団（参加 17 名)”を組織

1933　昭和　8 年　**ナルト・スポーツ　国産第１号ラケット：見本頼りに「総員かかれ」**
大澤渉：私は証言するもう一つの源流：「ジャワ※から舞い込んだラケット註文に“社内は黒船以来の騒ぎ（バドミントン界、No.42,4 月号 1973)”(※地理的にも経済的にもインドネシアの中心をなす島；世界一人口が多い)
昭和８年、私（大澤渉）は横浜市西区東久保町にあったナルトスポー

スラゼンジャー Slazenger (英国、1881 年創業)。最も古いスポーツブランドの一つ：1881 年 The New Game of Lawn Tennis を発表。木製ラケットの代表的メーカー。1800 年代終わりにテニスボール・メーカーとして大きな成功を収める。このグループの一つが第二次世界大戦時イギリス軍支援のため武器を作り続けたという。ラケットが金属製・ガラス製・グラファイト製の時代に入って、拠点をアジアに移している。



昭和９年当時のナルト・スポーツ社の従業員の風景

シャトル製作工場の一部

社所属コートでのプレー

ナルト 所属の女子選手

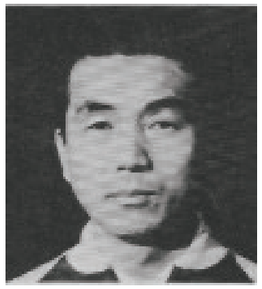
ッ（経営者・岡藤吉）に在職しておりました。その年の夏頃だったと記憶しているのですが、当時、会社の設立の母体であったジャワ島(インドネシア）スラバヤ市の The Sporting House からバドミントン・ラケットの注文が入ったのです。話が前後しますが、ナルトスポーツは、ジャワの前記店で販売するテニス・ラ ケット（もちろん硬式）の製造と同時に一般運動具を仕入れて、ジャワに輸出 していたのです。そこへ、バドミントン・ラケットを見本として送ってまいり、 製造するようにとのことだった次第。造ることは専門であり 、さっそく金型などを手配して、準備に入りまし た。しかしバドミントン・ラケットがあまり弱々しいので、いったい、どんなプレーに使われるのかと、ジャワへ、いろいろ質問し、同時に「もしセットがあれば、送ってほしい」と手紙をしたのでした。折り返し、スラゼンジャー製ダブルス・セットが送られてきました。「ヘェー、羽根つきのようなゲームじゃないか」といいながら調べると、ラケット四本、ネット一張、ボール１組、シャトルコック６個、パンフレット一冊が木箱に入っていました。

パンフレットは、翻訳しなければどうにもならず、苦労しておったところ、元三井物産のジャワ島スラバヤ支店におられた（現在、横浜市在住）**山本弥太郎**さんが見えて「やってあげよう」と持ち帰られ（当時、同氏は岡山の支店勤務だった）数日後、訳文を送ってくださいました。

さっそくバドミントン競技の解明にとりかかり、「こうか、ああか」と机上で議論しました。 まず、打法は軟式テニスでは絶対にダメであることがわかりました。道路で打合うだけの練習を、最初に始めました。しかし、これではどうにもならず、「なんとか、屋外でよいから」とコートの入手を店主に頼みました。 ちょうど其頃には、シャトルもなんとか自力で作ろうと試みました。目方（重量）の“グレーン※”などは全然知らない単位。特注で作ってもらい、コルク屋だ、皮革屋だ、それテープだ、くくり用の糸、ラケットのガットの研究だ、羽根を差込む穴あけの角度の道具だ等々、ちょっとやそっとの騒ぎでなかったことは、想像願えると思うのです（※ grain：ヤード・ポンド法の質量単位１グレーンは　0．6479891gr.）。

当時の私の仕事は、現在同様経理でしたが、その方は半日と夜にし、残りの半分は、シャトル製造の指導、というよりは、かたっぱしから製品の結果をテストしたり、材料の手伝いをしたりでした。 そのうちに、工場を建てることになりました。私の住宅の隣が空き地だったので、そこの北側に二階建の工場を建て、南側にコンクリートを流し、屋外なが

田中壮三郎
日本バドミントン協会創立時の中心メンバーの一人



※堺栄一：昭和 14 生。村山幸雄のコーチを受ける。早稲田大バド部出身我国を代表するダブルスの名手。ト 杯戦等で活躍。著書『バドミントン』(1073 年、講談社 ）がある。

ら、一応練習のできるコートをつくったのです。

やがて、横浜の YCAC という外人クラブにラケットを納めたり、シャトルを売ったりするようにもなりました。国産のシャトルコックの製造も、ここがスタートだと存じます。

屋外コートをつくり、自らプレー　街中で実演、普及活動も活発に

話はまた戻ります。コートができ、いよいよプレーに入ったのですが、 道路で打ち合っていた時は、別にネットがあるわけではなし、勝手気儘でしたが、今度はそうは問屋がおろさず、まともに打ち合うことができるようになるまでは大部、時間がかかりま した。

ルールと首っぴき、原文を、もう一度見ながら。こんな苦労も、辛いと思わなかったのは、私たちが皆、未知のものに挑戦し、征服する喜びに燃えていたからでしょう。やっと翌年の春頃にはプレーに自信も持て、人に説明もできるようになりました。工場でも相当の人数が朝に夕に楽しみながらプレーをしていたので、まずこれを横浜の人々に知ってもらおうと、社長が伊勢佐木町の近く、馬車道にあった空地を二ヶ月ほど借り、コートを三面つくりました。宣伝がてら、希望者には教えることにしました。常時、４、５人を派遣、日曜日などは７、８人も出かけて、希望者にプレーさせ、かつ、競技を説明いたしました。その時、現日本協会副会長（註：この原稿が書かれた 1973 年の時点で）の廣田兼敏氏も、通りすがりに見たとのことでした。私のパートナーは、現在、北海道におられる田中荘三郎君でした。私の妻も、その頃から、一応、指導できる技術を持っていました。

このような経過からもおわかりのように、私たちのプレーはパンフレットだけを先生として身につけたもので、しかも、それを解説して、人にも教えてきたのです。もちろん、すべては岡藤吉氏が、このプレーを愛しここまでにする時間等を私にくださったからこそできたことです。

47 年３月号の“スポーツ用品ジャーナル”に河崎ラケットの堺君※が紹介した記事のように、YMCA が日本のバドミントンの発達史の原流ではない。日本のバドミントンは“一車線”で入ったものでなく、時を同じくして、“二車線”で入ったものだ、ということを知っておいてほしいと思うのです。

岡藤吉氏が力を入れておられたことや、その経路もご存知の方がかなりおられるはずですが前述の記事に関し、“二車線”の形で入ったとの説明を公けにされた方が、あったでしょうか。おそらく現会長も、バドミントン競技に、このよ

うな別のルートもあったとは、ご存知ないのではないかと思います。第２回全日本バドミントン大会のシングルス優勝者・岡淳一君は岡藤吉氏の甥。私たちが苦労した別の車線で上達した人です。

本邦初の競技規則書も出版、 偉大だった岡社長の功績

岡藤吉氏の手から入ってきたバドミントンも、立派にこの発展史の一翼を担っている事をバドミントン愛好者の全部が知っておいて欲しいのです。

話はまた戻ります。新設コートで、ルールに従って試合しているうちに「これはなんとしても**規則書を作らねば**」と考え、テニスの規則書を傍らに、その形式にならって、バドミントン規則書を作り上げました。

プレーの内容が現在は多少、変更されていますが、当時のものとしてはどこにも間違った個所のないものとして私は満足に思っています。**昭和９年の印刷発行でした。非売品としてですが、どんな形式にせよ印刷物としてバドミントン規則書が出されたのは、これが日本での最初だと存じます。**

この規則書も、あの戦災に合い、ほとんど散逸、手元に一冊もないような状態ですが、今ほうぼうに電話したところ、なんとか見つかりそうだとのこと。ひと安心しているところです。

幸いに発見できたら、ゼロックスでコピーして、あとあと心配のないよう、記念品として有志の方々に保存願うつもりです。発行者・岡藤吉氏のためにも、ぜひ、入手せねばと念じております。（以下省略）

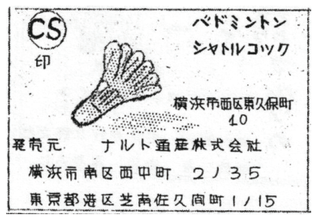
※ 復刻版を pp.49-51 に掲載、以下はナルトの規則書に関するもう一件の‘資料に纏わる’『競技規則書』復元の話：

1934 昭和９年 岡藤吉（ナルト・スポーツ）による我国初の『競技規則書』発行：、

これは**日本バドミントン協会発行**（当時は未だ誕生していない）と銘記され、昭和９年３月８日印刷・同 10 付「バドミントン競技規則書」としてあるが、上記で紹介したように直訳による我国最初の「規則書の形式を持つもの（本来協会が発行すべきもの）」である。これを「昭和９年３月 10 日発行版バドミントン競技規則書原本」と呼ぶことにする。これを 村上忠次氏が入手され、それを筆者が拝借する際に、村上氏は現存するこの原本について「昭和 38 年３月 25 日、東京都台東区浅草駒形 1-4 k. k.クライ貿易大沢渉氏より横浜市南区南太田 2-333 ミナミ工芸社岡善七宛に送った物で、今は村上氏自身が預かっている」旨の説明があり、それをコピーして、原本は岡氏に返却したとの説明があったもの（現在の所有者は不明）である。この時

今井先（はじめ）先生

ナルト・スポーツの商標；カンガルー印



1951 年度のガリ版刷り協会報の題と CS 印シャトルの広告
皆手書き・手作りだった

のコピーされたものを**「コピー原本」**と呼ぶことにする。

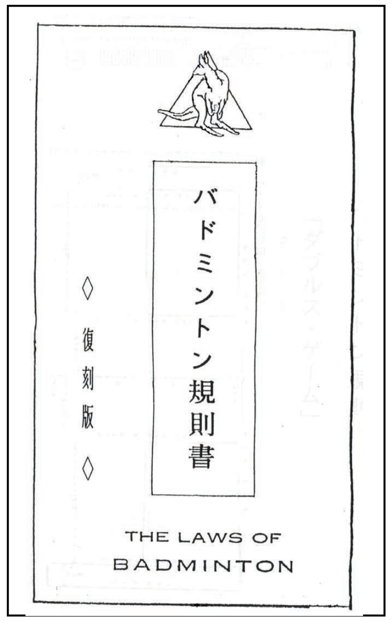
その「コピー原本」作成時の複写技術は極めて低く、劣化が激しくて、数年でその物件の細部はほとんど読み取れない程に**劣化**、複写技術が何某か改善された後に改めてその**「再コピー原本」**を作成せざるを得なかった。ここで紹介するものは、**本邦初の規則書を、当時日本女子体育大学バドミントン部を指導しておられた今井先先生（いまいはじめ）が「復刻版」として再成され、次のような挨拶文を添えて、周囲のバドミントン関係者に配布され、資料としての命を再生させたものである。**以下の文章は今井先先生が「**復刻版**」をお仲間に発送するに当たって認められた挨拶文（「第１信」と「第２信）である。この第１信の後に、それを読まれた方々から指摘のあった箇所に修正が加えられ、第２信を添えて再送されている。現在では唯一この「復刻版」が条文などをその時のままに伝えてくれるものとなっている。（※この時点（ナルトの規則書作成時）では未だ日本バドミントン協会は設立されておらず、**正規の規則書は斯くあるべきだとする考えから正規のルールの形式を模したもの**だと考えられる）。

【第１信】平成４年１月 23 日　今井先（はじめ）

この小冊子は、先年Ｔ大Ａ氏よりコピーをお送りいただいたのを、今回さらにコピーしてお届けします。 奥付に書かれている「ナルト・スポーツ」は、我国バドミントン業界の先駆者。遅くとも昭和の一桁にはカンガルー印のラケットと CS 印のシャトルを製造していたはずで、我々バドミントンの古い愛好者達には懐かしい懐かしい名称なのです。 この規則書は、同社がバドミントン用品の販売を始めるに当り、サービスとして添付、プレーの普及を図られたものではないでしょうか。バドミントンの活き字引とも申し上げるべき村上忠次氏のお話によると、同社々長岡藤吉氏の実弟善七氏は当時ジャワ（現在のインドネシア）に在住、現地の人達が楽しんでいるバドミントンに興味を覚え、ラケットとシャトルを母国の藤吉氏宛て送った。これを手にした藤吉氏が前述のカンガルー印と CS 印を作り出されたとの事です。また、藤吉社長は、のちに、わが国初めて金属フレームのラケットを完成した創意工夫の人でありました。

【第２信】 平成４年２月 29 日　今井先（はじめ）

去る１月 23 日、この小冊子の「コピー版」を各方面へお届けいたしましたところ、望外の反響に接し、深く喜びおる次第です。 しかし印刷の不鮮明や、古い漢字は、特に若い世代には、難解との評をいただきましたので、畏友松村隆一氏の労を



コピー原本・表紙の現状と裏表紙のイメージであるが劣化していて殆ど読み取れない。

唯、白地にしか見えない右半分には、ナルト・スポーツの玄関側から見た家屋社屋全体が概観できる写真が添付されていた。
上のコピーには「復刻版」の文字が加えられており、「再生復刻版」の表紙であることがわかる。

いとわぬご助力を得、ここに「復刻版」としてお送りする運びとなりました。 なお、原書の誤字や脱字、また仮名遣いはそのままとしましたが、旧漢字については初出にルビを付し、読み易くいたしました。(ルビ漏れ、重複あらばご容赦)。（平成4年2月29日　今井）

※　お気付きの点は先へお教え下さい。電話・FAX,○▷・・。

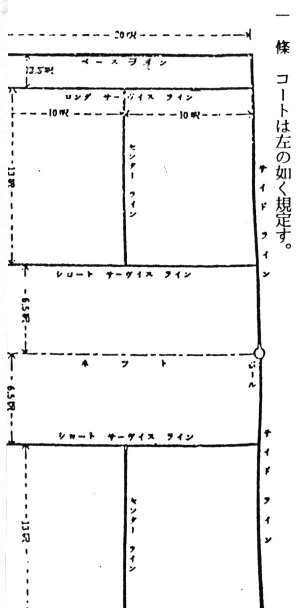
なお、善七氏のご子息、淳一、道明のお二人は共に卓越した名プレーヤーで、淳一氏は全日本選手権（今の総合大会）の第一回より四年連続男子単に優勝、また第４回大会でペアを組み、ダブルスの選手権をも取られております。なんとも懐かしい思い出です。

1973年２月の女子国際選抜（欧州 vs 日本）宇都宮大会のパーティにおける大澤渉（中央）と、小柴貢（左；栃木県協会長）、松本（右：同県理事長）

バドミントン規則
「ダブルス・ゲーム」

コート

第一條　コートは左の如く規定す。



第二條　ラインの巾は一吋乃至一吋半にして白線又は黒線を以てす。

第三條　ポールは高さ五呎一吋ネットを保つだけの力を有する事。

第四條　ネットは3/4吋乃至一吋角の網目と爲しシナヤカなる紐を以て作られ兩側のポールの位置に從ひて長さ二〇呎乃至二四呎巾二呎半たる事、ネットの高さは中心に於て五呎ポールに於て五呎一吋にして巾三吋の白き帶（二重）を以て縁を付け其の中に紐を通し之をポールにかけて強く張る。

第五條　シヤツトルコック（鳥球）
屋外用鳥球は重さ「一匁八分」乃至「二匁一分」にして直徑一吋乃至一吋半のコルクにゴム

第七條　審判者はプレーヤー以外の第三者たるべし、審判者はライン・キーパーを命ずることを得。

第八條　正審は本規則により競技の進行を掌る。

第九條　シヤツトルコックのイン又はアウトはラインをインと見做してその落下點を以て判定すべし、サーヴイスの場合又然り。

ゲーム

第十條　プレーヤーは二人を以て一組とす。

第十一條　プレーヤーは互にネットに對し反對側に立つべし、ゲームに際し最初に鳥球を打ち出す側をサーヴアーと稱し他をレシーヴアーと稱す。

第十二條　ゲーム開始に當りサイドまたはサーヴイスもしくはレシーブの選擇はトッスによりて之を定む、トッスの勝者サーヴイスもしくはレシーブを選びたる時は他者はサイドを選ぶ勝者サイドを選びたる時は他者サーヴイス又はレシーブを選ぶべし。

第十三條　プレーヤーは正審の「レデイー」により各自その採るべき位置につき「プレー」によりゲームを開始す。

第十四條　得點は最初のサーヴイスサイドより之を數ふ。

三

第十五條　一ゲームの勝負は一方が早く十五點を得たる時にこれを決す、但し双方十四點宛を得たる時はその後何れかが先に三點を勝ち得たる時勝負を決するものとす。

第十六條　勝負は五ゲームを以て試合に於ける最大限度とす、但し女子又は女子の參加する場合には三ゲームを限度とす。

第十七條　使用ラケットは一本とす。

サーヴイス

第十八條　サーヴイスは腰より上部に於てなすことを許さず、これに違反せる時はフォールトとなす。

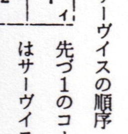
第十九條　サーヴイスは之を爲すの意志を以て手より鳥球を離したる時に始まり地上に落ちざる前にラケットを以て之を打ちし瞬間に終るものとす。

第二十條　サーヴイスはネットに向って右側より始め對角線上にあるサーヴイス・ボックスの内に入るべく打たるゝものとす。

第二十一條　サーヴイスはショートサーヴイスラインとロングサーヴイスラインと並にセンターライン及びサイドラインの中何れの個所よりするも可、但し片足たりともラインの上乃至外にある時はライン外にてサーヴイスをなしたるものと看做されフォールトとなる。

四

第二十二條　サーヴイスの順序



1.2.3.4. ハ コート
イロニハ ハ プレーヤー

先づ1のコートより「イ」サーヴを開始するとして不幸サーヴイスを失敗又はサーヴイスは成功せるもレシーヴアーに敗れたる場合には次のサーヴイスは3のコートに居る「ハ」之を行ふ、「ハ」も亦「イ」同様失策せる時は4のコートに居る「ニ」に遷る、右の如く次々に失策せるとせば順序は最初より示せばコート順次の如し。

1　3　4　1　2　3　4　1　2　3　4

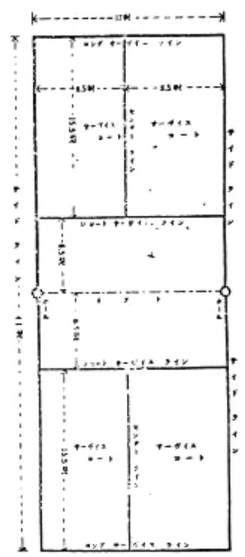
次に一例を示せば、今の1のコートより「イ」サーヴし得點せるときは「イ」は「ロ」と入れ替りて2のコートよりサーヴをなす、若しこのサーヴ得點にならざりし時は次のサーヴイスは反對側の3のコートに在る「ハ」之を行ふ、「ハ」のサーヴイス失策せる時は「ニ」之を行ふ、次は1のコートの者サーヴイスの順となる、即ち最初はサーヴイスを初めし側は一人のみサーヴを行ひ反對側にサーヴのうつりし後は片側必ず二人共サーヴを行ひ二人共失策せる時反對側にサーヴイスが移る、右の如く其後は各側必ず二人共サーヴを了して後に反對側にうつるものとす。

而して反對側にサーヴのうつりし時はその時のサーヴイスは必ず右側より之を行ふ。

「シングルス・ゲーム」

コート

第二十三條　コートは次の如し。



第二十四條　ゲームは上記規定の通用を受く、但し以下の場合を除く。

1　サーヴァーの得點が零の時若くは試合中に偶數の得點を得たる時にプレーヤー

昭和九年三月十八日印刷
昭和九年三月廿日發行

横濱市中區久保町池ノ上六八八
日本バドミントン協會事務所
編輯兼發行人　ナルト・スポーツ
岡藤吉
電話長者町㈢二三九二番
振替東京六九三八九番

横濱市神奈川區高島通二丁目五番地
山縣印刷所
印刷者　山縣平司
電話本局㈡五五〇九番

非賣品

右上の「編輯兼発行人岡藤吉」の肩書きに注目する。横濱市中區久保町池ノ上688「日本バドミントン協会事務所 岡藤吉」と記名されている。当然誰の目もこの日本バドミントン協会の所に行く。ナルト・スポーツ関係者は、恐らく『ルール・ブック』と言うものが、然るべき協会というものによってオーソライズされていなければならないことを原本とした英語で書かれた規則書の形態を見て、知ったのであろう。そして、今自分達の日本語化したルール・ブックが国際的な標準を満たしていることを示したかったのであろう。そこで、手続きを考慮するより重要なこの「ルール・ブック」の内容が世界標準の中にある本格的なものであることを明記しておきたかったのであろう。そのための体裁として「日本バドミントン協会』を表記しておきたかった！ 素晴らしい感覚であるとしか言いようがない。

一つの歴史過程を先取り、具体的な協会活動のあるべき“形”を示してくれていたのである。

我国への最初のバドミントン紹介がどのように行われたのかを見てくると、横浜 YMCA の廣田の残した文献内容と実際の組織的活動との関係に齟齬の不具合が見えくる。それを以下、我国のバドミントン史を時系列で追いながら、大阪のバドミントンの協会結成までの歴史との関係を照合しておく。

1933 昭和８年　大阪 YMCA バドミントンクラブを結成：

【川口清著（青木昭二加筆）『大阪のバドミントンの夜明け』（大阪バドミントン 協会編『大阪バドミントン協会五十年誌』pp.67-75. 平成９年 12 月５日発行）で、川口は昭和８年結成に大阪 YMCA バドミントンクラブが関わったと、以下のように記す：

■『大阪のバドミントンの夜明け』：昭和 21 年 11 月東京に日本バド

第二十三條　得點は必ずサーヴィス側のエースのみに數へらる、レシーヴァーの勝ちたる時は得點にならずしてサーヴィスの權利を得る段程とす。

第二十四條　サーヴィスは一打のみとす、但し空振の場合はサーヴィスをやり直すことを得。

第二十五條　エースを得たる側は次のサーヴィスを得るものとす、而してサーヴィスは同一人がエースを獲て居る間は連續之を行ふものとす。

第二十六條　次の場合はフォールトとなす。

一、サーヴィスがオーバーハンドなりし時。

（鳥球を若し腰より高い處にて打ちたる時はオーバーハンドと看做す）

二、サーヴィスせる鳥球が違った「ハーフコート」に落ちたる場合。

三、サーヴィスの終る迄サーヴァーの足がサーヴィスを爲さんとするコート内に在らざる時若くはレシーヴァーの足がレシーヴァーの終る迄レシーブすべきコート内に在らざる時。

四、サーヴィスの時アムパイヤーの意見として「サーヴィス」若くは其の組む者が敵を妨害し若くに邪魔したる時。

五、サーヴィスの時若しくは試合の最中に鳥球がライン外に落ち、ネットを潜りネットの下を通り抜けは側に居る人或は他のプレーヤーの着物に觸れたる時、鳥球のライン上に落ちたるものはセーフとす。

六、鳥球の進行中受返すべき側の者が鳥球がネットを越す前に之れを打ちたる時、但し打ちたる後にラケットがネットを越す場合は差支へなし。

註、鳥球はサーヴァーのラケットにて打たれたる時より地面、人又はプレーヤーの着物に觸れ若くフォールト及びレットの生ずる迄プレーされ居るものと看做さる

七、鳥球が進行中プレーヤーがラケットにてネット又はポールに觸れたる時。

八、鳥球が續いて二回同じプレーヤーに依りて打たれ又はパートナーにより續いて打たれ若くは鳥球がハッキリ打たれざりし時。

九、プレーヤーが敵を妨害したる時。

十、規定第廿九條が犯されたる時。

プレー

第二十七條　サーヴィスを決めたる後右側に居るプレーヤーが反對側の右に居るプレーヤーにサーヴィスを初むることに依り試合開始さる。

若し「レシーヴァー」が鳥球の地面に着く前に反す時はインサイドの一人に依りて返され

次にアウトサイドの一人に依りてフォールトとなる迄之れを繼續す。

若しフォールトがサーヴァーの側に依りて爲されたる時はサーヴァーの側はレシーヴァーとなる然し若しサーヴィスが返されず又はレシーヴァー側に依りフォールトが爲されし時は

サーヴァー側が一點を得。次いでサーヴァー側は互に他の半分のコートに代り其の結果サーヴァーは左側のコートより反對側の左のコートに居るプレーヤーにサーヴィスする事となる。何方かの側がインである間はサーヴィスは交互に各半分のコートから對角線上にある反對側のコートに向つて行はれ點が加へられる。レシーヴァーはレシーブするに當り必ずサーヴィスボックス内に兩足を留め、少くとも片足を地面に置くこと、萬一片足たりとも線上にあればコート外にて打ちたるものと看做す。（ジャンプを許さず）

サーヴィスが行はれたる後はサーヴァー及びレシーヴァーは境界線に關係無くネットを境として如何なる位置如何なるホームを採るも差支へ無し。

一般規定

第二十八條　サーヴァーは相手方がレシーブの用意をする迄サーヴィスを爲す事を得ず。但し相手方が若しサーヴィスを返さんとしたる時は用意したるものと看做さる。

第二十九條　サーヴァー及びレシーヴァーは各片方のコートに立つべし、而して右各プレーヤーの兩足の一部分はサーヴィスの済む迄地面に付け居る事を要す。

第三十條　サーヴィスの鳥球がネットに觸れてサーヴィスコートに達したる時はレットとなる、然し打合の最中にはこの限りに非ず、鳥球の時鳥球が兩側の支柱の外側を通り又は反對側コートの境界線上若くは其の内側の何れの部分に落つるも可なり。

アンパイヤーは又豫期せざる突發的事故に對しレットを宣告する事を得。

第三十一條　プレーヤーが順番にあらずしてサーヴィスを爲し又はコートを間違って他のコートよりサーヴィスして得點したる時はレットとなる、但しレットの要求は次のサーヴィスの打たるゝ前に爲さるゝ事を要す。

若しプレーヤーが間違ったコートに立ちてサーヴィスを受け其の方の側が點を取りし時はレットとなる。但しこの場合レットは次のサーヴィスが打たるゝ前に要求さるゝ事を要す

註、プレーヤーが間違ってサイドを變更すべからざる時に變更し、其の間違ひが次のサーヴィスの打たるゝ前に發見されざる場合は其の間違は正當と認められレットは要求し得ず。

第三十二條　アンパイヤーはフォールト又はレットの生ぜし時プレーヤーより申出あると否とを不問之を宣言し又は點につき事を生じ之れが是非を問はれたる時には之に裁決を與ふるの義務を有す。但しその申出に次のサーヴィスの打たるゝ前に爲さるゝ事を要す。又アンパイヤーは必要の場合ラインキーパーを指名するの義務あり。但し主審の選ばれたる場合アンパイヤーの決定に關し規定上の異議生ぜし時は之れが裁決に從ふ。

疑義

ミントン協会（NBA）が発足。全国的規模の唯一組織を目指し、その一環として近畿地方へは廣田兼敏氏を中心に大阪を訪れ、積極的に接してきた。この動向が、大阪協会への動きのひとつになったことは否定しがたい。

それでは**昭和 21 年以前の大阪のバドミントンは**、どんな状況だったのか、当時記載の資料から年代順に原文のまま引用すると:

資料 1.【大阪 YMCA 発行『大阪 YMCA 史』】1933（昭和 8）年、大阪 YMCA バドミントンクラブが初めて結成された。

資料 2.【毎日新聞、昭和 52 年 11 月 29 日付け朝刊】 昭和 13、14 年頃、大阪市西区の**大阪中央 YMCA** でバドミントンが行われた。

資料 3.【バドミントン界 79 号】昭和 14 年筆者（廣田兼敏氏）は関西の大阪（大阪 YMCA は松葉体育主事）、ならびに神戸 YMCA（石渡体育主事）を講習指導し（中略: 文脈からするとこれが機縁でと言うことであろうか）、東西の YMCA を通じ、（バドミントンが一般に指導普及した）と言うのであるが・・、※［**註：松葉・石渡はこうした講習指導を受けた事実それ自体を全面的に否定している**］。

因みに**廣田**自身が此年の 7 月以前に大阪 YMCA を訪ねたのであれば、指導云々の可能性がないわけではないが、7 月に松葉は応召されて YMCA を離れている。また、その機会が 昭和 14 年の横浜 YMCA「大日本体操講習会で」ということであ れば、此年の 9 月 29・30 日の開催であるから、互いに出会う機会はなかったはずであり、昭和 13 年まで遡って廣田がメインで指導する機会があったとすれば、その年 6 月 5 日の名古屋 YMCA での「デンマーク体操講習会」で 53 名を指導した事実があったかどうかであるが、そのことは確認できず可能性も低い。尚、横浜 YMCA が「バドミントンを始める」のは 1933（昭和 8）年 11 月のことである。

資料 4.【バドミントン界 83 号】 昭和 15 年 7 月 13 日、於大阪 YMCA、（中略）成績は横浜 YMCA のワンサイドゲームで、（中略）大阪をリードした。※※［註：「バドミントン界」は NBA 機関誌であったが、20 年程前に廃刊されており、内容の真偽は確認できない。］

こうした歴史認識に齟齬の生じる視点を変え、敢えて大阪を中心に初期の歴史の流れを見る：注目されるのは、やはりここで取り上げている 1997(平成 9)年 12 月 5 日以後に発行された大阪バドミントン協会『広報・総集編』 に掲載された青木昭二・川口清著「大阪バドミントン協会史１～38」で、その関係箇所を追ってみる：

前記に続く川口清著・青木昭二加筆『大阪のバドミントンの夜明け』（続）（原文のまま）：出典『五十年誌』大阪バドミントン協会、pp.67-75.1997(平成 9)年. によれば、

当時、大阪では、バドミントンも含めて室内スポーツを志向するとき、学生や生徒を別にして、社会人の場合は、その体育館の確保が甚だ困難であったため、土佐堀の青年会館の愛称で市民から親しまれていた YMCA の体育館が、すべての人たちの利用に応じていた唯一無二のものであった。

川口　清

青木 昭二

大阪 YMCA 土佐堀体育館

神戸 RC&AC

※ **川崎策実**　所謂大阪の船場の生まれで、幼少より学校へ通わずに、家庭教師だけで勉強したと言われ、英語にも堪能であったようだ。昭和 25・6 年頃にバドミントン等のルールの翻訳も手がけている。昭和 7 年（この年に徴兵検査を受けている）神戸外人クラブの体育室でポルトガル系の外人からバドミントンの教授を受ける。以後 YMCA で辰馬、松葉、福田らとプレー。或日神戸の‘ナルト（本社；横浜市）’でラケットを購入した帰りの電車の中で乗り合わせた人にバドミントンについて質問を受け、バドミントンへの自覚に目覚めたと言う。印象に残るプレーヤーは辰馬、八幡満胖（やわたみつまさ）で、デンマークでバドミントンの基本をマスターして帰国したのちの広田兼敏の瞠目すべきスマートさは鮮明な思い出であると言う。（『広報』05-37）

昭和 18 年 5 月野戦から一時帰国。中尾（神戸新聞社）という青年とバドミントンをしている。この後、南太平洋に転戦。この時山羊皮のシャトルを使用。これがブラウン持参のシャトルのように思われると『広報』11-43 号に記されている。

※※**八幡満胖**　（陸上自衛隊幹部）戦前はプレーヤーの内の最年少者。川崎等から手ほどきを受け、軍役にあった期間（昭和 17～21 年）を除き、バドミントンを継続した。昭和 21 年 6 月復員後、同 4 月やはり復員した川崎と協力し、大阪を中心に青年にバドミントンを指導。50 歳半ばで急逝された。（『広報』06-38 号）

大阪におけるバドミントンの源流は、これらのものが重なり混じり合って、自ら YMCA とその関係者に到達する。そこで、YMCA 関係でバドミントンに親しんだ方々を挙げると。フェンシング仲間では、福田氏（元日本フェンシング協会理事長）・辰馬・的場・川崎※氏、YMCA 職員では松葉・石渡氏、指導者の役割は**川崎策実氏**だったと思う。用具は淀屋橋の美津濃か、レインクロファード（当時、神戸で斬新な各種輸入品を扱っていた店）辺りで求めたようだ。

指導者の**川崎策実氏**の回想には「私は徴兵検査を受けた昭和 7 年に、神戸外人クラブの体育室でポルトガル系の外人からバドミントンを教えてもらいました。これが私とバドミントンとの最初の出会いです。以後、私は、ここ(神戸外人倶楽部)でプレイを続けると同時に大阪では YMCA でもやり出しました。辰馬、的場、福田、松葉氏などと YMCA でラケットを握っていた**昭和 9 年頃**、神戸の**ナルト**（東南アジア方面へバドミントン用具を輸出していた商社（本社は横浜市）へラケットを求めに行った帰りの阪急電車の中で、未知の乗客からバドミントンについて尋ねられた記憶があります。

思い返せば半世紀に近い年月の間、多くの同好の友人とこのスポーツを楽しみましたが、取分けて印象に残っているプレーヤーは、辰馬、八幡※※の 両氏です。八幡氏は戦前派プレーヤーのうち最年少者で、昭和 13 年後半から翌 14 年に、川崎氏などからバドミントンの手解きを受けたものと思われる。以後軍役期間（昭和 17 年 2 月から同 21 年 5 月）を除いて、バドミントンを続けた。昭和 21 年 6 月には同年 4 月に復員した川崎氏と協力し、バドミントンに興味を持つ青年たちを集め指導し始めたことは、大阪はもとより全国的にも高く評価されよう。昭和初期以前に話を戻す。大正中期に中距離走者として極東(しかい：この方面)オリンピックの候補選手であった**松葉徳三郎**氏は、故八幡氏を斯界に導きいれた先輩でもあった。同氏は、昭和 7 年月 12 日、羅府(ロスアンゼルス)オリンピック視察のために横浜から渡米した。在米中、宿舎の YMCA の体育館でバドミントンを試み、帰国後昭和 13 年 5 月に軍隊に入るまで大阪 YMCA の職員として同所の体育館で続けられた。

石渡俊一氏は昭和 2 年 8 月、神戸港より体育の研究のため米国へ出発された。少し話が横道に逸れるが、松葉氏は石渡氏の義弟にあたる、ともに 戦後朝日新聞社に籍を置かれ（石渡氏ー企画部、松葉氏―運動部）、戦後の高校野球の復活に尽力された。また両氏は名トレーナーとしても有名である。

そして昭和 20 年 8 月敗戦になる。昭和 21 年 6 月には川崎氏は 3 年、八幡氏は 5 年ぶりにラケットを握る。そこへバドミントンの全く未経験な青年男女が次々に集い始め、やがて 15 人ほどのグループとなって両氏の指導を受け出した。以前は、一部の人のスポーツで

※ **国民体育大会**：1946(昭和 2)年第 1 回、近畿開催。第 3 回福岡大会から都道府県対抗方式に。天皇杯（男女総合）・皇后杯（女子総合）授与。2024 年佐賀県大会から「国民スポーツ大会(略：国スポ)」に改称される。天皇杯（男女総合)、皇后杯（女子総合）が授与される。
61 回大会から夏・秋（陸上・水泳）の 3 大会制としたが、63 回大会から水泳の特殊性を考慮し、「大会前競技」として先行させる 4 大会制に戻されることになった。

は、とも思われていたバドミントンにわずか 15 人でも関心を持つ市民が、しかも社会人ばかりが期せずして集まったのは特色づけられる。用具は、未だ市販されておらず、ことにシャトルの調達には苦労が多い。 ある時は、川崎氏(英語が堪能)が米陸軍（占領軍）に交渉し、話がまとまると米軍の SSO という兵士達への特別用務を担当する部門まで用具を貰いに行った。これらの物品は米軍が、その兵士の余暇活動に準備しているのだから大した品質でもあるまいと、軽く考えもしたが、包みを解くと米国の一流メーカーのラケットや水鳥製のシャトルである。

この年の秋、(昭和 21 年)YMCA は大阪府の後援を得て講習会を、**人事院レクリエーション課長を務めていた柳田亨氏と松葉徳三郎氏を講師として開いた**。受講者は商社などから派遣された人たちであった。内容もデンマーク体操を主とし、新しいスポーツも紹介する計画であったので、多くの人には目新しいバドミントンを公開した。**これが大阪で一般市民にバドミントンを問いかけた初回であろう**。

同じ頃 11 月、第 1 回国民体育大会※（秋季）が京阪神地区で開催された。大阪協会の歴史を語る時、NBA の創設との深い関わりを見逃すことができない。そこで体協が発刊（昭 45）した『日本スポーツ百年』の、関係箇所を引用させていただく。「・・・・同年 12 月には遂に待望の日本 バドミントン協会の成立に成功するといった進展であった（以降を省略)。」

■ 大阪バドミントン協会史　同協会元理事長川口清特別寄稿（原文のまま）

大阪協会はいつ設立したのだろうか。遺憾ながら正式記録を見いだすことができないため性急な結論は困難である。そこで、当事者達の記憶と残存する資料を付き合わせ慎重に検討し、妥当と考える事項を繋ぎ当時を可能な限り再現し解明の突破口の構築を試みる:

ひとつめは、「大阪バドミントン協会史 3」広報 No.33 昭和 52 年

昭和 21 年、東京と横浜を軸に日本協会が発足した。全国的規模の唯一組織を目指す新しい協会であるので未組織の各地関係者に連絡をつけ、その拡充を図るのは当然であろう。この一環として近畿地方へは廣田兼敏氏を中心に大阪を指向し、積極的に接してきた。具体的には各種情報の提供や日本協会充実のための要請などであった。廣田氏を通じてのこの動向が、大阪協会設立への動きの一つになったことは否定しがたい。まして要請があれば尚更である。この点から推考すると、大阪協会の設立上限は昭和 21 年以前に求められそうもない。万一、これを超える組織があれば、陳寿（※）の述べる卑弥呼の国に譬えられる（＊に続く)。

※陳寿　二十四史と呼ばれる古代中国の史書『三国志』(魏・呉・蜀の紀伝体の歴史書を編纂。故国蜀への思いやりに溢れる。その陳寿が異国邪馬台国の歴史を書いたとすればおかしなことになる。歴史を語るとき一番気をつけなければならい態度である。これとは別に、陳寿には以下の批判がある：①魏の子孫に立伝を書くとして原稿料を要求した。②自分の父を処罰した諸葛亮を腹いせから批判的に記述した。③自分に恥辱を与えた諸葛瞻は実力以上の名声を受けたと、記す等の癖があった。

ふたつめは、「大阪バドミントン協会史 4」No.34 昭和 53 年広報

＊それでは、1946(昭和 21)年以前の大阪のバドミントンは、どんな状況であったのか、私(川口)が調べた範囲で当時のことを記載したものから必要箇所を年代順に原文のまま以下引用させていただく。

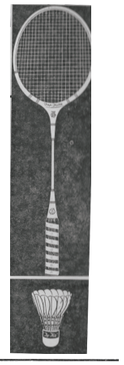
1 ,大阪 YMCA バドミントンクラブは 1946（昭和 21）年に初めて結成された。資料は大阪 YMCA 発行『大阪 YMCA 史』(発行年度未確認）による

2 . 1938~39(昭和 13-14)年頃、大阪市西区の大阪中央 YMCA でバドミントンが行われた

3. 1939(昭和 14)年に筆者（廣田兼敏氏自身：川口註）は、関西の大阪（大阪 YMCA は松葉体育主事）ならびに神戸 YMCA（石渡体育主事）に講習・指導、(中略）東（横浜 YMCA を指す：川口註)、西(大阪 YMCA)を通じ一般に指導普及した（引用した『バドミントン界 79 号』の記述内容には問題がある)。

4. 1940(昭和 15)年 7 月 13 日、於大阪 YMCA、(中略）成績は横浜 YMCA のワンサイドゲームで、(中略）大阪をリードした。『バドミントン界 83 号』

※ 米国のナラガンセット・ブランドのスポティーなウエアーやシューズ



IBF の　HANDBOOK for 1961-62.の裏表紙に載せられたスポルティング社の製品

みっつめは、「大阪バドミントン協会史 5」昭和 53(1978 年)年広報 No.35」

ここまでを見ると、全ての資料は YMCA に係っている。当時、大阪では、バドミントンも含めて室内スポーツを志向するとき、学生生徒を別にして、 社会人の活動の場合は、その体育館の確保が甚だ困難であった。ただ、土佐堀の青年会館の愛称で市民から親しまれていた YMCA の体育館が、すべての人たちの利用に応じていた唯一無二のものであった。

このような背景をもつ YMCA 体育館は、こじんまりとしており、備え付けの多くの体育器具は、ナラガンセット※やスポルディングなどの製品で、それらの器具が駆使され、各種各様の機能が十分に満たされ得た本格的な体育施設であった。従って、多数のスポーツマンがここに集まったようにバドミントン愛好者たちにとっても恰好の場所であった。加えて、当時の YMCA は、 目新しいスポーツを市民に普及する事業も行っており、バドミントンもこの 枠のなかに位置付けられていたにちがいない。

大阪におけるバドミントンの源流は、これらの事毎が重なり合って、自ら YMCA とその関係者に到達する。もちろん、YMCA 関係以外のものを軽々しく否定することは慎まなければならないが。

さらにもう一つ加えて、「大阪バドミントン協会史 6」1978（昭和 53）年広報 No.36；YMCA 関係で親しんだ方々は・・・

YMCA 関係でバドミントンに親しんだ方々に、何時・仲間・指導者・用具などに焦点を合わせて以下の様に御回想頂いた：

①最初は福田宗次郎氏に伺う：福田氏は西区に現住し、元日本フェンシング協会理事長であり、ローマ、東京両オリンピックの同競技の役員などを務めたフェンシング界の大御所である。同氏は語る。「私が初めてフェンシングの練習をするために YMCA へ行ったのは、1934（昭和 9）年 9 月 21 日に大阪方面を襲ったあの猛烈な室戸台風の前後でしたので、今でもはっきり覚えています。

その年の暮れの頃でしょうかフェンシング仲間の辰馬さん（他界）、的場さん（他界）、川崎さん、そして、YMCA 職員の松葉さん、石渡さんもおられたように思います。こういった仲間とともにバドミントンをやりだしました。指導者の役割は川崎さんだったと思います。用具は淀屋橋の美津野か、レーン・クロファード※※（当時、神戸で斬新な各種高級英国系の輸入品を扱っていた店）あたりで求めたように記憶します。ネットはバレーボールのものを代用していたのと違いますか。」

②川崎策実氏自ら語る ：「大阪バドミントン協会史 7」昭和 53 年広報 No.37 に 回想を追って、川崎策実氏の回想にそれをみる：「私は徴兵検査を受けた昭和７年 に、神戸外人クラブの体育室でポルトガル系の外人からバドミントンを教えてもらいました。これが私とバドミントンとの最初の出会いです。以後私は、ここでプレイを続けると同時に大阪では YMCA でもやりだしました。辰馬、的場、福田、松葉さん等と YMCA でラケットを握っていた**昭和９年頃**、神戸のナルト（東南アジア方面へバドミントン用具を輸出していた商社、本社は横浜市、川口註）へラケットを求めに行った帰りの阪急電車の中で、未知の乗客からバドミントンについて尋ねられた記憶があります。

思い返せば半世紀に近い年月の間、多くの同好の友人とこのスポーツを楽しみましたが、取り分けて印象に残っているプレーヤーは、辰馬、八幡の両氏です。また、横浜市の廣田氏（日本協会副会長）も心に留まる方の一人です。特に彼が、バドミントンの基本をマスターしてデンマークから帰国した時のプレーは、まさに眼を見張るスマートさを覚えた思い出は今日でも鮮明に残っています。」

③「大阪バドミントン協会史 8」昭和 53 年広報 No.38 で、川崎氏が語る 八幡満胖（やわたみつやす） 氏に関して：彼は戦前のプレーヤーのうち最年少者で、1938(昭和 13)年上半期か翌 14 年に、川崎氏やある時は他の人（後述）からバドミントンの手解きを受けたものと思われる。以後、1947(昭和 22)年３月頃まで、軍役期間の 1942（昭和 17）年の２月から 1946(昭和 21）年５月を除いて、バドミントンを続けた。**1946（昭和 21）年６月**浦賀へ復員し、翌月彼は同年**４月**に復員した川崎氏と協力し、バドミントンに興味を持った青年たちを集め指導を始めたことは、大阪はもとより全国的にも高く評価されよう。しかし、翌 1947（昭和 22）年４月頃から家業の都合でバドミントンから遠ざかった。それらのことから今日に至る 30 年間に、彼は陸上自衛隊の幹部を勤めあげたが、昨 1977（昭和 52）年６月５日に突然の病に襲われ、50 歳代半ばにして不帰の人となった。私は故八幡満胖（やはたみつやす）氏が現世に在れば、大阪協会の指導的役割も果たしたであろうし、またこの協会史もより精密に描くと思う。

＜以上「大阪バドミントン協会史」資料の提供は 1975(昭和 50)年度大阪バドミン協会理事長の青木昭二氏の好意によるものである。＞

1934 昭和９年　５月 13 日　神奈川県バドミントン協会発会式を兼ね第１回競技大会開催
出典：『神奈川県体育史』「年表」神奈川県教育委員会、1973(昭和 48)年 12 月９日 第２回神奈川県バドミントン選手権大会※(※第１回との関係は不明。尚、同書「年表」では 1938(昭和 13)年 11 月に神奈川県協会結成とされており；・要検証)、さらに同書によれば 1940(昭和 15)年５月 22 日にも県バドミントン協会結成と明記しており、その違いの確認が必要となる。亦、同書『年表』1939(昭和 14)年 12 月 28 日には「横浜 YMCA 対横浜外人スポーツ・クラブのバドミントン試合挙行」の記載もある。これらについても同書との内容をの突き合わせによる検討が必要であるが本誌への執筆では果たせなかった。

1935 昭和 10 年　**東京運動具製造販売組合、創立 15 周年記念事業『東京運動具製造販売組合史』を複刊**（前出 PP.31- 33 の 1921（大正 10）年の項を参照）

1936 昭和 11 年　４月 13～21 日 「日本 YMCA 主事養成講習会」を大阪 YMCA で開催。松葉徳三郎（大阪 YMCA）指導陣の一員に加わる（京青 36-5）
６月 11 日 柳田享（東京 YMCA)、R.LDurgin（日本 YMCA 同盟)、日本オリンピック・チーム役員としてベルリンに赴く。(東別 174- 55)
７月**日本 YMCA 同盟：ベルリン・オリンピック見学団を組織**(大 245)。**廣田兼敏（横浜 YMCA）ベルリン・オリンピック見学団に加わる。引き続きデンマークの Niels Buken 国民学校に留学する（横 177）石渡俊一；神戸 YMCA に就職 體育部嘱託となる**
「神戸青年７号」（昭和 11 年）P.11; 石渡俊一（関西大学経済学部卒業後、米スプリングフィールド大学へ留学していた）が、留学を終えて帰国し、神戸 YMCA に就職、體育部嘱託となり、バドミントンの指導を開始する。『神戸青年７号』（昭和 11 年）P.11 の 名簿に紹介される。

1937 昭和 12 年　**「神戸青年５号」（昭和 12 年５月）に掲載された「お知らせ」。**

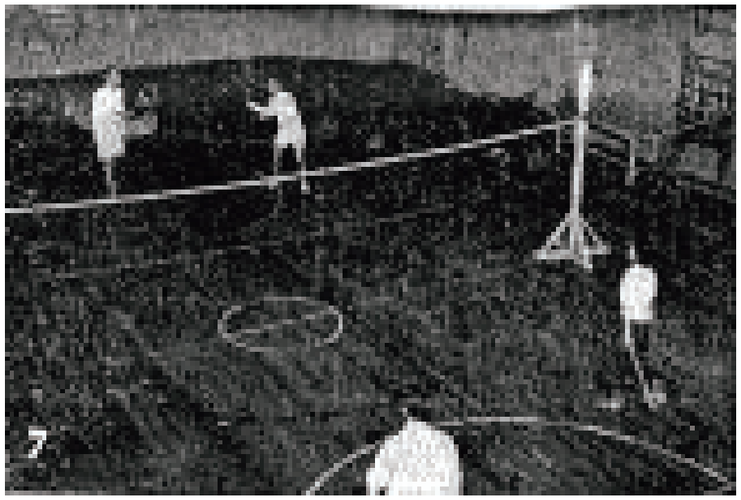
新興ゲーム
バドミントン練習開始さる

練習歓迎

練習日	**毎週火・金、午後６時より７時まで**
	土曜日に限り貸借時間の他にバドミントンゲーム練習に開放
場　所	**YMCA 體育館**
資　格	**YMCA 會員限る**
指導者	**石渡主事**
申　込	**及び問合わせは體育部石渡迄**

本号に紹介された指導者；石渡俊一と神戸 YMCA に新設開講されたバドミントン練習會のお知らせ

※ 神戸 YMCA 関係の資料収集に当たっては当時神戸大学に勤務していた斎藤健司助教授（現筑波大学教授）が大きな役割を果たしてくれた。



一寸日本の羽根つきに似ています。 同誌 p.14 より； このキャプションにこの時代のバドミントン の社会的な位置づけが表されている（石渡註）

神戸青年６号（昭和 12 年）バドミントン部発足のコラムを掲載

新興ゲームの持つかぎりなき魅力は、既にクラブ員 10 数名を集めて、新興バドミントンゲームの抱持するテニスの妙味へピンポンの巧微繊細とヴァレーボールの様式を加味した此の特技に益々精進しつつある。バドミントンクラブ加入希望者は體育部迄どしどしとお申込を乞ふ。練習日 火、金、午後６時ー７時。土、試合、練習試合、對外試合

新興ゲーム バドミントン 石渡俊一【我国初のバドミントン解説（原文）】

バドミントンを始めて知り初めてやって見度いと思ふ人達で、此のゲームが印度から興って来たことは一寸受け兼ねる圖である。恐らく其国辺りの貴族の奥庭で貴婦人、令嬢にでも専属していると考へるのが至当であるように思われる。あのスマートな細長い軽快そのものの様なラケットと楚々（清らかで美しい）たる純白のシャトルキック(註)を見れば尚更その感が深い。いつ頃から始められたゲームであるか詳らかでないが、1873 年に西部印度で古風の方法で行われたのが此の競技の正式記録としての第一頁を踏出したものと認めて良いのである。競技規則書としても 1887 年に王室機械技師のセルビー(註)によって第一版が出されたのである。当時の規則とバドミントン器具に就いても現在とは余程異ったものに改良され進歩してもゐることは他の競技と何等異なるところは見られない。

（註：原文のまま）

（註：確認できなかったが貴重な情報である）

テニス選手又は選手たらんと志す人あるいは各期に於けるテニス競技の補助競技としても実に卓抜優秀なものであり、婦人、小児、老人の運動としてもビジネスマンのランチタイムエキサーサイスとしても十分に推奨するに躊躇するものではない。

規定のコートより縮めても尚又快味を満喫し得る点において家庭に移しても大に効果を上げうることと思はれる、競技場は野外でも室内でもよろしい。幅 20 呎（フィート）縦 44 呎の短形の面積（広がりを持つもの）で、区画線は白色なり黒色で分割され、ネットもヴァレーボールの様式に吊り張り式でサイドで５呎１吋（インチ）、 中心で５呎の高さに張られる。羽根は 14 本乃至 16 本の羽根をコルクに取り付けたもので、１匁１分乃至１匁３分が適当とされてゐる。室内競技用としては白色の羽根に多少染色した方が見易くゲームを愉快に進めることが出来る。シングルゲームもダブルスゲームをも楽しめるのはテニスと同じことである.

次に揚げられてゐる場合はフォールトであって注意しなければならない。

1、サーヴィスをオーヴァーハンドにてなしたる場合（普通サーヴィスは腰よりも高からずと解釈されてゐる）

2、 サーヴィスの羽根が所定の場所以外に落ちたる場合、サーヴァーの対角線上にある相手のコートに落ちざりし場合、ショートサーヴィス線（ライン）にンに達せず或はロングサーヴィスラインを越へた場合、バウンダリーラインの外に出た場合等が列挙される

3、 サーヴィスを為すとき正当なるハーフコートにサーヴァーの両足が置かれてゐない場合あるいはサーヴィスの入るべきハーフコートにてレシーヴァーの両足がサーヴィスの入るまで置かれてゐない場合。

4. サーヴィス中に於てサーヴァーが或いはパートナーが豫備的誘致動作をなしたる時何等も審判の判定による。

5、 サーヴィス又は競技中に於てシャトルコックが境界線上に落ちた場合、ネットの網目を通過した場合、その他の障害物及び競技者の身体若しくは着衣に触れた場合、ライン上に落ちたるものはコート内に落ちたるものと見做される。

6、 ネットを越さぬ先に羽子を打った場合ラケットをネットにカヴァーせしめた場合。

7、 羽根を二回連続的に打たれた場合。 （次号完結）

（※残念ながら、次号は既に欠損しており、参照できなかった。）

1937　昭和 12 年　10 月　横浜 YMCA バドミントンを始める
同　　11 月　大阪 YMCA バドミントンを始める

【検討】【廣田の主張する内容の真偽を考えるため】我国初のバドミントン指導・競技について論じた主要文献をみる：我国最初のバドミントンは“横浜だ”とする文献（①）

①－１神奈川県教育委員会編『神奈川県体育史』p.291】の文章「日本人による初めての大会」とある説明文

横浜市バドミントン大会、平沼小学校で開催（参加者約 30 名）；日本人による最初の試合［昭和８年に、横浜市バドミントン大会が平沼小学校で開かれた。参加者は約 30 名であったが、日本人による大会としては、おそらく我国における‘大会’とな（名）のつく最初の催しであったと思われる。

『日本スポーツ百年』、日本体育協会編、和歌山新報者、1970 (昭和 42)年

①－２ 横浜市教育委員会『日本スポーツ 100 年の歩み』（監修：成田十次郎)

「日本で初めての大会」横浜市民バドミントン大会は 1933(昭和８）年平沼小学校で開かれた。参加者はわずかに 30 人ほどであったようだが、**県体育史や日本体育協会史などでは、「日本で初めての大会」と定義**つけられている（**①－1 を資料にしていることがわかる**）。記載内容は以下のようである。

※インド・ボンペイ州ボンペイが最近ムンバイに、マドラスがチェンナイに変更されている。かつてのビルマはミャンマーに、首都ングーンがヤンゴンに変わっている。

インドのポンペイ※地方が発祥の地と言われるバドミントン(註；資料や出典の提示なし)。英国を経由して日本に伝わった地は長崎のようである（*成田の見解か*)。長崎出島資料館に「バドミントン 伝来の地」の碑が建立されている。(*註：その碑を建立した根拠が不明で、それが長崎の『出島図』の存在によるなら問題がある。「英国を云々」に至っては伝聞の範疇にも入らない*)。神戸市立南蛮美術館には「長崎漢洋居留図・二巻」にバドミントン の原型と思われる羽根つきのような構図がある（*としているが出島図は複数あり、認識が乏しい*)。1800 年、今から約 200 年前のことである。このバドミントンに興じていたのは居留地以内の人に限られていたようで、日本人がバドミントンに直に接したのはこれからはるか後、大正時代も終わりに近いころであったようだ（*重要な問題は出島の羽根つき(ウーラング)の時代には未だバドミントン は誕生しておらず、羽根つきをしているのはオランダ人でもなく労務に携わるバタフィア人と思われる*)※（※ *斜体文字による文面は本篇の執筆の際のに変更したものである*)。

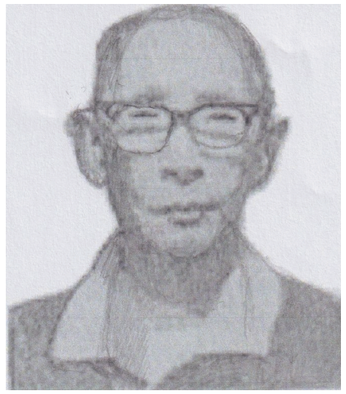
横浜 YMCA 体育主事・廣田兼敏（1899-1981）が横浜にあった外人スポーツクラブ YCAC などの協力により市民に広めたのが、市民がバドミントンに接する初めであったようである。日本で最初と言われる市民大会が開かれた地 横浜。貿易港としての特徴(が)をよく表されているように思われる。

横浜市西区の「ナルト・スポーツ」が上海から水鳥（ガチョウ）を輸入、バドミントンの羽根（シャトル・コック）を製造。インドや欧米に加工輸出していた。市民大会が開かれた前年の昭和７年。このナルト・スポーツの創立者、岡藤吉・善七兄弟が社内に屋外コートを作り、市民にも開放して実技を経験させるなどした。品質の向上を目的としたものであったが、中区馬車道の明治屋近くの空地にコートを造り、ラケットやシャトルを無料で貸し出したこと（昭和８年以降の事）も市民へ結びつきを強めたことは想像に難くない。

全国に先駆けていち早く大会を開いた横浜であったが、伝来の歴史こそ古いものの、市民がバドミントンに興じるようになって僅か 1、２年で行われた大会であったためか、其競技人口は少なかったようであり、「横浜市民バドミントン大会」の模様を伝える書物などは、ほとんどない。

現在のようにマスコミが発達していなかった当時のこと。大会を広く知らせる文章が見つからないことは仕方ないと思われるが、バドミントンが市民スポーツの仲間入りを果たす第一歩となった「横浜市民バドミントン大会」。日本のバドミントンの歴史の一ページを開いた大会であった。【註：記述内容に誤りがあり、風聞による記載等も修正が必要である。】

①ー３『日本スポーツ百年』「バドミントン の歴史」(pp.535-536)
「わが国への移入」横浜市教育委員会（監修：成田十次郎）



廣田兼敏（1899-1981）

1898(明治 32)年 札幌で誕生
1914(大正 3）年 京都工業夜間部 林業 科卒業
1919(大正 9）年 横浜 YMCA 職員とな る
1924(大正 13)年 神戸 YMCA 主事講習会参加
1925(大正 14)年 横浜 YMCA 少年事業開始、体育指導主事となる。この年日本 YMCA 同盟、横浜 YMCA で第２回主事養成講習会を開催。柳田・松葉（指導陣として）参加
1933（昭和 8）年 横浜 YMCA でバドミントンを始める
1936(昭和 11)年 ベルリン五輪見学。デマンーク Niel Bhkh 国民学校に留学（バドミントン活動に参加）
1942(昭和 17)年 横浜 YMCA 第 1 回バドミントン講習会を開催

さて日本には大正 13,4 年頃（1924 年）北米 YMCA から横浜、東京などの YMCA にバドミントンの道具が贈られていたが、当時は別に複雑なルールやテクニックにとらわれず、ただバーズを打交(うちかわ)して面白がっていた程度のものであった。しかし在留外人の間では、昭和４年頃の春に、横浜と神戸の両外人が、インターポート（各種競技のシーズン終わりの定期戦）にこの種目を加えて対戦し、正規のバドミントン試合が行われていた。横浜といえば、我国バドミントンの発達と浅からぬ関係がある。横浜 YMCA がこの競技を**正式に取り入れた**のは昭和 10 年頃からである（*註：**正式という言葉に**どんな意味内容を込めようとしたのだろう*)。12 年の秋にデンマーク体操学校でバドミントンを学んだ（という）廣田兼敏（1899-1981）の帰朝とともに、技術的な研究がいよいよ本格的となり、間も無く廣田氏の尽力により横浜 YMCA が中心となり、古河電気、コロンビア、ナルトスポーツなどの四つのチームにより神奈川県バドミントン協會がいち早く組織されて、会長に秦孝治、理事長に廣田氏が推され、ゲームはまだ県内だけのものではあったが、各種の大会も開催された。とにかく、我国における最初に*正式なバドミントン協会*※であり、また戦前における*ただ一つの協会でもあった*のである（ 1938 年の項を参照されたい)。

また横浜を語れば、岡藤吉のことも忘れられない。氏は当時唯一のバドミントン用具製造業者であり（※唯一の製造業者か否か検討する必要がある)、横浜にあって南洋ジャワ方面に大量の輸出を行い、また日本のバドミントン界に多大の貢献をなしたのである。わがバドミントン界におけるパイオニアは前出の廣田、岡両氏の他にもあった。例えば、東京聖学院の今井（先(はじめ)）、大阪 YMCA の松葉徳三郎（現協會顧問)、神戸 YMCA の石渡俊一(現副会長）らの熱意と努力は、日本バドミントン界に永く記憶されるべきであろう（本文のまま)。こうして昭和 16 年になると、横浜 YMCA の佐藤保（現北海道協會理事長)、山本孝二、中地幹雄らの努力が実って、待望の学生バドミントンクラブが慶大内に生まれ、学生バドミントン連盟結成準備の一歩手前まで進んだのであったが、当時の緊迫した国情により、ついに陽の目をみるにいたらなかった（註：後段の内容から廣田とは別組織所属の筆書き手が廣田著の文献を軸に内容を構成したことが想

像される)。

ここで、必要から話を 1937(昭和 12)年の廣田のオリンピック見学・デンマーク研修に纏わる次の事項に話を戻す：

①-4 上記と同じ『日本スポーツ百年』「バドミントンの歴史」(p. 535-536) より「我国への移入」

※ **'正式な協会'とは**：広辞苑は協会を次のように記述する「ある目的のため会員が協力して設立・維持する会」。これに対して **Shorter Oxford English Dictionary の Association の項目 2、4** によれば
:2. A body of persons associated for common purposes: the organization formed to effort their purpose : a society :*e.g.* theBritish Association for the Advancement of Science, etc,1659.とある。

※※ **club は、広辞苑によれば政治・社交・娯楽その他共通の目的によって集まった人々の団体。また、その集合団体とされている。**

※※※ **協会とクラブの差異は、クラブ等の集合体が協会とする程度で把握しておきたい。**

さて日本には 1924（大正 13・14）年頃、北米から横浜、東京などの YMCA にバドミントンの道具が贈られれていたが、当時は別に複雑なルールやテクニックに囚われず、ただバーズ(シャトル)を打ち交わして面白がっていた程度のものであった。しかし在留外人の間では、昭和 4 年頃の春に、インターポート（各種競技のシーズン終りの定期戦）に此の種目をも加えて対戦し、正規のバドミントン試合が行われていた。横浜と言えば、我国バドミントンの発達史と浅からぬ関係がある。横浜 YMCA がこの競技を正式に採り入れたのは昭和 10 年頃からであるが、12 年の秋に、デンマーク体操学校でバドミントン を学んだ廣田兼敏（1899-1981）の帰朝と共に、技術的な研究がいよいよ本格的となり、戦法は一変して急速に競技化されたものである。間もなく廣田氏の尽力により横浜 YMCA が中心となり古河電気、コロンビア、ナルト・スポーツなどの四つのチームにより**神奈川県バドミントン協会**※がいち早く組織されて、会長に秦幸次郎、理事長に廣田誌が押され、ゲームはまだ県内だけのものであったが、各種の大会も開催された。とにかく**我国における最初にして正式なバドミントン協会であり、また、戦前におけるただ一つの協会でもあったのである**（組織に対する微妙な意味解釈の問題が残り、検討が必要な事項である)。

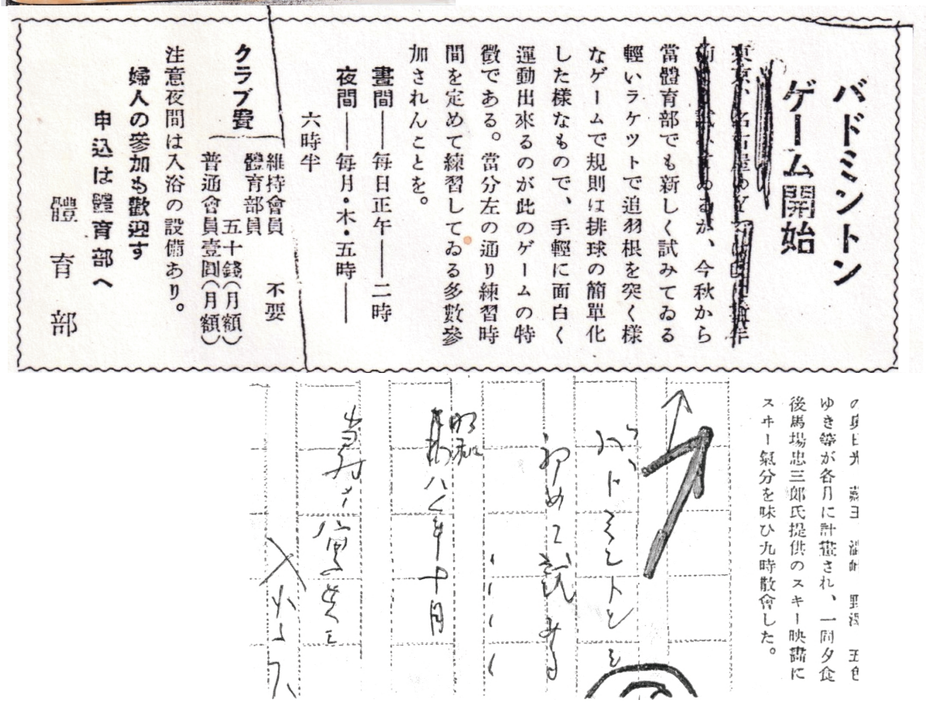
また横浜を語れば、岡藤吉のことを忘れられない。氏は当時唯一のバドミントン用具製造業者であり、横浜にあって南洋ジャワ方面に大量の輸出を行い、また日本のバドミントン界に多大の貢献を為したのである。わがバドミントン界におけるパイオニアは前記のように廣田、岡両氏の他にもあった。例えば東京聖学院の今井（先(はじめ)）、大阪 YMCA の川口浩（現協会顧問)、神戸 YMCA の石渡俊一（現副会長)、らの熱意と努力は、日本バドミントン界に永く記憶されるべきだろう（本文のまま)。こうして昭和 16 年になると、横浜 YMCA の佐藤保（現北海道協会理事長)、山本浩二、中地幹雄らの努力が実って、待望の学生バドミントン倶楽部（慶應義塾大学バドミントンクラブ）が慶大内に生まれ、学生バドミントン連盟結成準備の一歩手前まで進んだのであったが、当時の緊迫した国情により、ついに日の目を見るに至らなかった（※学連の発足は昭和 22 年である)。

② 『横浜青年』(「昭和 8 年」の書込みのある横浜 YMCA 関連の資料)

②-1 横浜が必ずしも我国最初のバドミントンをやったとはしない文献：『横浜青年』(昭和 8 年 10 月号)：当誌のゲラ刷りへの書き込みによくある修正指示に注目する；

この現物は、横浜 YMCA の定期的な資料整理の際廃棄され既に現存しない。しかし、廃棄寸前に横浜 YMCA 職員大塚氏が現資料をコピーし筆者に送付してくれた。危機一髪の機転で当該コピーが今に残った。廣田氏自身の手になるゲラ刷で、事務方への修正指示の書込がある。修正加筆指示は「**東京、名古屋の YMCA においては前年から試みられてゐるが、今秋から當體育部でも新しく試みてゐる軽いラケットで追羽根をつくようなゲームで規則は排球の簡単化したようなもので、手軽に面白く運動できるのがこのゲームの特徴である**」と読める。廣田は、明らかに横浜に先行して東京、名古屋の YMCA においても、既にバドミントン の指導プログラムが存在することを認識していたことが窺われ、如何なる理由かそれを改竄する指示をしたと思われる節がある。廃棄前の当該頁の問題箇所の拡大コピーを下に提示した。

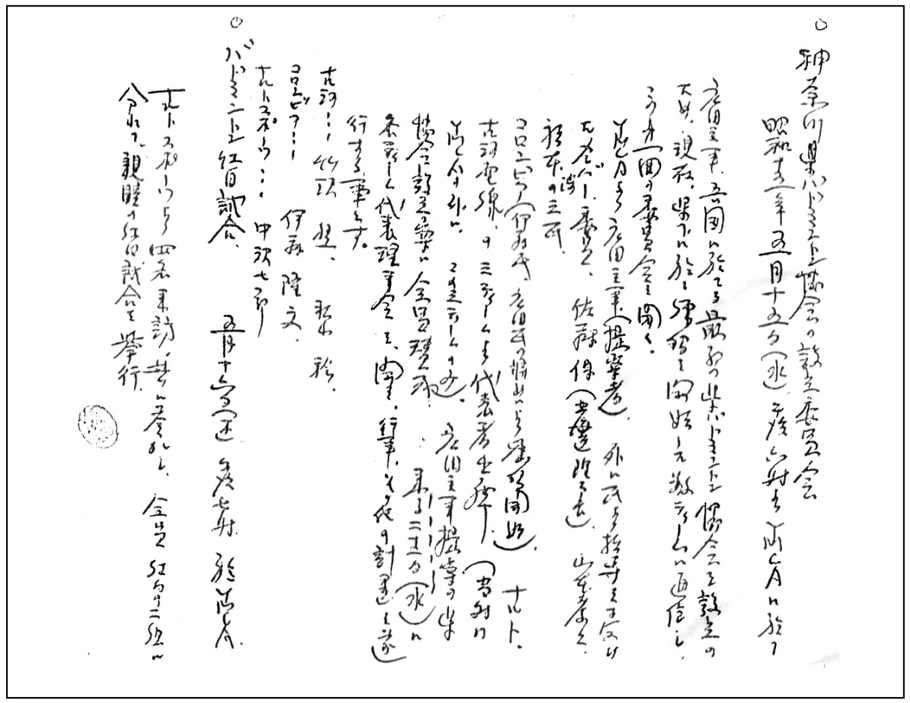
横浜青年 昭和8年


バドミントン
ゲーム開始
東京、名古屋のYMCAにおいては前年から試みられてゐるが、今秋から當體育部でも新しく試みてゐる軽いラケットで追羽根を突く様なゲームで規則は排球の簡単化した様なもので、手軽に面白く運動出来るのが此のゲームの特徴である。當分左の通り練習時間を定めて練習してゐる多数参加されんことを。
晝間——毎日正午——二時
夜間——毎月・木・五時——六時半
クラブ費 維持會員 不要
體育部員 五十錢(月額)
普通會員 壹圓(月額)
注意夜間は入浴の設備あり。
婦人の參加も歡迎す
申込は體育部へ
體育部

「我国におけるバドミントンの始まりは横浜である」と同定する作業は、なかなか難しい。

次の案件を検討しよう。協会という統括組織の誕生に注目してみることが重要なのかもしれないが、協会はバドミントンの活動があって、その活動母体が複数あって、初めて統括組織として誕生するものであるから、それを**“バドミントンの始まり”**と呼ぶのは不合理だ。

1933 昭和 15 年 5 月 15 日（水）**神奈川県バドミントン協会設立：我国初のバドミントン地方協会の発足(註；共通の目的を達成するために結合した人々の集まり)**



村上忠治
2000（平成 12）年神奈川県バドミントン協会 60 周年記念式典で感謝状を贈られる村上氏

○ 神奈川県バドミントン協会の設立委員会　　＜上記のガリ版刷り資料の写し＞

5 月 15 日（水）午後 6 時より横浜 YMCA に於て

広田主事、わが国における最初の県バドミントン協会を設立のため、現在、県下に於て練習を開始した数ティームに通信し、この第 1 回の委員会を開く。YMCA より広田主事（提案者）、外に氏より指導を受けたメンバー、委員。佐藤保（北海道理事長※次頁参照）、山本孝二、福本渉の 3 氏。コロンビア（伊藤氏、広田氏の奨めにより練習開始）、ナルト・古河電線の 3 ティームより代表者出席（当時は YMCA の他にこの 3 ティームのみ）、広田主事提案の県協会設立案に全員賛成。来たる 22 日（水）に各ティーム代表理事会を開き、 行事其の他の計画を 遂行する事とす。

古河・・・竹沢猛、松山稔、
コロンビア・・・伊藤隆文、
ナルトスポーツ・・・中沢七郎

○ バドミントン紅白試合　　5 月 16 日（木）午後 7 時　於 YMCA

ナルトスポーツ 4 名来訪、共に参加し、全員紅白の 2 組に分かれて、親睦の紅白試合を挙行　　廣田印

註） 本頁上図の手書きの原稿は村上氏が所持していたもののコピーである。下の横書きは、これを活字体・横書きに直したもの。コピー版にはコピーされた廣田の印があり、元原稿が廣田の手になる事、ないしは同氏がが所持したものであると推測される。

村上忠治氏は、我国バドミントン界の草創期にあって。“組織づくり”“ラケットづくり”“ネットづくり”“ルールづくり”そしてそれらの工作器具の開発、“出版”等々の先鞭を切って開き、バドミントン界育ての親とも言うべき働きをされて、我国のバドミントン草創期を支えられた。亡くなられた後残された村山氏の所蔵資料は、いずれも協会発展史を知る上で重要なものであるった：

1)昭和 24 年度日本バドミントン協会総会記録
2)昭和 25 年度臨時役員総会抄録（名古屋市）
3)昭和 26 年度日本バドミントン協会総会記録（丹羽市）
4)昭和 27 年度日本バドミントン協会臨時総会記録（仙台市）
5)昭和 28 年度日本バドミントン協会大会運営規定・審判擁護案
6)昭和 28 年日本バドミントン協会大会規定案
7)昭和 28 年に本バドミントン協会総会議事録（新潟市公会堂）

【神奈川県バドミントン協会設立委員会起案書の不思議】上記資料を活字体で書き直した写しに注目する。これは何時作成されたのか：この起案書の書かれた日時を決定しようとすると不合理でおかしな箇所のあるのに気づく。この文面に佐藤保（北海道協會理事長）という箇所がある。「**わが国に於ける最初の県バドミントン協会を設立するために、云々、第 1 回の委員会を開く**」としてある会合に戦後別途系列から誕生する北海道バドミントン協会の理事長佐藤保［北海道協会初代理事長に就任したのは 1949（昭和）24 年］が出席していたと言うのである。つまりそのままこの一節を正しく書き直せには、1）佐藤保の（）の中の記述を外すか、2）佐藤保自体を外すかしない。さもなければ、この起案書は北海道バドミントン協会の設立後に書かれたことになるから、第二次世界大戦前のここで記述しようとしている神奈川県バドミントン協会誕生の事後に書かれたものだということになる（しかもそこには廣田の捺印＜承認印＞があるのだから廣田によって書かれたとみる）ということである。そうでないとすれば、この書面を果たして誰が作成したのだろうか謎が残る。第 1 回の委員会が廣田氏の他に「氏（つまり廣田氏）の指導を受けたメンバー」とコロンビア（やはり廣田氏の奨めで練習を開始したと言う伊藤氏）・ナルト・古川電線によって構成されていたと記されているのだから、時系列が合わなくなる。文面は「廣田主事提案の県協会設立案に全員賛成。来たる 22 日云々」と綴られていく。

誰が何時この一枚の書類（議案書でも議事録でもない）を認めたのだろう、この書類の名称を付し難い上に執筆者が誰かも同定し難い：ただし前述のように文面の最後に執筆者と思われる者の印鑑が承認印のように押印されてはいる。こうしてみると佐藤保の括弧付きの（北海道協会理事長と記載の）意味は何であろうか。‘後に北海道バドミントン協会理事長になる・或いはなった’という意味なのだろうが、そうだとすれば、**書類に記された昭和 15 年 5 月 15 日というのは、**書類の作成された日なのか会合の行われた日で後日その記録が書かれたのか、同定が難しくなる。文面最後の三行の評価にもなかなかの難しさが残る。「バドミントン紅白試合を 5 月 16 日（木）於 YMCA、つまりこの委員会の翌日にやる、として、ここにナルトスポーツ 4 名が会合に参加（したのか・予定なのか）と言うことなのだろうか；それともゲームに参加したというのだろうか、観戦・見学する予定と言ったのだろうか等々とも思いあぐねると、全員紅白の 2 組に分かれて、親睦の紅白試合を挙行（したのか・する予定なだったのか）、時間の齟齬がどうしても判じられなくなるのである。非常に重要な資料の評価が暗礁に乗り上げてしまった。

【検討】どうしても曖昧さが気になる。話をもう一度前の 1937(昭和 12)年時点に戻す：

1937 昭和 12 年 **『横浜青年 6 月号』（昭和 12 年）横浜 YMCA の、バドミントン部設立の記事掲載に関して：大塚（横浜 YMCA 職員）→ 長田（横浜 YMCA 職員）宛送付の前記資料のコピーへの書き込み（註）とそこから推察されるもの【(註)横浜 YMCA 職員大塚が以下の資料に添付されたもの】**

「昭和 11～12 年にかけて廣田主事はデンマーク体操研修のため渡欧、帰国後フェンシング、テニス、バドミントンのクラブを設立しました。それ以前、バドミントンのプログラムはコンスタントな活動としてはなかったと思われます(以上、添付された書込み)」。

體育部　昨年７月渡欧、オリンピック大会後欧州各国の體育視察研究の旅を了へてこの度歸朝されました廣田主事を迎へ體育部は急に活気立って参りました。器械運動の各クラス、**バドミントンクラブなどが新しく生まれました。**尚６月よりは正金銀行クラブや古河電気倶楽部やスワロー倶楽部、排球クラブ等と共に歩調を揃えて初夏の體育場を賑わしてゐます。

次に新設クラブのない日や時間割等をご報告申し上げ皆様のご参加を歓迎致します。

委員會　５月 25 日（火）、午後７時より開會 ９時閉會

出席者　古谷氏、石原氏、山室氏、藤井氏、大橋氏、仙田氏、小林氏、谷口氏、渡邊會員部主事、廣田主事

協議事項 1、實演会　５月 29 日の開催の事

1、フェンシング、バドミントン、基本体操、研究クラブ等を６月より新設、適當に宣傳すること等々

バトミントン倶樂部

英國のバトミントン卵といふ方が考案されたゲームなのでこの名前があります。羽根ゲームともいはれ、コートの中央に高さ五尺のネットを張りテニスのラケット様の軽い小さいラケットを以つて羽根を打ち合ふ、日本の追羽根式のゲームであります。一寸考へると如何にも簡単で興味が無い様に見受けられますが、實は反對で、室内運動の興味あるもの、一つとして六ケ敷なく、運動量も多く理想的なゲームであります。

部　費　體育部費一ケ月壹圓（外にＹＭＣＡ會費壹圓）
練習時間　毎週月・木・午後五時半――七時半　（其の他自由時間を使用）
コート　ＹＭＣＡ室内體育場
設　備　更衣室、シャワー、浴室、衣類保管室、觀覧席
申込と資格　希望者はＹＭＣＡ會員並に體育部（申込み書へ記入の上）（申込み願ひます（御婦人の參加も可）
用　具　ラケット、靴（テニスシューズ）、輕快な運動着
注　意　部員の方には特に用具の取次の便宜が有ります

皆様の御利用を歓迎します

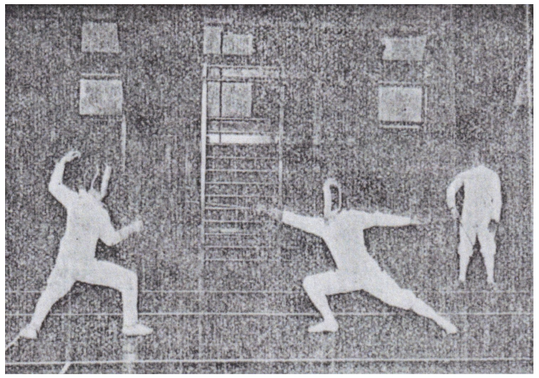
横濱ＹＭＣＡ體育部

會員諸兄姉へ（廣田主事歸國の報告）

慌ただしい研究の旅も事なく了へて去る 11 日に歸ってまいりました。留守中の皆様のご協力を旅先で承り何時も感謝してゐました。会員のお骨折りに對し厚く御禮を申し上げて止みません。全くいそがしかったため、歸つて來ても落ち着けませんで閉口してゐます。あれもこれも試してみたいものがありますが設備費用等もあり直ぐには参りませんが追々準備して盛んな體育部にしたいと思ってゐます。元来Ｙの體育場は會員のための運動場でありますから皆様擧って御利用ください。

国民の保健の問題が、只騒がれてゐる丈で未だに解決されずにゐる時に、私等はその先駆者として保健の體育を先づ自ら試み、又大いに拡めようではありませんか。よく「私(わたく)しは老人でありますから」等と云ってゐる人を見受けますが、その様な方はボールゲームや機械運動は兎も角として、是非一般の基本體操クラスの御利用を御奨めします。昔同じ様な考へを持ってゐられた方々が現在ではすっかり若返って、毎日の生活能率を上げて感謝してゐられます。この経験は只試みた人たちのみが知りうる特権であります。YMCA が皆様に差し上げる最上のプレゼントとして私しはクラスの御利用をお勧めして止まないのであります。

（廣田）



フェンシング　ー　右立てるが廣田筋主事

時間	4時 30	5時 30	6時 30	7時 30	8時 30	9時 15
月		バドミントン○クラブ	丁抹體操研究クラブ	フェンシング○　クラブ		器械体操クラス○
火			一般丁抹體操○　クラス	一般排球○　クラス		排球クラブ○
水		古河電線クラブ（BB）	正金銀行クラブ（BB）	黒船クラブ（BB）		スワロークラブ○
木		バドミントン○クラブ	丁抹體操研究クラブ	フェンシング○　クラブ		器械体操クラス○
金		バドミントン研究クラブ	一般丁抹體操○　クラス	一般排球○　クラス		排球クラブ○
土	少年部クラス		白菊クラブ（女子）BB	スワロークラブ（BB）		黒船クラブ（BB）

【横浜 YMCA 概史】

YMCA がロンドンで誕生してから 40 年後の 1884(明治 17）年 10 月 18 日、横浜海岸協会の青年達が中心になって横浜 YMCA が誕生。青年達が中心になった活動は、海岸教会から支部協会を経ながら、教会を中心に広がってきた。一般市民に開いた門戸は、聖書研究会、英語研究会、講演会、音楽界など。「廃娼運動」では支援活動の中心となる。大正時代には、横浜で **YMCA** 初の体育場を竣工。バスケットボール、バレーボール、バドミントン等市民スポーツの普及に努めた。 YMCA は、「Young Men's Christian Association」の略で、キリスト教青年会と訳す。「青年」という言葉は、YMCA の「Young Men's」を日本語に訳す時、日本の YMCA 創立者の一人「小崎弘道」が、「青雲の志を持って生きてほしい」と考え出した言葉とされる。「青年」は、すぐに社会一般に、広まっていった。創立時から、青少年問題に取り組んできたと言うのが YMCA の誇りだと横浜 YMCA のブログは紹介している。

1937 昭和 12 年　**神戸青年９月号　第１回会員バドミントン 大会（確定）の案内**

新興ゲームとして一度覚えたらやめられない面白さを持つゲームです。毎週

火、水、金曜 午後６時から７時まで練習をやってゐますからぜひ覺えて
10 月 20 日（水）午後７時から開催の大会に貴兄もご参加下さい。

神戸青年９月・11 月号（昭和 12 年）第１回会員バドミントン 大会確定案内

西日本で初めての催しであるバドミントン大会は、辨天堂運動具店寄贈になる優勝盃をめぐって 10 月 20 日午後６時からＹコートでＡ・Ｂの兩組に分かれてリーグ戦を行い、Ｅ(東)リーグの優勝者ダファー・高木兩君とＷ(西)リーグ覇者渡部・ナンポリアの兩君によって最後の輪贏（ゆえい；勝ち負け）は決せられ、高木君はナンポリア君に惜敗、渡部君はダファー君を下して、決勝は渡部・ナンポリア兩君によって、ヒフティゲーム３セットで開始、最後までシーソーゲームで火華をちらして、ナンポリア君を最後迄烈々たる闘志と迫力で土壇場まで追ひ詰めた邉りは大に偉とするに足りるが、技に一日の長あるナンポリア君が辛勝した。ナンバーワンの村上君が一枚加わればさらに激烈な熱戦が豫想せられたにちがひない。職員も大に張り切ったが矢折れ力盡きた形で一敗地に塗れたる。

EAST リーグではダファー４戦４勝、高木３勝１敗、WEST リーグでは渡部４戦４勝、ナンポリア３勝１敗の成績で、最初の優勝杯は前期の通り、ナンポリア君が保持することとなった。

次會大會はトーナメント式によって下記の通り 12 月７日擧行に決定。

第２回　バドミントン競技會（案内）

日時　　**12 月７日（火）午後７時開始**
場所　　**本會室内體育場**
資格　　**YMCA 會員　初心者觀迎**
参加料　　**金貳拾銭**
申込締切　**12 月６日（月）午後６時限**
試合方式　**トーネメント式**
表彰　　**優勝者には優勝盃を次大會まで保持せしむ**

1938　昭和 13 年　２月 18・19 日　（記録資料は原稿用紙に手書きされたもののコピー）

横浜 YMCA　第１回横浜 YMCA 内バドミントン大会を開催
昭和 13 年２月 18・19 両日、午後６時より　於体育場

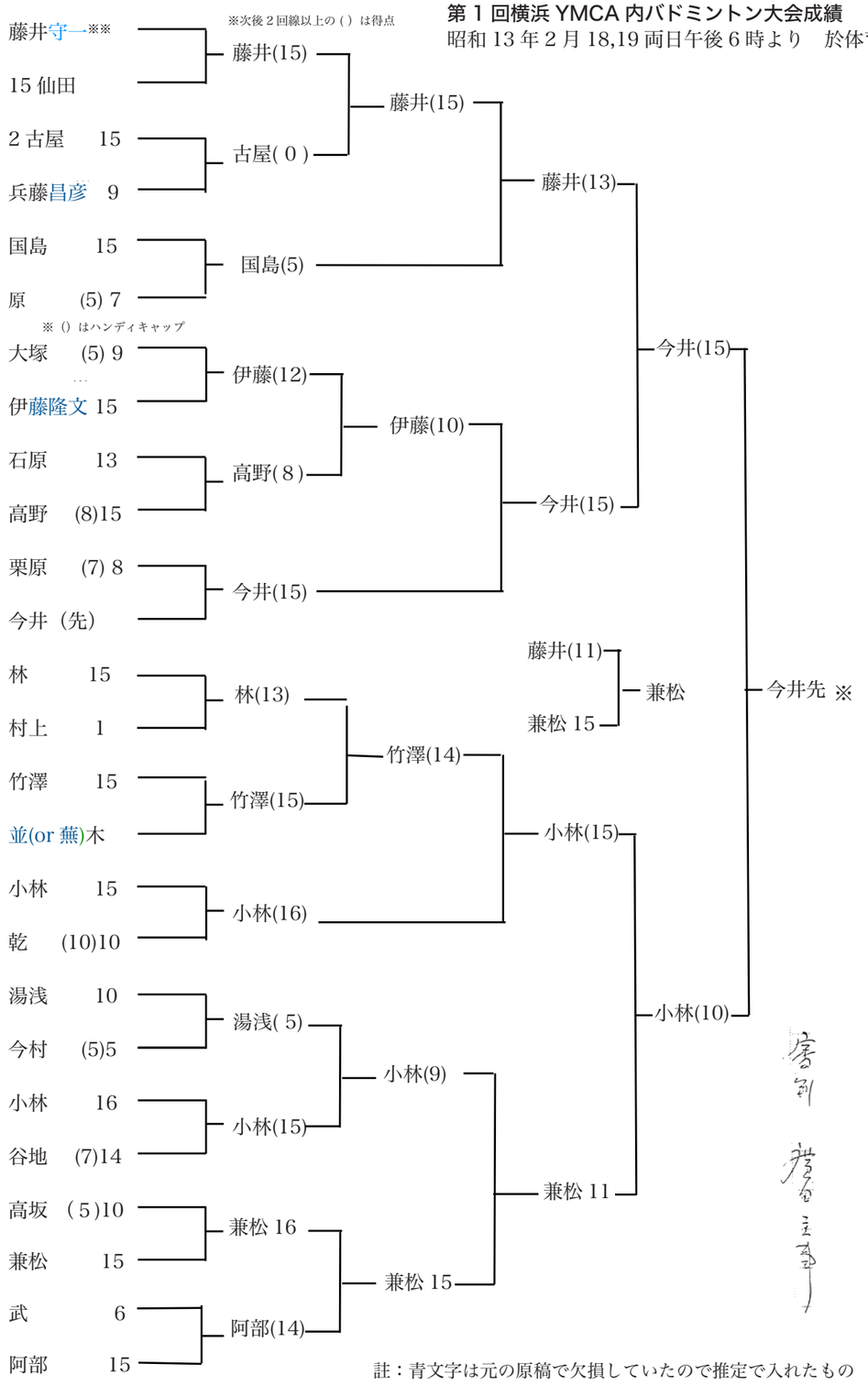
26 名の参加、第１日目は１回戦、13 試合で終り、19 日（土）２・３回戦並びに決勝、準決勝の 13 試合、藤井氏幸運にもＡコースより準決勝に勝ち残り、Ｂコース今井君（今井先(はじめ)）、苦しいハンディを破り、小林充と大接戦の末、今井君の初優勝に、盛大に終わる。
（結果は次頁に掲載）
審判　廣田主事

江守節子女史

https://modoribadminton.web.fc2.com/history.html
藤井守一選手と其その仲間：当時のバドミントン状況については藤井守一著『三高・緑高バドミントン生い立ち日記』、大圃秀生の日記・記録帳等が参考になる。藤井守一らの緑高（横浜緑ヶ丘高校）でのバドミントン活動等を支えたのは江守節子女史（山手学院創設者）であると言う。藤井守一が山手学院の英語教室に通い江守節子を介してバドミントン・ラケットと出会う。後に關西の学連を率いた大圃秀生らを勧誘、敗戦後の困難な時期にバドミントン活動を開始・・。
年間部費 3,000 円

第１回横浜 YMCA 内バドミントン大会成績
昭和 13 年２月 18,19 両日午後６時より　於体育場

※次後２回線以上の（）は得点
※（）はハンディキャップ



註：青文字は元の原稿で欠損していたので推定で入れたもの

※ 今井　先（はじめ）：今井は、第二次世界大戦直後（1945 年）「世界平和を達成するためには人と人との交流が最も有効である」との信念のもとにウィリアム・フルブライト（米）上院議員が米国議会に提出した法案に基づいて実施された‘米国と諸外国の相互理解を目的とした人物交流事業の第１回目のフルブライト留学生として渡米。ダビドソンらの活躍する世界レベルのバドミントンと併せて教育の基本課題を学ぶ。帰国後教職者としての立場を通して、バドミントンの様々な指導の場における基本的な活動容態を実現された、日本バドミントン界を育てた日本を代表する知性派指導者。

当時の **IBF** の Rules of the International Badminton Federation や The Laws of Badminton 始め、当時の先駆的指導書の翻訳にも当り、用語の選択や設定に大きな指導力を示す。聖学院高校、立教大学、日本女子体育大学 他のバドミントン部等の指導を通して、世界に伍して競えるプレーヤー達を育成された。真のフェアー・プレーを指導された稀有な指導者で、堺栄一、片石兼敏　、中山紀子（高木）、天野博江、新沼博江（湯木）、味蓼とも子（高橋）、近藤さおり等々の選手らを育成・指導された。

また、日本教職員バドミントン連盟を組織・指導し、多くの指導者陣を我国のバドミントン界に送り出す。その事業の一つ**『バドミントン 100 問集』**の中で同連盟参与の龍井昇治（元茗溪学園高等学校校長）はその書のシリーズが「私たちの師であり先輩である今井先（故人）が長年温められ、着手されたものである」と特に言及している。

1938　昭和 13 年　**神戸青年４号（昭和 13 年）　P.19**

「指導責任者石渡のバドミントンクラス参加人員が（延）500 に達している」ことが記されている。他に體育部の定期事業としてバドミントン大會の参加人員 20 名、 観覧者 120 名が報告され、會員體育新設事業として「バドミントンクラス 」が５月より参加人員 500 名で開設されるという案内がなされている。

神戸青年５号（昭和 13 年）　P.8.

會員の参加歓迎・定例の集ひ　▼バドミントン練習会　水曜日金曜日午後６時―７時　石渡俊一氏指導

神戸青年６号（昭和 13 年）　P.15. に**「第２回オープン會員・バドミントン大会の大会報告」**が以下の様に掲載され、大阪 YMCA とのつながり、初の女性會員の参加」が特筆されている。

第２回オープン會員・バドミントン大会

昨年開館デーに於て新興ゲームとして一般に公開されたこの競技も今年に入って新メンバーの入會により毎週の練習に張り切ってその意氣ものすごい時にあたり。 第２回大會が６月 12 日（日）午後１時より體育場にて擧行された。大阪Ｙより鳥海・酒井**兩**氏も参加されダウアー、タラポール氏に紅一點中野嬢と色取りどりの出場になごやかな中に終わった。成績左(下)の如し

	（シングルス）			（ダブグルス）
第１回戦	西　村	15－5	中　野	西村・タラポール 15－6 鳥海・酒井
	ダウアー	15－10	天　野	
	鳥　海	15－6	林	
第２回戦	海　邊	15－10	タラポール	
	西　村	15－3	酒　井	
	ダウアー	15－7	三　股	
準決勝	海　邊	15－10	ダウアー	天野・三股 15－15 福原・長谷川
	鳥　海	5－10	西　村	西村・タラポール 15－6 鳥海・中野
決　勝	海　邊	15－10	鳥　海	西村・タラポール 15－6 天野・三股

神戸青年 11 号（昭和 13 年）P.12、第３回會員オープンバドミントン大會

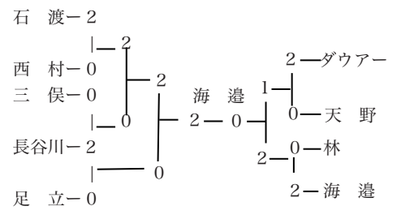
Flips and Frops：体育部便りにお洒落なカットが登場。“火花を散らして！”とでも訳すのか。バドミントンの報告が石渡から西村に換り、担当が補強されたようだ。

體育部だより　（西村記）

新興ゲームとして始められたバドミントンも其後會員諸兄の精進に依り技術的進歩に著しいものがあり、今度の試合等もそれを十分に立証するに足るものであった。

各々社會人としてスポーツは、體位の向上と精神的な結ばれと總手の方向に今後ますます効果を上げるものと思はれるが、此際 YMCA 會員方の御入會を特に歓迎する。

因みに戦績は右の通りであった。



1938　昭和 13 年　**12 月７日（木曜日）横浜 YMCA バドミントン親睦会の夕べ**

【広田直筆原稿のコピーより】：クリスマス・シーズンを前にナルトを招き、祝クリスマスの 楽しい試合を催す。

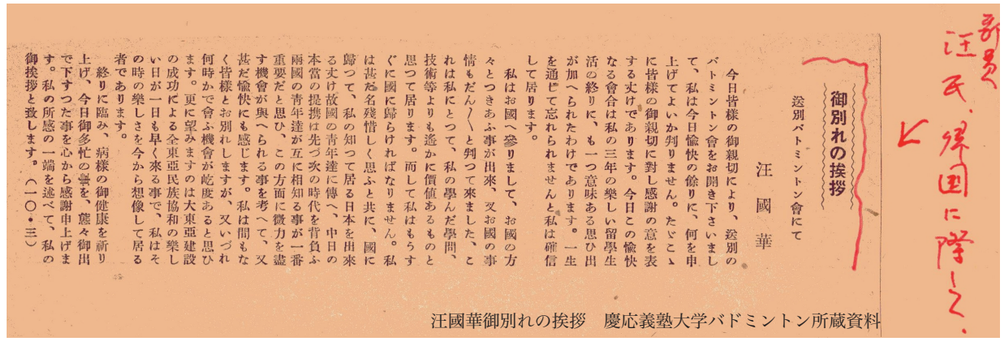
	ナルト（4）		（5）横浜 YMCA
ダブルス	秋元・中山	2(13-12,11-6)0	佐藤・高橋
	津田・中沢	2(11-6,4-11,11-8)1	山本・福本
	宮代・遊佐	1(-11,11-3, 11-8)2	兵藤・国島
シングルス	宮代	0(7-11,3-11)2	廣田
	遊佐	0(7-11,0-11)2	兵藤
	中沢	2(11-1,11-4)0	山本
	津田	0(1-11,3-11)2	福本
	中山	0(2-11,2-11)2	佐藤
	秋元	2(11-4,11-4)0	高橋

1939　昭和 14 年　**２月　横浜 YMCA 汪國華送別バドミントン會【汪國華御別れの挨拶】**

今日皆様の御親切により、送別のバドミントン會をお開き下さいまして、私は愉快の餘りに、何を申し上げてよいか判りません。たゞここに皆様のご親切に對し感謝の意を評する丈であります。今日この愉快なる會合は私の３年の樂しい留学生活の終りに、もう一つ意味ある思ひ出が加えられたわけであります。一生を通じて忘れられませんと私は確信して居ります。

私はお國へ参りまして、お國の方々と付き合うことが出來、又お國の事情もだんだんと判って來ました。これは私にとって、私の學んだ學問、技術等よりもはるかに價価あるものと思って居ります。而して私はもう直ぐに國に歸らなければなりません。私は甚だ名残惜しく思ふとともに、國に歸って、私の知って居る日本を出来る丈故國の青年達に傳へ、中日の本當の提携は先づ次の時代を背負ふ兩國の青年達が互いに相知る事が一番重要だと思ひ、この方面に微力を尽くす機會が興へられる事を考へて、また甚だ愉快にも感じます。私は間もなく皆様とお別れしますが、またいずれ何時か出會う機会が屹度あると思ひます。更に望みますのは大東亜建設の成功による全東亜民族共和の樂しさを今から想像して居る者であります。

終わりに臨み皆様の御健康を祈り上げ、今日ご多忙の事を態々（わざわざ）御出で下すった事を心から感謝申し上げます。私の所感の一端を述べて私の御挨拶と致します。



御別れの挨拶

送別バトミントン會にて

汪國華

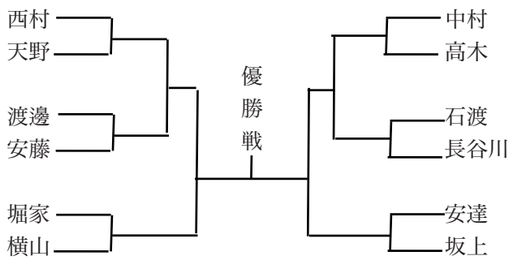
今日皆様の御親切により、送別のバトミントン會をお開き下さいまして、私は今日愉快の餘りに、何を申上げてよいか判りません。たゞこゝに皆様の御親切に對し感謝の意を表する丈けであります。今日この愉快なる會合は私の三年の樂しい留學生活の終りに、も一つ意味ある思ひ出が加へられたわけであります。一生を通じて忘れられませんと私は確信して居ります。

私はお國へ參りまして、お國の方々とつきあふ事が出來、又お國の事情もだん〳〵と判つて來ました、とれは私にとつて、私の學んだ學問、技術等よりも遙かに價値あるものと思つて居ります。而して私はもうすぐに國に歸らければなりません。私は甚だ名殘惜しく思ふと共に、國に歸つて、私の知つて居る日本を出來る丈け故國の青年達に傳へ、中日の本當の提携は先づ次の時代を背負ふ兩國の青年達が互に相知る事が一番重要だと思ひ、この方面に微力を盡す機會が與へられる事を考へて、又甚だ愉快にも感じます。私は間もなく皆様とお別れしますが、又いづれ何時かで會ふ機會が屹度あると思ひます。更に望みますのは大東亞建設の成功による全東亞民族協和の樂しい日が一日も早く來る事で、私はその時の樂しさを今から想像して居る者であります。

終りに臨み、病様の御健康を祈り上げ、今日御多忙の處を、態々御出で下すつた事を心から感謝申上げます。私の所感の一端を述べて、私の御挨拶と致します。（一〇・三）

汪國華御別れの挨拶　慶応義塾大学バドミントン所蔵資料

1939　昭和 14 年　3 月　**神戸青年 3 号 P.13、體育部便り:第４回會員オープンバドミントン 大會トーナメント（ハンディキャップシステム）報告に併せて、プレー中の写真を掲載**



バドミントンの持つ實際的の興味とゲームのテクニックが漸く練習諸兄姉「身體的條件」とぴったりとする程最近の技術は純理化されて、好練習試合の数々がコート上に展開される。第 1 回オープン試合の昭和 12 年度秋期のメムバーを回顧すれば強豪高木既に退き渡辺亦遠く北支の地にあり、當時の優勝者ナンポリア亦故國印度に旅立って昔日のメムバーはなくとも新興気鋭に満てる勃々(ぼつぼつ)闘志寄宿舎組の西村天野組、テクニックの渡邊と長身を唯一の武器の安藤組、スタッフ組の石渡長谷川組、更に足立坂上組に配するに中村、高木、堀家、横山組等々 ETC ‥‥神戸 YMCA のバドミントンは順調に生長しつつある。

最近トーナメントの組別は次の如く發表された。

破損せる肉體を有する者の知識は柄なき劔の如し（ピーチャー）

1939　昭和 14 年　**神戸青年４号（昭和 14 年） P.15 に會員体育事案が表示されており、 特に新設事業として二つのバドミントン行事が案内されている。**

1) バドミントン選手権大会（担当責任者石渡）
2) YMCA 東西対抗バドミントン試合（担当責任者石渡）
3) 神戸、大阪 YMCA 對抗バドミントン試合（担当責任者石渡）

他に、會員体育事業として第５回會員オープン・バドミントン大会（日時：10 月 9・10 日の両日、トーナメント法、シングルス及びダブルス
参加費；1 人 20 銭）。

1939　昭和 14 年　7 月　**横浜 YMCA、バドミントン・クラブを結成**

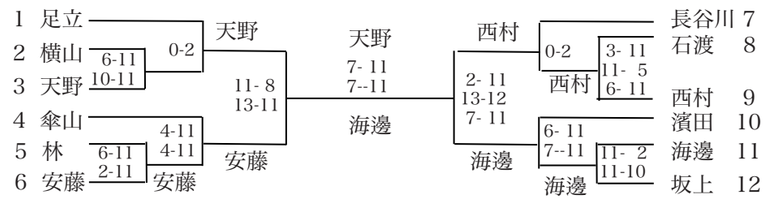
慶應義塾大学、兵藤昌彦、佐藤保（北海中出身：横浜 YMCA より松本東部 50 部隊へ学徒出陣）、山本孝二（大阪北野中）、仲地幹雄（横浜市内在住、のちに加賀に改姓）、寿祝嵩（満州国）らが参加。佐藤（保）、山本、寿は横浜 YMCA アパートに入居したのが機縁でバドミントン ・クラブに入会.

1939　昭和 14 年　10 月　**神戸青年８号（昭和 14 年） P.8、秋の特別プログラム（豫定）を案内**

新興ゲームバドミントン競技大會（10 月 11 日）
東西對抗バドミントン競技會（10 月 28,29 日）
第 5 回會員オープン・バドミントン大会（トーナメント式）（日時；10 月 9・10 両日、トーナメント法、シングルス及びダブルス、
参加費；1 人 20 銭、等の案内を掲載

1939　昭和 14 年　**神戸青年９号（昭和 14 年）P.10、第５回會員オープンバドミントン大会**

去る 10 月 9 日より四日間に渉りシングルスの大會が行われた。古豪と新人が入り亂れて熱戦を演じ見ごたへのある試合が各所に見られた。前優勝者石渡主事は西村君と三セット ゲームを行い惜しくも敗れ；天野君は横山、足立、安藤君を破り順調に決勝へ！　海邊君は濱田、坂上、西村君と対戦の結果決勝！　決勝は接戦の末海邊君が覇をとなえた。海邊君はこれで２回目の優勝者となった。成績は次の如し



1939 昭和 14 年　**11 月　神戸青年 10 号（昭和 14 年）P.11、第 4 回神戸市開館記念日**

室内厚生體育運動大会プログラムの予告

11 月 25 日（土曜日）午後 1 時開始　演技種目

バドミントン（単）	1.00	YMCA（紅組）｜YMCA（白組）
バドミントン（複）	2.00	（紅　　組）｜（白　　組）
バドミントン（単）	6.00	Y・バドクラブ｜Y・バドクラブ

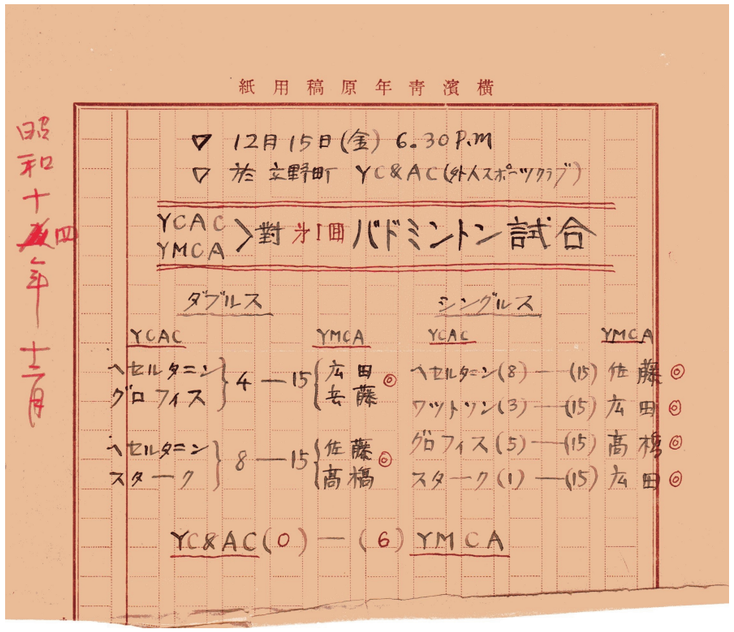
11 月 26 日（日曜日）午後 0 時開始　演技種目

バドミントン	2.00	Y・スタッフ　｜Y・バドクラブ
バドミントン	5.00	神戸 YMCA　｜KRAC

1939 昭和 14 年　12 月 15 日（金）第 1 回 YC&AC(神戸外人スポーツクラブ)對横浜 YMCA
バドミントン試合 ：於　立野町 YCAC（横濱外人スポーツクラブ）

ダブルス				シングルス		
YCAC			YMCA	YCAC		YMCA
ヘセルタニン	4 － 15		廣田	ヘセルタニン	(8 － 15)	佐藤
グロフィス			兵藤	ワットソン	(3 － 15)	廣田
ヘセルタニン	8 － 15		佐藤	グロフィス	(5 － 15)	高橋
スターク			高橋	スターク	(1 － 15)	廣田

YC&AC (0) － YMCA (6)



慶応義塾大学バドミントン部所蔵の記録資料

1940 昭和 15 年　**神戸青年 6 号 P.14、體育部便り　バドミントン東西兩覇者決戦**

横浜 YMCA バドミントンクラブ関西へ遠征。
来たる 7 月 14 日午後 1 時より神戸バドミントンクラブは、強豪横濱のオールスタッフを迎えて 3 ダブルス、4 シングルス の試合を擧行、乞御声援。＜この記録は次の佐藤保の『鳥球關西遠征記』で知ることができる＞

1940 昭和 15 年 **7 月 25 日（(金)第 2 回神戸 YMCA 對横浜 YMCA 戦：0 對 7 で大勝す**

佐藤保『鳥球關西遠征記』「此の佐藤君は当時慶応のナンバーワン（横浜 YMCA アパートに宿泊)、YMCA のキャプテンをして貰った。第 1 回関西遠征、大阪並に神戸 YMCA との試合」(バドミントンが鳥球に変わっているのに注目)

散策した名所

楠木正成に由来する湊川神社

楠木正成は当時教科書にも載る時代のヒローだった

日本鳥球界の先駆的存在たる横浜 Y 鳥球部對神戸定期鳥球試合（第 2 回）は 7 月 25 日午後 6 時より神戸 Y にて開かれた。當日先着の私は廣田主事、安井、兵藤の諸氏と三ノ宮で落会ひ、會館で少憩の後神戸 Y 體育主事石渡氏の案内で餘裕綽々元町を散歩したが物資の豊富なのに皆目を皿にした。暑い日で自然と冷房装置のデパートに吸収され、最初に大丸を上から下迄観て廻り、次に三越に行き神戸 Y 側の心からなる饗応を受けた。聞く処に依ると本城主事の特別の計らいにより最上級の御馳走であったさうで氏に深甚なる感謝を捧げたい。會は石渡主事の歓迎の辭に始まり、横浜對神戸の親睦舌戦が和気藹々の中に続いた。神戸側が“試合迄何處か歩いて大いに疲れていらっしゃい”と云えば横浜側は“いや暑いから冷房映画館へでも行って充分休養しますよ”と巧みに応酬、廣田氏の謝辞に閉會し、後は自由行動となり午後 5 時神戸 Y へ集合した。途中湊川神社を参拝其後の我々の足跡は興味深いが省略しよう。さて定刻より 30 分遅れて午後 6 時半中等器械体操競技に引き続き、横浜神戸兩軍は再びコート上にて見えた。先ず國民儀禮の後廣田主事よりペナントの贈呈あり、最初の出場者として安井氏期待の裡に出場し、此処に競技の火蓋が切って落とされた。以下は輝かしき勝利の記録である。

横浜（7）　(0) 神戸

シングルス　横浜軍（4）　(0) 神戸軍

◎安　井	2 (11-3　11-2)○	長谷川
◎廣　田	2(11- 2　11-2)○	菅　沼
◎山　本	2(11- 3　11-3)○	石　渡
◎佐　藤	2(11- 7　11-1)○	安　藤

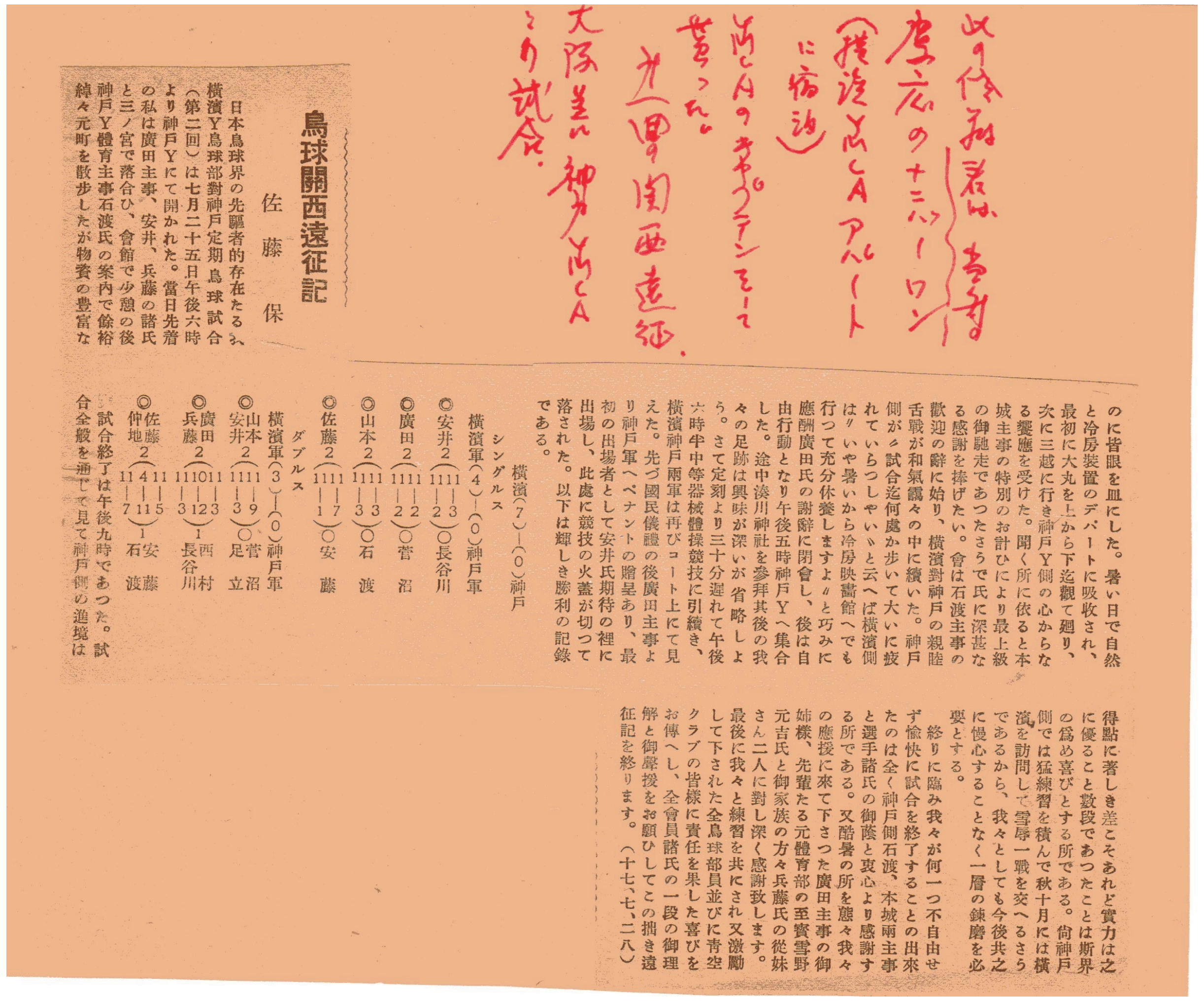
ダブルス　横浜軍（3）　(0) 神戸軍

◎山本 安井	2(11-9　11-3)○	菅沼 足立
◎廣田 兵藤	2(11-3 10-12 11-3)1	西村 長谷川
◎佐藤 仲地	2(11-5 10-12 11-7)1	安藤 石渡

試合終了は午後 9 時であった。試合全般を通じて見て神戸側の状況は得點に著しき差こそあれど實力は之に優ること數段あったことは棋界の爲め喜びとする所である。尚神戸側ではもう練習を積んで秋 10 月には横浜を訪問して雪辱一戦を交へるさうであるから、我々としても今後共之に慢心することなく一層の練磨を必要とする。

終わりに臨み我々何一つ不自由得ずに愉快に試合を終了することの出来たのは全く神戸側石渡、本城両主事と選手諸氏のお陰と衷心より感謝する

処である。又酷暑の所を態々（わざわざ）我々の應援に来て下さった廣田主事の御姉様、先輩たる元體育部の至寶雪野元吉氏と御家族の方々、兵藤氏の従妹さん二人に對し深く感謝致します。最後に我々と練習を共にされ又激励して下された鳥球部員並びに青空クラブの皆様に責任を果たした喜びをお傳へし、全會員の一段の御理解と御聲援をお願ひして此拙き遠征記を終わります。



鳥球關西遠征記

佐藤　保

日本鳥球界の先驅者的存在たる、横濱Y鳥球部對神戸定期鳥球試合（第二回）は七月二十五日午後六時より神戸Yにて開かれた。當日先着の私は廣田主事、安井、兵藤の諸氏と三ノ宮で落合ひ、會館で少憩の後神戸Y體育主事石渡氏の案内で餘裕綽々元町を散歩したが物資の豊富なのに皆眼を皿にした。暑い日で自然と冷房装置のデパートに吸收され、最初に大丸を上から下迄觀て廻り、次に三越に行き神戸Y側の心からなる饗應を受けた。聞く所に依ると本城主事の特別のお計ひにより最上級の御馳走であつたさうで氏に深甚なる感謝を捧げたい。會は石渡主事の歡迎の辭に始り、横濱對神戸の親睦舌戰が和氣靄々の中に續いた。神戸側が〃試合迄何處か歩いて大いに疲れていらつしやい〃と云へば横濱側は〃いや暑いから冷房映畫館へでも行つて充分休養しますよ〃と巧みに應酬廣田氏の謝辭に閉會し、後は自由行動となり午後五時神戸Yへ集合した。途中湊川神社を參拜其後の我々の足跡は興味が深いが省略しよう。さて定刻より三十分遲れて午後六時半中等器械體操競技に引續き、横濱神戸兩軍は再びコート上にて見えた。先づ國民儀禮の後廣田主事より神戸軍へペナントの贈呈あり、最初の出場者として安井氏期待の裡に出場し、此處に競技の火蓋が切つて落された。以下は輝しき勝利の記録である。

横濱（7）—（0）神戸

シングルス

横濱軍（4）—（0）神戸軍

◎安井 2（11—2　11—3）○長谷川

◎廣田 2（11—2　11—2）○菅沼

◎山本 2（11—3　11—3）○石渡

◎佐藤 2（11—1　11—7）○安藤

ダブルス

横濱軍（3）—（0）神戸軍

◎山本・安井 2（11—3　11—9）○菅沼・足立

◎廣田・兵藤 2（11—3　10—12　11—3）1 西村・長谷川

◎佐藤・仲地 2（11—7　4—11　11—5）1 安藤・石渡

試合終了は午後九時であつた。試合全般を通して見て神戸側の進境は得點に著しき差こそあれど實力は之に優ること數段であつたことは斯界の爲め喜びとする所である。尚神戸側では猛練習を積んで秋十月には横濱を訪問して雪辱一戰を交へるさうであるから、我々としても今後共之に慢心することなく一層の錬磨を必要とする。

終りに臨み我々が何一つ不自由せず愉快に試合を終了することの出來たのは全く神戸側石渡、本城兩主事と選手諸氏の御蔭と衷心より感謝する所である。又酷暑の所を態々我々の應援に來て下さつた廣田主事の御姉様、先輩たる元體育部の至寶雪野元吉氏と御家族の方々兵藤氏の從妹さん二人に對し深く感謝致します。最後に我々と練習を共にされ又激勵して下された全鳥球部員並びに青空クラブの皆様に責任を果した喜びをお傳へし、全會員諸氏の一段の御理解と御聲援をお願ひしてこの拙き遠征記を終ります。（十七、七、二八）

慶応義塾大学バドミントン部所蔵の記録とその報告記事

1940　昭和 15 年　　**秋田杯争奪戦で佐藤保優勝**

初優勝の秋田杯（YMCA に貢献した秋田氏贈呈の）を手にする佐藤保（慶応義塾大学バドミントン部主将）

佐藤保（昭和 19 年卒）：昭和 14 年両親から離れ北海中學から慶應に進学・・横浜 YMCA アパートに入居。大きな感化を受けた山本孝二（大阪北野中）、寿祝嵩（満洲国）も同居、初めてバドミントン に出会う。昭和 18 年 12 月学徒出陣で松本東部 50 部隊へ入隊。学生服を着て撮ったこの写真を両親に送ったと、手記の中にある（義塾『五十年史』「初優勝など思いつくままに」）

こうした流れの中で、本誌 p.64 に紹介した **1940 昭和 15 年 5 月 15 日** の**神奈川県バドミントン協会設立：我国初のバドミントン地方協会である“神奈川県バドミントン協会として設立された旨”の記された書類１枚が書上げられたのである。なかなか難しいが、ここから私達は、必要な事項だけを読み取らなければならないのだろう。とにかく“協會はできた：参加加盟チームもある”。この後我国の歴史はこうした小さな出来事と関わりなく、さらに国毎不可解なままに変転して、有史以来の大きな惨事を経験していくことになる。**

『日本スポーツ百年』、日本体育協会編、和歌山新報者、1970(昭和 42)年

▽『日本スポーツ百年』「バドミントンの歴史」（pp.535-539）

本書によれば、「間も無く広田氏の尽力により横浜 YMCA が中心となり古河電気、コロムビア、ナルトスポーツなどの四つのチームにより**神奈川県バドミントン協会**がいち早く組織されて、会長に秦孝次郎、理事長に広田氏が押され、ゲームはまだ県内だけのものであったが、各種の大会も開始された。とにかくわが国における公的にして最初のバドミントン協会であり、又戦前におけるただ一つの協会でもあったのである」とされていることと北海道協会が結成され組織機構ができなければ北海道協会の理事長も存在しない筈であるにも関わらず神奈川県バドミントン協会の委員会に参加するという）時間的経緯の齟齬がどうしても合わいのだ。この委員会議事録が何故・何処で作成されたのか、どうしても“その理事長参加”の記載の謎が残る。

▽ 因みに**北海道バドミントン協会創立 40 周年記念誌『北海道シャトルの軌跡』1988（昭和 31）年５月刊**によれば、同協会の設立は昭和 21 年札幌バドミントンクラブ設立、翌年函館地区バドミントン協会創立、昭和 22 年札幌バドミントン協会設立、昭和 23 年札幌バドミントン協会が北海道バドミントン協会の名前で北海道体育協会への加盟申請を経て日本バドミントン協会に加盟した、と年代を追った時系列が記るされている。この加盟申請時の会長は西野金助、理事長阿部厚雄であり、佐藤保は協会発足直後の昭和 23 年に北海道バドミントン協会の初代理事長として選任されているのである。

『北海道シャトルの軌跡』創立 45 年記念誌、1988（昭和 63）年

そこで、ここでは『日本スポーツ百年』pp.535-537 と『北海道シャトルの軌跡』p.31 との間にある齟齬について注目しておきたいが、消して拉致の開く事はないだろう。そこで時代を飛躍するために、『北海道シャトルの軌跡』（1988 年５月）を引用したのを機会に、ここで同誌に記された昭和のこの時期の歴史の変転を廣田の下でバドミントンを習得していった佐藤保の手記の内容を通して見て置きたい：

佐藤保著『若き日の思い出の一コマ：私とバドミントン』（『北海道シャトルの軌跡』1988 年５月）（この手記の書かれた 1991 年時点での佐藤保は、北海道バドミントン協会参与、元理事長であった）。

光陰矢の如しというが、私の若き日の思い出は今から約 40 年前の昭和 13 年(1938 年)にさかのぼる。それは慶應義塾大学入学による学生生活のため初めて両親の膝下を離れて横浜基督教青年會（YMCA）のアパートに入居した年であった。当時はすでに支那事変も始まっており、我陸海軍は連戦連勝ながら抜き差しならぬ泥沼にはまりつつあった

佐藤保　札幌市主催の第１回市民バドミントン大会のシングルスで優勝した時の佐藤保選手：場所は市立一高。出典：『北海道シャトルの奇跡；創立 40 周年記念誌』1988.5

※ **東京空襲**；太平洋戦争末期、アメリカ軍によって行われた、東京都区部に対する焼夷爆弾を用いた 60 回に及ぶ大規模な戦略爆撃。1944 年 11 月 24 日に始まり、確認された遺体数は約 105400 人に及ぶ。銃撃による死者も多数いる。

※※**小泉　信三**　1888（明治 21）-1966（昭和 41）年、慶應義塾長、東宮御教育常時参与、横浜正金銀行支配人を歴任した。　**「練習は不可能を可能にする」**

空爆による大火傷を超えて
慶應義塾塾長を務めた小泉信三

し、**米英仏蘭の四カ国との関係も悪化の一途をたどっておる時代であった。従って学生生活といっても、学問より軍事教練や勤労奉仕が正課のようなものであった。**このような世情の中でも YMCA では文化・体育活動を通じてモットーである「スピリット・マインド・ボデー」実践のためサラリーマン・学生・OL などが活発なサークル活動を続けていた。**しかしながらこの残された最後の自由の場にも、豊かな潤いとともに時局の厳しさが迫っていた。私はたまたま附属アパートに居住していた関係上、これらの活動に気楽に参加することができて、本当に幸せであったと思う。そしてこの５ヶ年の YMCA での生活は私の人生に大きな影響を与えてくれたといっても過言ではないと感謝している。私はもともとスポーツは好きであったので、なんでもやってやろうと体育会に入会し当時としては立派な体育館でおこなわれていたデンマーク体操、フェンシング・バスケット・バレーボール・卓球・バドミントンをやることになった。そのため学生時代を通して今日まで、馬術と弓道を除いて殆どどのスポーツに親しむことができたと思う。これらのスポーツの中でも最も興味を持ったのがバドミントンである。**それは北海道では全く行われていなかったスポーツであったことと、女性の部員が一番多かったからかもしれない。日本古来の羽根つきによく似ており、テニスのラケットを小さくしたようなもので、水鳥の羽根の下にコルクをつけたボールをネットで挟んで撃ち合うスポーツで、インドネシアなどで国技として盛んであると聞かされた。現在では全国的に普及しており、国際試合も行われているので誰でも知っているが、その時は全く驚いた次第であった。先生はデンマークから帰朝していた体育主事の広田兼敏氏で、現在も日本バドミントン界のパイオニアとして活躍しておられる。私は最初は女性のスポーツ程度としか考えていなかったが、実際にやってみると全く認識不足で、身体の動きはスピードを必要とし中々のハードスポーツで、度々コートに這わされる始末であった。そのうちにこのスポーツにすっかり魅せられ連日連夜猛練習に従事するようになり、**東京初空襲の日（※）も続けた。**学問と違い、練習すればするほど目に見えて上達するので、やり甲斐もあった。当時チームを作っていた大阪・神戸 YMCA との遠征試合、東京・横浜の実業団チーム、横浜外人クラブとも試合をし連勝を続けた。これらはジャパンタイムス等にも報道されたので、学生の間でも関心が高まり、学生バドミントンクラブの誕生となり、**発表会には小泉信三塾長※※も出席の上、試技していただいたことは忘れ得ぬ感激であった。**

やがて、戦雲急を告げ学徒出陣の日がきた。出陣式はどしゃ降りの中明治神宮外苑競技場で行われた。スタンドを埋め尽くした女子学生らの別れのハンカチに応えて、私共

1943 年 10 月 21 日神宮外苑で行われた壮行会
送られる学徒　25,000 人
見送る女子学生 50,000 人
この壮行会に出た出陣学生のうち 3,000 人以上が戦死したと言われている。

学徒出陣：1943(昭和 18)年。理工系、教育系を除く学生の徴兵延期処置を撤廃

出陣学徒壮行会

東京 1943.10-21
台北　〃
京城　〃
満州５都市　〃
二世出陣 1944.11-3
大阪 1943.11-14
仙台 1943.11-16
神戸 1943.11-16
名古屋 同 11-19
京都 1943.11-21,22
上海 1943.11-21
札幌 1943.11.28

塾内でも行われた壮行会に参加した塾生－

帰らざる学友の碑（慶應義塾大学）

は皆一段と足を上げ行進したものだった。おかげで顔から身体中どろんこでみられたものではなかったが、何かしら充実した満足感に浸っていた。しかしながら、共に学び、共にスポーツに読書に短い学生生活を送った多くの友人はついに帰ってはこなかった。私と違って後顧の憂いを持って祖国のために散華した彼らとは今でも夢の中で会い、悲しみに涙することがある。昭和 20 年 8 月 15 日戦い敗れ私も翌年悄然として北海道の土を踏んだ。

懐かしい札幌は生き残っていた。北海道のバドミントンは戦後急速に普及した。当時北大に留学していたインドネシアのスロジョー君や学生の西野君を中心として北大体育館で始められた。私もその一員として、戦前の経験を生かして本格的にバドミントン競技をコーチすることになったことは、「人脈北海道スポーツ編」の記載のとおりである。競技団体としての組織もいち早く道新の阿部厚雄氏や、北大の奈良岡教授※らとともに作られ、国体や全日本選手権大会でも多くの名選手 が育ち、一時はバドミントン王国北海道とまで言われたものだった。私も昭和 28 年新潟で行われた全日本選手権大会の優勝と同年度の読売スポーツ賞受賞と共に長い間のバドミントン生活にもピリオドを打つことになった。思えば長い道程ではあったバドミントンと私。辛かったこと、はたまた嬉しかったこと、思い出の一つ一つはこの上もない私の財産である。（終）

【慶応大学が戦争の記録を検証】

自由な校風の慶應義塾。しかし太平洋戦争では約 2200 人もの同窓生が没した。**慶應は戦争とどう向き合ったのか。**学徒出陣から 70 年に当たる 2013 年、慶應義塾は 3 カ年計画で、太平洋戦争時の実相を自己検証をしている：

慶大は「慶應義塾と戦争アーカイブ・プロジェクト」という事業を立ち上げ、証言や資料の発掘作業を進めており、担当する慶應義塾福澤研究センターの都倉武之准教授は、これまでに当時の塾関係者約 30 人から話を聞いた。当時、日本では満 20 歳以上の男子には一定の兵役義務が課せられていたが、大学生などには満 26 歳まで徴兵が猶予されていた。だが、戦局悪化に伴い、1943（昭和 18）年 10 月に徴兵猶予が停止され、理工系、師範系などを除く学徒への召集が始まった。10 月 21 日、東京の明治神宮外苑競技場（先の・国立競技場）で行われた文部省主催の**「出陣学徒壮行会」**は、学徒出陣の大報国行事だった。見送りの学生なども含めて約７万人が参加した模様だが、雨天下で学校ごとに隊列を組み、慶應義塾の大学、予科などからも、かなりの数の出陣学徒が校旗を先頭にずぶぬれの姿で行進した。

「展示会慶應義塾の“昭和 18 年”」の会場で特に目を引いたのは塾長小泉信三氏が、出陣学徒に贈った**「征く諸君への激励文」、それは、「塾生は入営の前日に至るまで学問に遊戯に平日と変わることはなかったと塾史に誇りを持って記されるであろう。」**と記されたものであったという。

「昭和 20 年 8 月 15 日戦い敗れ私も翌年悄然として北海道の地を踏んだ。懐かしい札幌は生き残っていた。」と記した佐藤の北海道での活躍を伝える『道新』に掲載された札幌市主催第 1 回バドミントン競技大会と同単優勝の佐藤保選手

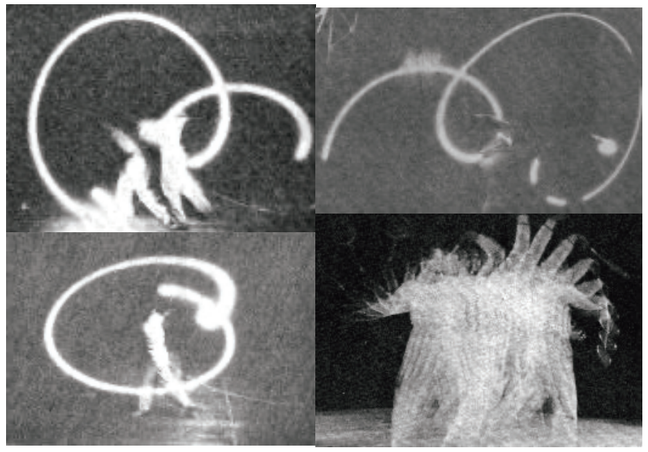
右端の佐藤保と北海道の仲間達、スロジョー君の顔も見える

【佐藤保が「懐かしい札幌は生き残っていた」と再生への思いを新たにした故郷北海道の仲間たち】

日バ結成時活躍の田中壮三郎

奈良岡賢三（北海道大学教授）

北海道にはストロボ撮影によるバドミントンの分析的理解を深めよう等とする北大の奈良岡健三教授や仲間の、阿部厚雄:北海道新聞運動部員、奈良岡の指導する学部生神山周二など、熱心な仲間等がいた。道協会誕生の契機となったのは南方司政官帰りの大場が、彼の地で見たバドミントンの魅力を、阿部・荒島敏幸らと語り合い道新前の大通り広場で、兎に角やってみようということになり、そこに北大生西野・スロージョー両君が合流して、風に吹かれて思うようにシャトルが打てないのを、託(かこ)ちながらバドミントンが芽生えていった。スロージョー氏の母国タイでは 90%の国民がバドミントンをしているという。（『北海道シャトルの軌跡』p.4 より）



※､※※奈良岡・神山の師弟コンビ手製のストロボ器で撮影した各ストロークでの運動軌跡

以上の記述は『日本スポーツ 100 年』PP.535-537 と『北海道シャトルの奇跡』P.31 を史料にしている。さらに敗戦前後の動き等を横浜 YMCA と慶應義塾大学バドミントン部との関係の詳細を同大学体育会バドミントン部誌『慶應義塾体育会バドミントン部 50 周年記念誌：50 年史』（1992 年 7 月発行）等で見ておきたい。

【ここまで、年代を追って第２次大戦前後の我国のバドミントン史を横浜・東京・大阪・神戸 YMCA それに慶應義塾大学におけるバドミントンの活動を中心にその流れを、バドミントン活動に参加した学生らの活動を中心に追ってきた。それらの活動を同大学学生はどのように捉えていたのか、体育会バドミントン部誌『慶應義塾体育会バドミントン部 50 周年記念誌：50 年史』（1992 年 7 月発行）の「座談会」から検討してみる】

「座談会」は 1991（平成 3）年 7 月 20 日（土）六角宅で行われ、加賀幹雄（昭和 19 年度卒業、旧姓仲地）、六角(むすみ)勉らによって同誌に編纂された。

体育会バドミントン部誌『慶應義塾体育会バドミントン部 50 周年記念誌：50 年史』（1992 年 7 月発行）の座談会から検討してみる。

座談会は平成 3 年 7 月（六角宅）に行われた。参加者は；加賀幹雄（S19 卒）、吹野家寿吉（S21 卒）、三橋公夫（S24 卒）、天木王文（S25 卒）、加藤慶郎（S26 卒）、橋本公雄（S26 卒）、司会：六角勉（S24 卒）、他に中村頼人（S31 卒）が参加。 慶應義塾体育会バドミントン部『50 年史』より

塾バドミントン部略年表による

S14 横浜 YMCA にバドミントン部結成
同年 塾生山本孝二・佐藤保が横浜 YMCA で廣田氏の指導でバドミントンを開始、これに仲地幹雄が加わる
S15 山本・仲地の同級生森友甫・諸岡良幸・寿祝嵩が加わる。
同年神奈川県バドミントン協会創立

六角　日本バドミントン協会の 40 年史を見ても YMCA、YCAC の記録、また岩波書店から出ているバドミントンの歴史を見ても、慶応のことなど一切書れていません。書かれているのは広田さん（横浜 YMCA 主事、昭和 28 年卒広田敏英君の父）の極く一部の人に渡した遺稿の中に慶応の人の名前が出てくる程度であり、この 50 周年の機会にはっきりしておかなければなりません。 特に慶応は他の大学と異なり、突如として出来たものではなく、（この年表の通り）佐藤さん、山本さん、加賀さん、諸岡さん、森友さんたちが昭和 14 年頃からやりだし、昭和 17 年に正式の部となり、日本バドミントンの歩みと慶応の部ができたのが本当に一体となってきています。この細部の歴史をはっきり作っておく為にも、加賀さんから昭和 14 年から昭和 17 年頃の部が出来る間のお話をして頂きたいと思います。

加賀　北海道の佐藤君（昭和 19 年卒）が(この座談会に)いると、彼と僕でかなりいろんなことが出てくると思いますが、一応プライベートなことも含めて話します。昭和 14 年入学式の帰り、僕は横浜に住んでいたので、横浜までの電車の中で一緒のクラスの者がおり、話しかけたのが山本（昭和 19 年卒故人）であったこと。どこに住んでいるのか聞いたところ、実は横浜 YMCA の寄宿舎にいる

ということであり、一度遊びに来ないかというので訪ねた。その寄宿舎に佐藤保君（昭和 19 年卒）がいた。最初のうちはバドミントンと何の関係なくYMCA に遊びに行っていた。その頃 YMCA の体育主事であった広田先生（広田君の父）に佐藤と山本と僕と、医学部に行っていた寿さん（満州国＜現中国東北部＞の人）がバドミントンをやらないかと勧められた。

その時すでに兵藤さんとデンマーク体操をやっていた若い人がバドミントンをやっていた。それから毎日の様に YMCA に行ったが、最初の頃は殆ど遊びであり、ただ一緒になりプレーをしていたに過ぎない。僕が本格的に始めたのは昭和 15 年頃と思う。寄宿舎の山本君のところを根城にし、夕食を食べに行き、帰ってきてからバドミントンをやり風呂に入って帰る日課であり、帰宅するのは 10 時であった。

第 1 回神奈川バドミントン大會（吾國最初の大會）と廣田が記している

「皆当時吾々が組織した神奈川県協会員のみ」と添書きがある・慶應義塾體育會バドミントン部 *webarchive* より

その後**昭和 17 年に正式に部を創ることになり**、又吹野君、六角君、橋本君（戦死）が集まった。最初横浜 YMCA でやっていたが、東京の部員が多くなったので広田さんの世話で東京 YMCA と 2 箇所で練習をし、これが慶応バドミントン部の第一歩が標されたこととなる。試合の記憶としては、ナルトと YMCA であり、後に古河（電気）、コロンビアが入ったと思うが、とにかく学生は慶応だけであった。

当時バドミントンは社会的に知られておらず、このラケットで何をやるのですかと聞かれたものです。昭和 14 年頃はラケットは木であったが、昭和 16 頃は竹だった。山本君は後ろの方でジャンピングスマッシュが上手であり、又佐藤君はスキーをやっていたので、運動神経が発達しており、大変上手でした。佐藤が一番強く、山本君僕の順であり、その後森友が入ってきたが森友には勝ったと思う。

六角　吹野さん、入部の経緯を話してください。

吹野　山本さんのいとこの津川君が同級におり、横浜 YMCA にいたのでよく遊びに行った。そこで津川君がバドミントンをやろうというのでやり始めたのです。昭和 15 年頃のことと思いますが、横浜 YMCA でやっていた印象が強いです。その後昭和 18 年に学徒出陣で兵隊に行き終戦で昭和 20 年 9 月に復員したが食べるものがなく、運動部どころではなかった。20 年 10 月に三田に行き学部の

4 年に編入し、21 年 9 月に卒業したが、そんな訳で戦後すぐには部の方には、生活自体が大変だったのであまり関係していなかったです。

六角　昭和 21 年春、僕が第 1 回の練習しようと呼びかけたとき、加賀さんも吹野さんも来てくれていますよね。そのまえに昭和 20 年の秋に三田の山で森友さんに「バドミントンをやりましょうよ。」といった。後で森友さんに「びっくりしたよ」と言われました。

東京、横浜の両 YMCA が米軍に接収されその他の場所は焼けて練習するところがなかった。仕方なく広田さんを訪ねたところ、早速自宅前の平楽小学校を借りて貰うことができました。これが慶応の戦後最初の練習です。**港中学校（横浜 YMCA の体育所）で正式に練習が始まったのは昭和 21 年 6 月であります。**・・・・・

三橋　昭和 20 年暮兵隊から帰ってきて、中学同級生の六角君の生麦の家を訪ねた。そこで六角君から熱心にバドミントンの入部を勧められ、その熱心さに負けました。**横浜 YMCA の体育場である、港中学の体育館**での練習では、ガラスが破れており、風が吹き込んで羽が飛んでしまう状態でした・・・。

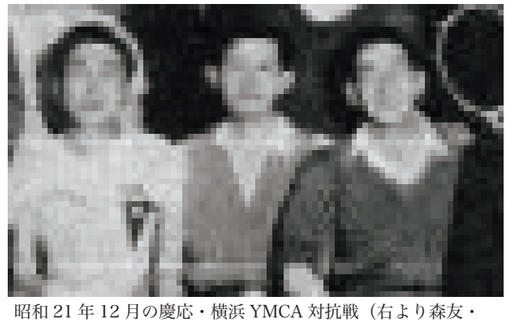
加藤　**昭和 21 年部員募集のポスター**を見て入ったのです。なぜポスターを見て入ったかといいますと、幼稚舎の頃の同級生の家に遊びに行き、そこで初めてバドミントンのラケットを見ました。それはジャワ（インドネシア）に行った人がお土産に買ってきてくれたものだとのことでした。確か昭和 14 年頃のことと記憶しています。誰かにポスターのことで連絡したら横浜 YMCA に行きなさいと言われ、横浜に行き練習しました。そのうち横浜 YMCA が使えなくなり、コート探しをすることになりました。そこで**幼稚舎**に行き借りようと恐る恐る話してみた。何とか借りることができました。最初のうちは体育館に白墨で線を引いてやっていたが、線を引いても良いと許可が出、正規の白線を引くことができました。昭和 24 年頃と思いますが、関東学連のリーグ戦が幼稚舎で行われ、その結果が日刊スポーツに載りました。・・・・・・。

戦後練習場に使用させてもらった慶応義塾大学幼稚園舎（当初は練習の度に白チョークでコートの線を描いていた。）

六角　昭和 21 年、22 年ころ試合が終わると日刊スポーツと毎日新聞に記録を載せてくださいと頼みに行きました。毎日新聞ではバドミントン部を創ろうとしていたので好意的でした。

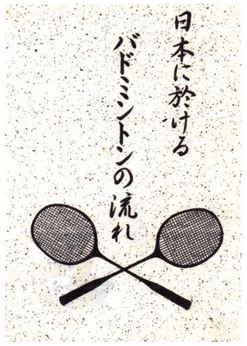
藤井　毎日新聞では**毎日スポーツ**というのを出しており、そこの表紙に（バドミントンの）写真が載った記憶があります。・・・・・・・・。

慶應義塾の戦前の最強メンバー
後列右より佐藤・仲地・山本
前列右より福本・廣田主事・寿



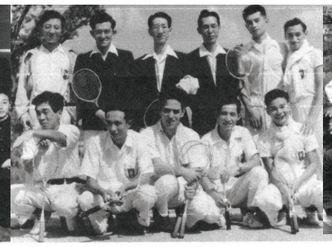
昭和 21 年 12 月の慶応・横浜 YMCA 対抗戦（右より森友・加賀・六角；於横浜 YMCA）、いずれも慶應義塾體育会バドミントン部所蔵

慶応義塾大学のバドミントン愛好者、三田の山上の版来社前広場に小泉信三塾長を招き、体育科事業としてバドミントン を披露



この座談会を企画・記録した六角勉は 2005(平成 17)年 1 月を吉日として、『日本に於けるバドミントンの流れ』と題して次のように呼びかけながら慶應義塾大学バドミントン部に残る歴史資料の整理保存の運動を始める「昭和の初期にバドミントンが日本に紹介されてから、バドミントンに魅せられて、選手として、愛好者として、創生期（註；早生期かバドミントンの普及にご尽力なされた多くの人たちも、八十近い年月を経た今、亡くなられる方たちもすくなくなく、その当時の記録も散逸しています。 その時代にささやかながらもたずさわった私としては、残念な気が致し、なんとか記録に残せないものかと思い、小宮章敬氏の協力を得てこの小冊子にまとめました。 まだまだ欠落している所が多々ありますので、ご覧になった方で、資料をお持ちの方は是非私までご一報のほどお願いいたします。」（下は収集された写真資料の一部）

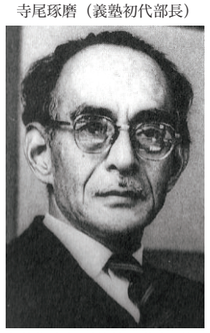
創世記 1


創世記 3

創世記 6

1940 昭和 15 年 4 月 17 日 **寺尾琢磨（慶応義塾大学体育会バドミントン部初代部長）の『日記』**

寺尾琢磨（義塾初代部長）


奥井復太郎（義塾２代部長）森友氏とは在学時からの知己。全日本学生連盟初代会長

部員５名来訪「**報国隊といかなる関係に立つべきかを協議した**」とある。誰でも今でも目に残っているのは、戦争末期の或る日、小泉塾長さんと奥井さん（奥井福太郎第２代部長）を正門脇の幼稚園舎校庭に誘い出し、部員の指導で練習の真似事をやったことで、さすが昔テニス選手として鳴らした小泉先生は部員に褒められて喜色満面、その時の無邪気な笑顔は今でも忘れられない。先生が空襲で無残な姿にかわられたのは、それから間も無くのことであった。

【以下は、同じ『日記』での戦後関東学連結成時の思い出へ繋がるの回顧】

やがて戦争は終わったが、半ば廃墟と化した塾の復興は困難を極めた。部も再建にのり出し、幸いいくつかの大学にいつの間にかバドミントン部が生まれていたので、**確か昭和 22 年だったと思うが、法政、明治、立教と相談して、「関東大学バドミントン連盟」なるものを結成し、会長に私が祭り上げられ、塾の部長さんに奥井さんが就任してくださった**。連盟は毎年春秋２回のリーグ戦を行ったが、さすがに元祖の塾は抜群の強さで、まるで試合にならなかった、会場探しが苦労の種で、焼け残った体育館を求めて都内を転々したものである。だが私の覚えているのは幼稚舎と佐久間小学校だけで、そのほかは思い浮かばない。

神奈川県教育委員会 編『神奈川県体育史』廣田兼敏著「運動競技編：13.バドミントン」PP.265-280、 1956』から昭和 15 年以降の関係記事から以下の 3 点を紹介、検討したい：

①**【昭和 15 年※ 10 月中旬　紀元 2600 年記念神奈川県バドミントン選手権大会】**昭和 15 年度神奈川県バドミントン協会主催リーグ戦が 4 日間にわたり毎夕横浜 YMCA 体育場において開催された。このリーグ戦も春季同様、ほとんど YMCA のワンサイドゲームで終了したが、続いて**紀元 2600 年記念※大会**を、11 月 14 日から 3 日間、YMCA コートで開催。下記の各選手が選手権を獲得した。

※ 紀元 2600 年：昭和 15 年。神武天皇即位紀元（皇記）を祝った一連の行事、神道の海外進出が促進される。皮肉にも諸行事が終わると「祝ひ終わったさあ働こう！』の標語が生まれ、国民生活が厳しさを増していく

単‥‥1 位　佐藤　保（YMCA）　　複‥‥1 位　佐藤・仲地組（YMCA）
　　2 位　壽　　（YMCA）　　2 位　山本・壽　組（YMCA）
　　3 位　福本　渉（YMCA）　　3 位　福本・兼松組（YMCA）

②**【昭和 16・7 年頃の事ども】**（県）協会が組織されて既に 3 年経過したが、この年も加盟チームは依然として前記の 4 チームと、YC & AC が存在するのみであった。この間、あらゆる機会を通じて普及宣伝を図ったのだが、新興スポーツを広く普及することが如何に困難な事であるかをみにしみて感じさせられた。これには種々の原因があったが、まだ一般人がこのゲームに精進していないこと、学校教育に取り入れられていないこと、ラインを描いたバドミントンの正規のコートが、YMCA 並びに YC&AC の他にはほとんどなかったことが主たる原因であったようである。協会は機会ある毎に懸命に宣伝につとめたが、その割合に反響がなく、普及は遅々として進まなかった。

③**【上海への遠征計画※※】** これより数年前に、華僑人のプレーヤー、**ビル・ファンク**によって、シンガポールから香港に、そして香港より上海へ北上したバドミントン熱はすこぶる隆盛を極め、当時上海に在住の日本人間にもこのゲームが伝わり、**16 年 9 月 30 日付で日本人愛好者によるバドミントン協会の結成**が当時の新聞に報道された。また、役員名簿、行事等の案内を受けたので、横濱 YMCA は好相（敵）手現わるとばかり勇躍上海遠征を計画、その準備を進めたが、国際情勢の急激な変化は、折角の計画を交渉の一歩手前で中止の止むなきに至らせたのは寂しくも残念であった（この文節が一人称で書かれていることから、廣田自身が資料提供者であるばかりでなく、執筆者自身であったことがわかる）。

※※ この項を資料より抜粋したのは、この数年後の終戦の後に日本バドミントン協会が設立されるに際して、上海でのバドミントン経験者が中心になって、その事業を押し進めることになるので、日本のバドミントンの歴史的展開と上海のバドミントとの関係を示す稀有な情報として、ここに拾っておいた。それにしてもビル・ファンクの情報が欲しい。

1941　昭和 16 年

神戸青年（ほぼ 1 月号の意味）1 号（バドミントン）（昭和 16 年）P.13. 體育部

第４回 鳥 球※リーグ戦績（※戦時下、敵性言語の使用禁止が始まっている）
月餘に亙って擧行された秋季大リーグ戦も幾多の波瀾を残し乍ら左（下）の 戦蹟で 優勝カップは海邊君の獲得するところとなった

１位９勝０敗　海邊　２位８勝１敗　西村　３位７勝２敗　安藤
４位６勝３敗　石渡　５位５勝４敗　坂上　６位４勝５敗　長谷川
７位３勝７敗　足立　８位２勝７敗　高田　９位１勝８敗　寺石
10 位 全　　敗　楠瀬

神戸青年４号（昭和 16 年）P.14. 第３章 體育部体育科事業

５個の報告事業項目のうちの１、２に、以下のことが記されている：

1. 體育科の會員事業 6.にバドミントンクラブ（石渡、海邊、安藤）参加延人数 1,500
2. 厚生科事業　鳥球委員会（西村、石渡、海邊、安藤）参加延人数 27 が報告されている

ー 以上、神戸 YMCA 発行の『神戸青年』の関係資料は斎藤健司（当時神

戸大、現筑波大教授） の協力による収集 ーこれ以後の同誌からのバドミントン関連記事を採取することはできなかった。

鳥球（バドミントン）クラブ親睦会（神戸 YMCA）

12 月 7 日會議室にて鳥球クラブ總動員全出席の盛況にて厚生すき焼き會を催す。意義深く思ひ出多き一夜なり。
出席者；西村、安藤、小川、坂上、寺石、海邊、長谷川、足立、石渡

1941 昭和 16 年 **４月 慶応義塾大学のバドミントン愛好者、三田の山上の万来舎前広場に小泉信三塾長を招き、体育科事業としてバドミントンを披露**

1941 昭和 16 年 **６月 23 日付**（葉書） **横浜 YMCA「春のバドミントン大会開催の急告」**

YMCA 體育部（葉書による廣田資料）：慶應義塾大学バドミントン部所蔵
「急告 かねてご案内いたしておきました通り、YMCA 会員のためのバドミントン 大會（紅白試合）を 24 日（水）25 日（木）の両夕 6 時より体育館で開催します。従って前記両夕の籠球並に卓球、フェンシング、バドミントンの各クラスは休みになりますから左様御諒承ください。 バドミントン紅白試合には体育部員に限らず、YM の会員は誰人でも参加できます（会費不用、6 時までに出席のこと）から奮って御参加下さい。右念のため重ねて御案内旁々御通知申し上げます。 6 月 23 日
YMCA 体育部部員各位 二信 （以下省略）』

６月 横濱 YMCA、ナルトスポーツ・コロンビア・古川電線の４チームによるリーグ戦始まる(本邦初ではないかとしている)：兵藤・山本・仲地・寿が活躍（『慶應義塾體育会バドミントン部所蔵資料』より）

７月３・４日 横濱 YMCA：戦前最後の選手権大会

例年ならば秋季に開くべき選手権大会を、戰爭中の種々の都合からこの年は 7 月 3・4 両日 YMCA 体育場で開催した。参加者の大半が YMCA メンバーで、他は外人クラブその他の団体から 15 名くらいで、全員約 50 名近くであった。

７月 横浜 YMCA: 関西に遠征；慶應の廣田・福本（YMCA）・兵藤・佐藤・山本・仲地・寿も参加（慶應義塾體育会バドミントン部所蔵資料より）

7 月 13 日 対 大阪 YMCA（詳細な記録は不明）
7 月 14 日 対 神戸 YMCA（ 〃 ）

11 月 14・18・21 日 横浜 YMCA:紀元 2600 年記念全神奈川選手権大會開催

シングルス 優勝 佐藤 2 位 寿
ダブルス 優勝 佐藤・仲地組 2 位 山本・寿組

1941 昭和 16 年 **12 月８日 日本軍真珠湾を攻撃 太平洋戦争（Pacific War：第２次世界大戦 の一局面で対日本との戦争を米国・連合国から見た呼称)）始まる。**

第 12 回オリンピック競技会、第２次世界大戦のため中止となる
太平洋戦争の開始により日本 YMCA 同盟は世界 YMCA 同盟との関係を断つ

開戦後も日本国内は、戦時体制が日増しに強化されていく中でも、暫くは従来の生活慣行が縮小されながらも一部は継続されている部分もあった。

1942 昭和 17 年 **慶応義塾大学バドミントン倶楽部として初の新入生募集を行う**

1942 昭和 17 年 ２月８日 **タイ国学生軍対横濱 YMCA 親善試合** 【出典：神奈川県教育委員会編『神奈川県体育史』「運動競技編：13.バドミントン」pp.265-280、1956.】

バドミントンをお家芸にしている東京在住のタイ国留学生チームから、親善試合の申し込みがあったので絶好のチャンスとばかり、横濱 YMCA の體育館で対戦した。YMCA は単において 4 対 2 とリードしたが、複において思わぬ不調を招き 3 試合とも 3 セットという大接戦の末、5 対 4 で惜敗した。この試合で彼らのごく自然なローテーションを学び、以後これらの前程としてサイドバイサイド・ダイアゴナル・トップアンドバック等のスムースなダブルス戦法の研究に心がけたことは何より貴重な収穫であった。
(写真は『慶應義塾體育会バドミントン部所蔵資料』※)

日泰親善バドミントン試合 昭和 17 年 2 月 8 日（日）於横浜 YMCA

横浜 YMCA		泰国（Thai land）
シングルス		
仲地	0(4 － 11、6 － 11)2	ピモン
安井	1(11 － 4、4 － 11、8 － 11)2	カラチャン
寿	2(11)－ 1、11 － 1)0	ウイナット
廣田	2(11 － 5、11 － 6)0	ピモン
山本	2(11 － 1、11 － 6)0)	プラサット
佐藤	2(11 － 3、8 － 11、11 － 3)1	カラチャン
ダブルス		
安井・廣田	1(11 － 7、7 － 11、4 － 11)2	カラチャン・ウイナット
佐藤・仲地	1(11 － 6、9 － 11、5 － 11)2	ウィナット・ピモン
山本・寿	1(11 － 7、8 － 11、7 － 11)2	カラチャン・プラサット

横浜 YMCA は仲地、安井の新人を加へ、十分の勝算を以って対戦したが、期待していた山本、寿組の不調とシングルスで楽勝したが、ダブルスは何れも接戦の末、5 対 4 で敗れる。試合終了後フルーツパーラーにて親睦晩餐会を開き、泰国名誉領事より優勝記念品寄贈。横浜 YMCA より記念品を贈呈。

※ 廣田はこの大会を日本最初の国際試合だと位置付けている。
確認する原資料は入手できなかったが書き込み等から慶應義塾大バドミントン部所蔵文献の信憑性を優先させて昭和 17 年とした。

【昭和 16 年度の記録であるが日時を特定できなかったもの】

横浜 YMCA「第 1 回バドミントン講習会」を開催する(横 565)

横 565:: 大和久泰太郎著『横浜 YMCA 百年史』横浜キリスト教青年会、1984, P.565.

神戸 YMCA において横浜 YMCA との「第 2 回東西対抗鳥球戦（バドミントン）」を開催（神青 42-7）詳細な記録の紹介なし

『YMCA 年表』の著者；安村正和、日本体育専門学校を卒業、東京 YMCA 体育館でボランティアリーダーとして柳田主事の助手を務める。(安資)

神戸青年４号（昭和 16 年）P.14. 第３章 體育部体育科事業

事業項目５個のうちの１・２項に以下のことが記されている：

1. 體育科の會員事業 6.にバドミントンクラブ（石渡、海邊、安藤）参加
   延人数 1,500 ＜数字が大きすぎるのだが＞
2. 厚生科事業 鳥球委員会（西村、石渡、海邊、安藤） 参加延人数 27 が報告されている。

東京 YMCA「バドミントン」を始める（東体 56※）※※

「安村正和（南京都学園、元 YMCA 職員）著『YMCA 年表：体育事業を中心に;1842 年～1990 年』に、出典を“東体 56“とする昭和 16 年の事案；**東京 YMCA「バドミントン」を始める（東体 56※）」**がある。この**（東体 56※）**を特定できなかった。「安村正和（南京都学園、元 YMCA 職員）著『YMCA 年表：体育事業を中心に 1842 年～1990 年』の【引用・参考文献・資料等略語表】を見ても（**東体 56**）はなく、“東青”なら『東京青年』、“東別”ならば『別冊東京青年』がそれに近い。しかし、他の案件と勘案すると、慶應義塾大学体育会のバドミントン部が廣田兼敏や柳田享の配慮で東京での活動が実現していく。

当座、日本の国内では従来の戦前の生活慣行が暫くではあるが縮小気味の気分の中で継続され、元々小さかったバドミントンの活動も継続されて行った。

1942 昭和 17 年 **４月 26 日 慶応バドミントン倶楽部最初の対外試合：慶応対横濱 YMCA、於：横浜 YMCA**

1941 昭和 17 年 **６月 18 日 横濱 YMCA：第１回バドミントン講習会を開催**する【出典：神奈川県教育委員会 編『神奈川県体育史』「運動競技編：13.神奈川県バドミントン協会」pp.291-295,1956 年.**「第１回バドミントン講習会」**

第 1 回バドミントン講習会が横浜 YMCA で行われた。新人の要求を入れ、その普及を兼ねて表記講習会を昭和 17 年 6 月 18 日の夕、YMCA 体育場で開いた。まず規則の説明と研究、バドミントンの一般的プレイと戦法及び実演等に組織だった講習で、参加者約 30 名が廣田講師の指導で練習を続行(おこな)けた。これが、バドミントン競技の最初の講習会であった。(要；検討)

1942 昭和 17 年 **７月４日 慶應義塾大学バドミントン部 泰留日学生對慶応、東京大東亜(現在の東京 YMCA)体育館**

10 月 慶應義塾大学バドミントンクラブ、東京 YMCA で創立総会を開き創部

部長寺尾琢磨、主将山本孝二を決める。

第２回全神奈川バドミントン選手権大會(開催期日特定できず)

横浜 YMCA 體育場に於て開會、YMCA 軍善戦して全種目に優勝す

試合成績次の如し.: **慶應義塾バドミントン部資料による**

男子シングルス

1 回戦	山本	2（11-0、11-6）0	ペテロフ
	J.アガジャン	2（11-1、6-11、11-3）1	仲地
	佐藤	2（11-3、11-3）0	エドワード
	壽	2（11-3、11-6）0	ブリックス
2 回戦	山本	2（11-8、11-9）0	J.アガジャン
	佐藤	2（11-4、11-3）0	壽
決勝戦	佐藤	2（11-0、11-8）0	山本

女子シングルス

1 回戦	エマール	2（11-1、11-0）0	中村
2 回戦	エマール	2（11-0、11-7）0	赤山
	池端	2（12-10、11-1）0	プロハスカ
決勝戦	池端	2（11-5、4-11、11-6）0	エマール

男子ダブルス

1 回戦	山本・壽	2（11-0、 11-1）0	J.アガジャン・ワイス
	仲地・佐藤	2（11-5、 11-5）0	ブリックス・エドワード
2 回戦	山本・壽	2（11-0、11-3）0	J.アガジャン・ハリス
決勝戦	仲地・佐藤	2（11-4、11-8）0	山本・壽

ミックスダブルス

1 回戦	ペテロフ・A.エマール	2（11-1、11-7）0	安井・池端
	ハリス・エマール	2（11-5、11-5）0	兵藤・赤山
2 回戦	廣田・中村	2（11-4、11-13、11-8）	ペテロフ・A.エマール
	ハリス・エマール	2（3-11、12-11、11-5）1	ワイス・マリア
決勝戦	廣田・中村	2（11-3、11-8）0	ハリス・エマール

【評】・男子單は定評通り佐藤君の独り舞臺で決勝にセットオール戦の望みをかけた山本君１セットを軽く奪われて本調子を回復せぬ裡に２セットを終る。
女子單は新人の中村孃は別として、赤山、池端兩孃の活躍に期待したが、試合勘に缺けた戰法はエマール・プロハスカ孃の一本調子に乘ぜられ、思はぬ苦戰を展開、赤山孃先づ封じられ、池端孃辛うじて勝残ったが、小憩後作戰を新にして臨んだ決勝戰は逆にリードを奪って優勝。男子複は優勝すべき筈の山本 - 壽組は平常の成績を十分発揮出來ず、不調の裡前回同様、仲地・佐藤組にストレートで敗北したが、佐藤・仲地組に対する作戰の研究を望んでやまない。最後は期待されていた安井・池端組に並びに兵藤・赤山組が敗退したために選手権は當然 YMCA 軍に決定の感がするが、廣田・中村のコンビ宜しき得て強豪ハリス・エマール組をストレートで壓へた事は賞すべきである。

11 月 14・18・21 日 紀元 2600 年記念全神奈川選手権大會開催
シングルス　優勝　佐藤　２位　寿
ダブルス　　優勝　佐藤・仲地組　２位　山本・寿組

1943　昭和 18 年　**YC&AC 対横濱 YMCA の戦前の最終戦**【出典：神奈川県教育委員会 編『神奈川県体育史』「運動競技編：13.バドミントン」pp.265-280、 1956』】

昭和 18 年に入り、戰争の過激化に伴い競技の続行も困難に陥った。前記のコロンビア・ナルト・古河等は全部（バドミントン活動を）中止し、外人チームも英・米人を除いた一部のメンバーに限られ、人員も 10 数名足らずになったが、シーズン中は YC&AC 対横濱 YMCA は７試合を交わした。成績は YMCA が第２軍メンバーによる２試合に１敗、１引分けとなり、第１軍による５試合は連勝の記録を残し、今シーズンを最後として対 YC&AC 戰を終了した。

２月 12 日　横濱 YMCA　混合バドミントン慰安会：傷病兵士の招待試合【神奈川県教育委員会 編『神奈川県体育史』「運動競技編：13.バドミントン」pp.265-280、1956 年.】
当時横濱 YMCA 内に組織されていた青空クラブ（婦人スポーツクラブ）主催の下相模原の第３陸軍病院から白衣の兵士を招待し、同日、横濱 YMCA 体育場で、**混合バドミントン慰安会**を催した。約 20 名の傷病兵に 15 名の青空クラブ員が加はり、羽を打ち合いながら１日を楽しく送ったことを記憶しておきたい。

神奈川県バドミントン協会の終幕【出典：第 10 回国民体育大会神奈川県教育委員会事務局編『神奈川県体育史』「運動競技編：廣田兼敏編「13.バドミントン」pp.265-280,1956 年.】
県下に発祥以来約 10 年の歩みをたどった新興スポーツ、バドミントンも、戰争の深刻化、拡大化により**昭和 18 年度になって**、他の競技団体と運命を共にし、**協会解消の止むなききに至った(協會活動の中止ではなく、協会の解消といういう事である)。**

以後は YMCA を中心に有志が相集い、紅白試合或いは部内大会等により練習を持続していたが、**19 年を迎えた頃は**羽の入手にも困難を生じ、僅かに保存の羽を大切に使用する状態となり、**秋 10 月をもって休止符**を打たざるを得なかった。

神戸 YMCA において横浜 YMCA との「第２回東西対抗鳥球戦（バドミントン）」を開催（神青 42-7）詳しい内容は記述されていない。

この当時の慶應義塾大生と横浜 YMCA の関係を森友徳兵衛（第３代日本バドミントン協会理事長）の手記『創部 20 年に際して』（慶應義塾体育会バドミントン部関係資料）から少し長くなるが以下の部分を攫っておく：

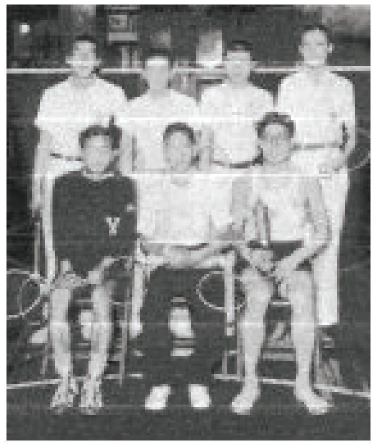
森友徳兵衛
日本バドミントン協会
第３代理事長

（前略）最初に YMCA を訪問したときに廣田氏や兵藤氏と御交際を願うことになったのだが、その理由の一つとして、私の叔父（父の弟）が本学の剣道部の副主将をしていて、卒業後も横浜で貿易商を営む傍ら、YMCA で練習をしていた関係で、当時叔父は出征中であったが、一度懐かしくして頂いたことを覚えている。兵藤氏は剣道部で叔父の一年後輩であり、之又懇情を賜ることとなった次第である（ここまでで、森友・義塾・YMCA とその関係者の立ち位置値のおよその関係が見えてくる）。
昭和 16 年には諸岡（良幸、現姓館山；森友の同級生）が私と共に時たま YM に行く様になり、二人は YM の会員になった。この頃の諸岡と私はバドミントンが従で硬庭が主であり、16 年 10 月学部へ進学すると共に田園クラブと近くのお茶の水ローンテニスクラブの会員になっ（てい）た。この間、Y の人であった４名の学生（佐藤、仲地、山本、寿）方とは YMCA などで親善試合を行ったりしていたが、あくまで YMCA チームのメンバーとしてその時都合の良いものが適宜借り集められて出たようなチーム編成であった。廣田主事は勿論陣頭で短複共元気で活躍され、廣田・兵藤組は最近迄中々大したものであった。
昭和 17 年の春に山本（孝二）、仲地（幹雄）は慶大バドミントン部の創設を始めて、私に相談があった。この頃になるとテニスよりバドミントンに魅せられてしまっていた私は一も二もなく賛成し、共に手を携え諸岡も同志として協力することになった。問題は No.1 であり、学部の違っている佐藤（保）の動向如何であった。彼は巨（大きい・強い・象徴的に高い立場にある等の複合的なイメージを指そうとして）に似合わず細かい神経の持ち主で（それ故にプレーヤーとして大成した訳であるが）主旨として賛成するが横浜 Y のメンバーを抜けることは Y の No.1 としての立場や今日迄の廣田氏の恩義に背信するから嫌であるという態度で、煮え切らなかった。
山本の考えとしては Y との縁を切ってすっきりとした部（当時は体育会員である筈がないので）、部の名称が使えず（バドミントン部と名乗れない）語源のクラブ（バドミントン・クラブ）を使ったが、全ての考え方は今迄の YMCA や YCAC 等のクラブ的でなく、朦朧部員を許さない方針で**部**として出発したのであった。併しこれには廣田氏との誤解や反対を怖れ（廣田氏もプレーヤーなので相当な神経質である）、**日吉から三田へ通学が変わったから便利な東京へ、と云う段取りで進んだ**。勿論、横浜 Y や東京 Y の選手として出る時は部の関係のない様にしようという約束であった。寿については丁度四谷に変わる都合で、その事に関わらず横浜 Y は脱会して東京のホステル（宿泊所）に代わる機会であった処で、全面賛成であった。彼には別に感傷とか我部の自主性とか排他性とか（学生の今も変わらぬ共通点であるが）はテンから関係がなかった。（中略）佐藤の決心のため、かなり難渋したが、山本、仲地以下の面々は仮に佐藤が入部してくれなくても団体戦で当たって一番強いと思われる横浜 Y にも絶対負けないという計画だけは立てた。山本・寿・仲地・森友・諸岡で勝てる訳なのである。併し佐藤・山本の間では次の様な約束が取り決められて解決に到達したようだった。すなわち佐藤は当部員たる以上、当部との対抗戦に相手側として出るわけにはいかない。又横浜 Y にも今迄世話になった関係上その相手側に廻ることも出来ない。
すなわち慶應チームが横浜 Y と試合する時のみ欠席し、Y 軍にも入らない。そのほかは全て慶大部員であると云ったものである。私としては佐藤も塾生

として我部のために同一行動すべきであると強硬に山本に対し主張し、結果的にはそのように落ち着いたことは喜ばしいことであった。**山本や私の考え方はＹから離れることが発展であり前進であったのであり、佐藤は浪花節があったのであろう**。

後から考えれば誠に若かったと云うのだろうが、勿論廣田氏は腹の小さい人ではなく、結成後の佐藤以下の面々になにくれとなく、面倒を見、暖かい気持ちで日本のバドミントンのために育ててもらったので、部の創設に学校関係を駆け回っていただいた兵藤氏を生みの親とするならば、技術や行動に力を貸して戴いた廣田氏は育ての親であると云うことが言えるのである。後年廣田氏の長男俊秀氏を終戦後我部不滅の名プレーヤーとして迎えることになったのである。

結果から見れば、このようにどうということはないのだが、本当にその当時としては佐藤を含めて我々の憶測は、佐藤・山本・寿・仲地の主力４名が分離した後の横浜 YM の戦力低下についても心配したものであった。その夏が終わって、10 月に我々は学部２年に進級した。戦時体制下で軍事教練の盛んであった頃である。山本の手によって他の部の部則を参考にし、**慶大バドミントン部（慶大鳥球クラブ）＝ KBC**（体育会入会と共に奥井部長の手により）と改称した部則がまとまった。**当時バドミントンの和訳に羽球と鳥球の二つがあったが、我々は合議で鳥球の文字を使用した。**語呂が良くて、又空飛ぶ白鳥を猟銃で撃つのを模したバドミントンの実体をよく表しているからであった。エース佐藤の決心も前述の通り定まったので 10 月７日の３時に・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・


慶應義塾の戦前の最強メンバー：後列左より佐藤・仲地・山本、前列左より福本・廣田主事・寿

（資料はここで１行分空白になっている。それが原文なのか、何かの手違いで欠損したのかは確認できなかった。１行分を空けて資料は次のように続く）。**部の為（に）という程に練習をする人はおらず、幸いなことに私の時代に上達してきたプレーを破る人は出てこなかった。**我々は月火水金を練習日に定め、バドミントンの時間は２面を、他の時間は１面を張って練習し、又昼でも他の時間で空いている限り１面のみは勝手に張って使った。職員は好意を持って見ぬふりをしてくれ、他競技はバスケットなど半面で練習して呉れた。それでもバスケットの時間にはバスケの人たちが我々に空けてくれる様丁寧に頼んできた。この様な時は当然我々はすぐにネットを外した。全体にスポーツマンに比して紳士で（余裕のある人のみがやっていたせいかもしれない）。戦前ロッカーに入れっぱなしにしてあった運動靴（当時は貴重品である）が戦後そのままあった程で、その辺に置き忘れた物等は決して何日経ってもなくなるとは想像もしなかったくらいであった。この点今の人達は嘆かわしいと思う。（以下省略）

1944　昭和 19 年　11 月 24 日　**東京大空襲；1944(昭 19）年 11 月 24 日以降 106 回に及ぶ**
1945　昭和 20 年　**B-29 による東京大空襲**
東京空襲で東京 YMCA 体育館の一部を消失、体育館を閉鎖。（東 309）

1945 年　昭和 20 年　**8 月　6 日　広島に原爆投下される。**
8 月　9 日　長崎に原爆投下される。
8 月 14 日　日本国無条件降伏：ポツダム宣言を受諾
8月15日　昭和天皇の玉音放送にて日本の敗戦を伝える

新生日本が再スタートした状況下、我国のバドミントンも亦変革の時をスタートさせる。

1946　昭和 21 年　**日本の学制６・３・３制となる：戦前の学校令に替えて定めた学校制度**
1946　昭和 21 年　1 月　**第１回東京都民大会開催：　男子単優勝：廣田俊秀、２位；藤井光男**

廣田俊秀

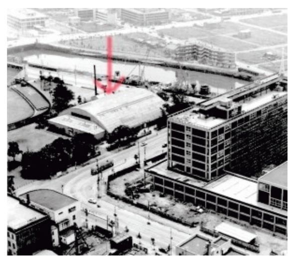
廣田兼敏が"日本バドミントン協会の成立に言及"した資料：**廣田兼敏著「ばどみんとん昔むかし黎明時代とミナト横浜」「日本協会結成、国体種目へ」『バドミントン界』No.33.6 月号、pp.20 -24.で、**

「第二次大戦により、日本のバドミントンの**組織**（※組織は未だ確立されていなかったからここでの'**組織**'というのは一つのクラブ規模の'**活動**'という位の表現が適切だろう）は、白紙状態に戻らざるを得なかった。実は大学連盟や日本協会の結成等は戦前から計画されていた（関係資料確認できず）。しかし、実現しないままに終戦を迎えたため、国体種目への参加（日体協への加盟）や IBF（国際バドミントン連盟への加盟）なども、足踏み状態となってしまった訳である。しかし、戦後、いち早く大阪の松葉、神戸の石渡氏を始め、YMCA 関係の諸兄や横浜の県人有志等の協力・賛同を得て日本体育協会、文部省方針に沿った組織化を進めた。すなわち**昭和 21 年に現在の日本バドミントン協会が正式発足**し、**日本体育協会への加盟が実現**※」。

※ こうした認識に関係者の勝手に合理化された内容が含まれており、上述の如く事実と微妙なズレがある。協会の設立経緯を含めて時系列を整理したより適切な記述が必要。

1946　昭和 21 年 2 月 28 日（金）**【終戦後神奈川県下における最初の練習（前述されて居るが一部反芻する）**
出典「運動競技編ー 13.バドミントン」『神奈川県体育史』.pp.265- 280.,1958 年. によれば：この日、

「慶応義塾大学バドミントン部 OB の森友兄弟、現役の六角・三橋・藤井・廣田（兼敏氏のの長男）等がバドミントンの復活について相談した。その結果、**6 月 30 日から**毎日曜日 11 時より２時まで、平楽**小**学校校長の厚意で同校体育場を使用して、慶大並びに YMCA メンバーによるバドミントンの合同練習が開始された。**練習は 7、8 月と２ヶ月続い**たが、**これが（神奈川）県下における**終戦後のバドミントン練習の始まりであった。」とする。さらにその状況を**【羽の入手困難時代】であったとして**、「当時逸早く練習を開始したが、使用羽の補給に全く困難をきたし、レギュラーの練習の継続に非常な支障があった。当時フライヤージム※・ゲーリックスタジアム※※、根岸ゴルフ場※※※等が、進駐軍スペッシャル（おそらくスペシャル）のサービス下にあった体育施設関係の主任メイジャー・ベリー並びにスペッシャルサービス体育課のメイジャー・サムソン等が同情を寄せ、試合等に毎回要求に応じて特に羽を寄贈し、このゲームの続行を援助してくれた。」と記している。


※横浜公園脇のフライヤーズジム

※※ゲーリック・スタジアム

※※※根岸ゴルフ場：

※フライヤージム：米軍の体育館で、横浜伊勢佐木町にあり、昭和 33 年にに横浜公園内に移転し改築され、体育館となった。昭和 33 年米軍の接収が解除され、後に改修され横浜公園体育館となる。
※※ゲーリック・スタジアム

日本最古の競馬場、関東最古のゴルフ場があった所。この写真ではどこでバドミントンが行われたかは判別できなかった。

戦後の横浜 YMCA を中心とにした活動における同じ練習開始の事案を、次の資料でも見ることができる。

日本バドミントン協会編【「日本バドミントン前史」、『日本體育協会 75 年史』 pp. 690- 694、 1986 年】は：「**7 月** 我国のバドミントンの練習が戦後初めて行われたのは、横浜 YMCA と慶応義塾大の学生が横浜市立平楽 **中**(小の誤り)学校体育館で行った練習である」と戦後の歴史を書き出し書き出し、さらに、**8 月東京バドミントンクラブ結成委員会を開催**した」、という(詳細不明で、これ以外の記述にも誤りがある：前述の様に平楽中学校は平楽小学校の誤り)。

ここまでの期間についての以上の様な記述内容には不明なところもあるので、日本バドミントン協会発足までの動き(活動)を知るために歴史を少しだけ巻き戻してみる（反芻箇所が含まれる）：

1946　昭和 21 年

神奈川県教育委員会 編『神奈川県体育史』pp.272-280、「運動競技編 (二、終戦後)：13.バドミントン」1956 年.

2 月 28 日（金）「県下における最初※の練習」（※戦後最初のバドミントン活動の意味）慶応大 OB の森友兄弟、現役の六角、三橋、藤井、廣田（俊秀であろう）等がバドミントンの復活について相談した。その結果、6 月 30 日から毎日曜 11 時より 2 時まで、平楽**小**学校校長の厚意で同校体育場を使用して、慶大並びに YMCA メンバーによるバドミントンの合同練習が開始された。練習は 7、8 月と 2 ヶ月続いたが、これが県下における終戦後のバドミントン練習の始まりであった。この後に、同じ**神奈川県教育委員会 編『神奈川県体育史』「運動競技編：13.バドミントン」pp.265-280、1956 年では「バドミントンの講習会」「神奈川県バドミントン協会の再結成」「全関東大会に県選手活躍す」「待望の関東学生バドミントン連盟発足へ」「終戦後の大勢（昭和 22、23、24 年）」**の項目へと続くが、**残念ながらこの資料**には**日本バドミントン協会の設立、同協会への神奈川県の加盟等**についての内容は、全く言及されていない。

1946　昭和 21 年　**3 月**

上海帰りの**宮澤宏之**は早稲田大学 OB のラガー原田氏の仲介で日刊スポーツ社社長秋山慶幸に会い、駐留軍のバドミントン ・コーチを 依頼される。そこで宮澤は上海のバドミントン 仲間である**山田文雄、田中荘三郎、池田鮮、服部延住、今村正雄**でバドミントン慰問部隊を編成。**丸の内バンカースクラブで公開模範ゲームのチームを旗揚げする。**次に、**国電新橋駅際の'フタバヤ運動具店'ショウウインドウ'に「バドミントン経験者を募る」の張り紙を出す：東京バドミントン・クラブを結成。**

フタバヤの広告カード
1948 年（S23)- 卸と小売の店
新橋サービスステーション東京・新橋駅北口都電通り、と読める（尾藤伸治・提供）

最近の新橋駅駅風景

降伏文書調印後 1 ～ 2 日で丸の内に米軍が進駐、爆撃を免れたビルを軒並み占領。写真のバンカース・クラブは旧銀行協会内に設置された。

【山田文雄の生きた時代とバドミントン】

※山田文雄 1898-1978
日本バドミントン協会第２代会長

※ **山田文雄 1898-1978 年**
東京帝大経済学部卒、河合栄次郎※※（著書の発禁処分を受ける）に師事。鶴見祐輔の**太平洋協会**※※※に入り、調査部長となる。東京都副知事を経て、愛知大学教授、大学紛争時同大第 7 代学長となる。哲学と実践の仲介となる社会思想を研究・普及に努める。マルクス主義・ファシズム批判をやった河合栄次郎（『学生に与う』の著者）と共に東大を退職。第２次大戦後、東京都副知事を務める。

実質的には日本バドミントン協会の初代会長に当るが、山田氏が就任される前に歴史の不条理を地で行くように初代会長として白山源三郎氏が着任している。

河合栄次郎 1891-1944

※※ **河合栄次郎 1891-1944**
日本の社会思想家、著書『学生に与う』は多くの若者に影響を与えた。アンチ・マルキシズムの思想をもつ右翼、軍部ファシズム勢力が弾圧しようとした河合栄次郎事件は 1938 年から 1943 年まで続く。
私事になるが筆者も中学期に読んだ『学生に与ふ』に大きな影響を受けた一人である。

昭和 14 年東大の自由主義派 - 河合栄次郎と革新派・土方成美の派閥抗争が激化、河合は著書の発禁処分を迫られ、学長の平賀は喧嘩両成敗で両教授の休職を文部大臣に意見具申、自らも辞任し、学部自治・思想の自由に介入する。河合派の山田も含めて両派 13 名の教授辞表提出に発展、事態は昭 15 年一応の収拾を見た。

※※※**太平洋協会**　会長空席、副会長松岡洋右、理事鶴見俊介で「太平洋国策の樹立」を標榜し、海軍が大きく関与して設立された。戦時期における人類学者の活動の場を提供した。多彩な人材が集合、戦時米国の実態調査などを行う。日本バドミントン協会第２代会長山田文雄、同第３代会長本田弘敏氏もこの会に所属。

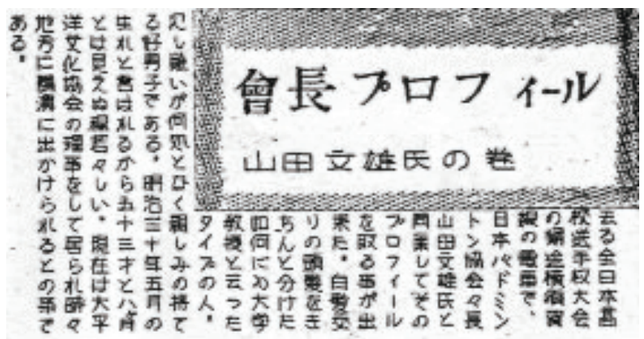
松岡洋右

鶴見俊輔

土方邸に集まった東大の辞職教授陣

昭和 28 年 **1 月 26 日発行の当時の日本バドミントン 協会機關紙『NBA』発行者日本バドミントン協会編集部：東京都中央区日本橋小綱町２－７ 森友商店内編集件発行者を森友甫（後に徳兵衛を襲名）**とするの 3 頁目に、**諸岡による“會長プロフィール；山田文雄の巻 ”を紹介**。同紙に会長プロフィルが紹介されたのはこれが初めて：**歴史が多少前後するが、先に機関誌紙 NBA 掲載の以下の記事を紹介しておきたい：**

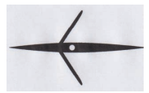
ガリ版刷りの日本バドミントン協会機關紙 NBA：昭和 28 年 1 月 25 日 p.3 に次のプロフィル紹介がある。

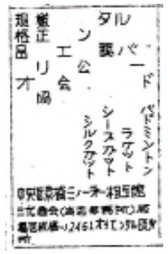


會長プロフィール
山田文雄氏の巻

去る全日本高校選手権大会の帰途横須賀線の電車で、日本バドミントン協会会長山田文雄氏と同乗してそのプロフィールを採る事が出来た。白髪交差りの頭髪をきちんと分けた如何にも大学教授と云ったタイプの人。侵し難いが何処となく親しみの持てる好男子である。明治 30 年 5 月の生まれと言われるから 53 歳と 8 ヶ月とは見えぬ程若々しい現在は太平洋文化協会の理事をして居られ時々地方に講演に出かけられるとの事である。一高、東大と進まれ東大教授から終戦後東京都副知事をされた。

※スカール scull
シングルスカル：左右一対の櫂を両手で持って一人で漕ぐボート競技の中で唯一の個人種目





同紙の広告もこの様な物からスタートしていたのだ。

事もある。専門は工業政策で学校での採点は辛い方であったと言われるが、生来殺生な事が嫌いな性分と言われるから被害者はないものと考えられる。 高校時代からスポーツは好きで、野球、陸上、庭球、水泳、ラグビー、サッカー、バレーと一通りはされたが、その腕前の程は知られぬが、昭和 14 年の神宮大会にスカール※で優勝された記録をもって居られるから、スポーツの神経は発達して居られる。バドミントンでは次回全日本ベテランに出場されるやも知れぬほどの腕で、お子様もラケットを振り回されるとの事で一家中バドミントンには深い関心をもって居られる。会長のバドミントン 記録の中には、第 1 回東京都民大会のベテランの部で優勝という輝かしい記録を持って居られる。 趣味は亦広く、トランプ、麻雀、ダンス、将棋、チェス、撞球何でも御座れ、中でもブリッジは御自身で日本の No.2 と言われる程、大分自信をお持ちの様子、将棋も亦かつて一度筆者もお手合わせ願ったこと事もあるが、素人初段に今一息 と云う処と見えけられた。下戸で酒は余り飲まれないが、甘いものがお好きでその為か入れ歯が多いとこれは筆者の推察である。話しているとつい小使いでもせびりたくなる様な「良い親父」と云った感じを受ける。

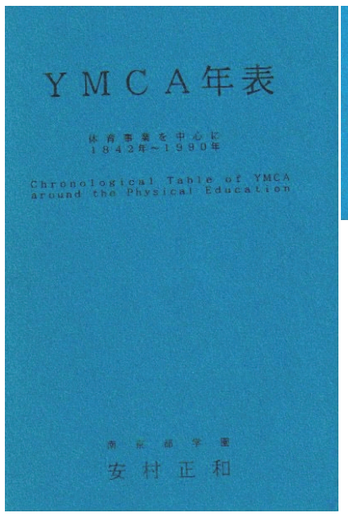
最後にバドミントンに対する抱負をお伺いすると「国際試合をやりたい。その為にはマナーもプレーも国際標準迄高めなくてはならぬ」と言われた。 （文責 諸岡）

続いて、会長のプロフィル紹介に添える様に機関紙 JBA の紹介がある。

編集雑記 **▼J・B・A** として親しまれてきた題名も今号より日本バドミントン協会の英文名が（NIPPON BADMINTON ASSOCIATION）と決定しましたので、N・B・A と改めました。

△ 本号より協会理事のプロフィールを掲載いたします。筆を担いで各理事の横顔を写生して行き度いと存じます。本号は会長の巻といたしました。

1946 昭和 21 年 **3 月** **『YMCA 年表』の著者；安村正和、日本体育専門学校を卒業（安資）、東京 YMCA 体育館でボランティアリーダーとして柳田主事の助手となる。**安村は関東・関西のバドミントンに広く関わられ、我国における初期のバドミントン活動を牽引した各地の YMCA の記録を、それぞれ記録した月刊 誌『○○青年』等の整理（廃棄）が既に相当に進められて来ており、この年表は安村の業績としての将来貴重な資料となる筈である。YMCA 活動を総覧した通史『YMCA 年表』を編纂。本年表は初期のバドミントンの普及展開を知る重要な資料の一つである。しかし残念な事に本書を執筆している 2022 年という時点にあっては、各地の YMCA で貯蔵されてきた初期の YMCA の歴史的資料である月刊誌等の廃棄が既に全国的に相当に進められて来ており、安村氏によるこの年表は将来に亘っての貴重な資料となる筈である。



安村正和著『YMCA 年表』表表紙

同裏表紙に示されたマーク

同誌に記載された頁内容の一例：YMCA 活動の経年的様子がわかる貴重な資料

南京都学園の『YMCA 年表』—体育事業を中心に 1842 年～1990 年—1993 年を』1993 年は、バドミントンの初期の事案が幾つか記載されている（貴重）。

7- 熊本 YMCA「水上安全講習会」を開催する。指導＝小森栄一（日本赤十字・日本 YMCA 同盟アクアテック委員長）（熊 30-50）

8-15 横浜 YMCA、新会館建設に着手。この間、体育プログラムは三春台の関東学院高校の体育館を夜間借用。（横 384）

8-17 名古屋 YMCA の新館竣工、会館式を開催。鉄筋コンクリート地下 1 階地上 6 階建。延 7,367.6M3. 地下に温水プール（25×10m）。4 階・体育室 B/C、5 階・体育室 A729m² 6 階・ランニングラック等。（名小 15）

8-19-22 京都 YMCA 中学生の「小豆島サイクリング」を開催。（京事 74）

8- 京都 YMCA 中学生の「小豆島サイクリング」を開催（京事 74）

8- 京都 YMCA「玄武公園プール」で「水泳教室」を開催。参加者延 -836 名。（京事 74）

9-15-16 京都 YMCA バドミントン・クラブ 京都 YMCA において「東京 YMCA バドミントンクラブと「交換会」参加者＝各 YMCA40 名。（京事 74）

9- 全国 YMCA 體育担当者会議『少年体育研究会』を京都 YMCA リトリートセンターで開催する。（京事 74）

1946 昭和 21 年 **3 月 31 日** **第 1 次米国教育使節団：** 連合国最高司令官マッカーサー元帥に「米国教育使節団報告書」が提出され、その時代を生きる「再生日本（民主国家）」の「人」と「国造り」つまり「教育改革」のための「指針：（学校教育制度の原型＝課程制度、男女共学、授業料無徴収、義務教育；普通教育の引き上げ、個性の尊重）」を提言：これ等が基調としたものは**「自由主義」「民主主義」への方向性**である。

1946 昭和 21 年 **4 月 17 日** **憲法改正案を枢密院で諮詢（他の機関の意志を参考として問い求める）**
極東委員会「日本の新憲法についての基本原則」を決定（これは 1 年前にマッカーサーに伝えられていた日本の統治体制の改革をの基本は – 天皇制に対する強い反発性を持つもので、その廃止と民主化を含むものだったが、その選択肢は国民に与えられるとすることで落ち着いた）。マッカーサーはこの基本原則に異議は唱えなかったが、これを指令すれば、憲法改正に対する日本国民の自発的努力が連合国に強制されたという性質を持つものになるとして公表を抑えさせた。

1946 昭和 21 年 **5 月 22 日** **吉田内閣成立、憲法草案を撤回**
27 日 **審査結果に基づく修正を加えて再度諮詢**

吉田 茂 1878-1967
外務大臣、総理大臣
1946~1947,旧憲法下最後の内閣

8 月 **東京バドミントン・クラブ、結成委員会を開催**
東京クラブ発足（常任委員：宮澤宏之、服部延住、委員：田中荘三郎、今村正雄、山田文雄、清水清太郎）を決め、活動は毎週月・土曜日、会場は都立芝高等学校で行う、とした。
宮澤宏之著「特別企画①日本バドミントンの歴史＜上＞、バドミントン・マガジン 1982.2,pp68-70,によれば「いよいよ進駐軍慰問へ」

当時の日刊スポーツは、「本社主催進駐軍慰問バドミントンゲーム（西洋はねつき）を左の日をもって挙行することに決定したが、終戦後初めてのゲームである為、進駐軍将士からは多大の期待を持たれている。なお、選手らは毎週土 、月曜日に都立芝第六高女において練習を行なっている」と、報じていたという。

▽**9 月 9 日** 板橋十条 73 オウデナス
▽9 月 15 日 丸の内バンカースクラブ
▽**9 月 26 日** 横浜レッド・クロス・クラブ
▽9 月 27 日 霞ヶ関将校クラブ；審判員は服部延孝（前上海クラブ員）
▽男子部＝宮澤宏之（前上海選手権保持者）、今村正雄（前上海・日本 YMCA 指導員）、 田中荘三郎（前上海クラブ指導員）、池田鮮（前上海・日本 YMCA 部員）、白石 芳士（前上海クラブ部員）
▽女子部＝三雲清子、伊藤欣子。 その他が担当、好評と いうことで,

▽ 10 月 9 日、麻布第八騎兵隊、浜松町のモータープールと大田区内にある旧宮田自転車工場（GHQ 関係車輌運転手宿舎、内庭にコンクリートながら 4 面のコートができている）へも巡回慰問した。
グループ慰問を終えた後も拙者（宮澤）は旧宮田自転車工場へは指導のため定期的に行き通っていた。GI の中にはカリフォルニアのチャンピオンというものもいたことから、横浜の廣田兼敏氏を介して数人のプレーヤー達と交流試合をさせたこともある。　—この記事は**昭和 21 年 11 月 2 日日本バドミントン協会発足**へと続き、次いで、**昭和 22 年 10 月の第 2 回国民体育大会（石川県下）**に及び、文部省の肝煎で **10 月 30 日午後 1 時** 金沢市公会堂で模範競技、指導・講習会（出場選手；宮澤宏之、津田吉太郎、岡淳 一、相馬万吉、秋元幾男、兵藤昌彦）が開催され、各都道府県の体育課長が参加し関心を呼んだ事が紹介されている。 —翌**昭和 23 年 4 月 24 日**『日本バドミントン協会が、過去 1 年間に、東京、神奈川、福岡、静岡、愛知西部の地方協会を設け、さらに大阪、京都をはじめ全国 27 都道府県にわたり支部設立準備中で、個人登録会員は 2,500 に達する活況をみせているとして、さらに次の役員が決定したと記している：即ち 、 ▼会長山田文雄（東京都副知事）
▼副会長白石謙作（三井厚生病院長）
▼ 理事長宮澤宏之（東京）

以下、日本バドミントン協会設立までの経緯をまとめる。

1946　昭和 21 年　　**9 月**　　**日本 YMCA 同盟中央委員会、「民族力の根基を培うための体育レクリエーションおよび保健教育を通じて国民体位の向上に貢献すべきこと」として基本 10 項目を協議し、これに合意。**

横浜 YMCA 会館の一部、大阪 YMCA 体育館、東京 YMCA 体育館、進駐軍に接収される（東 316）。

横浜 YMCA、バドミントンの練習を再開する。（横 567）
川口清※、**大阪 YMCA の臨時職員となる。**※初参加となる第 3 回トマス杯アジア地区予選日本選手団の監督を務める:外国書籍を収集・読破(世界に追いつこうとする日本の動きの始まりを見る。)

大阪 YMCA、バドミントン活動を再開する（注目されるのは川崎策実の知性）。

東京 YMCA、国際ホテル学校を再開（同校生徒の課外活動の一つとしてバドミントンを開始): 英語学校の生徒が参加しクラブとなる。

1946 昭和 21 年　　**9 月 1 日 戦後海外引揚げの今村正雄、宮澤宏之、田中荘三郎、池田鮮、神戸でやっていた清水太郎らが東京バドミントンクラブを結成、進駐軍へ慰問試合を行う。**

1946 昭和 21 年　　**9 月 9 日、9 月 15 日、9 月 26 日、27 日にも、東京クラブ 進駐軍へ慰問試合を行う。**

1946　昭和 21 年　　**9 月 21 日** 瀬尾実（東海スポーツ社長）の要請で「指導者講習会」を名古屋市第 2 高等女学校で開催。

近く（ちかづく）第 1 回国民体育大会の開催：急がれるバドミントンの全国組織の体系化
1946(昭和 21)年 11 月に開催される第 1 回国民体育大会に向けて、バドミントンの全国組織の形成が急務となっており、宮澤宏之（上海から帰国）のリードする 東京クラブのメンバーと、廣田兼敏を中心とする横浜 YMCA のメンバー がそれぞれ中心となって日本バドミントン協会の結成を急いでいた。

国民体育大会（国体):1946(昭和 21)年第 1 回大会を近畿で開催、以降各都道府県が持ち回り:
スポーツ基本法に位置付けられ、日本スポーツ協会、文部科学省、 開催都道府県の三者共催で行われ男女総合 1 位の都道府県に天皇杯、女子総合 1 位に皇后杯が授与される。

国体のシンボルマーク

日本 YMCA 同盟；新しいレクリエーションゲームを指導する民主体育指導者講習会を東京・大阪・京都で開催。指導：柳田亨、廣田兼敏、山田貞雄、石渡俊一

1946 昭和 21 年　　**10 月**　　**第 1 回 学連（創立）総会を、東京で開催**

東京 YMCA と横浜 YMCA の會員「親睦バドミントン大会」を横浜 YMCA で開催　（東 331）

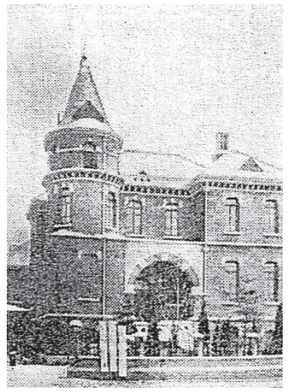
慶應義塾大学バドミントン・クラブ、東京 YMCA で創立総会を開き、創部：部長寺尾琢磨（前出)、主将山本孝二を決める
慶應義塾大学バドミントン・クラブ、新入生募集のポスターを日吉の第 1 食堂に張り出す；予科 1 年生の六角勉、榎本延次郎らが応募してくる。他に星、折田、吹野らも入部

寺尾琢磨（慶應義塾大教授（後に学連会長に就任））

最近の慶応義塾日吉キャンパス食堂風景であるが、往時を忍んでみる。

10 月 9 日　東京クラブさらに巡回活動を行う

10 月 30 日　東京クラブのメンバー、東京 YMCA 神保町会館（美土代町が正しい）に集合「日本バドミントン協会の設立を協議、翌日を持って発足日とすべきところ、11 月 1 日が日曜日であることから、2 日を正式発足日とするとした。


東京 YMCA 美土代町会館

宮澤は、これを『みやこ新聞（現在の東京新聞)』に次のように報じる。

『みやこ新聞』
’日本バドミントン協会発足’ 新興スポーツとしてのバドミントン（羽球）は大童（おおわらわ）の活動を続けているが、これら各クラブを統合して強力な団体として育て上ぐべく東京バドミントン・クラブが中心となり、種々具体案を統合して強力な団体として育てあぐべく、種々具体案をねっていたが、このたび（協会）設立の運びとなり去る(10 月)30 日午後 2 時より富士見町の YMCA 会館で（註；富士見町に YMCA 会館はなく、神田美土代町の誤り）**「日本バドミントン協会」の設立を見るにいたり役員並びに協会規約などが決定された。（注＝ 11 月 1 日が日曜だったため正式発足日を 2 日とする）なお、本協会は関東支部の役員を兼ねることになった。**
日本バドミントン協会は次の通り。
▽会長（関東・未定)、▽副会長（関東 1 、関西 1 、未定)、

日本バドミントン協会初代理事長となった宮澤宏之、上海バドミントン・クラブのメンバー

▽理事長：宮澤宏之（東京）、
▽常務理事：今村正雄（東京、）、清水太郎（東京）、
廣田兼敏 （横浜）、川崎策実（大阪）、
▽理事：池田鮮（東京）、兵藤昌彦（大阪）、八幡満胖（大阪）、
仲地幹雄（東京）、松葉徳三郎（大阪）、石渡俊一（神戸）、山本孝二（神戸）、田中荘三郎（北海道）、
▽顧問：平沼亮三（横浜）
▽仮本部：東京都世田谷区下馬 3-40(宮澤気付)[今月中の試合] 今回創立を見た日本バドミントン協会では 12 月中に以下の二試合を行う。15 日（日）12 時より対慶大新人（於横浜 YMCA）なお、同協会は来年 2 月、3 月の 2 ヶ月に模範競技会を兼ねて全日本選手権関東予選大会を東京において開催の予定である。

註）みやこ新聞
1884 年創刊の夕刊紙『今日新聞』が 1888 年改称したもの。さらに 1889 年 2 月『都新聞』に改称。1942 年『國民新聞と合併『東京新聞』となり、明治 2 年松平春嶽が読んだ初期の新聞以来の伝統を守り、下町的な感覚の独自地歩を築いた。1963 年には『中日新聞』傘下に入り、『東京新聞』として発行を続けている。

1947　昭和 22 年 **４月６日**　**東京バドミントン協会※の発足**（※後の東京都バドミントン協会）
設立間もない日本バドミントン協会は、初の一般公開模範試合を、昭和 22 年 4 月 6 日、明治大学本校体育館で開催する。

５月　日本バドミントン協会が設立されたのに合わせて、支部組織としての**東京バドミントン協会**（会長・山田文雄※、理事長・宮澤宏之； 日本バドミントン協会に対する支部協会としての位置付け持つ協会であるから正しくは**東京都バドミントン協会**のことであろう）が、7 加盟団体 130 名の会員を擁して、直ちに普及活動を展開していく。

6 月 21～22 日　**バドミントン公開競技大会：於明治大学体育館（神田駿河台）、２日間の予定で開催。**

白山源三郎 1898-1985
日本バドミントン 協会初代会長

第１日目　一般を対象に招待
第２日目　体育指導者を対象に招待。日本バドミントン協会から宮澤、今村、清水、廣田が出席予定であったが、定刻になっても廣田は現れず、代わりに白山源三郎が「会長を引き受けてくれと言われて来た」旨を告げて（開会の挨拶が終わるということだろう）早々に引き上げたという。こうして、経緯も何もない不可解のうちに初代の日本バドミントン 協会初代会長が誕生した、という。

白山源三郎 1898-1985
関東学院大学初代学長,神戸高商、京都帝国大学卒、昭和２年関東学院高等学部商科教授として着任。高等商業部を明治学院に合併。工業系学部を新設、初代校長となる。戦後学生改革による大学への変換後、初代学長に就任。白山は校訓である「奉仕」を実践するため教育を受けることの必要を説いた。日本を代表する水泳選手として国際的に活躍、ローマ五輪で大会役員、東京五輪では国際水泳連盟役員を務めた。レクリエーション論を専門とし、人間の虐待としてのスポーツに疑問を抱いていたという。第 10 回ロスアンゼルスオリンピック大会に米国駐在員として滞米中に、第 1 回世界レクリエーション会議に出席、初めてレクリエーションを知る。インタビューで「私はこの時にレクリエーションを拾ってきた」と述懐していたそうだ。“ムーブメント”としてのレクリエーションを捉えたとして評価されている。

こうした流れに対して異なる流れを記した横浜 YMCA 廣田による以下の様な手記の記録もあるが：

①廣田の手記（『特別寄稿：夜明けの時代を振り返ってー 2』バドミントン界 8 月号、1976 年発行）を見ると、（私が）関東側（註：これが何時どの様な組織を形成していたのかは不明、関東にいるバドミントン関係者ということであろうか）を代表して西下し、大阪 YMCA において、戦前からの同士全員（曖昧：バドミントンの交流のあった仲間程の意味か？）と会合、関東側の案（註：何時どの様な会合が行われ何が合意されていたのか実体は不明）に全面的に賛成を得、**ここに待望の日本バドミントン協会が創立、席上、全員の希望により筆者（廣田自身）が初代の理事長に推された**とある（註：この様な決議が実際に行われたのか、そうした空気があったということなのか記述は曖昧で確証できない）。廣田は、この後多忙であったこと、横浜在住で不便（中央との連絡が不便？）であったことなどから、**暫時、東京クラブ員に依頼し**（註：主語‘廣田’が目的語‘東京クラブ’に依頼したということか）、**協会規約等も至極簡単なもので 1～2 年を過ごしたと回想し**（註：**急要課題であった筈の国体参加等の案件はどうなったのだろうか**）、ついで文部省体育課、日本体育協会等の依頼があって（註：誰に対するどんな依頼か、或いは公的な依頼か（幾関を通した）私的な依頼か（私人同士の）、それとも通達か連絡か？）、山田文雄会長（東京都副知事）の下に“第 1 回全国総会（何の総会か）を開催（＊於東京：これを第２代目の会長が会を仕切ったことになるが、それでは自ら指名していた白山初代会長はどうしたのか）”、文部省の忠告、全国代議員（どんな資格を持っているのか）の切なる希望を入れて、協会を全く新しく改革した（註：協会組織を編成し直して担当部門を新たに設置するということか、会長人事を含めて人事を変えたということか、改革の内容が解らない）。**ここに初めて名実共に待望の日本バドミントン協会が発足した、というのである（これを記録した文書等がない）。**
ー この経緯の説明には恣意的な帳尻合わせによって実際の経緯を書き換えようとする意図が見えている様に思われる ー

※ビル・ファンク
『神奈川県教育委員会 編『神奈川県体育史』「運動競技編：13.バドミントン」pp.265-280、「上海への遠征計画 p」.270,

ビル・ファンク：(太平洋戦争を前後する頃)、華僑の１人のプレーヤー、**ビル・ファンク**によって、シンガポールから香港に、そして香港より上海へと北上したバドミントン熱はすこぶる隆盛を極め、当時上海に在住の日本人間にもこのゲームが伝わり、**16 年９月 30 日付で日本人愛好者によるバドミントン協会**の結成が当時の新聞に報道された（日本国内での話でなく上海でバドミントンの日本人協会が設立された）。また、役員名簿、行事等の案内を受けたので、横濱 YMCA は待望の好相手現るとばかり勇躍上海遠征を計画、その準備を進めたが、国際情勢の急激なる変化は、折角の計画を交渉の一歩手前で中止の止むなきに至らせたのは寂しくも残念であった。

②日本バドミントン協会編 「日本バドミントン前史」【『日本體育協会 75 年史』、pp. 690- 694、1986 年】（筆者を特定できず、記述の正確さに欠ける）では、戦後の 歴史を同じように「**７月**我国のバドミントンの練習が戦後初めて行われたのは、横浜 YMCA と慶応義塾大の学生が横浜市立平楽**中**（小学校）学校※体育館で行った練習である」と、記している。**ところが同書の他の項目「横浜 YMCA とバドミントン」の「日本バドミントン協会の設立（戦後のバドミントン活動）」**についてを見ると、;「横浜でバドミントンの練習が始まった。横浜 YMCA と慶大の２チームが、横浜の高台にある平楽小学校体育館（横浜市南区平楽１）で行ったもので、それは**昭和 21 年７月**の事である。」と正しく記録されていて、「丁度その頃、大阪 YMCA にも別途**練習の再開**された記録があり、戦後のバドミントン史は、東西ほぼ同時に紐解かれた事になる。東西の交流に支えられて今日の発展を見た本会の状況に鑑みると、非常に興味深いものがある。」とも記述されており、前書の当該項目での中学校は単純なエラーであったのだろう。

③これらに加えて、再度紹介するが、初期の我国におけるバドミントンの始まりの物語には東西２箇所での動きに対する認識の視野を二つにしなければならない上に、さらに加えてもう一つ加えなければならない歴史事案（アジアにおけるバドミントンの動きとの関わりを持つ）がある：【上記資料をそのまま続けると】
当時、在外帰国者の中にバドミントン愛好者がいた。**“東洋に並ぶ者なき達人”**と称された**ビル・ファンク**※の影響下にあった**上海日本人バドミントンクラブのメンバー達**で、帰国後、宮澤宏之を中心にして**東京バドミントンクラブを結成**（昭和

21 年秋）し、その華麗にしてパワフルなプレイは、当時、明治大学の現役選手であった筆者（㊟内藤安雄ではないかと推量される）をして目をみはらせるものがあった。**このような東京での動き**に、**俄かに中央協会設立の機運は高まり**、第 1 回国民体育大会（昭和 21 年 11 月）開催中、廣田が加わって、大阪 YMCA においてその**設立準備会**が開かれ、念願の日本バドミントン協会は設立されたのである（この設立準備委員会にはこの筆者は参加しておらず、詳細を認識できていなかったためか日本バドミントン協会誕生の記載に錯誤があるが、次の文章で記述内容が正しくなる）。

残念なことにこの大阪での設立準備委員会で、日本バドミントン協会の設立案件は実際に議論の話題にされたようだが、最終的な協会の組織化に必要な諸事項の決定には至らず、具体的な組織活動やその形態を計画し、協会を結成するまでの動きには至らなかったのである。

廣田兼敏著「ばどみんとん昔むかし一黎明時代とミナト横浜」（『バドミントン界 No.33.6 月号、pp.20-24.

昭和 14/5 年の頃シンガポールの名選手**ビル・ファンク**※がマライ、ジャワ、セイロン、タイ国等を征して北上し、香港からさらに上海で当時の各大学や実業団仲間とも交戦して全勝、上海大学他二、三の大学コーチとして活躍、上海は急にバドミントン・ブームになった。

同著の次の項「上海の日本人にも広まる」ではさらに以下のように綴られている。当時の上海在住の日本人の間にも一 時期バドミントが伝わり、YMCA を通して、知り合いの**福岡の中村高治代**および、 現在、**横浜 YMCA 理事として健在の高取氏**等も、かっての上海における日本人クラブのプレーヤーであった。YC&AC を征服した横浜 YMCA は、上海遠征等も考えてみたが、不幸にも思わしからぬ戦争勃発のため中止となり、日本人は次々に帰国せざるを得ない事態となった（以下略）。

※上海 YMCA の

1946 昭和 21 年　**11 月 3 日　日本国憲法　公布される**
11 月 4 日　芦田均　NHK で「新憲法」と題して講演

芦田　均　1887-1959
法学博士（東京帝大）
第 47 代内閣総理大臣

衆議院帝国憲法改正案委員会委員長を務めた芦田均は、憲法公布の翌日に当たる 1946（昭和 21）年 11 月 4 日午前 6 時 45 分から 15 分間、日本放送協会のラジオ放送で「新憲法」と題する芦田自筆のラジオ原稿で講演を行った。**この放送で芦田は、明治憲法下での軍閥・官憲による自由・人権の抑圧を振り返り、新しい憲法の必要性を説いた後、「新憲法」の特色を**
①. 象徴天皇制、
②. 戦争の放棄、
③. 国民の権利の大幅な保証、
④. 民主主義
の四点を説明した。（Wikipedia による）

芦田　均 1887-1959
外交官、法学博士、片山内閣総辞職を受けて第 47 代内閣総理大臣（首相とてはイニシアチブを摂ったことがなかった、と言われている）、リベラリスト。西尾献金事件、昭和電工事件など未曾有な政治スキャンダルに見舞われ、総辞職。米ソ対立構造の中で大きな政策転換を迫られた時期であった。

1946 昭和 21 年　**11 月**　**第 1 回国民体育大会秋季大会；京都、大阪、兵庫、滋賀で開催：**未だバドミントンは日本体育協会に加盟しておらず、バドミントンには国体への参加資格がなかった。

1947 昭和 22 年　**日本の学制 6・3・3 制となる：学生連盟（学連）、高校体育連盟（高体連）、中学体育連盟（中体連）、小学生連盟の形成へとつながっていく**

1947 昭和 22 年　川口清※、大阪 YMCA の職員となる
※大阪バドミントン協会の『五十年誌』によれば、昭和 21 年 6 月に川口氏が中国から帰国した頃は、（以下要約する）大阪では、ある程度盛んにバドミントンを行なっていた。大阪協会の事実上の設立者であり、日本協会の草創期にも大きく関わる。昭和 22 年頃川崎氏に「大阪のバドミントンを育てる世話を」と勧められ、千鈞の重みを感じバドミントンにのめり込んで行った」と述懐する。前述の様に 1954（昭和 29）年第 3 回トマス杯アジア地区予選（初参加）の監督を勤める。

1947 昭和 22 年　**5 月　9 日**　第 1 回東京都民バドミントン選手権大会開催（東京第二女子師範※）
男子ダブルス決勝　　廣田・藤井（東京）　15-6,15-9　相馬・秋元（神奈川）
女子ダブルス決勝　　中村・川俣（神奈川）２－０　　小仲・岡　（神奈川）
混合ダブルス決勝　　岡　・森　2(8-11、11-9、11-1)1 新開・山田（東京）
女子シングルス決勝　中村（神奈川）2(8-11、11-6、11-6)1 川俣（神奈川）
男子シングルス決勝　岡（神奈川）２（15-3、15-10）0　藤井（東京）
この試合の状況は NHK 第二放送で宮澤により「戦後に素晴らしい発展」と題して放送されたという。この大会の後で第 1 回全日本バドミントン選手権大会を開催※
※東京第二女子師範：1908（明治 18 設置の官立師範学校、昭和 18 年国立に移管、男子部が置かれ、昭和 24 年 学制改革で東京学芸大学の母体となる。
出典：**宮澤宏之著「特別企画①日本バドミントンの歴史＜上＞」、バドミントン・マガジ ン 1982.2, pp.68-70.**

岡　淳一

左；廣田秀俊、右藤井光男

1947 昭和 22 年 **10 月 4 日**　**全日本学生バドミントン連盟の第 1 回設立総会を東京 YMCA で開催：関東学生バドミントン連盟が慶応義塾大学（六角勉）、明治大学（梶間悟郎）、立教大学（鷲塚圭司）の加盟を得て、3 校で発足**

慶應

明治

立教

1948 昭和 23 年

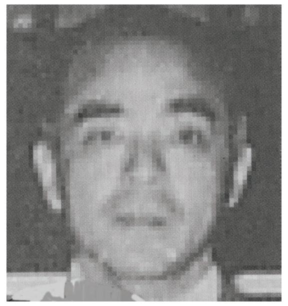
寺尾琢磨
(学連会長に就任))

法政大学が御徒町駅近くの小学校で練習を開始する、
中野 (法政大)に学連への参加を要請、関東学生の加盟校４校とな る。

法政

慶応義塾大学 寺岡部長が学生連盟会長に就任。
同連盟初代委員長に六角勉（慶大）
第１回関東大学リーグ開催：優勝；慶大、２位；明大、３位；立教

川口清が大阪 YMCA 体育事業を担当 となる (大 579)



角田賢三
日本バドミントン協会
第２代理事長

角田賢三日本バドミントン協会第２代理事長就任（任期昭和 23~31 年）
『バドミントン界』No.5,p.9,1970 に.「先輩からの激励：奇跡と幸運はない」と題した氏の文章が残されている「トマス杯が始まるたび、初参加の思い出が浮かんでくる。先般は、この時対戦して敗れた香港に文句のない完勝。このニュースを聞いたときは、溜飲が下がる思いだった。女子はすでに二回優勝、男子の奮起を切望したい。二月のゾーン決勝には堂々と勝ち、さらに進んでト杯そのものをも手中に納めて欲しいものだ。スポーツの世界では優勝して初めて大きな顔ができる。私が学生に口ぐせのようにいっていることば、それは “試合には奇跡と幸運はなく実力がすべて。実力は人間能力のギリギリの線までの壮烈な練習によって生まれる。戦う以上は何が何でも勝て” 、健闘を祈っています。(角田氏は後に日本協会参与、日本が初参加した第３回大会の監督を務めた)。
なお、著書に『全国職場体育主幹会議 14 年の歩み：特集・戦後体育の 20 年･･- 回顧と展望：正木健雄編（p.713-716） 』がある。

７月〜８月 第 14 回オリンピック大会ロンドン開催；日本に参加資格がなく、
古橋・橋詰ら水泳陣泣く

秋季に入って東京 YMCA バドミントンクラブ員、東京都民大会で活躍
男子複２位（山田康夫・露木重夫)、女子複優勝（新開章子・荒井貞子)、混合複優勝（山田康夫・新開章子)。

東京 YMCA と横浜 YMCA の會員「親睦バドミントン大会」を
横浜 YMCA で 開催（東 331）

1948 昭和 23 年 **11 月 10 日「東京クラブ対 YMCA の初試合」**東京クラブ（引揚者同好会）の試合申し込みを 受け、横浜 YMCA チームは全員勇躍上京したが、東京クラブは僅か２名の出席で、試合は成立を見ず、やむなく横浜会員の練習に終わった。しかし、(次の事項に続く)

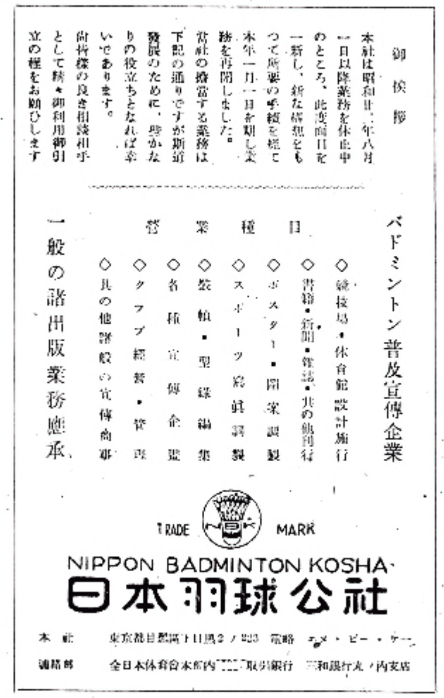
1948 昭和 23 年 **11 月 24 日** 東京クラブ員数名が突然来浜、平沼コートで戦後第１回の練習試合を行なった。横浜は急なことでメンバー不揃いで居合わせた人員で対戦したが、東京クラブは *(相手？)*（欠落部分） でなかった。

1949 年和 24 年 3 月 1 日 日本バドミントン協会前理事長・元国際選手 宮澤宏之著**『近代スポーツバドミントン - 最新国際競技規則書（付）-』全日本バドミントン體育** が刊行される。この時点で既に宮澤宏之は日本バドミントン協会理事長ではないが、バドミントンの普及活動を並々ならぬ意欲で継続している。

同書 目次

序 ‥筆 者
バドミントンの発達史‥全日本バドミントン體育會‥3
バドミントンの特徴 ‥宣伝委員會 ‥7
體育會の組織 ‥組織委員會 ‥8
諸用具について ‥資材委員會 ‥9
指導者派遣について ‥指導委員会 ‥10
ダブルスコート 圖解 ‥11
シャトルコック ‥12
ゲーム ‥13
サーヴィス ‥14
プレー ‥17
一般規定 ‥18
シングルスコート圖解 ‥20
細則 ‥21
體育會の規約 ‥27
スポーツマンシップ ‥今村正雄 ‥30
バドミントンの動向 ‥宮澤宏之 ‥34
語釋 ‥36

※ 表紙の村上忠治のスタンプは本資料の所持者の記しで著者印ではない



NIPPON BADMINTON KOSHA
バドミントン普及宣傳企業 日本羽球公社
御挨拶
本社は昭和 22 年８月１日以降業務を休止中のところ、此度面目を一新し、新たな構想を持って所要手綴きを経て、本年１月１日を期して業務を再開しました。當社の担當する業務は下記の通りですが騏道發展のために、些かなりの役立ちとなれば幸いであります。なお皆様の良き相談相手として精々御利用御引立の程をお願ひします。
バドミントン普及宣傳企業 営業種目
◆競技場・体育館設計施工
◆書籍・新聞・雑誌・其の他刊行
◆ポスター・圖案調整
◆スポーツ写真調整
◆装幀・型録編集
◆各種宣傳企畫
◆クラブ經營・管理
◆其の他諸般の宣傳商事
一般の諸出版業務應承

左上の広告らしき頁の内容を書き出すと上記のようになる。**公社**とは一般に国家的な事業経営のために設置する特殊な企業で、国が全額出資し直接監督するものであるが、そうしたものがバドミントン関係で現実に存在したかどうかは甚だ疑わしい。

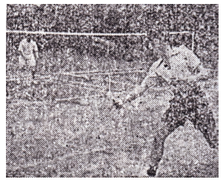
本書の p.6 で宮澤は“この組織”が ‘バドミントン活動の中軸機關’ だとする趣旨を説明、スポーツはレクリエーショナルの大局的見地から全ての勤労社會層を對象にバドミントンの普及啓蒙運動と、これに協調する諸實践團体を基本的に指導し援助することを目的とし、放縦且つ國民的廣範な国際組織を持つ**全日本バドミントン體育會**※が中央にあります”と言い切る。
昭和 24 年３月１日編 全日本バドミントン體育會※ ※ この組織の誕

本書に使用された写真の一部

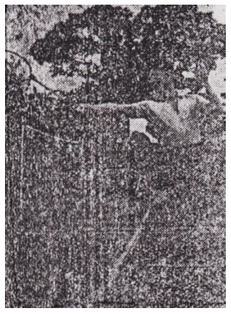
バックハンドヴォ～レー

フォアハンドヴォ～レー

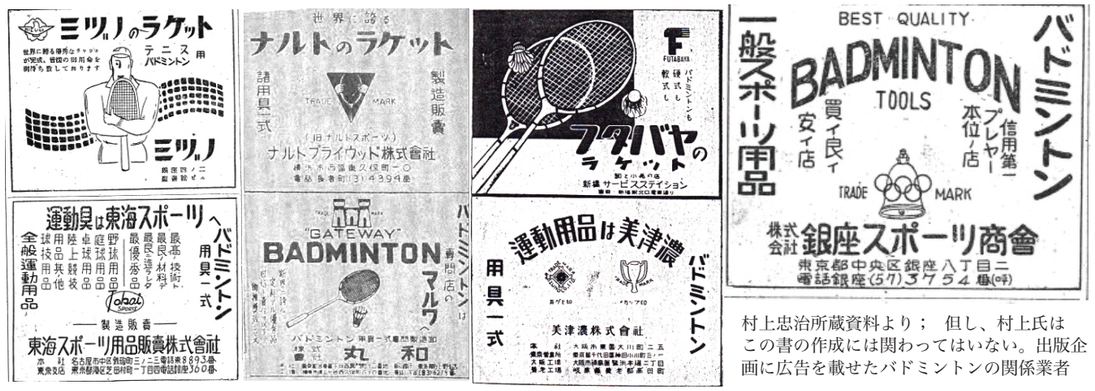
フォアハンドヴォ～レー
フィニッシュ



バックハンド



生の動機と経緯は全くわからないが、宮澤が払子（ほっす）を振るって発足させた全日本バドミントン協会をさらに別の目線でリードするような立場から日バと同じ目的を合わせ持つ機構をもう一つ組織したことが口上の意味として辛うじて読み取れる。この書の中で、宣傳委員長今村久は「スポーツは多種多様にあって、其々競技會として行われてゐますことは周知の通りですが、バドミントンも矢張り種々の競技會を持っていますから立派なスポーツであることはもちろんであり、また青年にかぎられたものではなく、一般大衆のレクリエーションゲームとしても公的ですから、風雨の制約を受けない限り何所でも出來ます。然し我が國の様に天候不純なところでは全く無風状態な南洋諸国とは異なって、何時でも屋外でとは言えませんが大体４月から９月までを屋外、10 月から翌年の３月までを屋内という具合に分けて行うことが適當であります。 コートは余り廣い場所を要しませんから、ビルディングの屋上や公園の空地或いは裏庭等を活用し、正式なゲームはできなくとも、レクリエーション運動の叫ばれている折柄、老若男女が眞に余暇善用の氣晴し遊技、若くは家庭團樂ゲームとしてよりよき効果を得られるよう御奨め致します。尚正式の競技會は屋内で行うを公式とされてゐますが、屋外で行う場合と趣きが多少異なることを御留意願ひます」。 さらに組織委員長となった宮澤宏之は「体育會の組織」と題して、「**全日本バドミントン体育會**は名の示す通り、我が邦に於けるバドミントン團体の**心木**（心棒）でありますが、實質的には**国際バドミントンコーチ協會**（実在しどうかわからない）であります。昭和 23 年 10 月 1 日編の性格論に於て「アマチュアでもなければまたプロでもない中間的なもの」であるとはセミ・プロの意に曲解する向きがありますので、改めて立場を糺しますが、ただ競技することのみが目的でないので常に煩雑な問題を起こし勝ちな**利己的主義を排除するために組織された國際アマチュアバドミントンの自主團体**であることを明確にしますと共に國内のレクリエーション運動に協力し、もって眞のスポーツマンシップの涵養に努めるを最大の目的とするものであります。因ってその組織も國民的且つ純民主的な國際組織で、形式上の拘束と規則に拘束される心配のない自由組織体でありますことを強調致します。 尚當會は積極的な地方團体の熱意と協力によって組織されたもので、既に普及啓蒙運動の下部組織も完了して、革新的な中央連絡機關的**新**体制を整えて、目下活發に躍動中ですが國内の手近な國際親善と對外的飛躍の速やかならんことを期待されてゐます※※。【※※この書が出版された時点で既に宮澤は日本バドミントン協会には所属していない。指導者の組織を別途立ち上げ、新たに指導・強化や組織の形成（中央と支部構造からなる）強化を図ろうとしたのだろうか。意図は何処にあったのかは掴めない。】



村上忠治所蔵資料より； 但し、村上氏はこの書の作成には関わってはいない。出版企画に広告を載せたバドミントンの関係業者

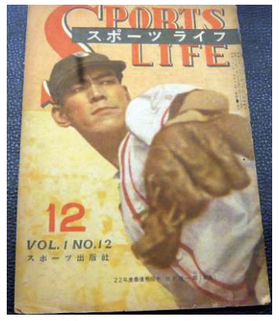
1949 昭和 24 年　東京 YMCA 本館・体育館の米軍による接収が解除され、改修して使用を再開
安村正和、東京 YMCA 体育主任主事となる
9 月　東京 YMCA 体育館修理終わり、会員に開放：バドミントン活動再会
10 月　横浜 YMCA 会館も補修完了、会員にプログラムを開放
12 月　京都 YMCA、バドミントンクラブ発足（京青 83-5）

1949 昭和 24 年　**10 月**

大会プログラムの一部

バドミントンが第４回国民体育大会の公開競技となる。
バドミントン会場：東京千代田区 YMCA 体育館、津久土小学校体育館
単優勝；廣田俊秀、２位；佐藤保、３位；不明、
複優勝；廣田俊秀・藤井光男組、
【日本バドミントン協会編『創立 50 周年記念誌』p.15 に第４回国民体育大会バドミントン競技プログラム』の一部が紹介されている。】
日本バドミントン協会事務所　東京・神田 YMCA 内に
会長：山田文雄、副会長：白石兼作、松葉徳三郎※、理事長：角田賢三

11 月 23 日　日本バドミントン協会、日本体育協会に正式加盟を申請
日本バドミントン協会初の全国総会（於横浜市）



当時のライフ・スポーツ誌。残念ながらバドミントン掲載号を発掘できなかったが、こうした記事が掲載されたことは、スポーツへの関心や情報が社会の中でどのような位置付けを占めるものになっていたかを裏付けるものであろう。

【この時期の概況】
日本バドミントン協会組織拡充化の軌跡を問う：1948(昭和 23 年 1 月)に入り第１回都民大会、３月東京都対神奈川県の社会人対抗、さらに５月第１回全日本バドミントン選手権大会が行われるに及び、**雑誌『スポーツ・ライフ』誌**（スポーツ出版）はその９月号に“バドミントン明るい将来”と題して「都民大会では進駐軍の優秀選手 24 名、インドネシア人 10 名の参加も合わせ、出場選手 204 名、さらに全日本選手権大会にも 200 名の参加選手を見るという成功を収めた」報じている。

こうして、東京都を中心にバドミントン普及の機運は高まり、同年（**昭和 23 年 12 月 24 日**）**（財）日本体育協会へ正式加盟が認められた**※。（※このことは日本バドミントン協会が既に組織されていることを意味する）、このことを 1949 年の第４回国民体育大会より正式種目になったと阿部・渡辺著『バドミントンの歴史に学ぶ』日本バドミントン指導者連盟刊.2005 年 - に記したが、故龍井氏より記述が正確さを欠くとの指摘があった。「**第４回国体からバドミントンが正式種目になった」されているがこの年は“オープン競技としての参加”**で、**翌 1950 年愛知国体から正式競技として参加することになった」とするのが正しい。**併せて、5

月 9 日付「朝日新聞縮刷版」のスポーツ欄ではその会場が“二師女子部”とあり、同 10 日付スポーツ欄でも“第二師範（現在の学芸大)”となっている）となっている」ことも指摘して頂いた。謝して訂正し、オープン競技実施会場の確認が宿題として残された。

国体参加を契機として、普及はさらに加速され、次々に各支部連盟の形成を見るに至り、それぞれの分野別の全国大会が開催されていく。

すなわち、

1948 昭和 25 年　**秩父宮同妃賜杯争奪第 1 回インカレ　（横浜市）**
1949 昭和 26 年　**高松宮同妃賜杯争奪第 1 回インターハイ　（横浜市）**
1952 昭和 27 年　**労働大臣杯争奪全日本実業団選手権　（東京都 ）**
1BF(國際バドミントン連盟)へ 21 番目の加盟国として承認される

栗本義彦（1897-1974）大正 13 年生まれ。東京高師卒、熊本大学助教授、熊本県体育主事、東京高師を経て文部省へ。スポーツを通しての平和な民主国家づくりに貢献。昭和 25 日本体育大学学長。「スポーツマンシップを国民の中に」を合言葉とした。

同じ頃（日時不明；宮澤が理事長職にある時だから昭和 21-22 年内の事**）宮澤ら、文部省を訪問、日本バドミントン協会の創立を報告し、栗本義彦文部省保健体育課長と面識を得る。**

早速、文部省の中庭でテニス・ネットを張って、バドミントンを紹介。西田泰介、朝倉事務官を紹介される。これを機に、天皇・皇后杯争奪全日本総合選手権大会、秩父宮杯・同妃杯争奪全日本学生バドミントン選手権大会、高松宮杯・同妃杯争奪全日本高等学校バドミントン選手権大会の開催、国民体育大会への参加が推進されていく。

【当時の指導者有志が栗本氏への感謝を込めて一冊の指導書を執筆刊行した。栗本義彦監修『バドミントン教本』1964 年 5 月 15 日、不昧堂】の出版である。執筆を担当したのは伊藤基記（熊本女子大）・相馬武美（青山学院大）・今井先（日本女子体育大）・菊池利明（早稲田大）で、これを受けて当時の文部省体育局長前田充明（1910- 2003）氏が、巻頭で次のように「推薦の辞」を寄せてくれる。そこには、新興バドミントンの意義と将来の課題が提示されていた。

伊藤基記
昭 19 東京高師卒、熊本女子大助教授、技術を執筆

相馬武美
昭 19 東京体育専門卒、青山学院助教授、歴史を執筆

菊池俊明
昭 30 早稲田大卒、早稲田大講師、福井政泰と共同執筆

今井　先（はじめ）
昭 10 青山学院卒、日本女子体育大バドミントン部監督、競技規則・審判法・コーとマナーを執筆。

執筆を担当した。４名の指導者

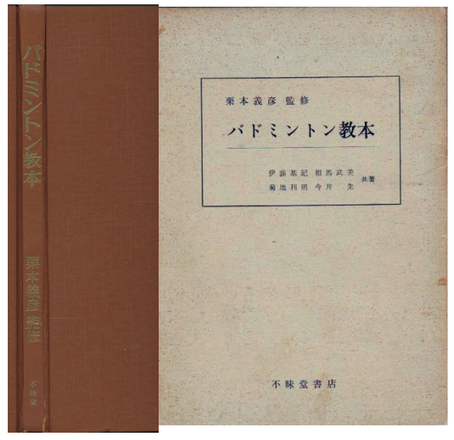
【前田充明：推薦の辞】バドミントンは日本では比較的新しいスポーツである。その上、体育指導者養成所学校の実技の中に、必修のものとしての座を占めえないまま今日に及んでいる種目である。 体操、水泳、陸上、さらにバレー、バスケット、サッカーなどのように、体育指導の水源地に培われた歴史を持たないのである。 従って、学校体育の授業の中に正式に採り上げられ、適切な指導が継続されるまでに至らず、選択科目として部分的に取り扱われ、

前田充明（1910-2003）東京帝大卒、スポーツを国のため、郷土のためにという戯れの言葉を嫌い、クーベルタンの精神に強く共鳴。アマチュアスポーツの基調となる肉体的努力と道徳的資質を若人の中に振興することに人生の課題を見た。J-GLOBAL より要約。

また放課後のクラブ活動に任されている現状である。 オリンピック種目に数えられていないことも普及の上の大きい壁であるといえよう。 にも拘らず、戦後にやっと歩き出した日本のバドミントンは、まるで雑草のような繁殖力を以って、その愛好者の人口を拡大し続けてきたことはご承知の通りである。国民体育大会に 46 都道府県ことごとくその代表を送り、全国的または地方のスケールを以って、数多くの行事が、日程を埋め尽くしている。各地に建設された体育館の殆んど全部が、バドミントンのコートを持ち、白い羽が恰も平和のシンボルのように飛び交う情景は微笑ましいものである。 **熱心な愛好者達が、先進の屋内種目によって既に飽和状態に近かった体育館の空気の中に、厚い壁を破って、静かに侵入していった努力が次第に身を結んだものといえよう。** このことはまた、一面、バドミントンというスポーツそのものが、近代人にアピールする何物かを内蔵していることを実証するといえる。

老人、女子子供にも十分楽しめるとともに、青年の溢れる体力でもカバーしきれないスリルと烈しさを含んだ運動量を要求するという幅の広さがこのスポーツの魅力の根源であろう。 今般“バドミントン教本”の題名を冠して、伊藤、今井、相馬、菊池の 4 氏が共著を持って、この近代感覚に富んだスポーツの解説に筆をそめた。内容を一読し終わって、それが、この新しいスポーツを解明して余すところがないのに満足するものである。 主として大学の教科書的内容を狙ったものであるが、一般の指導書としても最適なものであると思う。 4 氏の履歴が示す通り、いずれも自らコートに汗した体験の深さの上に、高校、大学に教鞭をとる幅の広い体育、スポーツに対する知識が経験となって、バドミントンを正しく位置付け得たことは貴重である。一面、過去 10 数年の実際指導の体験が読者を惹きつける魅力の 1 つであることも否定できない。学校体育、社会体育の指導者は勿論、学生や一般愛好者の必読のスポーツ指導書として、推薦する所以のものである（昭和 39 年？月 3 日)。

本書が発行される昭和 39 年以前に既に下記のようなバドミントン指導書が刊行されていたが、いずれの内容も当時知り得たバドミントンの断片的な歴史と日本に紹介される前後の出来事、初期的で想像的な解釈による指導 KNOW HOW に触れたのもので、バドミントンとどのように出会うかという理念を必ずしも含むものではなかった。本書の内容も、全体にわたって平易なバドミントン ・ゲームの紹介に終わっているが、発刊の意を受けた前田の「前書き」には、前田がバドミントンに何を期待し、どのように出会えばよいか、その方向性が優しく語られている。時代を代表する稀有の書である。



栗本義彦監修『バドミントン教本』
前田充明「推薦の辞」。
伊藤基樹・相馬武美・菊池利明・今井先 共著、不昧堂書店、1964 年

【当時国内で刊行されていた代表的なバドミントン指導書】

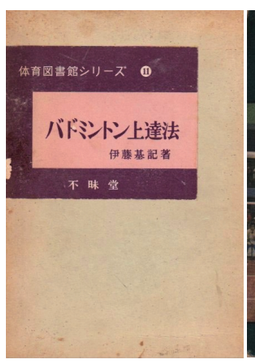
1) カール・H・ジャクソン＆レスター・A・スオン著『バドミントン入門』、今井先訳、ベースボール・マガジン社、1957(昭和 32)年 7 月.

2)伊藤基記著『バドミントン上達法』不昧堂、1959（昭和 34）年.

3)川端昇市著『バドミントン競技』旺文社、1960(昭和 35)年.

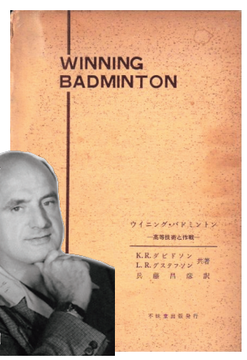
4)K.R.ダビドソン※& L.R.グスタフソン著；兵藤昌彦訳『ウイニング・バ ドミントン 』不昧堂、1960(昭和 35)年.

1）バドミントン入門, 1957（昭和 32）年.技能の図解に特徴.



2)伊藤基記著『バドミントン上達法 1959 年. 国際試合のイメージを中核に技能解釈

3)川端昇市著『バドミントン競技 』1960（昭和 35）年.学生の指導経験を整理、導課題を紹介。；日バ第 5 代常務理事、ト杯監督、アジア大会監督等。立大 0B



1)ダビドソン著『ウイニング・バドミントン』、1960（昭和 35）年. 習得過程からストロークを課題化し、図解する。

【新生日本バドミントン協会の地道な普及指導活動】

1947 昭和 22 年　8 月

瀬尾実（株）東海スポーツ取締社長は戦後の青年層の指導に心を砕き、仕事上からも、是非近代スポーツのバドミントンを普及させたいと上京し、設立 1 年目を迎える日本協会に講師派遣を依頼（愛知県バドミントン協会『50 年誌』）。

９月 21 日　瀬尾実の講師派遣要請に基づき日本バドミントン協会は、第１回指導者講習会を名古屋市第２高等学校（中区新栄町市立女学校；現中央高校）で開催。

東南アジアから帰国した水谷国広をはじめ、長谷川参三（中村小学校校教員）等社会人数名と中川中学校（現松蔭高校）の生徒 14、5 名らが参加。

＜資料教本の表紙に載せられたバドミントン の概要＞

バドミントンは軽快高尚なスポーツで、我国古来のオイバネに似かよったものであるが、ゲームがスピーデーでありプレーヤーは機敏な動作が必要とされる立派な現代スポーツであります。オイバネゲームが羽子板を使うのに對してバドミントンはテニスのラケット同様の小型のものを用ひるので繊細ながらもガットのハジキを利用して好きなプレーを楽しむことができます。

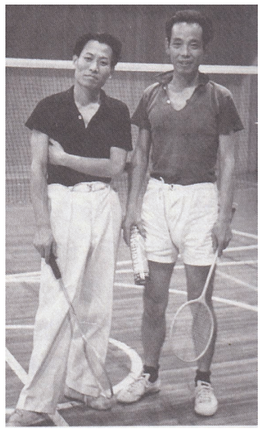
バドミントンは英国、米国及び南洋諸国間には既に相当流行してをり、シャム蘭印等では国技として取扱われている程で、今や世界共通の競技にまで発展せんとして認められようとしています。

愛知県においてもいち早く協会を結成し、各地で指導者講習会を開催し普及につとめ、協会加盟団体も逐次増加しつつあります。同好者各位の一人でも多く協会に加盟され本スポーツを楽しまれる様切望致します。尚詳細は下記の本部までお問い合わせください。

＜名古屋市中区鉄砲町 3-23 東海スポーツ内愛知県バドミントン協会事務所
電話東④ 8893 番＞

講習会で使用された資料教本
愛知県バドミントン協会『50 年誌 p.19』より

愛知県バドミントン協会作成の同資料は、「創立まで」と題した「愛知のバドミントンの芽生え」P.19 掲載のパンフレットの紹介である：この講習会で使用されたパンフレットは愛知県体育協会、日本バドミントン協会東海支部設立準



昭和 33 年当時の水谷氏（右）と愛知県協会副会長青山俊朗氏（左）同県協会『50 年誌』p.172,

備委員会共編「新興大衆スポーツバドミントン規則抜粋」として書かれたもので、バドミントンの楽しみ方と歴史を簡単に紹介、「愛知県においては本競技をレクリエーション運動の種目として一般の人を対象に普及奨励を図るとともに社会体育および学徒の課外運動として奨励し健全な発展を切望します」と結んでいる。 ‥‥ 看過できないのは次の一節「**水谷国広氏の普及活動**」で、「**東南アジアから帰国した水谷国広氏が、当時中村小学校の教員であった長谷川参三氏を訪ねて小学校の講堂の使用を依頼し、先生方と週２・３回の練習を始めた。**そこへ街の人や中川中学校の生徒が加わって来たのが愛知のバドミントンの始まりとなった」と、日本スポーツ新聞社発行の『バドミントン・マンスリー 11 号；37 年 4 月発行』に「対談」の形で掲載されており、「水谷氏は映画配給会社に在職していた関係でセレベス島やバリ島へ派遣され、そこは大変バドミントンが盛んで、教えてもらいながら毎日のように楽しんだ」と紹介されている。

愛知県協会設立に尽力した人達、
愛知県バドミントン協『50 年誌』p.19,

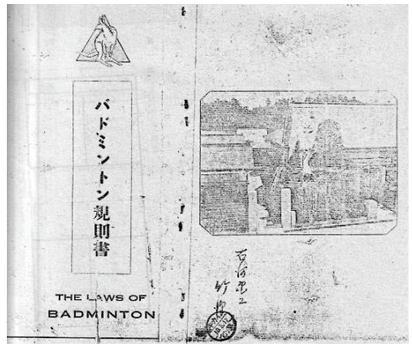
10 月 5 日　日本バドミントン協会講習会、碧海郡刈谷町（現刈谷市）の亀城小学校で愛知県・同体育協会指定碧海郡刈谷町レクリエーション大会の一環として模範演技を披露する‥‥引き続いて、

翌 6 日　同講習会　丹羽郡犬山町（現犬山市）の大日本紡績の体育館で実技講習会を開催

（愛知県バドミントン協会編『50 年誌』にこれらをフォローした水谷国広・長谷川参三の普及活動の様子がともに紹介されている。この講習会でも前述のパンフレットが使用されている。

【愛知バドミントン協会『50 年史』p.19, 1998 (平成 10) 年 10 月】

1947 昭和 22 年　8 月　**日本バドミントン協会、竹澤猛※の要請で実技講習会を私立鎌倉高校で開催**



※竹澤猛に関係した貴重な歴史的資料が 1 点残されている（先に我国において最初に作成されたナルト・スポーツの『バドミントン規則書』を紹介したが p.48)、その物件の最初の持ち主は竹澤であった。これを村上氏が預かって保存しておられたのだ。資料としては劣化しているが、同書の裏表紙に元の持ち主の名前が手書きで記されており、この資料の保持者が「昭和 17 年 3 月 10 日キカイ□」の文字が刻印されていて「古河電気・機械部の竹澤」のものであったことが推測される。

1947　昭和 22 年　　10 月 30 日 午後 1 時　金沢市公会堂で第 2 回国民体育大会(石川県)に来ている各都道府県体育課長の参加を得てバドミントンの模範演技と指導講習会を開催。
出場選手：宮澤 宏之、津田吉太郎、岡淳一、相馬万吉、秋山幾雄、 兵藤昌彦の 6 名。

1948　昭和 23 年　　川口清※、大阪 YMCA 体育事業を担当（大 579）

※　川口清について
　この 1949（昭和 24）年発行の Betty Uber 著　That Badminton Racket は、 1954 年 11 月 7 日香港開催の第 3 回トマス杯アジア地区予選（初参加）の日本チーム監督を務めた大阪バドミントン協会の**川口清氏**が、世界のバドミントンを知るために本書等数冊を購入、事前にこれを読まれた跡が残されている。川口氏の後、青木昭二氏（大阪バドミントン協会副会長をされた）がこれらの遺産を後世に伝えようと保存しておられた。

初期における大阪のバドミントン界をリードした川口氏を始め、川崎策實氏、神戸の石渡俊一氏等、原書を手にしてルールや技能を習得される方々がおられたことが特筆される。

1948　昭和 23 年　　法大が御徒町駅近くの小学校で練習を開始、
法大（中野）に学連への加盟を要請。学連加盟が 4 校となる。

1948　昭和 23 年　　秋季　　東京 YMCA バドミントンクラブ員、**東京都民大会**で優勝。
男子複 2 位 山田康夫・露木重夫
女子複優勝　新開章子・荒井貞子、
混合複優勝　山田康夫・新開章子

1948　昭和 23 年　　第 14 回オリンピック競技大会ロンドンで開催（日本参加できず）（9 オ事 207）

1949　昭和 24 年　　東京 YMCA 本館・体育館接収・解除 → 改修・使用再開
安村正和、東京 YMCA 体育主任主事となる
1949　昭和 24 年　　9 月　東京 YMCA 体育館修理が終わり会員に解放；**バドミントン再開**。
10 月　横浜 YMCA 会館一部接収解除。
12 月　横浜 YMCA 会館補修完了、会員にプログラムを解放
京都 YMCA、バドミントンクラブ発足（京青 83-5）

【こうして、東京都を中心に幼若とはいえバドミントンの組織的な普及が徐々にではあるが進められていく】

1949　昭和 24 年　11 月 23 日（財）日本体育協会へ正式加盟が認められる
（日本バドミントン協会が実態を持つ協会として既に組織されているという事）、
第 4 回国民体育大会より正式に参加することになる（とは言え、この年は公開演技としての参加にとどまったのである）。
しかし、この国体参加を契機として、普及はさらに加速され、次々と各連盟の結成を見るに至ったのである。すなわち、

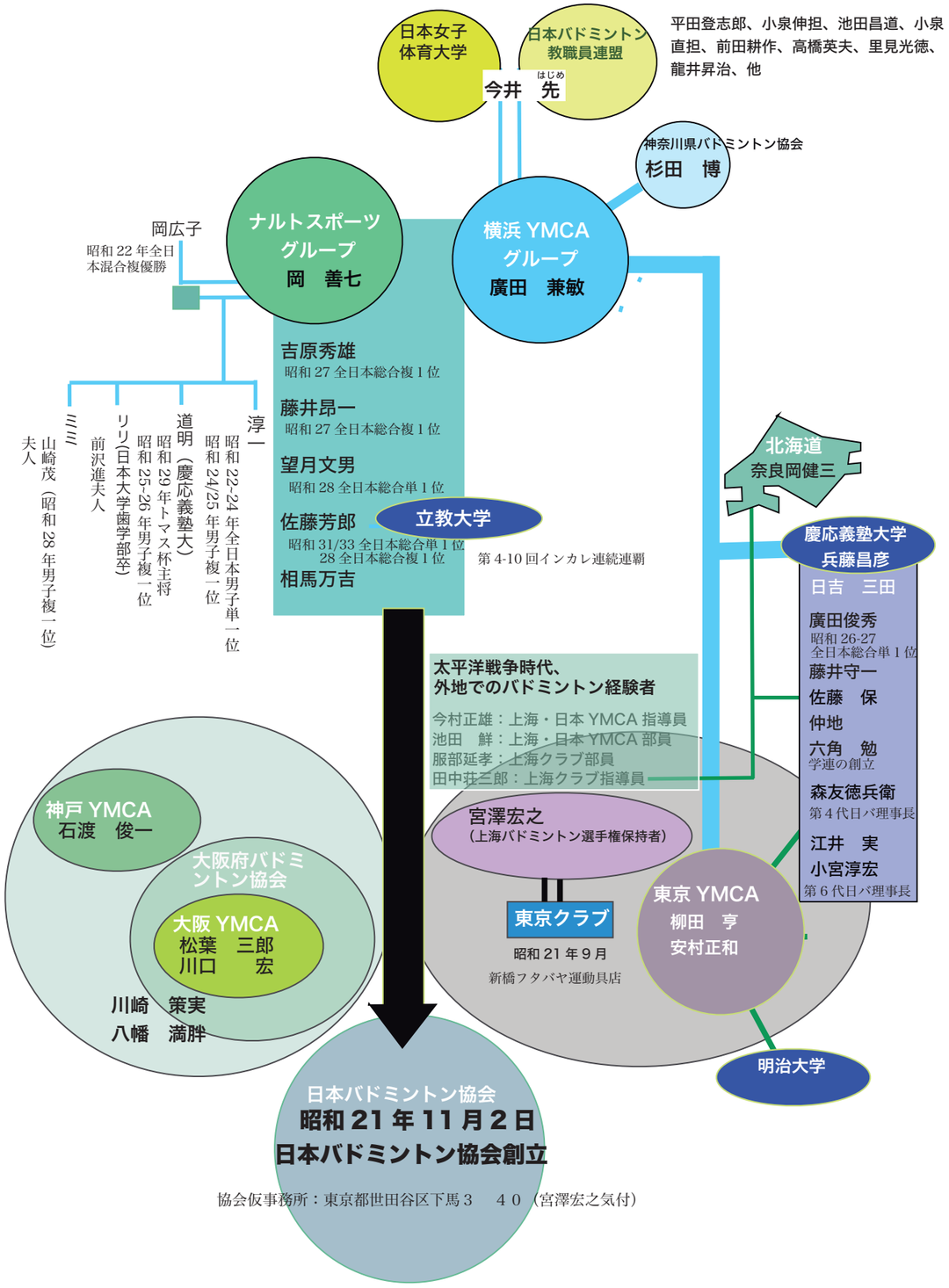
1950　昭和 25 年　　秩父宮杯※争奪第 1 回インカレ（横浜市）：学生連盟の誕生

1951　昭和 26 年　　高松宮同妃杯※の下賜をたわまり、**第 1 回インターハイ**（横浜市開催、高体連バドミントン）　更には、**第 1 回実業団大会**（東京都）、全日本実業団連盟結成と、矢継ぎ早に各全国連盟が結成され、全国大会が開催されていくようになる。
更に、
伊澤三郎著「栄誉ある高松宮杯御下賜の裏ばなし」『バドミントン 30 年史』pp.174-175、や、全国高等学校体育連盟バドミントン部による『1981 年年報』に当時のエピソード（昭和 25 年）が紹介されている。
このことは亦、日本実業団バドミントン連盟の『35 年史』p.8 並木万次郎著「故秩父宮妃殿下を忍んで」等でも触れられている。

1951　昭和 26 年 12 月　IBF(国際バドミントン連盟)へ正式加盟の手続きを完了し、
1952　昭和 27 年　　IBF の 21 番目の加盟国として承認され現在に至っている。

【本書の目指した内容はここまでで終わりとする。】

日本バドミントン協会発足期に関係した代表的な人物と主な組織の関係図



終わりに

ここまでの歴史を通して我国のバドミントン界が決して忘れてはいけない人がいる。
昭和 21 年日本バドミントン協会が呱々の声をあげた時、顧問に平沼亮三（1879-1959）を迎えた。

後に、日本の市民スポーツの父と呼ばれるようになった人である。

平沼亮三を Wikipedia で検索する：

日本の実業家、政治家、アマチュア・スポーツ選手、衆議院議員、貴族院議員、横浜市長と紹介している。慶應義塾の出身で、福沢諭吉の門下生であった。戦後公職を追放されたが、その解除後横浜市長となる。大学では野球部に属し、4 番打者として活躍、野球に対する貢献と功績により 79 年に野球の殿堂入りを果たしている。全日本体操連盟（会長）、日本陸上競技連盟（理事長）、日本バレーボール協会会長を歴任、ロス五輪・ベルリン五輪の日本選手団団長を務められ、1955（昭和 30）年第 10 国民体育大会開会式では炬火の最終ランナーを務められた。その姿を昭和天皇が、

松の火をかざして走る老人（おひびと）のををしき姿
見まもりにけり

と詠んだ。その時の姿は吉田三郎によって銅像「平沼さんの像」として彫られ、横浜市内にある三ツ沢公園に建立されている。平沼氏は 1955 年スポーツ関係者として初の文化勲章を受賞しておられる。

横浜市神奈川区にある三沢公園に建立されている吉田三郎作『平沼さんの像』

日本バドミントン協会が設立されるまでのバドミントンの歴史を書くという仕事の依頼を受けた。資料検索が覚束なくなった昨今の我が身の老衰の中で、何が何と繋がり、その繋がりが次の繋がりを呼んで、バドミントンと呼ばれるスポーツが我国に芽生え、どのように協会を形成するまでに至ったのか、その道筋を辿り直してみるには大きな制約があった。残されたもの（人や物や場所や事柄）が「語る」あるいは「語られ」て、何が残されのか、それはどのような契機を経て語られ、伝えられたのか。それを吟味するには、プレーしてしまえば一瞬のうちに消えるバドミントン現象が記録され、記録された物がさらに“恣意的に語られ、伝えられて、ややもすれば我田引水に陥りがちな事どもを、ある者、ある物・ある事”と向かい合う必要があった。歴史を読むとは、こうした向かい合い（対峙）を通して、そこで伝えられたものの意味を吟味するしかないのだろう。そのための行きつ戻りつの思考の中で、事実という言葉の意味の多義性と対峙することで大きな時間を要してしまった。途中からは千葉大学の谷藤千香先生の助け（目）無しには資料検索も覚束なくなって、手助けしてもらう羽目になり、幸いな事に一旦置いた筆を再び二人三脚で執り直すことになった。それにも関わらず、未だにバトミントンの我国での発展の歴史を多くの人と共に語り合うことなぞ所詮無理で、その概要を捉えることすら出来ていない。そうした不完全さが次にバドミントンの歴史の真実を捉える一つの足掛かりになってくれることを願いながら、ここで今、私達は筆を置くことにする。

2022 年 9 月 27 日　深更に及んで　阿部

2022年9月28日　追　記

資料収集、資料整理・・・を含めて1年余を掛けた執筆を終えて、机の周辺に山のように積まれた資料を片付け始めた。すると、決して忘れてはならなかった筈の一群の資料のあることに気付いた。20-30年程前に畏友名須川学氏が渉猟してくれた我国の教育の根本的な在り方を志行していた旧高等師範学校の図書館の蔵書資料群である。その内の**月刊雑誌『體育』**のコピーにバドミントンの紹介記事があった。既に筆を終えた原稿にこれらを加え直す時間はない。そこで「追記」の形で、それを補おうと不細工な考えを起こしてしまった次第で、ご容赦を乞う。明治25~26年にはバドミントンは、既にここまで体育関係者に紹介されていた。そのことをお伝えしたかったのである。内容は稚拙だが、一部の教育関係者はその存在を確実に識って居られた筈である。その全文を以下に追記して置きたくなった。

明治26年11月25日発行、高等師範学校『體育』第210號に●バドミントン（Badminton）の紹介あり。

『體育』明治第86號

『體育』明治第98號

【紹介されていたバドミントンの内容は、以下の様である：】

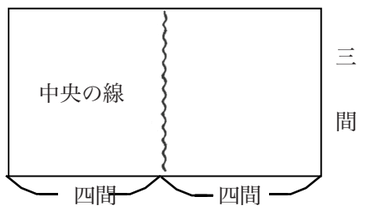
❶ バドミントン　　(Badminton)

1、由来

遊戯は三四年前より英獨に置いて盛に行はるゞものにして古来我國に行われし追羽子より轉化したるものならんか。一年前英國より歸りし人の傳へたることありしが今美滿津商店に於て製造し始めたり。動作の劇烈ならざると優美なるとを以て女子に最も適當なりとす。

2．コート

場は三間にして長さ八間なり



3、用具　用具は幅3尺位長さ三間の「ネット」、一つ。「[バドミントン」用「ラケット」　四本。羽子毬1つを要す。

4、演技　此技を行うには圖の如く各側線の中央に柱を立て5尺程の高ひ「ネット」を張り両方に各貳人宛分れ「サーブ」は場所の隅より反對の「コート」に向ひて行う。打たれたるものは其毬の落ち來たるを打ち返すなり。その毬のバウンドする事無は「ローンテニス」に異なる點とす。此審判の仕方は「ローンテニス」と同じ。

5、効能　この遊戯の特徴とするところは演技中、空を仰ぐ故肺臓に空氣の充滿するを助け視覺を養ひ四肢體幹の筋肉を充分に運動せしむるにあり殊に視覺と上肢筋との運動を一致するの好あり。

『體育』明治第98號
明治26年11月14日

安井てつ子『英国女子の體育』「・・マダムウースターバーブ（Osterberg）は教育社會には能く名の知られて居る瑞典（スウェーデン）の婦人で、倫敦（ロンドン）付近の女子體操教員養成所の長で、私の知己で御座いますが、其所では衛生、解剖、化学、整理、治療のようなことを教えへ、前に述べました瑞典流の體操、揉み治療等を練習し、實地事業などもあって、三年間で卒業し、其卒業生の俸給は学問の俸給は学問の教員とほとんど同じ事で、需要も澤山御座ります。・・・我が国でも斯う云う様に體育會に女子部を設けられて、女子體育盛んにさるゝのは宜しう御座りますが、第一都合の悪いのは服で、唯今我々が着て降ります通りのでは不便で、殊に立派な召物などを着ておられては、着物が汚れるとか、破れ易いとかで自然活発な運動をせぬ様になります。それで私の考では必ずしも特別に體操服とか、自轉車に乗る服とかを御作りにならなくとも少し運動に便利な衣服をお作りになって・・」、と筆者は序文を描き始めて居る。以来70有余年後を経た今の私達の当位置を謙虚に受け止めなければならないだろう。

柿沼修治　『体育教師の資格』

・・世には誤説を伝え世人を迷わすもの古今を通じて其如何なるを知らず教師たるもの学理と実験とより得たる一定の見識を備ひ誤説を観破し世の悪風に感染せざらんことを希ふ近世の教育家政治家法律家実業家と、稱揚せらる人の中に口には衝天驚人の明論卓説嘉言善行を説くも實行に至りては皆無にして言行一致せざる者往々あり之れ現生の大欠點なり　しかるが故に上の好むところした之より甚しきはなし一般世人之に倣ひ口のみにて實なく公義公徳の地に落つるも故なきにあらず　＜文章に句読点がないのがこの時代の特徴＞・・一教師の資格として略ほ前陳せしと雖とも直接被教育者を教訓するに寸時も欠くべからざる者左の如し（古い文体で読み難い）

第一道徳の高さと読み

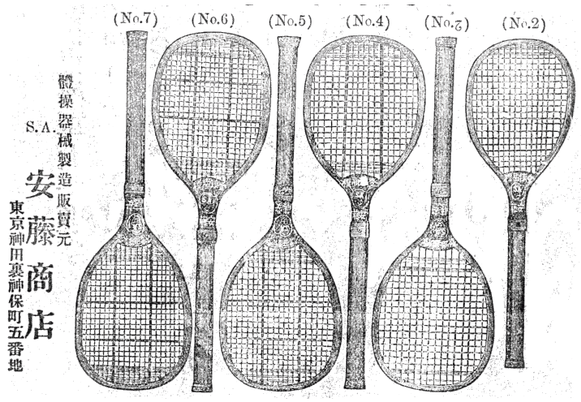
第二身体強健なると

第三其職に熱心に生徒に親愛なると　・・・

ルーソー氏曰く「熱心が天才の欠を補ふことは天才が熱心の欠を補ふに勝こと大なり」と實に然りひと熱心ならんか如何なる事業をも成就せぬことあらざるべし是教師に熱心の必要なる所以なり

とある。このように真直ぐに前を向こうとしていた時代の社会の空気の中でバドミントンが紹介されていた。

※ 同誌に掲載された広告：当時のスポーツ用具の市場における位置づけなどを垣間見ることができる。貴重な情報資料である。



第2章

バドミントン概史

～バドミントンの歴史を語ることについて考える

『バドミントン慨史』
バドミントンの歴史を語ることを考える

はじめに

歴史を語ることには、難しさと面白さが混在します。私はバドミントンと出会うと共に、その歴史に興味を持ちました。「よいバドミントンをプレーしたい」、「よいバドミントンを教えたい」と思い、それまでバドミントンに携わってきた人達が、どの様なバドミントンと出会い、どの様にバドミントンを捉え・引き受けて、どのように形あるもの・見えるもの・感じられるものにしてきたのか、尽きない興味が湧いたからです。

私は好奇心が旺盛で、大の昆虫採集マニアでもある。これまでも様々なコレクションに手を染めてきました。今、人生の終幕に近づいて、その大方をバドミントンに関わり続けてきた過去を振り返りながら、バドミントンを何か或る視点からまとめておきたい衝動に駆られています。大法螺風(おおぼらふう)に語れば、コレクション・マニアとしてバドミントン博物館の一つも残したいところなのですが、小さな博物館どころか、僅かに集めた関係図書を収納する場所も用意できずに一生を終えそうです。せいぜい用意できたのは、シャトルの径にも充たない高さの展示用の昆虫標本箱数個で、それも中古品。 **コラージュ（collarge）**というフランス語があります。「**糊付け**」という意味で、美術史の中でキュビズム時代にパブロ・ピカソやジョルジュ・ブラック等が始めた現代絵画の技法の一つです。新聞紙・雑誌などの印刷物の紙片（文字や写真)、パッケージのような色や模様の付いた紙、壁紙、木片、フィルムなどを台紙に貼る・ピンで留めるなどして作成、この様な作品を**パピエ・コレ**（papier collé）と呼んでいました。

さて、いざこの様なパピエ・コレ（papier collé）の制作に習って、バドミントンの資料を一つの小さな箱（文章）の中に並べようとすると、何を・どのように収めるのかという問題が発生、関連するものが次々に出てきて、テーマを絞ることがなかなか手怖い仕事になってしまいます。

1．「バドミントンの始まりの歴史」を考えるとは

例えば、「始まる」とはどんな元の意味を持つ言葉でしょうか。白川静の辞書『字統』によれば「始」の初形は「姒(じ)』で作り、旁(つくり)の「以(い)」の初形は「台」に始まるとして、「ム」と「口」の形にこの文字の「元の意味（力)」を求めました。「ム」は「耜(すき)」の形で、「口」は「くち」でなく「「祓い清める」ための器を表します。農耕の開始に当って「まず農具を洗い清め」「虫害をを防ぐ儀礼」を行ったことに由来するというのです。「姒(じ)」はそれを執り行った一族の姓を表すもの、偏(へん)の「女」がそのことを表しています。

私達は誰もが事に臨んで「すっきりした・きりの良い始まり」を望むものです。しかし、問題なのは、この「始まり」というものに「スッキリしたものを求める心」が、「バドミントンの歴史の始まり」を考える時にも、始まりは押し並べて「スッキリしていた」と思い込

んで、歴史そのものを歪めてしまうことがあるのです。

さて、バドミントンの「始まりの歴史」ですが、調べれば調べるほど、すっきりしないことがわかってきます。そこで本論の‘はじめ’では、二つの「スッキリしない歴史」の話をしようと思います。一つは「バドミントン誕生の歴史」について、もう一つは「我国におけるバドミントン活動の始まりの歴史」についてです。

「**バドミントンの誕生の歴史**」がはっきりしない理由は、古い昔から世界の様々な地域に様々な「羽根つき遊び」があって、それらが発掘される度に、それぞれの場所で「これがバドミントンの起源である」と喧伝されてしまうことによります（註１）。バドミントンは或る日突然に忽然と誕生したのではなく、「羽根つき遊び」が何世紀にも亘（わた）る発展・継承の歴史を通して誕生してきたものです。難しいのはこの「誕生」という言葉の意味をどの様に解釈するかです。「バドミントンが誕生した」ということと「バドミントンの様なゲームが誕生した」ということは、明らかに違う。そこに何らかの繋がりを見るか、それを切るか、始まりを決めることはなかなかに難しい課題です。

図1. Battledoor and Shuttlecock（羽根つき遊び）の起源をチベットと紹介、GRIND YOUR COFFEE AT HOME ARBUCKLE BROS の No.39.
この問題のカードは 50 枚からなる“諸民族の余暇であるスポーツとその歴史の挿絵カード・シリーズ”の一枚。

註1） **図１**は 20 世紀初頭のアメリカのコーヒーの景品カード No.39 で、素敵なカードに接した多くの顧客の心をこれらをシリーズで集めたいという衝動に駆り立てました。チベットで羽根撞き遊びが知られれば、忽ち「バドミントンの原型はチベットにあった」ということになる。これはその一つで「コーヒーの**おまけカード**：Fifty Cards giving a pictorial History of the Sports and Pastime of Nations. (U.S.A.)」である。20 世紀に入ると多色刷の印刷技術が普及し、色刷りの小さなカードが様々な商品の景品として付けられ、これが消費者の購買意欲を喚起させました。

そこで、羽根つき遊びでなくバドミントンであるための必須条件を考えてみます。まず、1）シャトル、次に 2）ラケットが必要です。さらに 3）ネットとコートが必要でその高さ・大きさを定めなければなりません。こうした約束事は既に数種類はあったであろうことが各々のルールの存在を窺わせます。それではこの三つの要素だけでバドミントンが成立したと言えるでしょうか。さらに 4）ルールの存在が必須です。それでは、この四つの要素でバドミントンが成立するでしょうか。５）クラブ（メンバー；仲間＋活動空間＋活動資金＋活動時間）が要る？、６）協会が要る？、７）何某かのバイヤー（継続的な用具の供給者が要る）がいなければ活動は継続できないでしょう。いや、それ以前に８）参加できる大会が必要ではないか？等、「バドミントン」として区別されるには、羽根を打ち合って「はい、バドミントン！」とは行かない様々な要件が揃う必要があります。

このような変わる要件・多様な条件の何処を捉えて「バドミントンが誕生した」と定義するのでしょうか。前述のような難しい疑問が生まれてくるのは、こうした諸要件に関わる諸条件の歴史のじわじわとした進み方によることがわかります。この進み方を詳細に吟味するには膨大な学問的研究が必要です。ということは、これまでバドミントンの歴史研究は、未だ十分に行われていなかった、それだけ研究が難しかったとも言えるわけです。

そこで「はじめに」で提案した様に曖昧さを折り込み済みにする**“コラージュ※”**という**“貼り込み技法”**を使って、歴史の痕跡を標本箱の中に並べるかのように、バドミントンの歴史を概観してみようと考えたのがモニカ・クラッカーです。以下その考えを見てゆきます。

※ **コラージュ：画面に紙・印刷物・写真等の切抜きを貼り付け、一部加筆などして作品（パピエ・コレ）を構成する。**

2. 羽根（はね）、羽子（はね）、シャトル（はね）の歴史をコラージュする

英国の MK8 9LA, Milton Keynes, Loughton Lodge Bradwell Road にある**英国バドミントン・センター**のミーティング・ルームを訪ねてみます。このセンターは、ナショナル・バドミントン・クラブとナショナル・バドミントン・ミュージアムからなり、二階に広いミーティング・ルームがあって、その壁に「**シャトルとそれを遊んだ人々の歴史**」つまり「**バドミントンとそれを遊んだ人々の歴史**」、言い方を変えれば「**バドミントン誕生以前からバドミントン誕生まで**」を描いた四枚の大きなコラージュが掲額されていて、ここを訪れる人々の目を奪います。

このコラージュは、チューリッヒにある創作芸術高等学校の学生モニカ・クラッカーの 1997 年の卒業作品**『中国風絵巻』**として描かれました。その後バドミントン・スイス・オープンのバーゼル大会への出展を依頼され、卒業作品を元に新たに一部の精密画**『1250 年』**を描き加えたものです。

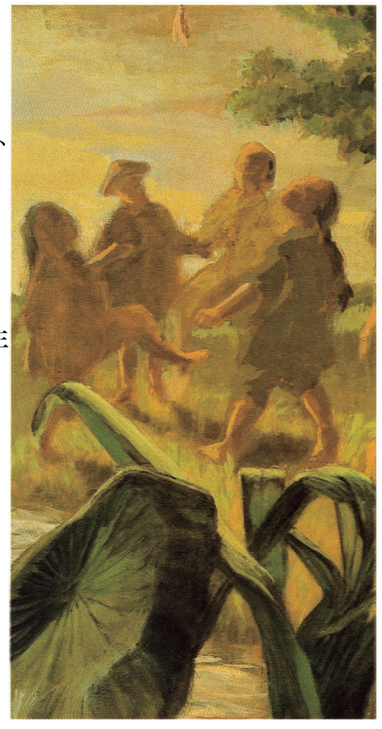


図２ モニカ・クラッカーがこのコラージュのために描いた最初のページを飾る１枚の絵コンテ※
※ コンテはクレヨンの一種で鉛筆より絵の濃淡をはっきりさせた素描画

英国バドミントン協会は、バドミントン・センターの竣工を記念してこれらの絵を買い上げ、ミーティング・ルームに掲額すると共に、この絵のシリーズをコンテ毎 15.6×33.4×0.8cm、32 頁の冊子に組み込んで、素晴らしい書籍『The Shuttlecook and the People Who Used to Play with It 』(1999 年)としました。

それはモニカの制作姿勢が極めて優れたものであったことによるもので、作品自体の‘コラージュ’という手法が、バドミントンの歴史的発展の様子を存分に伝えていたからです。

それらのことが書籍のタイトルにも遺憾無く表されています。彼女は実物大のシャトル像を精密に描出して、時代背景の中にまず置きました。そうすることで相互に容れ合う時代との繋がりが、その時々の人の在り方・関わり方を自然に浮き上がらせる様に工夫してみたからです。並べて描かれた羽根（はね）の図を中心の軸として、時代の移っていく様を人々の活動と重ねながら、バドミントン誕生までの歴史を遺憾無く描出するものになっています。

図３. 英国バドミントン センター・ミーティングルームに掲額されたモニカ作の壁画コラージュ ①「中国風絵巻」と 「1250 年」の要素コラージュ②③④⑤からなる壁画コラージュ ②

元の作品は、形式を中国の絵巻物に模した 6m の上図のドローイング『中国風絵巻』からなります。彼女は、**アイソルド・シュミット・メールホッフ著『シャトルコックの歴史的発展』**（スポーツ・インストラクターになる資格を取得するための提出論文 1957/58 年）を中軸にして、インカや日本等々の資料に当たり、シャトルの発展史を 1250 年に及ぶと捉え、別途、作品『1250 年』**(壁画コラージュ②)**を描いて、この主作品に添えています。

こうした意味や意図を汲み取り、冊子刊行までを企画した英国バドミントン協会の感性に、私たちは、大いなる拍手を送らなければなりません。

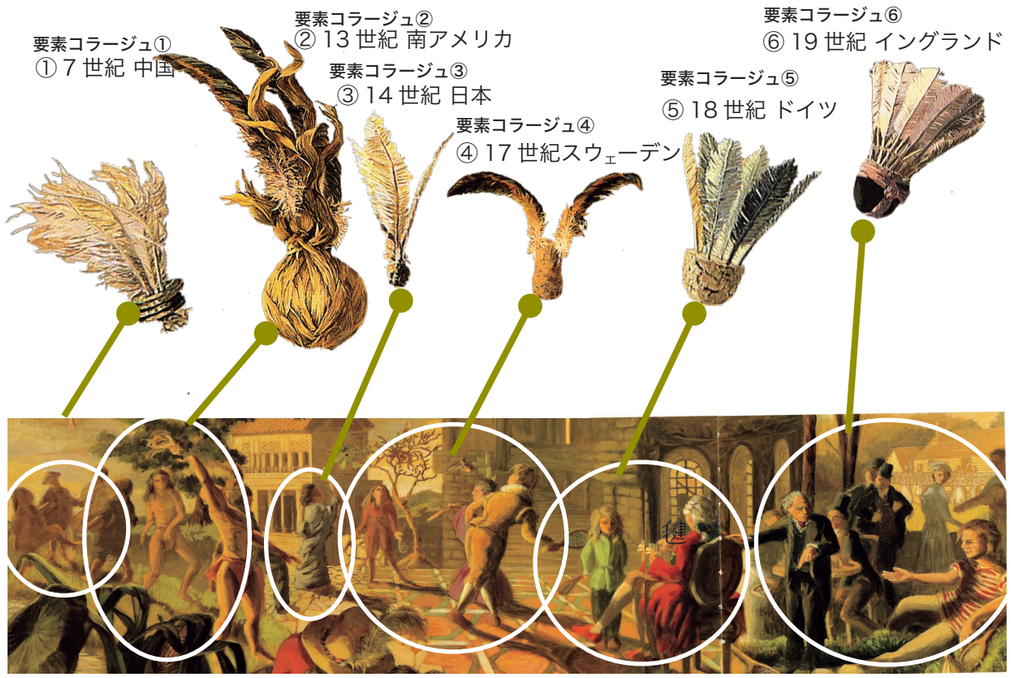
3. これらのコラージュを解析する

さて、掲額されたこれらのコラージュがどの様な ‘断片’を‘貼り合わせたもの’か、モニカの冊子コンテンツを見ながら、この冊子のコラージュの材料がどの様な歴史資料に由来するのかを、可能な限り探ってみようと思います。**壁画コラージュ①**とした**中国風絵巻（図３）**は、世界の所謂 ‘羽根遊び（‘はねつき、はねけり’）の被射体（ラケットに叩かれる）（“はね”）を**チチェンツィー（踢毽子）**から羽根（ボラン）に至るまでの、それぞれの時代のエポックとなる 6 種類の被射体**(図 4)**を並べて、6 つの絵コンテ（つまり**要素コラージュ**）と絡ませています（**図 5**）。

図４　モニカの作品には６種類の被射体（はね）が選ばれている

「バドミントンの誕生の歴史」がはっきりしない理由（わけ）は、前述のように、古い昔から世界の様々な地域に様々な所謂「はねつき遊び」があって、それ等が発掘される度にそれぞれの処で「これがバドミントンの起源である」と喧伝されて来たことにあります。

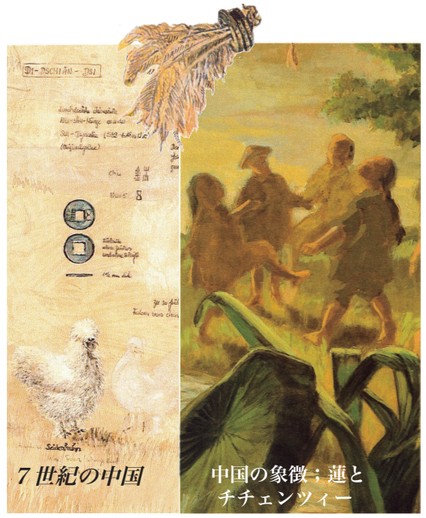
バドミントンはある日忽然として誕生したのでなく、「はねつき遊び」が何世紀にも亘る発展・継承の歴史を通して誕生してきました。難しいのは、「**誕生」という言葉の意味**をどの様に解釈するかにあります。「**バドミントン が誕生した」ということと「バドミントンの様なものが誕生した」ということは明らかに違うのです**が、しかし、そこには何らかの繋がりがあるかもしれない。それを切り捨てるか・切り捨てないか。つまり、「始まり」を決めることはなかなかに難しい問題を含んでいます。



モニカの作品に描かれた被射体（はね）６種類の要素コラージュ

図５　壁画コラージュ①は要素コラージュ①〜⑥で構成され、その時代と６個の被射体（はね）が対応している

要素コラージュ① は、このシリーズの構図の元イメージとした**“絵巻物”**という描画法の文化を生み出した中国を象徴するように **“ 踢毽子（tijianzi；チチェンツィー）”が‘蓮の葉’と関わる印象と重なるように描き出されています（図６）**。



モニカのコンテ画によるスケッチと鉛筆デッサン

シャトルコックは穴空きの硬貨（コイン）と鶏の羽で作られた。
“中国の絵巻物” 風に作画されている
From body and competition exercise

：チチェンツィーは銅銭と鶏の羽根を括って造られるられたもの（**鶏毛繖**）を使って遊ぶ

図６　図５を受けて要素コラージュ①のコンテをアレンジしたモニカの冊子 p.6-7 は、踢毽子（チチェンツィ）が銅銭と鳥骨鶏（うこっけい）の羽根から造られること、それを蹴って遊ぶ初まりのプレーの形態がどの様なものであったかを紹介しています

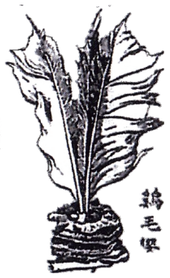
“ 踢毽子（チチェンツィー）”は、**図７**のスケッチの様に“穴空き銅銭”と**“鳥骨鶏（うこっけい）”**の羽根２～４枚で造られた被射体（**鶏毛繖（けいもうえい）**）で遊ぶ姿を３枚の絵で紹介しています。**これらの遊びの元絵はどれも 18-19 世紀の資料によるものですが、モニカが** “チチェンツィ” の起源を７世紀としたのは、“銅銭使用の開始時期（起源）”を“遊びの開始時期（起源）”と重ねて観たことによるのでしょう。中国ではこのような「天円地方（銭は丸く、穴は四角）」が造られたのは、秦の始皇帝（紀元前 259- 紀元前 210 年）の時代で、始皇帝は**銭形**を決めると共に**銭銘**が価値と一致するよう定めました。ところで７世紀は、高祖が中国を統一し、**唐（618-907）を建国**した時に当たります。高祖（在位 618-626）は**唐の基準銭**として銅銭**「開元通寶」**を鋳造させ、銭銘には当時書家として名声を博していた硯学の欧陽詢（おうようじゅん）を選定、揮毫させたものです。この「開元通寶」は世界に広く行き渡りよく知られたものですから、モニカ或いはシュミットは唐の成立と結んで**“ 踢毽子（チチェンツィー）”**の起源を７世紀としたのかもしれません。同じ頃我国でも「開元通寶」に倣い**「和同開珎（わどうかいほう）（又は、わどうかいちん；708 年）」**が造られています。

開元通寶

中国で、621 年（唐の高祖時代）以降鋳造・流通した銅銭

和同開珎

我国初の鋳造銭。珎は珍の異体字



中国広東地方で鶏毛繖（Kai Mo in）と呼ばれた。繖（いん）は紐で結ぶの意

紙製を九州国立博物館で購入

韓国の伝統的な正月遊びの尾羽根蹴り（チェギチャギ）で葉銭（ヨクチョン：天円地方の銭）に絹や紙を織込んで造る。古代韓国の蹴鞠；武術錬磨のために行われた。

図７ 「天円地方（銭は丸く、孔は四角）」の銭を用いた踢毽子“チチェンツィー”

図８　T.タウンゼント & L.シャーツ著「足で shittlecock※をプレーするコーチシナ原住民」 1796 年
※ 今日一般に使われている shuttlecock のスペルとの違いに注目。サミュエル・ジョンソン編の英語辞書によれば、 shittlecock の方が shuttlecock より古い表記法だとしている。

要素コラージュ①の３枚の**“踢毽子（チチェンツィー）”**とそれを遊ぶ風景の図は、そのイメージを**図８**の T.タウンゼント & L.シャーツ画『足で **Shittlecock**（※） をプレーするコーチシナ原住民』1796 年や B.アダムス著『The Badminton Story』の p.16 で紹介されている**図９**の L.アローム画「足で **Shuttlecook** をプレーする』1980 年 等の絵図から得ていることがわかります。※shuttlecock でなく shittlecock であることに注目

図９　L.アローム著『図解シナ』「(両) 足で shuttlecock をプレーする」 1843 年

『The Badminton Story 』の著者 Bernard Adams は、この図に‘‘Playing at shuttlecock with the feet' - a Victoriam engraving hinting at badminton's oriental origins”と今日風の綴りでキャプションを付けている。

図１０　シャム※人のシャトルコック遊び　※シャム：タイ国の旧称、出典不詳

こうした絵を描く動機の一つに 17 世紀以来の西欧によるアジア支配の中で進むアジア蔑視の風潮が伺えないわけではありません。**1555 年の A.スカイノ（伊、学者）は著書『球戯書』**では、**‘球戯’を二種類に分類。「ボールを棒や器具を使って扱うのは上品な運動」「ボールを直接手や足で扱うは下品な運動」としています。**こうした価値観からは「裸足で‘生活する・遊具を扱う’」のは下品な行動と見做され、**裸足で生活するアジア人は**どうしても**低俗な人間**に見えてしまっていたようです。（**図１０**）

後述しますが、我国の江戸時代末期（19 世紀）渡邊透石らによって描かれたとされる『長崎漢洋居留図』（ロンドン大英博物館、他に長崎県立美術博物館、神戸市立博物館他が所蔵、等々**『出島図』**で知られる；後述する）でも、オランダ人が畳の部屋に靴履きで上がっているのに屋外でウーラング（羽根）をラケットで打ち合う黒坊は裸足で描かれている、それだけでなく、洋館の前を丁髷（ちょんまげ）姿の役人と思しき侍（日本人）までが草履（ぞうり）を手にして、やはり裸足で歩いている姿で描かれています。（**図２７**）

要素コラージュ②には、インカ時代に使われた被射体（はね）とそのゲームが**「神話的な象徴」**と題されて描かれています。バドミントン・ゲームの始まりが 13 世紀とされるのは、インカ帝国の前身であるクスコ王国の成立が 13 世紀とされることを受けているのでしょうか。中・南米の歴史にも疎い私には詳細を論じることはできません。モニカは自身の冊子に「インカ経済は、主として農業に基礎を置くもので、果実や野菜とりわけトウモロコシが大切だとされていて、それを絵に描いた」と紹介しています。インカの生活を支えた豊かな南米の農産物、とりわけジャガイモ、トウモロコシ、落花生、カボチャ等々は、16 世紀のスペインやポルトガルによる征服の後にヨーロッパに齎され、以後、それまで貧しかった西欧の食世界を大きく支えるものになったことは特筆しておくべきことだと思われます。

図１１　冊子に収録されたとうもろこしの葉の羽根（ボール）と２枚のゲームのイメージ図
赤い被写体は 1936 年、カールハンス・クローンが考案したインディアカの被射体

この**被射体（はね）は、**数枚のトウモロコシの葉を重ねて石ころを包んで、造られています。プエルトリコのタイノ族はこのゲームを BATEY（バティー）と呼んで、村の中央に三

角形かＵ字型の球技場を造り、二つのチームを対戦させ、プレーヤーは頭、肘、肩、膝を使ってこのはね（被射体）の動きを止めない様に動かし続けることを競い、これが止まった時に止めたチームが失点する。地面に印をつけてスコアーとし、一定の失点を数えて勝敗を決めた様です。勝者は英雄の様に扱われましたが、何と敗者は生贄とされたのだそうです。モニカはこうしたゲームを想像し、とうもろこしの葉の羽根（ボール）とゲームのイメージを重ねて絵図２枚を描きました（**図１１**）。最近は我国でも、“インディアカ”が一時期盛んに競技され、国体種目としても採択されています。これはドイツ人体育教師カールハンス・クローン（Karlhans Krohn）がブラジルのリオデジャネイロに滞在中、コパカバーナビーチを散歩中に**ペテカ**と呼ばれる遊びと出会い、これを持ち帰ったのが始まりで、ドイツ YMCA やドイツスポーツ連盟を中心に普及が進み、競技スポーツへと発展したもので、モニカのイメージはここに由来すると想像されます。

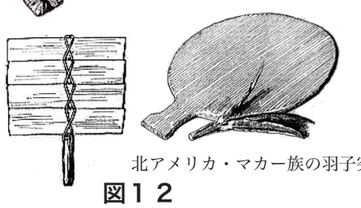
1）スタウロ族のシャトルコック。ヒマラヤ杉から削りだした長いパドルで打ち合う北アメカ・イン ディアンのズニ族 のシャトルコック

2）アメリカインデアン / ズニ族のポ・ケ・アンのシャトルコック (トウモロコシの皮製) 打ち上げ空中にある時間を競う

3）スタウロ族のシャトルコック。ヒマラヤスギから削りだした長いパドルで打ち合う

4）寒川恒夫編『図説スポーツ史』(朝倉書店、1991 年)p.22「モチカ文化 100-800 年」として紹介されたシャトルコックを使って行われる宗教的なペルーの儀礼的羽子落下傘遊 び。羽子は投槍器によって空中に投げ上げられた後、漂う」と紹介されている。

5）ラテンアメリカのアズテック人の羽根の文化：儀式の式服を“神” ケッアコアートル (カザリキヌバネドリ)の羽根の生えた大蛇に見立て作った。アズテック文明由来の写本にシャトルに似た造形物を添えて描かれている



北アメリカ・マカー族の羽子突き

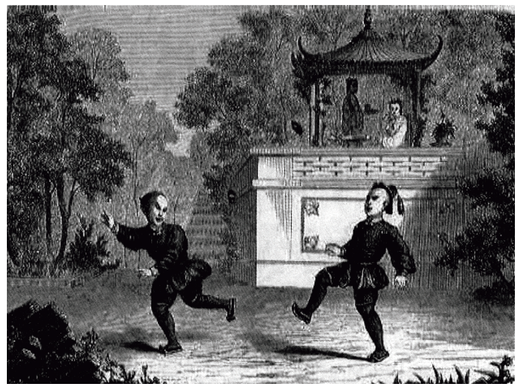
図１２

2004 年、フランスサッカー協会所属の**ジン・イヴ・ギランが『図解バドミントン史』（仏語）**を出版しました。それを直ぐに英国の P.Herrrudge、H.Nielsen それにギラン自身も加わって、英語版として翻訳出版。この翻訳本を英国留学を終えた鵜木秀夫・千加子教授夫妻が筆者に送ってきてくれました。筆者らも直ぐにそれを和訳。そこに収録されていた本誌との関係箇所をここに以上の様に紹介することができました。（**図１２**）右端のインディオの祈祷師らしい図像はフランス国立博物館所蔵の宗教画のコレクションにあった物で、その図版にジェン・イヴ・ギランが前出書の中で紹介した‘シャトル’のような飛翔体のイメージの元になったと思われる原色図がみられます。また、**同書　第１章　起源は遥か昔・全世界に及ぶ：中国のシャトルコック・ゲーム(踢毽子（チチェンシー)の周辺にある真実と神話：**想像であるが中国の**シャトルコック・ゲーム踢毽子（チチェンシー）**は B.C..2500 年、伝説の黄帝が蚩尤（しゆう）と闘う兵士のスキルを改善するために行った蹴鞠 Tsu-chu を起源に持つ。‥これを大衆は丸い鞣革のオブジェクト（ボール）に仕上げ、それを英雄である神に見立て、一晩かけてゲームをした。これがシャトルを用いるに至り、**踢毽子（チチェンシー）と呼ばれるようになって行ったのです」とする紹介にも大いに注目しておく必要があると思います。（図１３）**

黄帝（こうてい）
神話伝説の最初の王。紀元前 2510- 紀元前 2448 年。蚩尤を討って諸侯の信頼を得る。

様々な形で描かれる蚩尤（しゆう）
古代中国神話に登場。炎帝神農氏の祖先とされる。兵器の発明者と言われる。４面六譬で牛の頭と蹄を持つ。

図１３ギラン著の同書で紹介されたた中国・東南アジアの“シャトル蹴り”



1875 年仏国のジャーナルに紹介された白黒のエングレービング※による China での Shuttlecock 遊び:
出典：Jounal de la Jeunesse, France.1875.
※エングレービング ebrraving：

ビュラン彫による版画の凹版技法の一つ。ビュランという先端にダイヤモンド様の硬い歯のついたノミのような器具を使って銅板に線を彫り、その溝にインクを埋めて刷った作品。鮮明な線が特徴。

絹地に水彩画で描かれた Le Chuon 画「ベトナムにおける“シャトル蹴り”」

“宮殿から弾み出る笛の音が激昂を震わせ、
見張り塔の太鼓が花の咲き開くのを急き立てる。
物売り達はいやはやに活気づいて、
街々は互いに美を競い、若い男は上着をまくり、
終には上半身を裸にしてシャトルコックに興じる”

ー王都の春ー、1508 年より

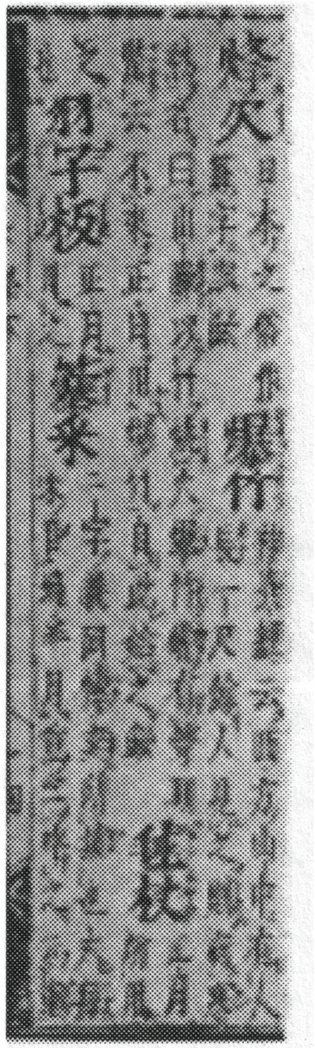


図１４　下学集

要素コラージュ③は、我国の**“羽根つき遊び”**です。‘はね’に「羽子」「羽根」などの漢字を、‘つき’に「撞き」「突き」等の漢字を当てることがあります。ここでは、‘はねつき’と表すことにします。モニカの絵柄を詳細にみれば、一人遊びの**‘撞き羽根’**でなく、二人遊びの**‘追い羽根’**が描かれています。‘はねつき’は平安時代に起源を持つというのが通説。モニカは‘追い羽子（おいばね）’を‘Cibane’と記してしまいました。おそらくは、自分の手書きメモの「O」を「C」と読み違えたのでしょう。時代を‘14 世紀’としていますので、鎌倉・室町時代ということになります。室町時代の資料として私達が知っている物に、文安年間に作られた**『下學集』（図１４）**※があり、ここに**「毬杖（ぎっちょう）」**や**「羽子板」**の項目を見つけることができます。**そこにこれ等に関する記述があり、‘羽根撞き’が‘左義長’という‘験（けん、またはげん）を担ぐ’正月行事に由来することを仄めかす３行程の文章を読みとることができます。**しかし、モニカがどんな資料に寄っていたのかは、定かではありません。

※**『下学集』**：15 世紀、室町時代（144 年、文安 1）の二巻からなる手書きの国語辞典。3000 語程の単語を 18 分門に分類した辞書様なもの。「羽子板 正月ニ用フ」とある。毬杖についても言及しているのが見て取れる。

‘はねつき’の起源については二説あり、一つは宮中行事の**「左義長」**に由来するとする説と厄※※を払う道具としての**毬杖**と**羽子板**との連続性を語り、もう一つは、平安時代、人口密集で排水溝や水溜りができ、蚊が発生するなど不衛生な状況を呈した町中で流行る熱病を免れようと、“無患子”の黒い球に羽根を付けて**‘胡鬼の子**（羽子の呼称）’と呼び、これを蚊を獲る**蜻蛉**に見たて、羽子板で撞いて身体の周りにたくさん飛び交わせ、無病息災を願ったというものです。

※※**厄（やく）**：①苦しみ、②災い・災難、③疱瘡

図１５　我国の伝統的な正月遊びである羽子板遊び（羽根撞き）には、①一人で打ち続ける**揚羽根**と、②主に二人で打ち合う**追羽根**の二種類がある。**羽子板**は**胡鬼板（こぎいた）**とも呼ばれ、コギノコ（無患子の木）は子供が患わない意味を重ね、その種子が羽根突きの羽子に似ており**“衝き羽（つくばね；筑波嶺との語呂合わせもある）”**とも名付けられた。起源は、奈良時代の神事である男子の蹴鞠に対する女子の**毬 杖**まで遡る。**毬杖**※**は**篦の様に平べったい物で毬を打ち合う遊びで、**神事である毬杖と遊びを区別するため毬を無患子の実に羽根を付けた物に変え‘羽子板遊び’**となったとされる。

毬杖（ぎっちょう）遊び

図１６

※『年中行事絵巻』にある毬杖（ぎっちょう）から羽子板が生まれたという。奈良時代に起源を持ち、男子の神事である蹴鞠に対して、女子は毬杖という遊びで、鞠を杖で打つ遊び［棒の先が篦（へら）のように平たくなっていて、毬（まり）を打ち易くなっている］から無病息災を願いを込めて‘蚊’を取ってくれる蜻蛉に見立てた羽根を沢山身体の周りに打つ数を競う羽根撞き遊びに変わった物である。

儀式ばった技術からなるゲームと紹介された羽根つき遊び

14 世紀の 日本

図１７　モニカ著『The Shuttlecock and the People Who Used to play eith it』14 世紀の日本 p.10-11

右端の絵のポーズは日本の羽根つきの動きというよりは、今日のバドミントン・ゲームでのフロントエリアにおけるロビング・モーションをモデルにした様な絵柄になっています。

モニカのイメージはそこまでは届かず、14 世紀の日本と見るよりは幕末～明治維新時代を活写したビゴーやワーグマンの江戸末期の日本文化の印象をイメージしている様です。モニカは冊子に**「14 世紀の日本、儀式的なゲームの絵から」**と題し、**「羽子」「羽子板」「日本情緒」**等計６枚を載せて描いた絵**『1250 年』**（英国バドミントン・センターに掲額され

図１８

清水勲編『ワーグマン日本素描集』「特派員美術通信員の目」pp.128-129
チャールズ・ワーグマン（1832-1891）;英国の画家・漫画家、幕末期に記者として来日。挿絵入りの新聞『ジャパン・ポンチ』を創刊。五姓田義松。高橋由一らを指導。Battledoor & Shuttlecock の戯画が数点ある。

ている）は、日本の女性がバドミントンをプレーする（遊ぶ）時でさえある種の仕来りを重要なものとしていることを表しているとして、今日においても未だ着る物・履く物・持ち物（ラケット等）までがその枠を越えない様にしている」と書き添えています。（**図１８**）

要素コラージュ④は、Jacob von der Heyden 著『Speculum Cormellanum...Jest aufs news...Tag geben』（シュトラースブルク、1618 年）所収の図版「シュトラスブルクの球技館の一つでゲームする学生達」（**図１９**）の○で囲った部分から採られています。この絵は中世のテニスを描いた物で、謂わば 17 世紀という時代を示そうとモニカが、この絵にデフォルメを加えて女王クリスティーナの時代を連想させようと挿入したもので、直接羽根つき遊びに関係するものではありません。しかし、モニカが特に“中国風絵巻”と題した英国バドミントン・センターに飾られた絵には女王クリスティーナと題さずに、「17 世紀 スェーデン」と題して冊子にクリスティーナを登場させています。羽根つき遊びと女王クリスティーナの話は時折バドミントン関係の本で紹介されていますが、断片的な逸話で終わる物が多いのです。

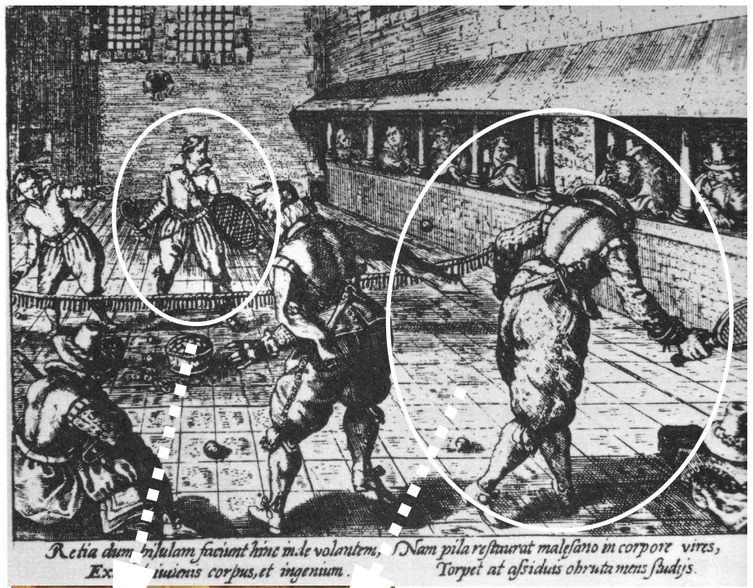


図１９
モニカの絵の元になった図版資料「シュトラースブルクの球技館でゲームする学生」（出典；ハナー・ギルマイスター著、稲 垣正浩・奈良重幸・船井廣則訳『テニスの文化史』）1993 年、大衆館書店）
シュトラースブルクには、17 世紀初頭、球戯館があります。ギャラリーの中央のドアー越しには戸外の景色も見えておりモニカはそれも描きとっている。

けれども、この女王の物語を日本語で詳細に読める本が二冊あります：１）**下村寅太郎著『スウェーデン女王クリスチナ：バロック精神史の一肖像』（中央公論社、1975 年）**と 2)**E. カッシーラ著（朝倉剛、芳賀賢二郎訳）『デカルト、コルネーユ、スウェーデン女王クリスティーナ』（工作舎、2000 年）**です。モニカは**図２０・２１**のような彼女の肖像画からその才気煥発な‘はねつき遊び’する姿を想像したのでしょう。なお、彼女の‘はねつき遊び’のエピソードは 19 世紀フランスのアンリ・ルネ著『スポーツと技巧を競うゲーム』（年代不詳）に記されています。ここでは、‘はねつき遊び’は“ジュ・ド・ボラン”というフランス語の呼び名で紹介されています※。

※ アンリ・ルネ著『スポーツと技巧を競うゲーム』「第５部ジユド・ボラン -1.にスェーデン女王のクリスレィーナのジュデュボラン」にある

貴族のゲームへと推移する羽根つき遊び（17 世紀）
to the game of aristocracy

図２０　セバスチャン・ボーデン画『馬に乗るクリスチーナ』

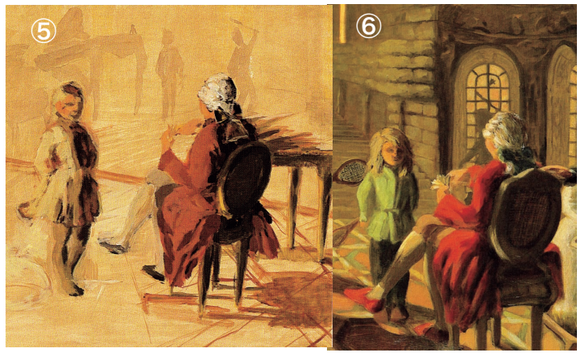
図２１ モニカの描いたスウェーデン女王のジュ・ド ・ボラン

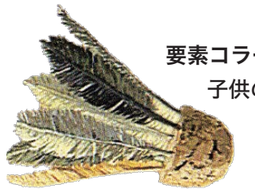
このテーマに関しては 17 世紀の記録が具体的で、興味深い。有名を馳せたスウェーデン女王クリスティーナは、この遊びを情熱的に愛好したそうで、人臣を極めた官僚に対しても自分と同じ様にこの遊びを嗜む様に強いたと言われます。著名な学者ボシャールに対しても同じだったそうで、彼女の誘いは王命そのものである訳ですから、彼すらこれを拒むことはできなかったそうで、周りの者達もボシャールの弱気を咎め立て、囃し立てましたが、それは誤解というべきでしょう。女王は宮廷内であるにも関わらず、規範・礼儀・作法を度外視して貴族達にも外套や鬘まで脱ぐ様に要求。すっかり用意ができて漸くボランがこちらのラケットからそちらのラケットへ舞うといった具合で、そうならなければ女王は決して満足しなかったと言われています（**図２１**）。

要素コラージュ⑤は、プロシャのフレデリック３世の子供時代のエピソードに題材を採っています。モニカはこのエピソードを**図２２**の様に描きました。この元の話は『le Journal de Bouilon』に、1787 年プロシャの小フレデリックが大伯父のフレデリック二世の書斎でボランを遊んだとする次の様な記載によるものです：

打ち続けている内に、小フレデリックのボランが国王の机の上に落ちてしまいました。この時は国王からこのボランを直ぐに返して貰うことができましたが、暫くすると、国王の仕事をしている書類の上に又もボランを落としてしまいました。国王は十分注意して、この遊びの下手な子供にその玩具を返してやりました。この子は暫くは上手く遊んでいましたが、亦々国王の細かな文字の詰まった書類の上にボランを落としてしまいました。三度目でした。フレデリック二世はボランを採り上げるとそれをポケットの中に隠してしまわれました。子供は玩具を返して欲しいと頼みましたが、国王はこれを断りました。子供はもう一度返してくれと頼みます。新たな拒否が返されました。すると、小フレデリックは国王の前に座り込み、断固として言い放ったのです。「陛下！　どうか私に、直ぐにボランをお返しください。ご返事を！」と。国王はこの時の甥の息子の言葉の強さに大いに喜んで、王位を継がすことにしたのだそうです。

国王は次の様に言って、子供の求めたものを返しました。「さあ！　君のボランだ。如何にドイツとは言え、君の様に勇敢な少年からシレジア（Silesie）を取り戻すことはできないだろう」と。





要素コラージュ⑤
子供のゲームから

子供の遊びから
from the children's game
18TH century Germany

さあ！　君のボランだ。如何にドイツとは言え、君の様に勇敢な少年から sirllsia を取り返すことはできないだろう。

図２２　小フレデリックのエピソードから

“こうした逸話に感謝しなければならない。私達はバドミントンが 18 世紀にもまた“シャトル遊び”プレーされていたことを知るのだ。“1250 年 ”より

要素コラージュ⑥：『スポーツと技巧を競うゲーム』でこのエピソードを紹介した前述のルネは「羽根撞き遊びは、若者の教育に優れた効果を持ち、冷静さと決断力を彼らに与えるだろう。この遊びを完遂するには、走りきらなければならないし、動揺せずに時詮を得たチャンスを逃さないようにしなければならないからである。」と結んでいます。

要素コラージュ⑦⑧⑨　競技スポーツへ
競技するスポーツへ
to competitive sport

19 世紀　イングランド

ボーフォート公爵は客をガーデン・パーテーに招き、バドミントンというシャトルコックを使った新しいスポーツを紹介、楽しんでいる；このゲームはネットを張って行われるもので、今日では様々な変化が加えられたものになっている。

“中国絵巻物”より

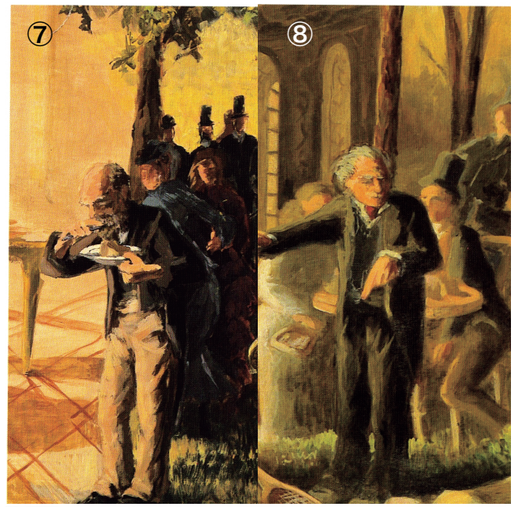


図２３ の要素コラージュ⑦⑧⑨は、モニカが “バドミントン”という名称の生まれる契機となったバドミントン宮の前庭で開かれたパーテーの情景を想像し三枚の絵を描いています。遠景にはバドミントン宮が描かれています。

図２３　モニカの冊子 pp.16-17 のシャトルコック図と３枚の絵

19 世紀末、英国では battledore（バトルドアー）と呼ばれていた羽根つき遊びにネットが加わり、コートが引かれ、遊び方が約束されて、この遊びの用具セットが「バドミントン・バトルドアー」の名前で売り出されることになります。1860 年のロンドンの文具商の発注記録中にこの用具セットの名前が残されていると記されています（註：バドミントンの遊びの名が記録された一番古い資料とされ、バーナード・アダムス著『バドミントン 物語』、BBC.,1980 年に掲載。）モニカのコラージュはそこまでは描いていませんが、羽根つき遊びが競技になるまでを描き出してくれています。難しい言い方をすれば、文字でバドミントンの歴史を記したのでなく、曖昧なものを曖昧なままに絵として切り取って、歴史の流れとして見せてくれているのです。こうした技法を「見事」だと受け止めたいと思います。

バドミントンの誕生史を遡る上で、大きな謎は「何時・何故・何処で・誰によって､‘羽根つき遊びの名’と‘バドミント宮の名’が結びついたのか」ということです。これまでも、この

問いを巡って多くの人々による様々な誕生神話が伝えられてきました。筆者は 2005 年 3 月、教え子の案内で英国バドミントン協会会長のビル・ロジャー夫妻と御一緒させて頂き、バドミントン宮を訪れました。英国貴族末裔の中で最も裕福な一族と言われるボーフォート卿のカントリー・ハウスです。伝説のエントランス・ルームの壁にも罅（ひび）が走り、時を経た重要な歴史遺産の保存の難しさを知りました。それを見学する許諾を与えてくれた誠意に深く感謝しながら足音を忍ぶ様に拝観させて戴きました。訪う人を想定してか、バドミント発祥の地である事の証にと、窓際のベンチに今様のシャトルが置かれていました。さすがにバトルドアーはサマーセット嬢が友人と「1830 年 1 月 12 日土曜日、2,117 回打ち続けた」と記録を書き残した当の物（バトルドアー）が、空気に晒され、眼垢に晒されて文字ももう識別できない程になって置かれていました。バドミントンの歴史と出会うこの場の持つ意味が心に残り、「この部屋も、これらの道具も保護されなければならない。今直ちに！」と心が痛みました。しかし、そうした思いもその向かう先を、私は今も見つけられないでいます。（**図２４、２５**）

図２４

バドミントナーなら一度は夢見るバドミントン・ハウス訪問: ① B.Adams 著『バドミントン物語』p.21 紹介のホール、②③同ホールの角度を変えて、④当時の IBF 主催で行われた関係者のバドミントン 宮見学会に招待を受けて参加した 1972・73・75 全英女子複女王の梅野尾悦子（手にするのはサマーセット嬢の記録の書き込まれたバトル・ドアー）。特別企画でホール内での写真撮影も許可されていた。ラッキーな写真が残された。

私は、たくさんのバドミントン愛好者が、競技することが好きなことの何分の一かを歴史に対して興味を示して欲しい、勝利の数を数える時に、その先にあった歴史を熱く思い起こして欲しいと願います。モニカの歴史絵はそうした気持ちをそのままコラージュしている。次頁の**図２６**は、モニカがこれらのコラージュを冊子の表紙に見開きで展開して見せてくれた「**バドミントン誕生までの歴史全図**」です。本当に美しい。

図２５

※私事になるがこの筆者の欧州訪問は、英国留学中の鵜木秀夫・千加子夫妻、ドイツ留学中の太田憲・和美夫妻が中心になって万端の用意をしてくれた他、米国からダートマス大助教授深山こずえが駆けつけてくれて、主要な訪問先での通訳を務め、須田和裕（東工大教授）、高橋裕美（岩手大講師）、谷藤千香（千葉大准教授）、佐々木道子（筑波大助手）等が同行してくれました。

図２６．英国バドミントン センター・ミーテングルームに掲額されたモニカ作の 壁画コラージュ①『中国風絵巻』(上) と 壁画コラージュ②『1250 年』(中). 鉛筆デッサンそして（下）は『1250 年』の要素コラージュ②③④⑤⑥からなる

前述した様に元の作品は、形式を中国の絵巻物に模した 6m 程の上図のようなドローイング『中国風絵巻』と『1250 年』からなります。モニカは、アイソルドシュミット・メールホッフ著『シャトルコックの歴史的発展』（スポーツ・インストラクター；公認指導者になるためにスイス・バドミントン協会が要求した課題論文）を受けて、中国、インカ、日本等の関係資料に当たり、1250 年に及ぶシャトルの発展史をも描いてそこに加えました。これを英国バドミントン協会が創立 100 年の祝賀記念事業として買い上げ展示に及んだものです。

４. 我国のバドミントン活動の始まりの歴史

「何時我国に**バドミントン**が伝えられたのか」「何時**競技バドミントン**が我国に齎されたのか」という二つの問いは、微妙な差異を含んでいます。もう一つ、「バドミントン」という言葉で括られる「はねつき」あるいは「けりばね遊び」と「競技バドミントン」を何処までしっかり区別して歴史を考えるか、という問題がこの問題をさらに複雑にします。ところ

で、これらの問題を考える際に明瞭な二つの誤りのあることを最初に指摘して置かなければなりません。

第１の誤りは、「江戸末期の長崎の出島にバドミントンが伝来した」、「これが我国にバドミントンが伝来した第１号である」という認識です。根拠は『長崎出島図』に描かれた「黒坊のはねつきつき遊び」の絵の存在することによるのですが、残念ながらこの時点でバドミントンは未だ誕生していません。ところで**「出島図」**はその写本も入れると現在数本が存在することが確認されています（**図２８–１～６**）。

第２の誤りは、「競技バドミントンは横浜から始まった」という認識です。

第１の問題を考えます。一巻の『出島図』が描かれ、それが何本かに模写されたのは1780 年代であることが判っています。1800 年代の後半に誕生したバドミントンが誕生以前に長崎に来たというのは可笑しな話ですから、長崎に伝えられたのはオランダやその他の地で遊ばれていた「はねつき遊び」であることが解ります。出島図に描かれた「はねつき遊び」の元を尋ねると次の様な資料の存在と出会えます。

右の絵は、1655~58 年にかけて東インド会社の使節派遣団に参加したJohan Nieuhof が描いた興味深い**図解旅行記**(1682 年刊行）に収録されているバタビアの孤児院の風景画です。**（図２７）**

この絵の右端で打ち合っている二人の子供が手にする‘打具’と‘はね’は出島図のそれとよく似ています。打ち合っている者は孤児院の風景ですから現地の孤児達だと思われます。

この絵を此処に紹介したのは、『出島図』で黒坊の打ち合う「はねつき」との繋がりを見ておきたかったからです。絵のに中程にいる子供達の手にしているものは拡大してみると‘被射体’である羽子です。オランダ、バタビア、「はねつき」「黒坊」との関連は次頁の『出島図』との関係を強く窺わせるものです。

図２７　Johan Nieuhof（1618-1672）オランダの旅行家と旅行記の挿絵『孤児院の風景』

私たちは 1987 年に中央公論美術出版から発行された長崎市出島史跡整備審議会編の豪華な記念誌『出島図—その景観と変遷』で「出島図」の詳細を知ることができます。この書の p.237 以降に沼田二郎、森岡美子らが詳細な解説を載せています。森岡は出島とオランダ人の生活を伝える図柄がほとんど同じものが５本あり、別々の処に伝世されているがいずれも原図とは思えないとしています：

「出島絵巻」　大英図書館蔵（**図２８-1**）原図かそれに最も近い
「長崎阿蘭陀出島之図」　長崎県立美術博物館
「出嶋絵図」（伊達宗彰伯爵蔵の写）　東京大学史料編纂所蔵
「紅夷人旅館図」（許斐友次郎氏蔵）　東京大学史料編纂所蔵
「蘭館図」（『長崎漢洋居留図』の内）　神戸市立博物館蔵
際立って特徴があり、装飾性に乏しく、現実が描かれているのではないかと思われる(森岡)
「出島絵巻」（荒木如元）　モディ～「長崎画集」所収

図２８－１　『出島図』紙本着色　32.5×472.1cm ロンドン大英博物館

図２８－2『長崎唐蘭館市街図絵巻』紙本着色 36.0×64.0cm 蘭館部分 アムステルダム 国立博物館所蔵

福岡市博物館刊行の『出島図』の解説によれば、出島はキリスト教の布教阻止のため、市中に雑居するポルトガル人を住まわせる目的で増設された。扇形の島で面積 1,3000㎡、寛永 11(1634)年から２年の歳月をかけ完成。寛永 16(1639)年のポルトガル人追放後、平戸のオランダ東インド会社商館を招聘し、商館長(カピタン)以下 10～15 人程度の商館員と下働きや商館員の身回りの世話人々が居住。商館員は本国からの夫人同伴が許されず、出島からの外出も許可を得て幕府役人の警護の下のみで可。商館長は年に一度新年に江戸に行き徳川将軍に拝謁した。日本の鎖国体制下、幕府は長崎でオランダ、中国商人のみに貿易を認可。安政(4(1857)年の開国まで、出島は日本唯一の西洋文化流入の入口であった。参考文献『福岡市博物館名品図録』による。

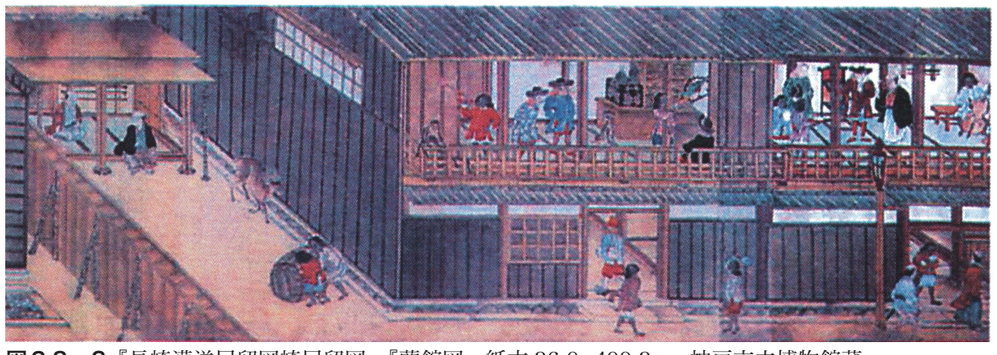


図２８ –3『長崎漢洋居留図崎居留図』『蘭館図』紙本 36.0×400.3cm 神戸市立博物館蔵

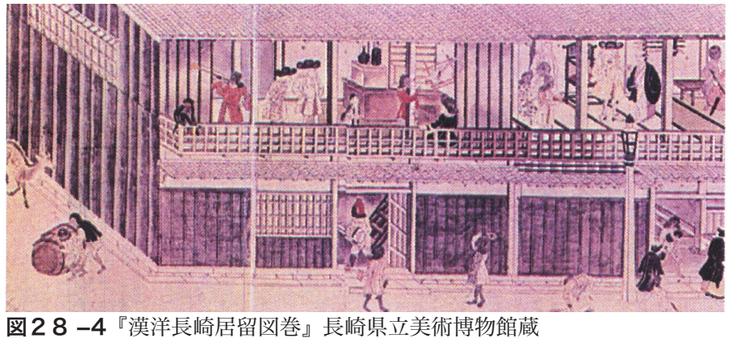


図２８ –4『漢洋長崎居留図巻』長崎県立美術博物館蔵

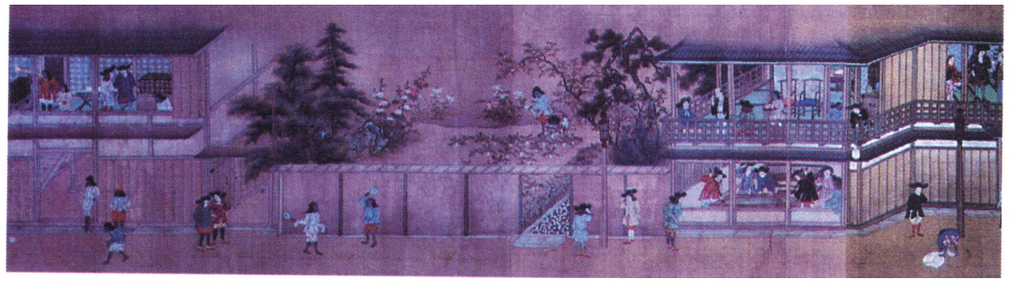


図２８ –5 狩野春湖（1639 ー 1707 年）『出島図・長崎図』水府明徳会彰考館蔵（水戸市）

図２８ –6 藤一純『紅夷旅館図』（絵巻）天明２（1782)年、模写、昭和 6(1931)年、東京大学資料編纂所所蔵

そのオランダでは、17 世紀には既に raketspel（ラケット遊び)、Raquette (ラケット)などの言葉が用いられており、これが長崎にも伝えられていました。“ラケット”の語源はアラビア語の“掌（てのひら）”を指す言葉“**raha**（ラハ）”で、その派生語“**rahat**（ラハット）（**掌（てのひら）の様な形をしたもの**）”が**地中海地方**に流布し、やがて各地に英語 racket に近い言葉として“racqets”が生まれました。17 世紀のオランダには“Raketspel（ラケット遊び)”、“Raquette（ラケット）”などの言葉のあったことが私自身の以下の 17・18 世紀の収集資料によっても判ります（**図２９**)。

Children's games 子供の遊びと題された染付けによるオランダ・デルフトのタイル、17 世紀中期の作とされている

Rakettspel Raqette とドイツ風、イタリア語風の名称が付された 19 世紀オランダ・フランドル地方の版画がによるカリカチュア Jan Pluis“kinder sppelen op tegels” 所収と裏書きされている

SPELEN MET TRAKET（spelen は遊びの意味、raket が t から始まっている）と書かれた 19 世紀オランダ・フランドル地方のカリカチュア（いずれも著者所有）

図２９： 17・18 世紀のオランダの資料にみられるラケット遊びの図

これらのことは、我国の江戸時代の奇人；**森島中良の著書『紅毛雑話』**（1787 年）「黒坊の弄（あそび)」の部分でも識ることができます（**図３０**)。江戸時代のこの書籍には「はね（羽根)」が「ウーラング」と記されています。当時フランス語では「はね」を volant（ボラン）と呼んでいました。その当時は、語幹の **v** を（**ウ**）と発音することもありましたので、「ボラン」をオランダ語で「ウーラン（グ)」と発音していたことが推測できます。ともあれ、長崎に来ていたのは、「バドミントン」ではなく、「はねつき遊び」でした。

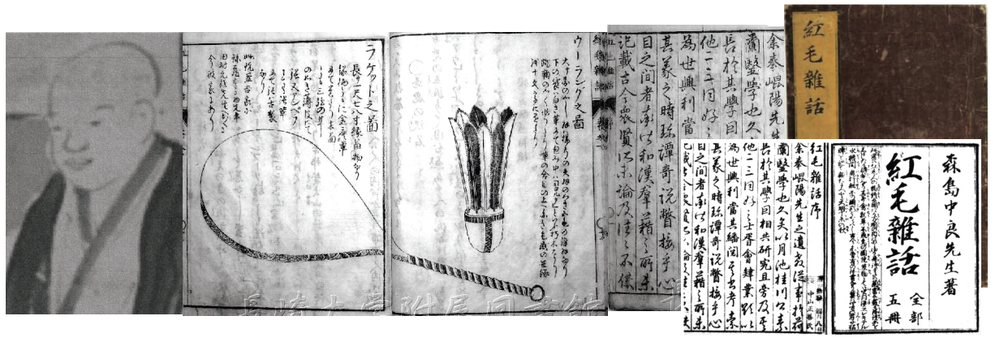


図３０　森島中良とその著書『紅毛雑話』(1787)に記載の「羽子板と羽根」

森島は出島でのこの遊びを「黒坊の弄（あそ）びなり　西洋館にて閑暇なる時は　遣羽根（やりばね）をつきて遊ぶなり　羽子板をラケット、羽根をウーラングという　形図のごとし」と紹介し、ラケットとウーラングを図解・説明している（筑波大学付属図書館蔵)。

森島中良（1765-1810）は『解体新書』の著者桂川甫周（江戸期の名医）の弟。兄が知識を平易に紹介した啓蒙書『北槎聞略』※にも参筆。大の変人で虱だらけの着物を洗おうともせず、家族がそれを洗おうとすると、「一匹だけは残しておいてくれ、また増やすから」と頼んだという逸話の残る『**紅毛雑話**』の著者です。

※ 天明２年江戸への航行中に遭難。漂流後ロシアで生き延び寛政４年に帰国した大黒屋光太夫の体験を桂川甫周が記した見聞録（岩波文庫にある）。大黒屋光太夫についてはウィキペセアの大黒屋光太夫も参照されたい。

ともあれ、長崎に来ていたのは、バドミントンではなく「はねつき遊び」でした。
さらに、これらの「はねつき遊び」が英語の Battledore and Shuttlecoock と呼ばれて我国に入ってくるのは、横浜等に外人居留地ができる様になってからで、これより古い資料を尋ねると、江戸時代末期の現在の兵庫県にあった柏原藩（織田信包が立藩し、織田信長の次男である織田信雄の系統と信長の弟有楽斎；織田長益の系統がある）の藩校＝**崇広塾**で幕末に使われていた英語の教科書 “The First Reader” に、遊びの名前として “Battledore and Shuttlecock” の単語が図入りで紹介されていました。（**図３１**）

図３１　織田旧邸長屋門、解体前の崇広塾と柏原藩の英語教科書に掲載されている Battledore and Shuttlecock の紹介図（鵜木秀夫・千加子夫妻の資料提供による）

幕末には、それまで外国との交流の門戸が唯一つだった長崎出島から横浜へ移り、ここに外国人居留地が生まれ、外国人の生活が始まると、そこで生み出された新聞や雑誌、書籍等にも彼等の生活の記録やスケッチ、果てはカリカチュア（風刺画）等、中に「はねつき遊び」も描かれて誌面に登場して来ます。これらの記録の書き手もオランダ人からイギリス人等に代わり「はねつき遊び」も「バトルドアー・アンド・シャトルコック」等と英国風に記録され・残されていきます。1862 年には **“THE JAPAN PUNCH, YOKO-HAMA”（図 32、３３）**が刊行されて、江戸時代から維新へ脱却しようとする我国の姿が**ポンチ絵**※と称された戯画として活写されます。

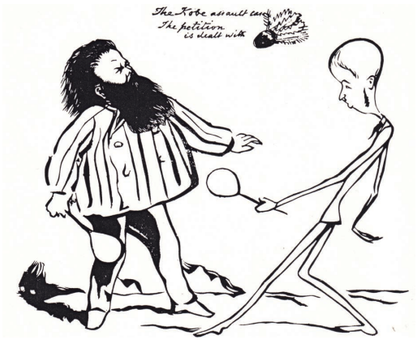
※ ポンチ絵：　1）風刺や寓意を込めた滑稽な絵、漫画。2）概略図、構想図、製図の下書きとして作成するイラストや 図による概要をまとめた企画書

チャールズ・ワーグマンとカネさん

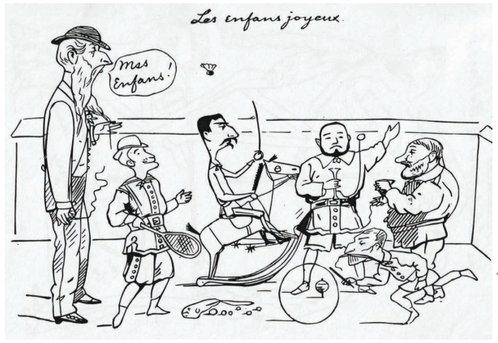
チャールズ・ワーグマン
1832-1891. 英国人画家、漫画家で、イラストレイテッド・ロンドン・ニュースの記者として幕末期に来日。幕末の日本の風俗・事件をポンチ画として活写。日本初の漫画雑誌『ジャパン・ポンチ※』を創刊。五姓田義松、高橋由一らに洋画の技法を伝える。1863 年小沢カネと結婚。横浜外人墓地に眠る。

図３２　ザ・ジャパン・ポンチ、創刊号の表紙
※punch をパンチとするかポンチとするか：『広辞苑』の項目**ポンチ**【punch】の③によれば「ポンチ絵、またはそれによって描かれる人物とあり、ポンチ絵【イギリスの風刺漫画雑誌「パンチ（Punch）から】とされていて、表記法を確定できないが、ここではポンチに揃えた。

1866 年 Game of Battle cock and Shuttle door
＜本来は Battle-door & Shuttle-cock ですから“しっちゃかめっちゃか”＞という意味。市議会と紀元１世紀の（時代遅れの）領事の間のしっちゃかめっちゃかなやりとり



1872 年 The Kobe assault cas　The petition is deals with
神戸の急襲も、その請求は（あっさり）片付けられる



1882 年 The Recreation Clube' Tokyio　東京レクリエーション・クラブ
The other boys are in the Billiard room
ここにいない少年達はビリヤード・ルームにいる

1881 年 Les enfans joyeus　遊び盛りの子供の喜び
「この幼さ！幼きままのあどけなさ」とでも言いたかったのだろうか

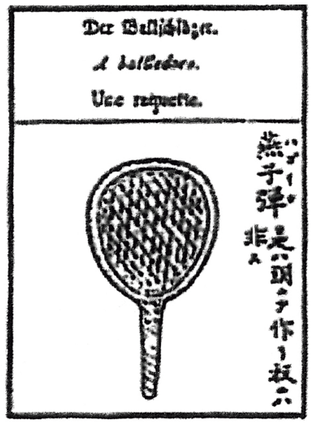
図 ３３『イラストレイテッド・ロンドンニュース』特派員チャールズ・ワーグマンの筆になる『ザ・ジャパン・ポンチ』に掲載された“バチドアー・アンド・シャトルコック”のカリカチュア　（どれもギャグやアイロニーに満ちている）

こうした外国人の手になる記録の他に、いくつかの日本人の手になる資料も残されていますが、未だバドミントンと呼ぶべきものには届いていません。以下にそれらの幾つかを拾っておきます。**(図３４、３５)**

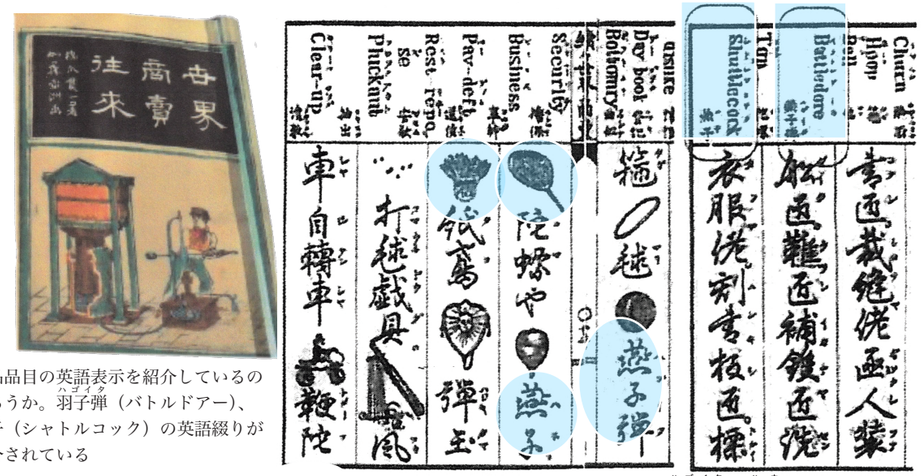
図３４　① 五雲亭貞次作『異人商館内部之図（1865 年)』羽根蹴りが横浜でも行われていた

②『泰西訓蒙図解』「遊戯部」文部省、1871 年

田中芳男（1838-1916）
飯田市出身の博物学者、シーボルトの弟子で、『泰西訓蒙図解』「遊戯部」（文部省）を翻訳。Battledore(raquette)を燕子弾（ハゴイタ）と訳し、「コレハ網ニテ作リ板ニハ非ズ」と紹介している。



③橋爪貫一『世界商売往来、続々』を刊行（東京府、1873 年?)



商品品目の英語表示を紹介しているのだろうか。羽子弾（バトルドアー)、燕子（シャトルコック）の英語綴りが紹介されている

図３５　橋爪貫一：『世界商売往来、続々』で Battledore、shuttlecock を燕子弾、燕子と訳して紹介

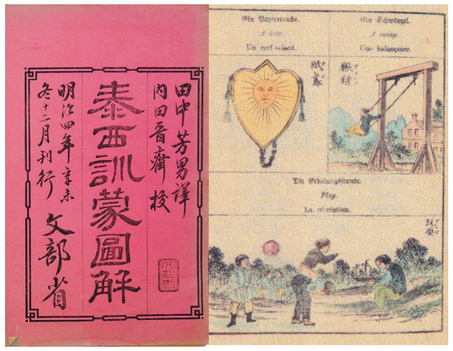
19 世紀末、英国で battledore と呼ばれていた「はねつき遊び」にネットが加わり、コートにラインが引かれ、何某かの約束事が形成されて、この遊びの用具セットが「Badminton」の名前で発売されることになります：1860 年のロンドンの文具商アイザック・スプラットの **Badminton Battldoor の用具セット発注の記録**が登記簿に残されているそうです（バーナード・アダムス著『THE BADMINTON STORY』1980, BBC.)。しかし、‘バドミントン・バトルドアー’の呼称が短縮されて“バドミントン”になったのは何時かは必ずしも定かではありません。

1870 年代に渡来した‘はねつき遊び’は、主として英国由来の Battledore and Shuttlecock だったことが伺われます。我国の歴史資料で、最初に日本人がバドミントンに出会った記録は、新潟県バドミントン協会の初代会長を務めた朝倉良三の厳父金作（写真家）氏が 1902 (明治 35）年ヨーロッパから、外国土産にパリ製の銘のあるラケットとシャトルを‘バドミントン 用具’として持ち帰ったことを挙げるのが現時点では最も妥当だろうと思われます。

次に古い資料としては、1979（昭和 54）年 12 月 16 日付の新聞『新潟日報』（**図３６**）に掲載された新潟県南蒲原郡田上町の旧家田巻恒彦宅で発見された「バドミントン 1 組[1918] 大正 7 年求ム 東京本郷美満津商店製造」と箱書されたバドミントン 用具一式の記事に注目しなければならないでしょう。この用具一式は当時のお金にして「25 円也」という物でした。ところで、これらの資料に記された日付発見以前に私たちが知り得た「日本人とバドミントンの出会い」や「バドミントン 用具との出会い」などについての歴史は、全て横浜を中心とするものでした。日本体育協会※編『スポーツ 80 年史』（1966 年）の「バドミントン」も横浜、とりわけ横浜 YMCA を中心にした歴史の展開が語られています。これによれば、「1924-5(大正 13-14)年頃北米 YMCA から横浜、東京などの YMCA にバドミントンの用具

※日本体育協会は 1911 年設立の大日本體育協会連盟から 2048 年に日本体育協会に改称、さらに 2017 年日本スポーツ協会に組織名称を変更

が送られ・・・複雑なルールやテクニックに囚われず、ただバーズ（註；シャトルのこと）を撃ち交わして面白がっていた程度のものであった。しかし、在留外人の間では昭和４年頃の春に、横浜と神戸の両外人が、インターポートの交流戦にこの種目を加えて対戦し、正規のバドミントン試合が行われていた」「横浜 YMCA がこの競技を正式に取り組む様になったのは昭和 10 年頃からと言われ、12 年の秋にデンマーク体操学校でバドミントンを学んだ廣田兼敏が帰朝と共に技術的な研究がいよいよ本格的となり、戦法は一変して急速度に競技化されたものである」と言い「・・・横浜を語れば、岡藤吉のことも忘れられない。氏は当時唯一のバドミントン用具製造業者であり、横浜にあって南洋・ジャワ方面に大量の輸出を行い、また日本のバドミントン界に多大の貢献をなしたのである」としています。此処では岡によるラケット作りが国産第１号だという認識だった様です。（註：ナルト・スポーツの創業者は岡善七で、操業は 1933(昭和８）年。岡藤吉は善七の弟で、当時同社の工場長でした）。ですからこうした認識を持つ私達にとっては、先の美満津商店で「大正７年に既にバドミントン 用具が国内で製造されていた」という「新潟日報」の記事は驚天動地のものでした。



※ 西洋文化理解のために文部省が作成した絵辞典。明治４（1871）年、英・独・仏３カ国語からなる文部省による最初の単語辞典(図解に注目)
※ 訓蒙は子供や初心者に教え、諭すこと

1979(昭和 54)年 12 月 16 日付けの新聞「新潟日報」に掲載された新潟県南蒲原郡田上町の旧家田巻恒彦宅で発見された「バドミントン一組　大正７年求ム　東京本郷・美満津商店製造」と箱書きされた‘バドミントン 用具一式’

図３６　田中芳男の『泰西訓蒙圖解と、新潟県での古いバドミントン 用具の発見』

しかし、まだその先の史料があります。東京市神田区須田町にあったという「日本體育商會」刊行の『日本體育商會総目録』の存在です。資料が一部欠けているため発行年を正確に特定できないのですが、このカタログによれば、最上級のバドミントンの７点セットが「14 円」。価格から押して或いは 1918（大正７）年より古い史料ではないかと思われます；但し国内生産された物であるか否かは明らかではないのですが。

このカタログ内容から発行年を推測してみます。価格表に「内地、台湾支部、朝鮮」という欄があろます。台湾の日本統治は 1895(明治 28)年 –1945(昭和 20)年の間、日韓併合は 1919（明治 43）年 –1945(昭和 20)年の間ですから、このカタログは 1910 年以降のものということになります。以下主要品目と年代、他を対照してみなしょう。美満津商會が「東京市」にあったことから 1889（明治 22）年以降。ハンモックの広告に「卅七八戦役※ (※明治

37-8 年、満洲・挑戦の支配権をめぐる日本とロシア間の戦争。日露戦争の異称)」で使用されたとありますから 1904（明治 37）年 –05（38）年以降。新式梁木の広告に「第５回内国勧業博覧会に展示した」とありますから、1902（明治 35）年以降。学校教練用の第一種１号連発銃の広告から、銃そのものを 22 年式村田銃とすれば 1889(明治 22)年以降、教練の導入を考えれば「陸軍現役将校学校配属令」の出されたのが 1925(大正 14)年４月ですから大正 14 年以降、兵式体操自体に注目すれば 1886（明治 19）年以降ということになります。遅く考えても大正末期までには出版・配布されていたとみてよいでしょう。いずれにせよ、ナルト・スポーツ 以前に「バドミントン用具一式」は、確実に我国のスポーツ・マーケットに登場していたのです。

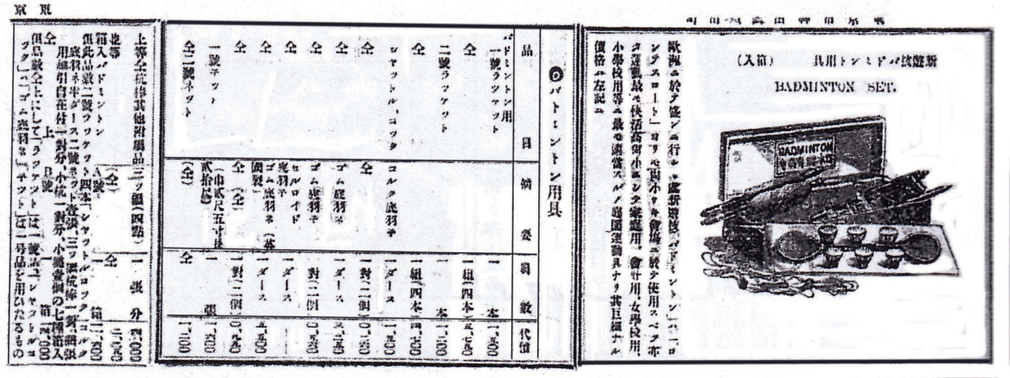


図３７ 「日本體育商會」刊行の『日本體育商會総目録』

5. 我国における組織的なバドミントン 運動のはじまり

このように見て来ますと、バドミントンの用具を購入し、バドミントンに興味を持ち、所謂バドミントンを楽しんだ者は、明治以降かなりいたに違いなく、そこにはバドミントン用具の生産業者がいて、マーケットのあったことは明らかです。しかし、組織的な活動と言える三つの活動形態、つまり１）継続した組織的な活動があること、２）時を決めて大会が開催されること、３）オーソライズされた規則があること等々をもって我国のバドミントンが始まったとするなら、それは一体何時になるのでしょうか。

我国のスポーツ黎明期にあって、北米 YMCA の体育主事で大正２年に来日、日本の YMCA の体育主事となり、17 年間に亘ってスポーツ活動の先頭に立ってこれを育成・牽引し、“我国スポーツ界の父”とまで呼ばれた **J.H.Brown（ブラウン）（米国）に注目してみましょう**。彼は我国にバスケットボールやバレーボール等を紹介しただけでなく、我国代表選手団の極東大会やオリンピックなど国際舞台への参加を指導・援助してくれました。丁度ブラウン来日の年に、日本 YMCA 同盟総会は、体育事業の振興を採択し、体育施設の充実、特に体育館の建設を決議しています。我国の体育＆レクリエーション活動の基（もとい）となったのは、1886(明治 16)年、大阪 YMCA に体育活動グループが組織されたことに始まると見られます。やがてこ

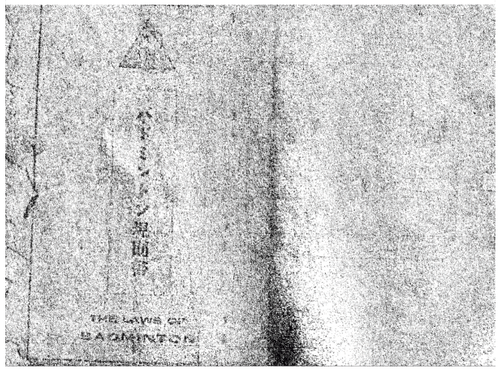
れが東京 YMCA で始まる活動と呼応して、我国近代スポーツ振興へと発展していきます。1917（大正 6）年に東京 YMCA の体育館が完成。W.Scott ライアンが来日し、**室内運動の指導・普及に併せて、体育指導者の養成**が始まります。**1918（大正 7）年、日本 YMCA 同盟主催の第 1 回体育指導者講習会を開催。この 2 回目のプログラム（名古屋 YMCA で開催）にバドミントン が登場します。**指導したのは **F.H.ブラウン**でした。ブラウンは東京 YMCA に活動拠点を置いており、当然、それまでに東京 YMCA の体育館でも何某かのバドミントン活動が行われていたことが想像されます。この 2 回目のプログラムを受講した大阪 YMCA 体育主事の松葉徳三郎は、その後大阪 YMCA でバドミントン活動を開始しますが、この活動を十分発展させることができなかった旨を、後年友人の青木昭二宛の手記に書き送っています。（**図３８**）

松葉徳三郎
1903-1981 年
東京高師卒、
大阪 YMCA 体育主事としてロサンジェルス五輪（1932 年）を視察、南カリフォルニア大、スタンフォード大を見学、フットボールに接する。1934 年関西大学でチームを組織。活動開始。翌年部を創設。1941 年関西連盟理事長となる。右の手紙は横浜の廣田の「自分が松葉を指導したバドミントンの祖だ」と公言していることに対して抗議する大阪バドミントン協会の青木宛の手紙の写しである。

図３８　松葉徳三郎とその手記(青木昭二氏提供)

松葉は 1932（昭和 7 年）年に渡米。米国でバドミントンも経験しています。その経験は遅れて米国留学を終えた神戸 YMCA の石渡俊一とも共有されて大阪 - 神戸周辺のバドミントン発展・普及を支え、昭和 12 年の神戸 YMCA の定期的なプログラムに継承されていきます。これに神戸外人クラブとの交流を通してバドミントンを習得した川崎策実らの参加も加わって、大阪の地にも組織的・継続的な活動が始まり、発展していきます。

一方、横浜 YMCA の機関雑誌『横浜青年』によれば、廣田兼敏が横浜 YMCA でバドミントン・クラブの活動を開始するのは 1933（昭和 8）年に出された「バドミントン・ゲーム開始」の案内と、1937（昭和 13）年に再度出された「バドミントン倶楽部」の案内の二つの時期があります。ここに慶應義塾大学の学生等が加わり活動母体が分岐して行きます。YMCA の活動と並行するように、**1934（昭和 9）年には岡藤吉が『バドミントン規則書』（図３９）を刊行**するなど、ナルト・スポーツの活動が社内に留まらず市中に展開されて行きました。



昭和 8 年　岡藤吉によって作られた『バドミントン規則書』は劣化していてほとんど判読不可能である。何とか画像を操作してようやく読めたのが左図である。ナルトの商標である三角の中にカンガルーが描かれ、その下にバドミントン規則書と書かれているのが辛うじて判読できる。これは昭和 9 年に作成されたもので、これを 1992（平成 4）年今井先が整理検証して、復刻版を作成している。

図３９ ナルトバドミントン 規則書

以上の経過を見ると、先に挙げた‘バドミントンの組織的活動の始まり’は、やはり 1927 (昭和 2)年の名古屋 YMCA でのプログラムの活動が最初で、さらにその先に東京 YMCA の活動のあったことが想像される、ということになります。横浜 YMCA やナルト・スポーツを中心とする横浜でのバドミントン活動は、同じ時期に中国の上海やインドネシアで行われた邦人によるバドミントン活動と共に、第二次世界大戦終結以降の我国のバドミントンの発展を支える中心的な役割を果たすことになりますが、 昭和 10 年を前後する複数の萌芽のあった名古屋や大阪や神戸における小さなバドミントン活動もまた戦後に始まるバドミントン運動を支える役割を担ったことも事実です。そうした展開の起点にやはり「ブラウンが主宰した 1919 年（大正 8）年の名古屋における第 2 回体育指導者講習会があったこと」は、忘れてはならないことだと思われます。

私達は、日本のバドミントン史を語る資料として、未だナルト・スポーツ製のバドミントン ・ラケットもサンバタ製のラケット等も一本も収集できていません。けれども、YMCA の活動記録や規則、それに時代毎の指導者の書き物や試合の記録等をコラージュの様に糊付けして来てみると、ここまで紹介した様な話になるのです。その後の我国のバドミントンを発展させて行ったのは、松葉徳三郎、川崎策実、川口清、福田宗次郎、石渡俊一、廣田兼敏、宮澤宏之、八幡満胖（やわたみつやす）、今井先、森友徳兵衛、村上忠治、今村正雄、池田鮮、山田文雄、角田賢三、兵藤昌彦、佐藤保、奈良岡健三、柳田享、平沼亮三・・・等の緒氏が並ぶ歴史で、そうした歴史の後に資料にも残る世界に繋がるその後の展開がなされて行くことになります。いずれ機会をつくり稿を替えてまとめてみようと思います。

2022 年 8 月 7 日　　（完）

【追記】日本バドミントン協会が創立 75 周年を迎えます。これを記念する史記の執筆を依頼されましたが、今の私には一人で資料収集・整理・執筆し続ける力は残されておらず、千葉大学の谷藤千香先生にご協力いただき、何とか所定の趣旨にまとめることができました。そのことを末筆になりますが記しておきたいと思います。谷藤先生からは次の様な文章を戴い

ています（阿部）；

「若い頃は歴史の解読等決して楽しいものではなかったのです。それは幾重にも重なる事象を読み解くことが複雑・難解であったからです。短いものながらこの仕事をお手伝いする中で、バドミントンの発展に関わられた人々の苦労に改めて向かい合いながら、歴史を一歩一歩前に進めてきた複雑な過程を知ることができました。想像もしなかったたくさんの資料と出会う度に、その事象の持つ意味を深く伝えてみたいと願うようになりました。そんな思いをお汲み取りいただければ幸甚です。小さなお手伝いでしたが、こうした機会を与えて戴いたことに感謝すると共に、終筆を迎えてこの先の歴史に改めて、新たな思いを馳せています（谷藤）」。

阿部一佳氏 コレクション

左：17 世紀オランダの染付タイル絵。中央の人物がラケットとシャトルを持っている
右：タイトル絵についてのメモ

左上：1867 年パリ万博を契機に、欧州で日本の有田焼が人気となり、競技用具を持った陶磁人形が制作された。

右上：子どもと婦人がラケットとシャトルコックで遊ぶ様子を描いた絵皿

右下：中国の羽根蹴り遊びの伝統遊具

6. 参考文献

1. 『字統』白川静
2. A Pictorial History of the Sports and Pastime of Nations GRIND YOUR COFFEE AT HOME ARBUCKLE BROS　No.39
3. Chinese Picture Roll,1250 years Monika Krucker
4. The Shuttlecock And The People Who Used to Play With It in 1999 Badminton England
5. Natives of Cochin-China, Playing at Shittlecock with their Feet by J.Landseer & J. Shirt 1796
6. Playing at shuttlecock with the feet 1843 Allom, Thomas (1804-1872)
7. The Badminton Story Bernard Adams from the BBC
8. The illustrated history of Badminton 2004 was published by French Football association official Jean-Yves Guillain
9. Shuttlecock game in China Journal de la Jeunesse, France.1875
10. Le Chuon 画『ベトナムにおける“シャトル蹴り”』
11. 『下学集』: 15 世紀
12. 清水勲編『ワーグマン日本素描集』
13. ハナー・ギルマイスター著、稲 垣正浩・奈良重幸・船井廣則 訳『テニスの文化史』1993 年、大衆館書店
14. 下村寅太郎著 『スウェーデン女王クリスチナ：バロック精神史の一肖像』（中央公論社、1975 年）
15. E. カッシーラ著（朝倉剛、芳賀賢二郎訳）『デカルト、コルネーユ、スウェーデン女王クリス ティーナ』（工作舎、2000 年）
16. Sports and Games of Skill (Sports et Jeux d'Adresse) by Henry René Allemagne
17. le Journal de Bouillon
18. landscape painting of an orphanage in Batavia 1682 the illustrated travel journal Johan Nieuhof
19. 長崎市出島史跡整備審議会編『出島図_その景観と変遷』
20. 福岡市博物館刊行『出島図』
21. 森島中良『紅毛雑話』（1787 年）
22. 柏原藩崇広塾英語教科書『The First Reader』
23. THE JAPAN PUNCH, YOKO-HAMA 1862 by Charles Wirgman,
24. 五雲亭貞次作『異人商館内部之図（1865 年）』
25. 『泰西訓蒙図解』「遊戯部」 文部省、1871 年
26. 橋爪貫一『世界商売往来、続々』
27. 1979 年 12 月 16 日「新潟日報」
28. 日本体育協会編『スポーツ 80 年史』（1966 年）
29. 「日本體育商會」『日本體育商會総目録』
30. 『名古屋 YMCA60 年史』1964 吉村欣治著
31. 松葉徳三郎氏が青木昭二氏に宛てた手紙
32. 横浜 YMCA 機関雑誌『横浜青年』
33. 岡藤吉『バドミントン規則書』

第3章

著者総論
「歴史の捉え方」

著者総論「歴史の捉え方」

日本バドミントン協会が創立75周年を迎える。それを記念し、その歴史を記録し残す事が企画され、その一部を委託された。その企画を三つに分けていただき、一つは資料の残る『協会創立75周年の歴史』をプロの方々に、二つ目はそれ以前の歴史『協会設立前史』をまとめ、さらに当初企画にはなかった三つ目の『バドミントンの歴史を語ることについて考える』を加えさせていただいた。三つ目の課題に取組む直前に、岩波書店が**E.H.カー著・近藤和彦訳『歴史とは何か；新版』ケンブリッジ大学**』を出版。歴史専門家にも特異な視点を持つ書籍で、我が意を得たりとこの書籍の出版に感謝した。それは歴史記述の意味を根底から問うもので、今回の仕事にとって、人と時代が多様に絡み合う複雑な行為の記録を歴史の中に位置付ける重要な視点を含み、**「歴史における眞実とは何か」**と歴史に問う、妥協を許されない思考の多義的な眼を投入していく重要な構えを与えてくれる稀有な書物だった。

同書の巻頭は**「歴史とは歴史家の経験である」**と決めて始まる。**「歴史をつくる」のは歴史家以外の誰でもない、と。「歴史を書くと言う行為だけが歴史をつくるのである」**と言うのだ。さらに続く：“歴史を書けと指示する歴史に名を残したい人もいる”と言うのである。口を出すか・出さないかは別として、多くの場合描かれた後で色々な人の心が騒ぎ出す、と言う。「然り」であろう。歴史を見ても著者のその後が保証されるか否かはわからないことがわかる。従来、こうした問題は看過されてきたとカーは言う。いかなる意味にせよ歴史に登場できない人がたくさんいることは極く当然のことなのだが。

だから、今回の仕事の成否を評価する筋合いは確実に二つある訳で、その二つがどう分岐点を形成するかは半ば予測がつき・半ば予測がつかない。予測される内容が見えれば、それを忖度する《まかせてしまう》幾つかの道が生まれ、組織外の者には見当もつかない言わば内輪の問題《テーマに関係した物だけ》で終わる（発生する）と言う。

執筆の立位置《ベース》を決めるために、カーの魅力的な言葉を三つに使わせてもらう：

①史料が伝えるのは「何があったか」ではなく、「ある者が起こったと考えた事」と、あるいは「他人に、起こったと思って欲しい事」だけだ。

②敬虔な信仰を持つランケ※によれば、自分が事実と取り組めば、歴史の意味は何と皮肉な表現であろうか“神の摂理が引き受けてくれる”ことになる、と云う。

※ランケ（1795-1886）:従来の啓蒙主義的な教訓や歴史学を批判し、史料を批判する科学的な歴史学を確立した。それで、ランケ以前を**歴史家**、以降を**歴史学者**と呼ぶ程である、という。

③生き生きとした事実が並べられていれば、「そこには歴史哲学がない」と評され、「エデンの園」を一片の哲学だけで前を覆うこともなく行けば、「恥じらいもなく天真爛漫だ」と揶揄される。だからと言って、そうした知見と遭遇した後で敢えて哲学なしでいく者がいれば、ヌーディスト・クラブの会員が緑の深い森であることをいいことにして自意識の営みに勤《いそし》んでいると言われるだろう。

その書の訳者；近藤和彦は後書きで、久々に面白い本と出会ったとして、「カーの著書は大人の漫画本ですね。彼の大学の講義も大評判のようです」と添えている。共感した私も学生気分を味わった程だから、感性を新たに用意して、協会からの要請と向かい合う覚悟をした程だ。

まずは歴史との対峙をウォーミング・アップしておきたい。一つの出来事がある。そこに関わる一方の人と他方の人にはそれぞれの状況・動機・感情・思考・選択等の複雑な過程があって、結果として或る行為が生まれる。その行為の何処を主人公とそれに関わる者の物語として綴るか。そしてその物語に絡んで生まれるその後の事態の変転をどう認識として留めるか。いや、今私が問題にしなければならないのは、その途切れることのない時の流れの中に生じる“**結ぼれ《knot》**（解くことのできなくなった結び目）を**どう捉えるか**”という問題なのであるが、関係者一人一人に生まれる“その思い”に応えることは極めて難しく、どうしても一つの選択を迫られる。“目を細めて《眩しさを避けて》絞り込んだつもりの目線で起きた事の**“来し方・行末を見る”**のであるが、この時点で関係は単純化に向けて（‘象徴的’と美しく言うこともできるが）絞られる。謂わばS+Vないし S+V+Oの構文に押し込め、Compliment（補語：補足して完全にするもの）をできるだけ省く作業である。起きたことの違いのわかる、典型的に絞り込まれた噺《はなし》を載せた二つの昔話の絵本をみてみよう。主人公が命懸けの仕事をした相反する二つの**「昔話（出来事）」**を紹介し、記述された歴史のモーメントが読後どのように振られるか《納まりをつける》をみる。

昔話一：新美南吉作・黒井健絵『ごんぎつね』偕成堂＜日本の童話名作選＞1986年

2008年1月26日日経紙の当時の夕刊コラム「文学周遊」（編集委員大島三緒）が、新美南吉の**「ごんぎつね」**を採り上げた。権現山周囲の夕暮れ時の田畑の風情が写真入りで紙面を覆う、書き出しは**「ごん、おまいだったのか。いつも栗をくれたのは」と問うて、名作の紹介が始まる。**大島は言う「郷土の人々の南吉への思いは強い。『ごんぎつね』にも描きこまれた彼岸花を矢勝川の堤に植える運動もその一つだ。秋には川辺が百万本の彼岸花で赤く染まる。春を待つ今は、やはり住民が植えた菜の花の黄色が鮮やかだ」・・・ 。

『ごんぎつね』に触れた日本人は実に五千万人にのぼる・・と言う。「兵十《ひょうじゅう》が病気の母親のためにとったうなぎを ふとしたいたずら心から奪ってしまったきつねのごん。せめてものつぐないにとごんは、こっそり栗や松茸を届けつづけましたが、その善意は兵十につたわらぬままに思いがけない結末をむかえる。それを黒井の絵は静かに誘っていく。」と。

この物語を総括すれば明らかに主人公を兵十とぎんぎつねとする、‘一丁の火縄銃の物語’なのかもしれない。『検定新美南吉全集』（大日本図書館刊）所収の「ごんぎつね」を底本にしている。兵十とごんぎつねの出会いを繋いだのは“兵十の母”そして“その死”。兵十とごんぎつねを繋いだのは“ごんぎつねの行為”と“その死”。その二つの死が生み出したもの、そして私たちが受け止めているのは“ごんぎつねへの哀惜”と“兵十の驚きと底知れぬ後悔”。しかもそれはどんな歴史書にも残らない事案。それでも私達はこうした歴史事案の起承転結の流れの追憶を自らの感情体験として始めなければならない。そしてそのことに今、私達は何某かの価値意識の中で“ある意味”を**付託させよう**としている。歴史の何を掴めばよいのか、難しい。私は自分の立ち位置とその役割に呆然とするのだ。これは私には大きすぎる問題だから、次のもう一方のモデルを探す。

歴史を書き出す動機（双方のそれぞれの思い（書く者・書かれる者））、行動、登場者の相反する動機とその後の思惑の変化、反転する思惑が齎す大きな“すれ違い”、相克の継続が生み出す事態の結末。外から見る者と中にいた者の余韻として残る実感の振れ幅の悲劇的な程の格差：これらが記憶され・記述された経験というものの“パターン１”です。そしてそれは新実南吉という一人の人の心以外には生まれえなかったものである。物語の力が一人一人の心に共感させるものとなるパターンである。

もう一つの“パターン2”が、全体的な感情を産み出すという相反するモーメント（物を回転させる力）が生み出されていることを、私達は知ることになる。それ故にかその役割を期待されるままに、読者（多くの人々が共鳴して）が、そのモーメントに引き込まれていくことになるのを見る。

昔話は天真爛漫に生きる人の像を幼い子供たちに投機してきたのが近代の歴史である。若人だけでなく多くの人が死んで行き、銃口に煙が残り、そして消えて行った。そこで、昔話に託されたそ

の第二のテーマも紹介しなければならなくなる。私が誕生した昭和の初期は、ある意味で、世間は次の話のような話（感情を生む物）に満たされていたのかもしれない。

昔話二：斎藤連山編・斎藤五百枝《いとえ》著『桃太郎』子供が良くなる講談社の絵本

桃から生まれた桃太郎は老いた婆《ばば》と爺《じじ》に育てられ、気は優しくて・力持ちに成長し、鬼ヶ島へ鬼退治に出征。道中犬・猿・雉を家来とし、鬼を成敗、故郷に凱旋する物語。誰もが知っていた。古いものを尋ねれば、1804年の蔦屋重三郎刊になる山東庵京伝『絵本寶七種』があるとされるが、「標準型」は明治以降現代に至る教科書や絵本として普及した。明治・大正・昭和の子供は、大方、次の二つの歌を耳にし、口にして育った。

①『尋常小学校唱歌』作曲・岡野貞一、作詞者不明　（明治44年）

桃太郎

1.桃太郎さん、桃太郎さん、お腰につけた黍団子、
　一つ私にくださいな
2.やりましょう、やりましょう、これから鬼の征伐に、
　ついていくならやりましょう。
3.いきましょう、行きましょう、あなたについて何処
　までも、家来になって行きましょう。
4.そりや進め、そりゃ進め、一度にせめてせめやぶり、
　つぶしてしまへ、鬼が島。
5.おもしろい。おもしろい、残らず鬼を攻め伏せて,
　分捕物をえんやらや。
6.万万歳、万万歳、お伴の犬猿雉子は、勇んで車を
　えんやらや。

②作・田辺友三郎、作曲・納所弁次郎　（明治33年）

モモタロウ

1.桃から生まれた桃太郎、気は優しくて力持、
　鬼ヶ島をばうたんとて、勇んで家を出かけたり。
2.日本一の黍団子、情けに付きくる犬と猿、雉も
　もろうてお供する、急げ者どもおくるなよ。
3.激しいいくさに大勝利、鬼ヶ島を攻め伏せて、
　取った寶は何々ぞ、金銀、珊瑚、綾錦。
4.車に積んだ寶もの、犬が牽き出すえんやらや、雉
　がつな引くえんやらや

これらの絵本が読まれた時代の後先に起きた大惨劇を記憶する人も少なくなった。決して消してはならない酷い経験であるが、その際の感情や思考を保持し続けることの難しさをひしひしと感じる昨今でもある。勝つこと（敵《対手》を倒す事）への尽きない心のモーメントは、スポーツ世界に限らず、大きくは以上のような物語となる二つの形態を装って顕現してくる。その現れを冒頭で触れたように「協会成立まで」と「協会成立以降」のそれぞれの二つの歴史群として捉え、記載する共に、その記載の根底に積もっている“バドミントンの歴史的な現れ”を、見事な散文詩にしてファンタジックに描出し、英国バドミントン 協会の会議室に掲額された**モニカの作品**に象徴された歴史”の様態を改めて受け止め、その文体のイメージで描き上げた我国のバドミントンの歴史を私達も『バドミントンの歴史について語ることを考える』風に書き上げてみようと考え、これを第３のテーマとした次第である。この小文に小柳氏が英訳を添えて下さった。そして、そこには協会役員何某かの思い入れもあった。いずれにも感謝して余りある。日本のバドミントン受容の特異な姿が、国内は勿論、少しでも海外にも伝われればと願う。

最後に作業の進捗を誠意を持ってコントロールしてくれた日本バドミントン協会専務理事はじめ、総務担当の方々、もう一方のサイドで困難な 75 年誌を担当してくれた丸井氏とそのスタッフの方々にも深く御礼申し上げる次第である。

2022 年 9 月 阿部 一佳

プロフィール　阿部一佳（あべ　かずよし）

1940年新潟市に誕生。市立湊小（蜜蜂の研究で受賞歴あり、新潟市小学生会議の議長を経験）、二葉中、新潟高、新潟大学理学部化学科卒。高１で父を失い、駄菓子屋経営で一家を支える。傍ら県立新潟商業高バドミントン部を指導、インターハイ・国体等を制覇、大卒後新潟女子工芸高（後に新潟青陵高と改名）教諭（化学）となり、バドミントン指導中心の人生始まる。同学園の短大増設に伴い大学部にバドミントン部を開設：相沢、竹中（栂野尾）らを指導、世界への道を開く。その後、上京、今井先先生の下でバドミントン指導を研鑽、勤務を我孫子二階堂高に替える（大阪花の井中渡邊真希子先生育成の山田・平野・瀬尾を指導）。同学園二階堂清寿・健寿両先生の計らいで慶大医学部解剖学教室研究生として人体解剖学等の研鑽を経てキネシオロジー、運動学等の基盤を学ぶ。折しも毛沢東の中国を訪暦した英国バドミントン選手団々長R・ミルズが突然来訪、日女体へ帯同。高木・天野・湯木等を指導する同大監督の今井先先生を紹介。二人の先達が私の関心を世界に大きく開いてくれる。

慶大への内地留学後、雑誌『新体育』の新体育社社長波多担氏との邂逅があって、同誌編集長となり「新実技講座シリーズ」等を展開。複数の文部省体育局関係者との新たな交流が生まれる。教科体育の刷新を計る中で体育官である山川岩之助氏との親交を得る。そうした中、筑波大学体育センター長浅田隆夫教授との面識を得て、スポーツの指導の理論的思考を深める場として筑波大学体育科学系への転職を勧められ、生活拠点を大きく変える。バドミントンに関わり、初めて自身の活動をバドミントンに向けて全開放する場を得る。時にメトロ・レジャー社長作道善作氏から二冊のPat Davis著の①BADMINTON COMPLETE、②THE BADMINTON COACH を贈られる。これを契機にコーチング概念の構築を意図するように至り、体育学体系を考える視点としての立ち位置を定める。トレーニング論に至る運動生理学、解剖学等からバイオメカニクス、キネシオロジーへと視点を変え、ニコライ A ベルンシュタイのデスクタリティ（巧みさ）という概念と出会う；機能と知恵は切り離せないのである。このような観念が、恩師筑波大の浅田隆夫先生との出会いの中で、現代スポーツコーチ実践講座『バドミントン 』（ぎょうせい）、淺見俊雄・宮下充正・渡邊融編、阿部一佳他16名共著『現代体育・スポーツ体系第27巻テニス・卓球・バドミントン』（講談社）として結実する。初の啓蒙書渡邊雅弘との共著『SPORTS GRAPHICS 基本レッスン；バドミントン』1985年（大修館書店）は16版を重ねた。

専門：バドミントン・コーチング論、(筑波大学名誉教授、筑波大学体育学系教授、尚美学園大学教授)。
主な著書：
１）阿部一佳・岡本進（共著）「現代スポーツコーチ実践講座第12巻：バドミントン」ぎょうせい1985年。
２）分担執筆「テニス・卓球・バドミントン：現代体育スポーツ体系第27巻」講談社1987年。
３）阿部一佳（渡邊雅弘・共著）「SPORTS GRAPHICS 基本レッスン；バドミントン」大修館書店1985年
４）阿部一佳・阿部智子（共著）「わたしのバドミントン・ブック』新体育社1994年。
５）ジェイク・ダウネー/デビット・ブロディー共著、阿部一佳（他2名）共訳
「プレーヤーとコーチのために；バドミントンの実践トレーニング」ベースボール・マガジン社1988年

あとがき

令和３年（２０２１年）１１月２日に、本協会は、めでたく創立７５周年を迎えました。これもひとえに先人の方々のたゆまぬ努力の賜物であったと感謝いたします。

創立５０周年に記念誌が作成されて以来、創立６０周年、７０周年は、これと言った記念誌が作成されないまま、いつの間にか過ぎ去っていました。この反省もあり、また、ＢＷＦが創立７５周年の際に記念誌を作成されたことを知ってからは、７５周年は４分の３世紀という節目の年でもあり、是非、記念誌を作成したいと考えていました。

折しも平成３０年（２０１８年）から歴史を残していくアーカイブ事業を立ち上げ、レジェンドＶＴＲの作成を始めたのですが、担当していただいた株式会社日テレアックスオン様から、７５周年事業として、記念誌の作成に加えて、この時代であるから肉声を残すインタビューＶＴＲをセットで作成する提案がなされました。これは、今、取り組まないと５年先、１０年先では遅すぎて後悔する。レジェンドの方々がお元気なうちに、また、近年、日本代表選手の活躍は目覚ましく、東京２０２０も開催されることもあり、とてもタイムリーであると確信し、記念誌を作成することとしました。

記念誌の内容構成を検討した際に、記載すべきもの、例えば本協会の詳しい沿革などになりますが、協会刊行物のバドミントン界などが発行されていた昭和４４年から昭和５６年までは、詳しい記録があるものの、それ以外の年代は、記録がほとんど整理されていないことが分かりました。これを機会に各種記録の整備を開始したものの、とても、間に合わないことから今回の記念誌掲載は断念し、次に継続することとしました。

そうなるとやはり、記念誌のメインを飾るのは、活躍された選手たちの情報になります。ほとんどの選手たちはインタビューＶＴＲ撮影を快く承諾していただきましたが、新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策のために、インタビュー日程が二転三転し、また、かなりの延期を余儀なくされました。このような中でもご協力をいただき立派なＶＴＲが作成できましたことに感謝いたします。撮影に協力していただきました方々、本当にありがとうございました。多くの方々に容易にご覧いただけるよう YouTube にて限定視聴できるようにしております。

さて、記念誌については、対象期間を創立時からにするのか、５０周年以降とするのか、はたまた本協会設立前の日本のバドミントンの状況までも含むのかなどの検討もありましたが、現在、明らかになっていること、是非、情報として残したいものは、期間を限定せずに掲載することにしました。

このことから、協会設立前については、別冊として作成することとし、バドミントンの歴史について研究されている第一人者である筑波大学名誉教授の阿部一佳氏にお願いしたところ、快く引き受けてくださり、日本のバドミントンに関する学術書的な資料として残せるものとなりました。阿部先生は、本協会の普及指導開発副部長としても公認指導者の養成にご尽力いただいた方です。

また、本誌や別冊と同時に、別冊の一部を抜粋しての英訳本を作成しました。小柳国際部長に翻訳をお願いし、これもまた立派なものが作成できたと思います。海外に対して、日本もバドミントンについて、ここまでの研究をしているということを示せるものであると確信しています。

歴史を調べると先人の方々が行ってこられたことの偉大さが分かり、今後の活動に対しても大変、刺激となります。日本のバドミントン界の更なる発展のためには、記録を残すアーカイブ事業はとても重要と捉え、今後も取り組んで参る所存です。

今回の記念誌は、多くの方々の協力を得て作成することができました。本当に素晴らしいものとなりました。誠にありがとうございました。感謝いたします。日本のバドミントンが更に発展していくことを祈念し、皆様方にこの記念誌をご覧いただければ幸いです。

記念誌担当

佐竹養一、山蔭栄、小国久美、朝倉康善

■ 特別協力　株式会社日テレアックスオン
■ 協力　谷藤千香（千葉大学准教授）
■ 表紙･デザイン　平田治久（有限会社ノーボ）
■ コーディネート　丸井乙生（株式会社アンサンヒーロー）

日本バドミントン協会
75周年記念事業

日本のバドミントンの始まり

著者　阿部一佳

2022年11月30日　発行

発行人　公益財団法人日本バドミントン協会
〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号 JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE 7階
電話　03-6434-5141
印刷・製本　三共グラフィック株式会社

この書籍は学術的見地で執筆・編集されております。
本書の無断転載・複製を禁じます。
©BADMINTON JAPAN 2022 Printed in Japan

こちらから75周年記念事業
インタビュー映像をご覧いただけます
▼

ⓒBADMINTON JAPAN